博士（人間科学）学位論文

他界の民族学的考察

――*Feuermann* 伝承からみる西欧の死生観――

An Ethnological Study of Revenants
Feuermann and Afterlife's Discourse in Europe

2004 年 7 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

嶋内　博愛

Shimauchi, Hiroe

○○○○○○○　　目　次　　○○○○○○○

序章　怪火の目撃 1

第１章　ドイツ民俗学における伝承研究史 7

１．１ 学史 8

１．２ フライブルク・ザーゲ資料所について 9

１．３　出典伝承集について 12

第２章　「怪し火」のエティモロジー 20

２．１ ドイツ語名称 21

２．２ 英国での名称 22

２．３ その他の言語での名称 24

第３章　タイポロジー 28

３．１　「燃える人」伝承のパターン 29

３．１．１　罰としての徘徊 29
３．１．２　生者への奉仕 41
３．１．３　祈りと悪罵 50

３．２　「燃える人」伝承のヴァリエーション 55

３．２．１　燃える人の外見 56
３．２．２　現れる時間帯 58
３．２．３　現れる季節 58
３．２．４　現れる場所 59

３．３　怪し火にまつわる伝承 64

３．４　「燃える人」伝承の分布 70

３．４．１　タイプA：徘徊する怪異 71
３．４．２　タイプB：生者への奉仕 74
３．４．３　タイプC：祈りと悪罵 76
３．４．４　タイプD：その他 78
３．４．５　分布から読めること 80

第４章　伝承の解体 90

４．１　燃える人 91

４．１．１　「徘徊する」 91
４．１．２　幽霊の彷徨 91
４．１．３　荒野の軍勢、あるいはメスニィ・エルカンと燃える人 93

４．２　怪し火とは 95

４．２．１ デモンとしての怪し火 95
４．２．２ 予兆 96
４．２．３ 幽霊というブラックボックス 97

第５章　聖職者の眼 103

５．１　信じる者の復活 104

５．２　最後の審判と死後の世界 106

５．２．１　善き者の天国、悪しき者の地獄　――マタイによる福音書 106
５．２．２　善き者、悪しき者、善くもあり悪しくもある者　――ヨハネによる福音書 108

５．３　布教者の熟考：「煉獄の父」アウグスティヌスと、幽霊の胎動 110

５．４　『黄金伝説』における諸聖人の祝日と死者の日 113

５．５　拡大解釈される他界の情景 114

５．５．１　幽霊の誕生 114
５．５．２　最後の審判の失墜あるいは相対化 116
５．５．３　他界観をめぐる教会の弁明 117

第６章　教訓逸話集 121

６．１　生前の行いと死後の生 122

６．２　幽霊とは誰か 128

６．３　生者による死者への弔い：隣人愛と救済の行方 131

第７章　宗教改革の果てに 135

７．１　動揺する他界観　――煉獄の禁止 136

７．２　彷徨える煉獄観 138

７．３　ルター『煉獄の無効宣言』 138

７．４　英国国教会下における怪し火：『ヘンリー四世』より 140

７．５　自然現象としての視線 142

終章　伝承のトリアード 147

８．１　燃える人をめぐる三角関係 148

８．２　祈りと浄罪の連鎖 150

８．３　死者と生者と教会の構図 152

８．４　「燃える人」伝承からみえるのは 153

あとがき 156

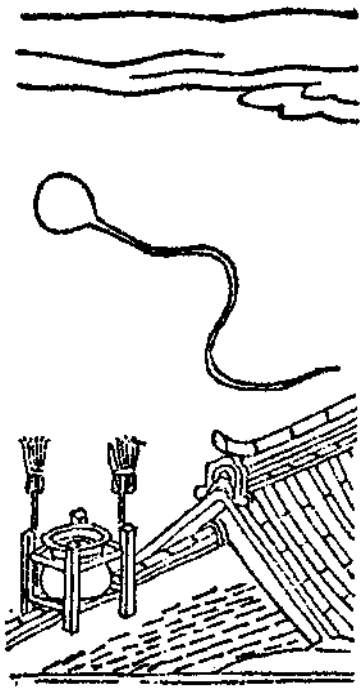
引用・参考文献 157

資料１　フライブルク・ザーゲ資料所「デモンに関するザーゲ　キーワード集」 177
資料２　フライブルク・ザーゲ資料所収蔵資料の出典となった、伝承集の目録 185
資料３　参照した Feuermann 伝承の日本語訳 193

序章　怪火の目撃

寺島良安の手になる『和漢三才図会』は、18 世紀初頭に編まれた図説百科事典としてつとに有名だが、その巻第 58 には、さまざまな火についての説明がある。「火」「陽火陰火」「君火・相火」「寒火」「　」「霊魂火」「庭燎」「炬」「篝火」「燈」「蝋燭」「秉燭」「蚊遣火」「？」「爐」「炭」「炭団」「灰」「煙」「？」「線香」「灸」「神灸」「花火」といった具合に細分されており、その各々形状や特徴などが図版つきで解説されている（図０－１および０－２参照）。その中の「　」の項で、彼は『本草綱目』の記述も引きながら、このように記している。《「色は青く状はたいまつの火のようで、聚ったり散じたりし、人に近寄ってきて人の精気を奪う。ただ馬の鐙をうちあわせて音を出せば消滅する」。（中略）大体、？？？ふる闇夜で人声のないとき燐火は出現する。みな青色で？芒はない。》[1]　の炎は青色で、形状は松明のよう。また、湿度が高く物音のしない夜に出現し、音に反応して消滅するというのである。

【図 0-1】
　の図（『和漢三才図会』該当部分より）



【図 0-2】
　霊魂火の図（『和漢三才図会』該当部分より）

燐火や狐火、人魂など、光を伴う夜の怪異については、はたして現実に発生する現象なのかどうか不明な部分もいまだ多い。そのためこれらは、一般的にはオカルト的な怪異現象の一種とみなされ、現代の日本社会でたとえば「昨夜見た！」という証言が聞かれることはまずない。しかし、民俗調査として各地を訪問し、土地の古老に話をうかがうなかで、「昔、あの道のところには川が流れていてね、そこには狐火が出たんだよ」といった話であれば、今でも少なからず聞くことができる。筆者自身は狐火を目撃したことはないが、「見た」という話を聞いたことはある。また、筆者の知る限りにおいても、ヨーロッパにもさまざまな形の怪火目撃譚が残されており、たとえば民衆の間に伝えられた口承文芸を文字化した伝承集[2]の中には、そうしたエピソードがしばしば含まれている[3]。あきらかに、いわゆる狐火・鬼火の類のことであろうと直感的にわかるものもあるが、人間の姿をした怪火という、グロテスクな妖怪ともい

うべき怪異に関する類話もある。

たとえば、ルール地方で 20 世紀初頭に編まれた伝承集に、以下のような話が収録されている。

【類話０－１】

ローンの司祭が、エアベリッヒのある病人の（告解の）ために呼ばれた。司祭を呼んだのは病人の 2 人の隣人たちで、彼ら２人と教会の寺男が随行した。一行が今日キュスター十字（おそらくはキリストの磔刑像）の立つところまでやってきたとき、いきなり寺男が叫んだ。「司祭さま、燃える人が来る！」「祈り続けるのだ。そして進もう！」司祭は答えた。燃える男が近づいてくると、司祭は祝福を与えた。すると、男が話し始めた。「この祝福を、ずっと長いこと待たなければならなかったんだ。まだ生きている頃、祝祭日に礼拝するのを怠けていたんだ。これで昇天できる。ありがとう」。そう言って、霊は消えた。[4]（類話中の丸括弧内は引用者による、また下線は引用者による強調部。以下同様。）

夜道を歩く一行の前に突如として現れた「燃える男」。その正体は、まぎれもなく死者、より正鵠を期して言えば幽霊である。生前犯した罪ゆえに昇天を許されず、現世を彷徨っていたところ、通りかかった司祭の祝福を受け、ようやく彼にも救済の時が訪れた。

一般に「燃える人（フォイアーマン）」[5]は、「生前犯した罪ゆえに昇天することを許されず、いつか救済される日を待ち続けながら現世を彷徨い続ける亡者」と説明される。このカテゴリーに属する類話は日本ではさほど知られていないが、ドイツ語圏にあっては『ドイツ俗信事典（Handwörterbuch des deutschen Aber- glaubens）』にも単独の項目として言及があり、少なくとも伝承研究者の間では比較的知られたものである[6]。

これら火に関する伝承が、すべて自然現象に由来すると証明することはまず不可能だが、少なくともその一部がそうであろうと想定することはできる。また、死者の救済に関する伝承は、「燃える男」に限らずとも、少なくともヨーロッパに限定すればさほど珍しいモティーフではない[7]。本論では伝承を、さまざまな自然発火現象が現実に発生し、その現象に対する「合理的説明」ととらえる。すなわち、ここで考察したいのは、ある現象が発生した際、人間はいかなる説明を付与するのかという問題であり、「燃える人」あるいは霊的存在が実在するかどうかについては問わない。説明をしている当人にとっては、自らが目にした（と信じている）事象は、科学的に説明できようとできまいと「真実」以外の何ものでもないからである。しかも、すでに事象を事象として切り取る時点で、受信する者の意図が「真実」を構成してもいるのだ。

はたしてこうした伝承が受け継がれていった背景にいかなる前提があるのか。表現や内

容があまりに荒唐無稽ゆえ、戯れ言と一笑に付すことも可能だろうが、本稿はこれら一見奇妙に思える伝承を分析的に読み解こうとするものである。しかし、ヴェールをはがして現象自体に近づき、近代科学によって怪異発生のしくみを説明しなおす[8]というところに、筆者の興味はない。そうではなく、特定の現象が「目撃」された際にそれを説明するために構築された言説が、いかなる背景をもっているのかを探る。なにゆえに、「その現象」に「こうした」尾ひれがついたのか。追加され、構築されていった言説の背後に隠れたメカニズムの解読を試み、そこからヨーロッパ、とくにドイツにおける民衆文化にまつわる伝統的な構造を読み解くこと。これが本稿の狙いである。

[1] 寺島: 1987, p.143. ただし、『本草綱目』の本文は、寺島良安が引いた記述よりは若干控えめである。

[2] ドイツ語圏では、グリム兄弟による『ドイツ伝説集（Deutsche Sagen）』を筆頭に、19 世紀中期以降とりわけ多く編まれた。

[3] ゲーテ『詩と真実』第 2 部 6 章中に（ゲーテ: 1979, p.216）、中部ドイツ南レーン近郊の、ハーナウとゲルンハウゼンの間で、窪地に無数の小さな光が飛び回る現象を目撃したことについて言及がある。

[4] Hoffmann: 1914, S.22, Nr.64.

[5] Feuermann は、feuer（「火」の意）と mann（「男」の意）からできた合成語であるから、文字通り訳せば「火の男」となる。実際、本稿執筆にあたって参照した類話中に登場する Feuermann には、「女性である」と明示的に書かれた事例はひとつもなかった。上野は、フランス革命期にあっても、市民とは「シトワイアン」であって、「シトワイエンヌ」ではなかったといい、市民権におけるジェンダー差を指摘しており（上野: 2003）、これらの類話が書き留められた時期において、Feuermann 伝承にも市民＝男性という枠組みが反映されているとも読める。とはいえ、「Feuermann」をカテゴリー上の上位概念として用いる以上、男性以外である可能性を排除すべきではないと考え、本稿においては Feuermann の訳語として「燃える人」を採用した。紹介した類話中に「燃える男」とあるのは、すべて、「der feurige Mann/ ein feuriger Mann」と明らかに男性であると書かれている場合に限った。

[6] ランケは『ドイツ俗信辞典』で「火についての幽霊現象（feurige Spukerscheinungen）の一例である」としているが、何をもって幽霊現象と定義するのかについて彼は明記していない（Ranke: 2000a, Sp.1406ff.）。 ただしここでは単数形の Feuermann が見出しとなっている。

[7] 代表的なモティーフとしては、キリストの地獄降下（地獄めぐり）がある。周知のようにキリストは、「十字架にかけられ死んだ後、3 日後に復活した」とされる。『ペトロの手紙１』3, 19 には、キリストが死と復活の間に、死者の所在、つまり地獄に降りて、死者たちを天国へと誘ったことについて言及されている。キリストに伴われて天へと至ることができたのは、キリストより先に生まれて死んだために洗礼を受けることができなかった善良な者たちである。

[8] 日本では、大槻義彦や角田義治などの名前を挙げることができる。「妖怪学」で著名な井上圓了や、昭和初期の科学者神田左京も怪火について言及しているが（井上: 1893, 1896; 神田: 1992）、彼らは狐火の存在には否定的だった。狐火現象発生のメカニズムについてわ

かりやすく仮説を述べているものとしては、たとえば（角田: 1990）がある。

第１章　ドイツ民俗学における伝承研究史

１．１ 学史

18世紀末から19世紀前半にかけて、中央集権化の遅れからくるルサンチマンの反映か、あるいはまたナポレオンによる事実上の占領を経たことも影響してか、ドイツ語圏地域[1]では現実逃避的傾向を持つロマン主義が流行する。後に古典主義の重鎮として大成していくゲーテやシラーも参加した「疾風怒濤」運動も、ロマン主義の初期形態とされる。いずれにしても、ロマン主義の文芸運動では、作家たちは国家体制の転覆よりむしろ個人の感情を重んじ、歴史や民族の文化の伝統を尊び、中世を賛美したことから、やがて、民族意識の高揚を目指す方向にも展開していった。たとえば、前期ロマン主義では、ドイツ観念論の影響を受けた詩人ノヴァーリス（Novalis、本名 Friedrich von Hardenberg、1772〜1801）やシュレーゲル兄弟（兄Friedrich von Schlegel、1772〜1829。弟August Wilhelm von Schlegel、1767〜1845）、後期ロマン主義では、ドイツ語圏各地に伝わる民謡を収集し、『少年の魔法の角笛（Des Knaben Wunderhorn）』を出版したアルニム（Achim von Arnim、1781〜1831）とブレンターノ（Clemens Brentano、1778〜1842）などの活動が、フランスの文壇にも影響を与えていったことはつとに有名だ。しかし、こうした流行がドイツ民俗学（Deutsche Volkskunde）の母胎ともなっていった点については、日本では研究者以外にはさほど知られていない。

18世紀末に本格的な胎動をみたドイツ民俗学は、19世紀に入り、たとえばグリム兄弟、とくに長兄ヤーコプ（Jacob Grimm、1785〜1863）の貢献により、学問としての体系が整備されていく。それまで行われてきた単なる興味先行の好事家的な収集から、集められた資料をいかに研究対象とし、秩序立てていくかという新たな目標が設定されたのである。この段階でヤーコプ・グリムが精力的に取り組んだのは、「失われてしまった（と彼が信じた）長大なザーゲ[2]」を再構成することだった。彼は、『ドイツ伝説集（Deutsche Sagen）』の前書きにおいて、民衆が語り伝えてきた民間伝承が、かつてあった物語の断片に違いないと仮定し、できるだけ多くの伝承を収集し再構成することで、「壮大な過去の物語」に少しでも近づこうという意図を表明している[3]。『ドイツ伝説集』初版第１巻が上梓されたのは1816年。これは、日本でも有名な『グリム童話集[4]』初版第２巻刊行のちょうど翌年にあたる。さらに、2年後の1818年には『ドイツ伝説集』の初版第2巻が出版されており、童話集と同様か、あるいはそれ以上に、グリム兄弟がザーゲ研究に精力を注いでいた様子がうかがえる。彼ら以外にも、19世紀から20世紀前半にかけては、さまざまな伝承を意図的に収集および編集・出版しようとする目論見が、ドイツ語圏の各地で盛んに行われた。その結果、じつに膨大な数のザーゲ集やメルヒェン集が編まれている。ある試算によれば、

ドイツ語で書かれたザーゲやメルヒェンのうち、500以上のモティーフが19世紀に初出し、個別のテクストを数えてみれば、その数じつに2万にものぼるという[5]。ただし、これらの民間伝承にみられるモティーフは、その大半は先に出版されたテクストからのフィードバックだったのだが……。こうした研究の蓄積もあり、伝承研究（Erzählforschung）は19世紀以来、ドイツ民俗学の伝統的研究領域のひとつに数えられてきた。

19世紀当時の伝承集をひもといてみると、そこに書かれている多くの話は、いわゆるザーゲに分類できる。にもかかわらず、伝承研究の枠組み全体の傾向では、ザーゲよりもむしろメルヒェンへの関心が強い。その結果、研究対象としてのメルヒェンは、ドイツ民俗学以外からもさまざまなアプローチの研究が積み重ねられ、かなり精緻な議論がされているのに対し[6]、ザーゲについては、立ち遅れているという現状がある。

実際第二次世界大戦後も、さまざまなかたちで、メルヒェン同様、ザーゲの目録を作成しようというローカルな試みが、あるにはあった。一例を挙げれば、1959年にコペンハーゲンで開催された民間伝承研究者の国際会議だ。この会議の際、民間伝説（Folk Legend）に関する分科会が設けられたのを直接のきっかけとして、ドイツ語圏においても、ザーゲ研究に意欲を燃やす研究者が参集し、目録作りが始まる[7]。中央ヨーロッパ、平たくいえばかつてのドイツ語圏をほぼ包含する地域の責任者となったのが、『ザーゲ辞典（Handwörterbuch der Sage）』[8]の編者で、伝承研究に軸足を据えた民俗学者としても知られるポイカート（Will-Erich Peukert、1895〜1969）だった[9]。

しかし、こうした一連の試みも、一部のテーマについてはある程度の成果は引き出したものの、ザーゲ研究を体系的に高めるには至っておらず、当時作成された膨大なデータベースは、さほど活用されることもなく、現在も各地に点在したままになっているようだ。

たとえばそのうちのひとつが、南西ドイツのフライブルク市にある。1960年代、マインツで教壇に立ち、後にフライブルク大学教授の職に就くルッツ・レーリヒ（Lutz Röhrich、1922〜）のコレクションがそれだ。1972年、レーリヒは収集したザーゲを利用しやすい形にデータベース化して「ザーゲ研究所（Forschungsstelle Sage）」とし、一般にも利用できるように公開した。教授在任中も随時データを追加し続け、レーリヒが大学を退職した現在は、フライブルク市の閑静な住宅街にある、ヨハネス・キュンツィヒ・インスティテュート（Johannes-Künzig-Institut für ostdeutsche Volkskunde in Freiburg）の一室に移設された。やがて移動にともない、「フライブルク・ザーゲ資料所（Freiburger Sagenarchiv）」と名称も改められ、現在に至っている。

１．２ フライブルク・ザーゲ資料所について

ヨハネス・キュンツィヒ・インスティテュートの広い玄関を入り、左側にある扉を開けると、地下室に通じる階段がある。そこを下りた先にある広さ約25㎡の一室、そこがザーゲ資料所である。（図１－１）。写真のほぼ中央に見えるのは、外へと続く扉で、その左右の壁面に並んでいる背の高い柱のようなものが、類話の収納棚になっている。棚には引き出しが入っており、そのおのおのの中には、さまざまな伝承集などの中から抽出されたザーゲが、テーマごとに整理されて収納されている。1箱につき、多いものでは200編近く入っている場合もあるが、空箱や、入っていても数編という箱も、なかにはある。資料所の管理者による試算によれば、ここに収容されている類話数はのべ15万にのぼるという。

【ザーゲ資料所　所在地データ】

Johannes-Künzig-Institut
Silberbachstr. 19
79100 Freiburg, Germany
Tel.: 07 61 - 70 44 30　Fax: 07 61 - 7 04 43 16
E-Mail: jki.kuenzig-inst@tesionmail.de
Internet: www.jki.uni-freiburg.de/willkommen.html

【図 1-1】フライブルク･ザーゲ資料所 撮影は筆者による）

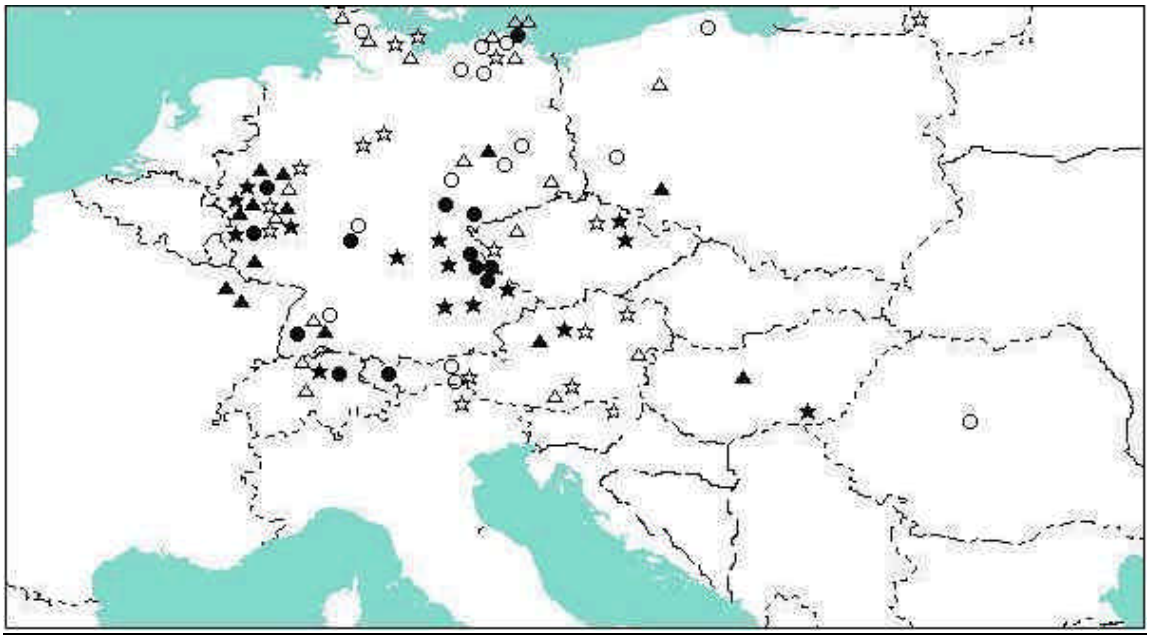
収集類話数においておそらく世界最大と思われるフライブルクのザーゲ資料所のコレクションは、19世紀以降出版されたザーゲの中でも、とくにデモン[10]と死者に関する類話に限定されており、それらを中心として整理されている[11]。参考資料として本論巻末に、収蔵資料の分類一覧をつけた[12]。分類項目については、まだ検討の余地も見受けられるが、それはザーゲの目録を作成させる作業が未完のままだからだ。とはいえ、これだけの数の伝承をテーマごとに収録してあるというだけでも、利用価値は計り知れない。にもかかわらず、その大半がアーカイブされた後、棚の中で利用者を待っている。それは、すでに述べたように、1970年代以後、メルヒェンが、伝承研究のみならず、さまざまな方面からとくにスポットライトを浴びてきたからにほかならない。資料所の分類項目のうち、研究が進んでいるものとしては、たとえば魔女や悪魔、矮人、ニクセなど、いわゆる流竄の神々系のデモンが挙げられる。これらがザーゲだけでなくメルヒェンにも登場するからだとも考えられるし、あるいは、従来の伝承研究では、祖型探しに強い関心をよせ、キリスト教によるフィルターがかかる以前の、より古い形・原型を抽出しようとする傾向があったからだとも考えられる。伝承研究の枠内でみれば、運命の女神（Schicksalsfrauen）や病のデモン（Krankheitsdämonen）、とりかえっこ（Wechselbalg）などについてはある程度まとまった研究はあるが、第二次世界大戦後に上梓された研究は、実際、ブレードニヒによる運命の女神研究くらいだ[13]。伝承研究以外からでは、悪魔などに関しては、美術史からのアプローチも多数あるし[14]、魔女を、産婆とからめ、ジェンダーの観点から分析した研究もある[15]。

本稿でとりあげる「燃える人」をモティーフとする伝承は、資料所の目録番号164番に「Feuermänner」（「Feuermann」の複数形）として収められており、それが本稿執筆にあたっての基礎的なデータとなった。総数は350編ほどで、40数冊の本ないしコレクションから抽出されたものである。燃える人についてのまとまった研究は、わが国はもとより、ドイツ語圏でも皆無というのが実情だ。その理由は、とりもなおさず、燃える人のハイブリッド性にあると筆者は考えている。冒頭でも言及したように、燃える人は、「昇天を待つ」「燃える」「幽霊」として伝承中では描写される。論旨の先取りになるが、「昇天」というモティーフにキリスト教の臭いをかぎ取ったならば、燃える人はキリスト教化後に成立した新しいデモン、すなわち、雑種・亜種と捉えられ、従来の伝承研究では興味の対象とはなりえず、研究の俎上にはあがらなかった。しかし、本稿において筆者が関心を抱くのは、純粋なものを抽出することでも、祖型を探すことでもない。そうではなく、ハイブリッドなものがいかに構築されたかについて解読したいのである。こうした視座にたった場合、燃える人はまたとない素材といえる。

１．３　出典伝承集について

本論に入る前に、資料所に収集されている伝承資料の基礎データとなった伝承集の、来歴についてみておきたい。伝承集は、古くは19世紀のものから、20世紀後半に出版されたものまで100冊以上におよぶ（巻末添付資料２参照）。表１－１から１－３は、それら伝承集について出版年代から３期に分け（第１期：19世紀、第２期：20世紀初頭～第２次世界大戦終結、第３期：第２次世界大戦集結以降）、おのおの出版地および伝承が由来する地域を、ドイツおよびオーストリアは現在の州、それ以外は国に基づいて一覧表示したものである。これら3期の区分は、地図上にマークする便宜上筆者が恣意的に行ったものであるが、おおむねドイツ民俗学の学説史をふまえた区分になっている。また、このデータを図１－２として地図に落とした。出版年代について内訳をみると、19世紀中31、20世紀前半（1901～1945）が38、1945年以降現代までが34となっている。

図１－２からもわかるように、収蔵されている伝承の由来地は、第二次世界大戦後に強制帰国させられるまでドイツ語話者が居住していた地域、全般におよんでいる。むろん、複数冊の伝承集が出版された地とそうでない地とで濃淡はあるが、それでも、かつてのドイツ語圏全域が網羅されていることだけはいえる。



【図 1-2】ザーゲ資料所収蔵の伝承集がテーマとする地域の年代別分布状況

※　ただし、ドイツ全般から収集されているものについては記載しなかった。

【凡例】

	「燃える人」伝承なし	「燃える人」伝承あり
第 1期	○	●
第 2期	△	▲
第 3期	☆	★

「燃える人」伝承に限っていえば、燃える人とその関連モティーフが採集された地は、全体より例数が減るため、伝承全体と比べれば分布は若干狭くなってはいるが、それでも、特定の地域への顕著な偏りはみられない。年代別にみても、全体からまんべんなくでているといってよい。伝承が収集され始めた最初期の伝承集にも言及が見られることから、「燃える人」というモティーフが20世紀にいきなり現れたわけではないことはいえる。つまり、本論を展開していくにあたっての基礎的なデータとして、資料所に集まっている伝承資料は、百点満点ではないにせよ、合格点は満たすといえる。むろん、サンプル数が少ないだけでなく、データ形式も統一されていないため、これらの伝承資料は統計処理には不向きだが、何らかの傾向あるいは方向性を読み取る鍵を提供してくれるのではないだろうか。ここを、本論の出発点とする。なお、収集され、参照した伝承については、その日本語訳を巻末に資料３として添付した。

※ 表1－1から1－3における「整理番号」とは、巻末に添付した、伝承資料目録の番号。
※ 表1－1から1－3における「FM」の欄に「1」と記入のあるものについては、「燃える人」伝承が1編以上収録されているもの。

【表 1-1】ザーゲ資料所収蔵の伝承集がテーマとする地域（第1期）

整理番号	FM	収集地域	地域名	出版地	出版年
24	1	Voigtland	ザクセン	Gera	1871
64		Schleswig-Holstein	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン	Kiel	1845
22		Innsbruck	ティロル	Innsbruck	1895
105		Tirol	ティロル	Innsbruck	1891
100	1	Thuringen	テューリンゲン	Wien	1878
83	1	Bergische	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Elberfeld	1897
86	1	Eifler	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Trier	1858
37		Mansfeld	ザクセン＝アンハルト	Eisleben	1880
3	1	Baden	バーデン＝ヴュルテンベルク	Karlsruhe	1859
10		Schwaben I	バーデン＝ヴュルテンベルク	Wiesbaden	1874
88	1	Oberpfalz I	バイエルン	Augsburg	1857
89	1	Oberpfalz II	バイエルン	Augsburg	1858
90	1	Oberpfalz III	バイエルン	Augsburg	1859
87	1	Oberpfalz o.J.	バイエルン	Kallmunz/Oberpfalz	o.J.
94		Mark Brandenburg	ブランデンブルク	Berlin	1839
25		Mark Brandenburg I	ブランデンブルク	Berlin	1868
101	1	Hessische	ヘッセン	Leipzig	1853
9		Oberhessisches	ヘッセン	Frankfurt/M	1873
55		Markische	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Berlin	1843
4		Meklenburg I	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Wien	1879
5		Meklenburg II	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Wien	1880
51		Pommern und Rugen	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Stettin	1886
95	1	Pommern und Rugen	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Berlin	1840
1	1	Alpensagen	スイス、オーストリア	Wien	1861
98	1	Alpensagen	スイス、オーストリア	Wien	1858
35	1	-	ドイツ	Berlin	(3)1891
36		-	ドイツ	Berlin	(3)1891
104		-	ドイツ	Freiburg/Br., Tubungen	1881/82
65		Siebenburgische	ルーマニア	Wien und Hermannstadt	1885
52		Hinterpommern	ポーランド	Posen	1885
97		Wendische	ポーランド	Graz	1880

【表 1-2】 ザーゲ資料所収蔵の伝承集がテーマとする地域 第 2期）

整理番号	FM	収集地域	地域名	出版地	出版年
17	1	Oberosterreich	オーバーエスタライヒ	Linz	1932
33		Karnten	ケルンテン	Leipzig	1914
57	1	Saar…	ザールラント	Saarbrucken	(3)1935
60		Sachsische Schweiz	ザクセン	Dresden	1929
93		Magdeburger Dom	ザクセン＝アンハルト	Magdeburg	1908
63		Amt Rendsborger	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン	Rendsburg	1925
16		Lubische	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン	Lubeck	1911
67		Nordfriesische	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン	Stedesand	1932
43		Berg und Mark	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Elberfeld	1927
84	1	Bergische	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Elberfeld	(2)1922
48	1	Indegebit	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Eschweiler	1914
44	1	Munsterlandische	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Munster/Westf.	1935
14	1	Niederrhein	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Bonn a.Rh.	1937
45		Rhein	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Essen	1935
49	1	Ruhrgebiet	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Eschweiler	1911
21		Tuttlingen	バーデン＝ヴュルテンベルク	Tuttlingen	1940
15	1	Kreis Zauch-Belzig	ブランデンブルク	Belzig	1937
59		Burgenland	ブルゲンラント	Wien und Leipzig	1931
39		Grimmen	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Greifswald	1925
27		Hiddensee	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Stettin	1925
40		Rugensche	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Stettin	(4)1912
41		Stubbenkammer	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Sasnitz	1914
42	1	Pfalzisches	ラインラント＝プファルツ	Kaiserlautern	1912
61	1	Lothr. Meistube I	ロレーヌ	Kassel	1943
62	1	Lothringen II	ロレーヌ	Saarbrucken	1936
29		Schaffhausen	スイス	Schaffhausen	1933
66		Uri. I.	スイス	Basel	1926
34		Egergau	チェコ	Eger	1913
73	1	Ungarndeutsch	ハンガリー・ルーマニア	-	-
56	1	Breslau	ポーランド	Breslau	1926
53		Provinz Posen	ポーランド	Berlin-Friedenau	1913

【表 1-3】 ザーゲ資料所収蔵の伝承集がテーマとする地域（第 3期）

整理番号	F M	収集地域	地域名	出版地	出版年
38		Wien	ヴィーン	Wien	1952
58		Glodnitztal	ケルンテン	Klagenfurt	1957
99		Fehmarn	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン	Neumunster	1964
91		Sudoldenburg	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン	Bonn	1972
50		Zillertal	ティロル	Innsbruck	1956
26		Bezirk Scheibbs	ニーダーエスタライヒ	Scheibbs	1975
11	1	Hallertau	ニーダーエスタライヒ	Mainburg	1975
71		Niedersachsische I	ニーダーザクセン	Gottingen	1964
72		Niedersachsische II	ニーダーザクセン	Gottingen	1966
18		Bonner	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Bonn	1965
46	1	Julich	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Bonn	1955
30	1	Rheinische	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Koln und Krefeld	(3)1949
31		Siebengebirge	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Koln	1957
47		Uberlieferung	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Munster/Westf.	1951
20	1	Untere Sieg	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Bonn	1950
6	1	Bohmerwald	バイエルン	Marburg	1957
2	1	Frankenland	バイエルン	Karlsruhe	1972
23	1	Frankische	バイエルン	Kulmbach	1964
12	1	Ingolstadt	バイエルン	Mainburg	1973
96	1	Mainfranken	バイエルン	Wurzburg	1969
13	1	Niederbayern	バイエルン	Rendsburg	1977
102		Reise,Quartier, in Gottesnaam	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Rostock	1952
103	1	Westeifel	ラインラント＝プファルツ	Bonn	1966
28		Sudtirol	イタリア（南チロル）	Munster	1969
32	1	Zurcher	スイス	Zurich	1959
85		Bachern	スロヴェニア	Wien	1956
70	1	Hochwies	チェコ（ズデーテン）	Gottingen	1959
92	1	Mies	チェコ（ズデーテン）	Dinkelsbuhl	1958
8		Sudetendeutsch	チェコ（ズデーテン）	Marburg	1962
69	1	Deutsche Volkssagen	ドイツ	Munchen	1970
54		Volkssage und Volksglauben	ドイツ	Bonn	1972
7		Oberpfalzisch-bohmischen	バイエルン／チェコ	Munster	1965
19	1	Donauschwabische	ハンガリー・ルーマニア	Munchen	1952
68		Kurische Nehrung	リトアニア（東プロイセン）	-	1961

[1] 当然のことながら、ここでいう「ドイツ語圏地域」は、現在ドイツ語が公用語となっている国（ドイツ、オーストリア、スイスの一部）とは必ずしも一致しない。たとえば、現在東欧に分類される諸国にも、第２次世界大戦終結まではドイツ語を母語とする人々が数多く居住していたからである。

[2] ザーゲ（Sage）の語源は、ドイツ語で「しゃべる」を意味する動詞 sagen に由来することからもわかるように、本来は「しゃべられたこと（ゲザクテス gesagtes、sagen の過去分詞 gesagt を名詞化したもの）」を意味した。演説（Rede）や報告レポート（Bericht）、物語・叙述（Erzählung）、噂（Gerücht）などもこの範疇に含まれた。こうしたニュアンスをふまえ、本稿において筆者はドイツ語の「Sage」には「いいつたえ」とルビを振った。以下、煩雑になるためルビは省くが、いずれにしても、定訳となっている表現（たとえば後述の『グリムドイツ伝説集』など）を除き、「Sage」の訳語として「伝説」は用いず、本稿において「伝説」は、「Legend」の訳に限って使う。

[3] ただし、グリム兄弟の営みを支えるデータが、民衆の間で集められた口承文芸などではなく、あたかもそうであるように偽装されたものだったことは、現在では（少なくとも研究者の間では）よく知られている。ただ、従来アカデミズムの舞台では、さまざまな事情から兄弟にシンパシーを感じる後継者が多かったためか、グリム兄弟の著作における「偽装工作」についての明言は、じつは 1975 年のレレケによる仕事（Rölleke: 1975）までまたなければならなかった。

[4] ドイツ語タイトルは、直訳すると『子供と家庭の童話集 (Kinder- und Hausmärchen)』だが、日本では一般に『グリム童話集』と呼ばれるため、ここでもそれに倣った。

[5] Schenda: 1987, S.280.

[6] たとえばボルテとポリフカによる『グリム兄弟の「子供と家庭のための童話集」注釈』（Bolte & Polívka: 1982）は、『グリム童話集』に収録されている各話について、その年代や文学的な注釈なども含めて緻密に研究したもので、第 1 巻の出版は 1913 年、第一次世界大戦を挟み、1932 年に第 5 巻をもって完結した。出版されて以後、メルヒェン研究にあたってのいわば「バイブル」としての役割を果たしてきた、金字塔的著作である。また、アールネとトンプソンの『昔話のタイプ』（Aarne & Thompson: 1961）およびトンプソンの『民間伝承のモティーフ索引』（Thompson: 1955-1958）は、メルヒェン分類に当たっての国際的な基準になっている。ドイツ民俗学においては、1975 年以来『メルヒェン百科事典』（Ranke: 1975ff.）が刊行され続けており、おそらくはここ 10 年のうちに完結するだろう。

メルヒェン研究者としては、ドイツにおける伝承研究の牽引役のひとりであったリュテ

ィ（1909〜1991、著作としては、たとえばLüthi: 1992）やレレケ（既出）を挙げておきたい。

最近注目されているのが、民間伝承のモティーフを歴史文献の中に見いだそうという試みである。レーリヒは中世末期の文献に直接あたり（Röhrich: 1962, 1967）、モーザー＝ラースはバロック時代のそれにあたることで（Moser-Rath: 1964）、モティーフがどのように文献に現れてきたか、系統立てて推論している。あるいは、ブルックナーは宗教改革期における伝承の源について再考した（Brückner: 1974）。とはいうものの、歴史的な研究については今なお立ち後れていると言わざるを得ない。このほか、シェーンダ（Schenda: 1969）、ダクセルミュラー（Daxelmüller: 1985）などの仕事も重要だ。

また、民間伝承を文明化の枠組みや社会的な関係を反映するものとして研究した、レーリヒ（Röhrich: 1979）、ザイプス（ザイプ: 2001）などもある。

なお、ドイツでは、ロシアフォルマリズムのような民間伝承の構造研究（プロップ: 1988）は、さほど盛んではない。比較的小さな研究が、たとえば笑い話（Schwank）や冗談（Witz）、ことわざ（Sprichwort）、なぞなぞ（Rätsen）などについて行われているのみである。

心理学あるいは精神分析的な解釈からのアプローチとしては、フロイト派の精神分析学によるメルヒェン解釈である、ベッテルハイムのもの（ベッテルハイム: 1978）が卓越している。

[7] Burde-Schneiderwind & Greverus: 1967 および Müller & Röhrich: 1967.

[8] Peuckert (hrsg.): 1961-1963. ただし、第1巻（1961年）から第3巻（1963年）が発行されただけで、刊行中止となった。

[9] この辞典作成の準備作業として彼が作成した膨大な量のカード型データは、現在は「ポイカート・アルヒーヴ（Peuckert-Archiv）」としてゲッティンゲン大学の文化人類学／ヨーロッパ民族学インスティテュート（Institut für Kulturanthropologie / Europäische Ethnologie）に保管されている。

[10] デモンは一般には「悪霊」などと訳されるが、「悪」というネガティヴな価値を付与したのは、当然キリスト教である。プラトン『饗宴』におけるソクラテスの発言を牽くまでもなく、キリスト教が土着の神格を追放するまでは、デモン（ダイモン）は偉大なる神霊であった。それゆえ、本稿において「デモン」には、善悪一切の価値基準を設置せず、たんに「人間以外の霊的存在や中立的な意味での怪異」といった意味合いで用いる。

[11] ただし、死者に関するザーゲについては、その一部（33段×10列＋15段、1段につき1箱。箱1つにつき100編入っているとすれば、総数はのべ3万4500編）は整理されてい

ることになるが、ここに収納されている以外の大半は、メモ書きの状態で死蔵されたままになっている。そのため、資料として即座に活用できるのは、デモンに関するザーゲが主である。

[12] 高位インデックスは 60 あり、それらには、1 番から 5 きざみに 300 番までの番号が振られている。下位インデックスとして、高位インデックスに 1〜4 までの数字を足した数が用いられ、さらに下位のインデックスとしてアルファベットのカテゴリーが設けられている。

[13] Brednich: 1964 （ブレードニヒ: 1989）

[14] 悪魔などの図像に関する研究は枚挙に暇がないが、筆者がことさらに興味深いと思った研究は、たとえばリンク:1995 がある。

[15] エーレンライク＆イングリシュ: 1996.

第２章　「怪し火」のエティモロジー

ヨーロッパで収集された火をめぐる怪異現象に関する伝承は、日本語とは異なった体系で分類されている可能性も大いにあるため、たとえば冒頭に記した寺島良安の分類をそのまま採用するわけにはいかない。それゆえ、本論では「怪しげな光」に関する分類を棚上げにし、「光を発する怪異現象」を総じて扱うために、「怪し火」または「怪火」という語を用いる。

ではまず、ヨーロッパにおいて怪し火を示す語彙の整理から始めよう。

２．１ ドイツ語名称

ドイツ語圏では、現象としての「怪し火」を指す呼称としてもっとも一般的なのは、イルリヒト（Irrlicht）である。「惑わす、困らせる」を意味する動詞 irren の語幹に、「光」を意味する名詞 Licht が連結したものだ。とりわけ北部ドイツと中部ドイツでは、イルヴィッシュ（Irrwisch）とも呼ばれる。wisch とは、「拭きとる、軽くなでる、さっと動く（さっと動いて消滅する）」を意味する動詞 wischen の語幹である[1]。

同様の民俗語彙としては、ルール地方を抱えるヴェストファーレンとニーダーラインの、イルリヒトの転訛型とみられるイアルュヒテ（irrlüchte）[2]、イアファッケル（irrfackel、Fackel とは「松明」の意）、ドゥヴァルリヒト（dwallicht）などが収集されている。dwal とは、地方語で「迷う」を意味する再帰動詞 sich verdwalen に由来し、これは標準ドイツ語の sich verirren（irren とほぼ同義）と同義であるから、これもイルリヒトの延長上にあるといえる。その他、クァドリヒト（quadlicht）という地域もある。quad とは「邪悪な、悪い」を意味する[3]。さらにヴィップ-ロェッチェ（Wipplötsche）[4]や、ドロェグリヒト（dröglicht）[5]という名もあるが、その語源は詳らかではない。ヴェストファーレンにほど近いルクセンブルクではドラウリヒト（draulicht）[6]、北部ドイツのシュレスヴィヒ・ホルシュタインではテュンメルディング（Tümmelding）[7]やドゥヴェリヒト（Dwerlicht）[8]など、同義と思われる語彙も知られている。

中部ドイツのハノーファー近郊とハルツでは、stelzen（「ぎこちなく歩く」の意）に由来するとも推測できる、シュテルテンリヒト（stöltenlicht）あるいはシュトルケンリヒト（stölkenlicht）[9]という名称が記録されている。加えて、ブランデンブルク地方には、リュヒテマンヒェン（lüchtemannchen、「光の人」の意か）[10]、メクレンブルクには、イァドフレムケン（irdflämmken、「地上の炎」）、イァドリヒト（irdlicht、「地上の炎」）、 フレムシュティルン（flämmstirn、「炎の額」）、フラッカーフュァ（flackerfür、「チラチラするもの」）といった民俗語彙もあるという[11]。また、南ドイツやスイスでは、怪火現象が擬人化され、

フォイアーマン（Feuermann、「燃える人」）とも呼ばれる。冒頭で紹介した伝承に登場する燃える人は、ここに分類できる。なお、本論文のタイトルにもあるとおり、燃える人が分析の鍵となることは前章で述べたとおりである。

いずれの表現も、語の前部あるいは後部に、何かしら火あるいは明かりと関係ある語が含まれている点で、少なからず共通点が見いだせる。さらに指摘しておきたいのは、「惑う、迷う」を意味する irr-が入っている場合も多い点である。

語尾に-old、-olt、-ot(e)がつくタイプもいくつかみられる。たとえば、アルトマルク南部[12]とブラウンシュヴァイクでは、ディッケポット（dickepot）と呼ばれ、この地に伝わる怪し火とは異なる怪異をめぐる言語表現、すなわちディックフース・アルス・ダス・トレーテンデまたはアオフホッケンデ（Dickfuß als das tretende, aufhockende、「のしのし歩く大足、背中に乗ってくる大足」の意）がその語源とも想定されている[13]。さらには、フッケポット（huckepot）、テュッケボーテ（tückebote）、テュッケボルト（tückebold）といった派生語もある。これらの語が、人に悪事を働くという侏儒コーボルト（Kobold）とどこまで関連するかは、民俗事例などと照らし合わせて考察する必要があり、関連性を即断することはできない。しかし、少なくとも名称をみるかぎりにおいては、コーボルトに似た名が怪し火の名称として用いられていたことは注目しておいてもよい。

２．２ 英国での名称[14]

得体の知れない怪しげな火の呼び名として、現代英国でもっとも一般的に使われるのは、ウィル・オ・ザ・ウィスプ（will o’the wisp）だ。OEDによれば、正書法でWill of the wisp となるこの表現は、「藁束（wisp）のウィル（Will、男性名ウィリアムの短縮形）」を意味する。ウィル・オ・ザ・ウィスプに類似の表現としては、たとえばウィル・ウィズ・ザ・ウィスプ（Will-with-the-Wisp）、ウィリー・ウィスプ（Willy Wisp）、ノーフォーク州のウィル・オ・ザ・ワイクス（Will o’ the wikes[15]）などが ある[16]。また、ヨークシャー西部では、ウィリーではなく、ビリー・ウィッツ・ウィスプ（Billy-wi'-t'-wisp、「灯火を持ったビリー」）と呼ばれる[17]。

ウィリーがホビーに取って代わり、藁束がランタンに取って代わっているのが、ウスターシャー[18]、ハーフォードシャー、イースト・アングリア地方、ハンプシャー、ウィルトシャー、ウェールズ西部だ。これらの地では、怪しげな火はホビー・ランタン（Hobby-lantern、「ホビーのランタン」）と呼ばれたという[19]。

ノーサンバランド州では、固有名詞の部分がキティに変わっており、キティ・ウィザ・ウィスプ（Kitty-wi'-the-wisp、「灯火を持ったキティ」）という名がある[20]。後半部分が「ろ

うそく立て」になっているタイプで呼ぶのが、ウィルトシャーで用いられている、キティ・キャンドルスティック（Kitty-candlestick）である[21]。また、ハンプシャーでは、キット・ウィズ・ザ・キャンドルスティック（Kit-with-the-Candlestick、または-Canstick、「ろうそく立てを持ったキット」）だという[22]。

ノーサンバランド州とノース・ヨークシャーでは、さらに別系統のヴァリエーション、すなわちジェニー・ウィット・ランタン（Jenny-wi'-t'-lantern、「ランタンを持ったジェニー」）が登場している[23]。ノーサンプトンシャーとオックスフォードシャーでは、後半部が入れ替わり、ジェニー・バーント・テイル（Jenny-burnt-tail、「燃える尻尾のジェニー」）となる[24]。これは、「燃える藁束」の極端な変化型ともとれる。ジル・バーント・タイル（Gyl Burnt-tayle、「燃える尻尾のジル」）というヴァリエーションもある。サマーセット州、コーンウォール州では、ジョーン・イン・ザ・ワッド（Joan-in-the-wad、「藁束の中のジョーン」、またはジョーン・ザ・ワッド（Joan-the-wad、「藁束のジョーン」）だという[25]。

固有名詞とランタンとが組み合わさったもので、もっとも人口に膾炙した名称は、ジャック・オ・ランタン（Jack o’Lantern、「ランタンのジャック」）だろう。現在ではむしろ「ハローウィンのカボチャ」を指す名称として知られているが、じつはこの用法が初出するのは1837年にすぎず、「怪し火」の名称としての文献初出は1673年。「ハローウィンのカボチャ」に150年も先行する計算になる[26]。なお、ジャック・オ・ランタンが怪し火の名称として使われるのに地域的な傾向はみられない。ただし西部地域では、とくにジャッキー・ランタン（Jacky Lantern）が用いられている[27]。

以上縷々みてきた名称は、基本的に固有名詞と燃えるものの組み合わせである。しかし、それ以外の型もいくつかあり、イースト・アングリア地方のザ・ランタン・マン（the Lantern-man、「ランタン男」）[28]、ウスターシャーのピンケット（Pinket）[29]などがそれにあたる。さらに、ランカシャーではペグ・ア・ランタン（Peg-a-lantern）と呼ばれることもあるという[30]。ペグとは、おそらく怪し火同様のいたずらをするといわれる妖精たち、たとえばヒンキーパンク（Hinky punk）、スパンキー（Spunkies）、パック（Puck）またはプーク（Pouk）などの表記にみられる語幹（pe-/pu-）が反映しているものだろう。したがって、これらの語彙も「いたずら者としての怪し火」の系譜上にあることがわかる。また、修道士ラッシュ（Friar Rush）[31]やロビン・グッドフェロー（Robin Goodfellow）[32]も、怪し火同様のいたずらをするといわれる。

こうした表現の応用型ともいえるのが、死の予兆としての怪し火コープ・キャンドル（corp-candle、「死体の灯火」）、デッド・キャンドル（dead-candle、「死の灯火」）だろう[33]。これらの用語も明るく燃える物体を指す後半部と、死を直接的に表現する前半部との合成語となっている。

２．３ その他の言語での名称

参考までに、ドイツ語と同じゲルマン語派に属する諸語の「怪し火」名称例をいくつかみておこう。ノルウェー語では lyktemann（lykte は「明かり」の意、mann は「人間」の意）[34]、デンマーク語では lygtemand（lygte は「明かり」の意、mand は「人間」の意）、スウェーデン語では irrbloss（irr は「迷う」の意、bloss は「明かり」の意）[35]、オランダ語では dwaallicht（dwaal は「迷う」の意、licht は「明かり」の意）とあり、語の構成から、どれもここまでにみてきたドイツ語表現の延長上に見ることができることがわかる。

ロマンシュ諸語の場合、フランス語にいうフ・フォレ（feu follet）が、得体の知れない火に与えられたもっとも一般的な名となっている。「火」を意味する feu を、「狂気」を意味する folie の派生語 follet が形容している。直訳すれば「狂気の火」とでもなるだろう。イタリア語ではフオコ・ファトゥオ（fuoco fatuo）[36]となり、ファトゥオが「愚鈍な、空虚な」の意であることから、意味はフランス語と同じである[37]。

じつは、ここまでみてきたさまざまな表現の元になったと類推される表現がある。ラテン語の ignis fatuus である。「愚かな」（fatuus）「火」（ignis）を意味し、英語では外来語としてそのままイグニス・ファテュウス（ignis fatuus）で「怪し火」を指す。たしかに、ドイツ語で一般的な名称であるイルリヒトおよび他の表現群も、このラテン語名称と内容的に酷似していた。いずれの表現にもラテン語同様の構図が見えることから、おそらくは、怪し火に対する西欧の諸言語の名称は、ラテン語から各国語に翻訳・導入されていったのではないだろうか。

論を先取りしていってしまえば、中世に編まれた聖者伝や教訓逸話集などをひもといてみても、そこで言及されているのは煉獄（後述）で浄罪する人ばかりで、筆者が参照した限りにおいては、明らかに怪し火とわかるような記述は皆無である[38]。じつは、ignis fatuus という名詞が英語圏に初出するのは 1563 年[39]、その元となった語がラテン語のテクストに登場したのも 16 世紀であるという。それ以前、つまり中世末期にこの語があったとは考えられない。ランケはそう断言している[40]。いずれにしても、英語およびドイツ語に「怪し火」が登場したのが、時まさに宗教改革の波に西欧世界が揺れた時期であったことは、注目しなければならない。

いうまでもなくラテン語は、20 世紀初頭までカトリック教会の公用語であり、母語としての話し手が皆無であるにもかかわらず、西欧文化のなかでは突出した位置を占めていた言語だ。それゆえ、怪し火の名称にこんなにも色濃いラテン語の影響が見られるという事実は、怪し火という現象を知覚した際に採用された説明原理の来歴を語っていると考えて

も、あながち的はずれではないだろう。つまり、ラテン語使用者、より正鵠を期して言えばカトリック教会の聖職者が、空中を浮遊する怪火現象を現実から切り出し、命名した張本人だったのではないか。筆者はそう推測する。なぜそのように推測できるのか。それをみるために、ふたたび「ザーゲ資料所」に戻ることにしよう。

[1] イルリヒトもイルウィッシュも、どちらももともと中部ドイツ語の地方語であったものが標準ドイツ語に採用された語である（Ranke: 2000b, Sp.779-786）。 なお日本語での表記は、ドイツ語の発音に忠実につづればイ･ァリヒト、イ･ァヴィッシュとなろうが、いくつかの日本語文献ですでに前述のごとく紹介されている。そのため本稿では、混乱を避けるため、両語については慣例に則った表記をとり、それ以外の単語についてはなるべく発音に忠実に従うような表記を心がけた。

[2] Oeke: 1907, S.223-224.

[3] Kuhn: 1973, S.23.

[4] Schell: 1925, S.84-85.

[5] Schell: 1897, S.166, Nr.65. また、Kluge: 1884～の Irrlicht の項も参照のこと。

[6] Gredt: 1963, S.73.

[7] Müllenhoff: 1845, S.186-187, Nr.255.

[8] Mensing (hrsg.): 1927, Bd.1, Sp.975.

[9] Schambach: 1967, S.212; Pröhle: 1886, S.197, Nr.201. なお、筆者は参照しなかったが、Pröhle の Harzsagen は、1957 年には Göttingen: Schwartz から Will-Erich Peuckert によって改訂されたリプリント版も出版されている。

[10] Kuhn:1887, S.98-99, Nr.93; Steig: 1904, S.425; Kuhn & Schwartz: 1848, S.425-426.

[11] Ranke: 2000b, Sp.780.

[12] マグデブルクを主要都市とする、中部ドイツの地名。

[13] Ranke: 2000b, Sp.780.

[14] 本稿においては、視座をヨーロッパに限定しているため、俎上に上げたのは英語のみで、米語については考慮しなかった。

[15] Briggs: 1977, p.438（ブリッグス: 1992, p.28）. ブリッグスによると、Mrs. Balfour, The Dead Moon にこのように書かれているという。また、リンカンシャーの沼沢地帯、ザ・フェンズ（The Fens）では、ウィル・オ・ザ・ワイクスとはいたずら者ボーグル（Bogle）の同義語として用いられるという。

[16] Briggs: 1977, p.438（ブリッグス: 1992, p.22）.

[17] Briggs: 1977, p.438（ブリッグス: 1992, p.22）.

[18] 以後、「シャー」とつく地名の場合、煩雑になるのを避けるため「地方」ないし「州」を省略する。

[19] Briggs: 1977, p.438（ブリッグス: 1992, p.22）.

[20] Briggs: 1977, p.438（ブリッグス: 1992, p.22）.

[21] Briggs: 1977, p.438（ブリッグス: 1992, p.22）.

[22] Briggs: 1977, p.254（ブリッグス: 1992, p.509）.

[23] Briggs: 1977, p.438（ブリッグス: 1992, p.22）.

[24] Briggs: 1977, p.438（ブリッグス: 1992, p.22）.

[25] Briggs: 1977, p.242（ブリッグス: 1992, p.527）.

[26] Oxford English Dictionary, “Jack o’ lantern”の項。

[27] Briggs: 1977, p.237（ブリッグス: 1992, p.136）.

[28] Briggs: 1977, p.438（ブリッグス: 1992, p.22）.

[29] Briggs: 1977, p.438（ブリッグス: 1992, p.284）.

[30] Briggs: 1977, p.438（ブリッグス: 1992, p.22）.

[31] Briggs: 1977, pp.181-182（ブリッグス: 1992, pp.137-138）

[32] Briggs: 1977, pp341-343（ブリッグス: 1992, pp.509-512）.

[33] Briggs: 1977, p.438（ブリッグス: 1992, p.22）.

[34] blålys（blå は「青い」の意、lys は「明かり」の意）、vettelys（vette は「賢い」の意）という呼び方もある。

[35] lyktgubbe（lykt は「明かり」の意、gubbe は「老人」の意）という呼び方もある。

[36] 語義は不明だが、クラルシ（cularsi）という呼び方もある。Ranke: 2000b, Sp.779.

[37] その他では、スラヴ諸語のうちチェコ語ではスヴェテュルコ（swetylko）、ブルディチュカ（bludicka）である。スラヴ基語の語幹 buchle は松明の意。

[38] だからといって、中世の知識人には怪し火が「見えていなかった」とは筆者は考えていない。怪火現象説明のためには、異なった切り口を彼らは持っていたのだろうが、それが何であったかについては、今後の研究を待たなければならない。

[39] Oxford English Dictionary, “ignis fatuus”の項。

[40] Ranke: 2000b, Sp.785.

第３章　タイポロジー

前節まででですでに言及しているように、本論文で俎上にあげるのは燃える人といわれる怪異だが、論を展開していくための基礎的なデータを共有するため、本章では、まず、燃える人にまつわる伝承をいくつかみることから始めよう。

３．１　「燃える人」伝承のパターン

３．１．１　罰としての徘徊

最初のパターンは、何らかの故があるため死後なお現世に繋ぎとめられて、しかも燃える姿となってあたりを徘徊するというものだ。たとえば以下のような類話がある。

【類話３－１】

以前、（ルール地方レヴァークーゼン市近郊）シュレブッシュ（Schlebusch）にほど近い、リュッツェルバッヘ（Lützelbache）にあるベックスヴィーゼ（Beckswiese）という名の牧草地には、赤々と燃える男がうろついていた。しばしば炎を吹き、うめき声を上げていたが、突如として夜道を歩いている者の前に出現しては、しばらくの間同道することもあった。その際、燃えている男はこんなことを呟いたものだった。「こいつをどこに置いたらいいんだ？こいつをどこに置いたらいいんだ？こいつをどこにやったらいいんだ？」。数年の間、そんなことが起こり続けた。多くの人がこの男に恐れをなし、その視線で病気にもなった。

ある夜、オーベンタール（Obenthal）のホーファー・マテスなる村人が帰宅するときのこと。シュレブッシュで大酒を飲んでいた彼は、リュツェルバッヘで赤々と燃える男に突然出くわした。男はいつもどおり呟いていた。マテスはステッキを強く握りしめて化け物の目を見つめた。彼は、背中に乗っている大きな境界標識石のせいで化け物（男）が喘いでいることに気付いたので、こういった。「そいつを、おまえが持ってきたところに置け！」すると化け物は「ありがとう！」と叫び、さらにこうもつけ加えた。「この答えをずっと待っていたんだ」。それきり男の姿は消え、以後再び現れることはなかった。[1]

「視線が人を病気にする」という発想は邪視信仰と呼ばれ、ヨーロッパや西アジアの諸地域で比較的多くみられる[2]。たとえばギリシアや中東には、「ファティマの目」と呼ばれるアクセサリーがあり、これは、手のひら型の中央にかっと見開いた眼が配置され、ネックレスや腕輪の飾りとして用いられているものだ。現代ではいささか信仰としての意味合

いは薄れてしまったが、本来は邪視よけとして身につけられた護符だった。ここに登場する「赤々と燃える男」も、「その視線で（人が）病気になった」という言及のみからすれば、ギリシア神話における邪視の使い手、「見た者を石にする」という怪物ゴルゴンの系譜に連なるともいえそうだが、燃える男の場合はゴルゴンとは異なり、退治はされない。燃える男は、背中に重い石、しかも境界標識石を担ぎ、喘いでいる。

この石が意味するのは何か。たとえば、石を担ぎ続けるというその姿だけをみれば、ゴルゴンと同じくギリシア神話に登場する、狡猾なシシュポスをも連想させる。シシュポスは、死を司るタナトスのみならず、冥府の王ハデスをも欺くことで自らの死期を延長させた。その狡猾さゆえ、死後、罰として、巨大な岩を山麓から山頂へと急な坂を登って運び続けるという仕事を課される。しかも、彼がようやく運び上げたその岩は、頂上に留まることはなく、運び上げられるとその途端にふたたび山麓へと転げ落ちるので、シシュポスは未来永劫苦役に縛り付けられる。ここに登場する「赤々と燃える男」の場合、シシュポスと同様、罰として石を担ぎながら歩き回っているようだが、泥酔したマテスとの出会いによって、燃える男には転機が訪れた。

マテスがステッキを手にしていることから、おそらく、彼が家長だということを暗に表現しているとも読み取ることができる。というのも、たとえばフランスとスペインの国境付近に広がるバスク地方では、ステッキは家長のシンボルで、それゆえ、家長以外はステッキをつくことは許されなかったという民俗事例があるからだ。マテスは燃える男と対決しようとそれを固く握りしめたようだが、ステッキを武器として戦おうとしたのだろうか。とすれば、バスクでのステッキに対する禁令とも符合する。その先に金具をつけると武器にもなることから、ときにステッキの持ち歩きは法によって禁止されたからである。

ともあれ、マテスが何者であろうとも、彼が何気なく口にした一言で、燃える男は「ありがとう！」と言い残し、消える。ではなぜ彼が背負っていたのは境界標識石なのか。それは、たとえば次に挙げる類話で言及されている。

【類話３－２】

燃える人とは、償わなければならない罪がまだ残っている、安らぐことのない魂である。とりわけ、生きている間に境界標識石を動かして隣人の土地を侵犯して耕したものなどである。境界標識石の設置は、古くはたいへん重大なことであって、裁判所の陪審員 7 名が見ているところで行われなければならなかった。設置にあたっては、まずは地面に穴を掘り、陪審員一人一人がその中に小石を 1 つずつ投げいれる。そしてその上に境界標識石を設置する。この境界標識石は「ポール（Pohl、字義不明）」とも呼ばれる。小石の位置を確認することで、境界標識石が最初に設置された場所にそのままたってい

るかどうかを確認することができるのである。境界標識石の設置は、厳粛に行われるべきものであり、それゆえ、その境界標識石を動かすという行為はとても罪深いこととして捉えられた。だから、違反者は死後燃える人としてあたりを徘徊することになった。彼らは自分が動かした石が元あったところに戻されるまで、永遠に地上をさまよい続けるとされた。[3]

「燃える人とは、（中略）安らぐことのない魂である」。類話３－１中では明示的には言及されなかった燃える人の正体について、ここではそう断言される。つまり、燃える人の正体とはいわば罪に穢れた死者だということがわかってくる。またここに、伝承の意図として、土地制度の厳守を強調する、教訓逸話的な要素を読み取ることもできる。7 名の陪審員の眼前で行わなければならないという境界石設置のための手続きが、どこまで現実を反映しているか、あるいは実際に運用されたかどうかについては詳かではないが、設置に際しての公正さを保証する証人である陪審員の数が、「7」という、1 週間の日数をも想起させるきわめてシンボリックな数となっていることは指摘しておいてもよい。

境界に対しての違反については後述するとして、次に挙げる類話には、境界標識石は登場しないが、類話３－２と同様、浄罪のための徘徊というモティーフがみられる。

【類話３－３】

燃える人とは、償わなければならない罪が現世にまだ残っている死者の魂で、とりわけ、生きている間に隣人の土地を（不正に）耕した者である。当地では彼らはたいてい、メルケンの野原（Merkener Feld。メルケンは、おそらくは、ケルンの近郊にあるデュレン Dürren という名の町近くの集落）あたりに出没する。夜になると、霊たち（Geister）がそこにたむろするとされたからだ。[4]

ここには、燃える人が境界標識石を動かしたかどうかについての記述こそないものの、類話３－２と同様、隣人の土地を勝手に耕したことが死後罪に問われ、犯した罪を贖（あがな）うために燃える人となって徘徊しなければならないとある。霊たちが跋扈するという「メルケンの野原」の夜の風景からは、たしかに刑場が連想されるが、ここは、罪を犯した者が断罪された場所だったのだろうか。いずれにせよ、類話３－３でも、やはり、燃える人の正体は罪を背負ったままに死んでいった者、とされていることがわかる。類似する話をもうひとつみよう。

【類話３－４　ブレスラウ（Bleslau、現ポーランドのヴロツワフ Wroclaw）の燃える人】

18 世紀当時、シュレジエン（Schlesien、現ポーランド南西部のシロンスク Slask）には、夜になるときまって出没する現れる妖怪（Gespenst）が怪し火の他にもいた。それは燃える人と呼ばれ、燃えさかる藁束のような姿をしていた。ある晩、帰宅が遅くなった村人がいた。彼が家の近くまでくると、なんと納屋の屋根に明るい火柱があがっているではないか。彼はびっくり仰天し、大声を上げながら隣人に助けを求めた。しかしまさにその刹那、ふっと火は消えてしまう。こうした出来事を経験した人は少なからずいた。別のある者はこのように言った。収穫の数日前、干し草置き場から屋外の野原の方向を見ると、収穫直前の畑が炎に包まれているのが見えた、と。しかし、この場合も、妖怪（Spuk）は通りすがるだけで人に悪さをすることはない。にもかかわらず、怪異が現れるその土地の所有者は、人々から罵倒された。というのも、強欲な開墾者（こそが怪異の正体）だと（シュレジエンでは）みなされていたからだ。生前、日々畑を耕すときに轍１本分ずつ隣の畑にずれ込み、（他人の土地を）恥知らずにも我がものとしていったような者は、死後呪われ、かつて不正に拡張した耕地に夜な夜な燃える人として戻ってくるのだと、農民たちは信じていたし、今でも信じられている。[5]

おそらくはたいまつをイメージしているだろうと思われる「燃える藁束」や、「畑が炎に包まれる」といった言及、あるいは、妖怪が現れたという年代が具体的に特定されている点が注目に値するが、本稿の主テーマとの関連でいえば、強欲な開墾者の欲深さの方がより興味深い。類話３－２から３－４に登場する咎人（とがびと）は、すべて、耕作すべき土地をもつ者、つまり富農なのである。土地の耕作権をもつだけで、その土地を所有しているわけではない小作人や、単純に労働力を提供するだけの季節雇い農民などであれば、境界石を動かすなどというリスクを冒すはずもない。人知れず行われる地境線の移動は土地制度への叛逆ともいえ、すると、前述したように、人々が違反行為に及ばないための歯止めとしての機能が、これらの伝承には仮託されていると読み取ることもできる。

史料をひもといてみると、たとえば、13 世紀前半に現在の中部ドイツにあたる地域で編まれた、『ザクセンシュピーゲル・ラント法（Sachsenspiegel Landrecht）』中に、境界標識石を設置する際の注意がみられる。ただし、その手順は、類話３－２中にみられるような方式とは異なっている。以下が該当部分の引用である。

誰しも境界樹［malbome］または境界石［markstene］を据えようとする者は、［境界の］他の側に土地を有する者を立会わせるべきである。[6]（[　]括弧内は訳文のまま）

中世初期に成立した[7]『バイエルン部族法典（Lex Baiuvariorum）』の第 12 章には、「破

壊せられたる境界? 示について」どのように処置すべきか、以下のように書かれている。

1［境界について］。もし誰かが境界を［壊して］平坦ならしめ、または固定せられたる境界? 示を敢へて除去したるときは、もし彼が自由人なるときは、各示標または目印毎に6ソリドゥスを賠償すべし。
2［もし奴隷がこれをなしたるときは］。もし彼が奴隷なるときは、各示標毎に鞭 50 打ちを受くべし。[8]

どの程度こうした罰則が厳格に運用されたかどうかは措くとしても、境界線の移動が違反として規定されていたことだけは、確かにここから読めるのである。

また、旧約聖書中にも何カ所か、地境の移動が違反であるとする記述がある。たとえば、『申命記』19,14 ならば以下のような具合だ。

あなたの神、主があなたに与えて所有させようとしておられる地のうち、あなたの受け継ぐ相続地で、あなたは、先代の人々の定めた隣人との地境を移してはならない。[9]

つまりは、聖書を忠実に読み解くならば、土地制度への違反は神の定めた規範への違反と同義なのである。聖書や、聖職者が民衆を教化するために利用した教訓逸話と民間伝承の関係については、キリスト教会における燃える人と絡めて次章以降でじっくり考えることになるので、ここでは記憶に留めておくだけでよい。土地制度に対する違反への罰であるという類話をもう一つみよう。

【類話３－５】

燃える男(fürige Mannli）がぴょんぴょん跳びはねているのが怪し火だ、と人々は考えている。燃える男とは、死者、つまり地獄または煉獄の炎で焼かれる霊（Geister）で、生きている間に境界標識石を不正に移動させた者だと信じられている。[10]

怪し火は燃える男の一種で、燃える男がぴょんぴょん跳ねていればそれを怪し火と呼んだ、と上記類話から読める。この話が成立する元となった現象は、日本語ならば「鬼火」や「狐火」と呼ばれる現象と、同一の現象かもしれない[11]。

また、ここでは地獄と並列的に言及されている煉獄とは、簡潔にいえば、生きている間に犯した罪を浄めるために死者たちが赴く場で、12 世紀以降、キリスト教の教義に組み込まれた。煉獄と燃える人の関連についてはかなりの説明を要するため、他の類話もみたあ

とでふたたびふれることになる。

さて、次に挙げる例では、これまでみてきた類話にあったのと同様、土地制度への違反行為と、それに対しての罰について言及はされているものの、燃える人のかつての職業は農民ではない。

【類話３－６　呪われた土地測量人】

夜、岸辺や畦をあちらこちらと彷徨う怪し火は、生きている間に偽りの境界線を引いた土地測量人だそうだ。それゆえ、死後彼らは永劫の罰を下され、死んでなお自ら引いた境界線を守るために出没するのである。[12]

この類話が採集されたメクレンブルクは、ドイツ人が中世以後に入植した地域である。18 世紀以後、西欧世界の表舞台で派手な立ち回りをするようになるプロイセンの範図にあるが、歴史的にみれば、西欧政治の中心からは地理的にかなり離れた、いわば辺境であった時代が長く、中世から近世にかけてつねに北欧諸国やポーランドなどの狭間で翻弄されながらも、辺境であるがゆえに、諸外国の征服の野心から免れてきたような地域だといえる。

いうまでもなく、土地をもつものにとっては自らが領有する土地を管理し経営するのは重要な関心事であり、それは新興領主とて同じであった。ただし、17 世紀頃にあっては、測量および地図の製作に関する統一ルールは発展途上であり、メクレンブルクに限っていえば、土地の所有者すなわち領主がおのおの役人を派遣し、自分の不利にならないように測量させていたようだ。不完全ながらも領内ではじめて土地測量のための統一ルールが布告されたのが 1702/04 年だったとされる。図３－１は、1704 年 1 月 25 日にプロイセン国王が出した、土地測量人に対しての指導書で、そこには、土地測量に対してのルールが書かれている[13]。いずれにせよ、土地測量によって計測された土地の広さは、財産管理や納税のための台帳作りに使われたから、測量人に対して人々が抱いた警戒心はいかほどだったかということが推測できる。

類話３－６をみる限りにおいては、どうやら土地測量人は、不正を犯したと思われているらしい。彼が仕える領主のための不正か、あるいは彼自身が私腹を肥やしたのかまではここから読み解くことはできないが、職務上の不正（と伝承を語る側からは思える）行為が、死後、伝承の中で断罪される。自らが犯した罪の代償として、死んだ後も彼には安息のときは訪れないのである。こうしたザーゲを語り継ぐことは、不正の被害を受けたものたちからの、権力に対してのささやかな抵抗だったろう。

無断で耕すにせよ、測量の際のごまかしにせよ、違反が人知れず隠れて行われたならば、

349 No. XIV. XV. XVI. XVII. 350

wenn er Gage hat 1. Gr., ohne Gage 1. Gr. 9. Pf. gezahlet werden können.

4. Bey einer nur General-Ausmessung einer gantzen Feld-Marck, Luches, Ackers, Wiesen, Bruch, Heyde, See, davon eine Charte zu machen, und alles auszurechnen, hat er Tractament, vom Morgen 8. Pf., ohne Tractament, 10. Pf.

5. So aber bey einer geringen Morgen-Zahl die Ausmessung geschiehet, alsdann kan nach Morgen diese Zahlung nicht geschehen, sondern gebühret demselben billig, so lange die Arbeit würcklich geschiehet, täglich nebst Essen und Trincken, wann er Tractament hat, 12. Gr., ohne Tractament, 18. Gr.

6. Für Verfertigung doppelter Charten wird nach der Arbeit die Belohnung müssen eingerichtet werden, so man so pure anjetzo nicht taxiren kan.

7. Wann von privatis die Ausmessung verlanget wird, zahlen diese dann die Arbeit nach der Taxe, als wenn der Land-Messer kein Tractament hat.

8. Letzlich muß dem Land-Messer allemahl die freye Fuhre in Hin- und Rück-Reise und freyes Quartier an jedem Orth gegeben werden, auch ihm die Handreichung von denen Unterthanen in tragen des Astrolabii, und anderer Instrumenten, auch Ketten schleppen geschehen. Cölln an der Spree, den 28ten Decembr. 1702.

Königliche Preußische Ambts-Cammer.

No. XVII. Reglement, wie es mit Ausmessung derer Aecker zu halten. De dato Cölln an der Spree, den 19. Febr. 1704.

Nachdem Seiner Königlichen Majestät in Preussen, ꝛc. Unserm allergnädigsten Herrn, allerunterthänigst vorgetragen worden, was gestalt wegen Ausmessung der Aecker in Dero Königreich und andern Provintzien und Landen bishero viel Schwierigkeiten vorgefallen, und, in Ansehung der hin und wieder sehr differirenden Hufen und Morgen, man nicht gewust, wie man denen Ingenieuren und Landmessern ihre dabey gethane Arbeit und gehabte Mühe der Billigkeit nach bezahlen solte; Als haben allerhöchstgedachte Se. Kön. Majestät nöthig gefunden, deßfalls eine gewisse Ordnung machen zu lassen und nach der Sachen reiffer Erwegung endlich beschlossen, daß es mit Ausmessung der Aecker nach Einhalt des folgenden Reglements gehalten werden solte.

1. Bey der longimetrischen Vermessung der [illegible] rinnen 12600. Landflächen, 4. Gr. Von fünff Meilen, darinnen 19200. Landflächen, 3. Gr. von jeder Landfläche von 12000. Ruthen bezahlet werden. Wann aber die differenten Gründe en general an Quadrat-Inhalt specificiret und angezeiget werden sollen, so muß der Acker, Wieserwachs, Heyde, Bruch und Hütung, in ihren belegenen gantzen Districten umbgemessen, und dann angezeiget werden, was insgesamt an Acker, Wiesen, Huht und Trifften en general darinnen befindlich, doch ohne zu specificiren, in was Proportion selbe eingetheilet, oder wie ein und der andere daran participiret, welches zur particularen Vermessung gehöret. Anbey müssen die Landstrassen, Flüsse und Ströhme mit der Ketten angemercket, und sollen diese, wie auch obige Species, in woll illuminirte Charten zu bringen, 20. Gr. vor jede 12000. Quadrat-Ruthen gegeben werden. [illegible]

【図 3-1】メクレンブルク 土地測量人に対しての指導書

それを暴き、咎めることは現世では誰にもできず、違反したという事実を知るのは、唯一、違反した張本人だけなのである。不公正きわまりないやり口に対して、死後、罰を加えることができるのは誰か。それが次の類話中にみられる。ここでは違反行為は、もっと堂々と行われている。

【類話３－７】

（ケルン近郊の）ランガーヴェーヘ（Langerwehe）とフレンツ城（Burg Frenz）の間には、ユンカースベンデン（Junkersbenden、語義不明）と呼ばれるかなり大きな底なし沼がある。そこは、以前はかなり柔らかく、足を踏み入れると抜け出すことができないといわれた。民衆の間に伝わる言い伝えによれば、この場所にはかつて金持ちのユンカー（郷士）が住む、立派な城塞が建っていたらしい。彼の暮らしぶりはたいへん贅沢三昧であった。しかしこのユンカーは、周辺には大勢の貧者がいたにもかかわらず、彼らに施すことは決してなかった。

あるとき、周辺で物価が高騰したことがあった。ランガーヴェーヘの貧しい未亡人が銅製の重い深鍋を小脇に抱えて、城にやってきた。鍋をユンカーに買い取ってもらい、そのお金で自分やかわいそうな子供たちのためにパンを買うためだった。しかしユンカ

ーは、冷徹にも貧しい未亡人の願いを拒絶した。そこで彼女は、おなかをすかせて待っている子供たちが今晩食べるパンを、ひとかけらよいのでどうか恵んではくれないだろうかと懇願した。ユンカーは無愛想に拒絶した。「失せよ、女！乞食と関わり合っている暇なぞ私にはない」。そういって彼は女に背を向けた。憤慨した女は、絶望のあまりこう叫んだ。「おお神様、この人には生きている価値などはありません。それなのに、私は哀れな子供たちとともに飢えに苦しんでいます。情け容赦のない仕打ちに対する罰として、この城が沈んでしまったらいいのに！」。こう言い捨てて、女は町を後にした。

翌朝、道行くものたちは驚いた。そこにあったはずの城がなくなっていたからだ。中にいた人々や財宝もろとも城塞は地面に飲み込まれ、城があったはずの場所には水が流れ込んで湿地になっていた。これ以来、そこは不毛の地となり、地中に沈んだ人たちの魂が、怪し火や燃える人となって徘徊するので、人々は夜には決して近づこうとはしなくなった。[14]

類話３－７が収められている伝承集は、ドイツとルクセンブルクの国境にほど近いインデ地方（Indegebiet）のもので、ここには、「沈んだ城」以外にも「沈んだ町」や「沈んだ教会」の伝承がいくつか収められている。筆者が参照した燃える人に関する類話のうちで、燃える人が、「地中に沈む」というモティーフとともに現れるパターンは、他の地域にはみられなかったことから、あるいは、両者のつながりはインデ地方に特有とも考えられる。地理的条件でみれば、インデ地方は、現在はポーランド領となるシロンスク（ドイツ名シュレジエン）地方と同様、のちにドイツとなる地域の産業革命を支えた石炭の産地でもあり、工業化が早く進んだ地域でもあった。

伝承に戻ってみれば、これまでみてきた土地制度への違反とは異なり、ここでは領主としての、あるいは人間としての寛容さが問われている。この冷酷なユンカーは、キリスト者としての義務ともいえる、貧者への施しを拒んだ。喜捨の拒否は、いわばキリスト教徒として遵守すべきモラルへの違反ともいえる。それゆえ、キリスト教的な論理の中で彼は処罰を受けたのである。

底なし沼は、一度はまったが最後、ずぶずぶと地中に飲み込まれてしまうという地形条件ゆえに、地獄への入り口があるという俗信もあった。ユンカースベンデンと呼ばれる底なし沼の起源説明譚とも、富の不平等という、社会制度へのルサンチマンの表出ともなっているこの類話では、冷酷なユンカーの仕打ちに絶望して、貧しいが実直な女は、神に対してユンカーを罰してほしいと懇願する。他人の目はごまかすことができても、天の高みより人間の行いを見やる神の視線からは、神を信じる者であれば逃れることはできない。女の願いを受けてか、強欲なユンカーは神によって城もろとも土中に飲み込まれてしまう。

死後の罰とは、つまり、神によって下される審判なのである。それは、「貧しい未亡人」という記述にも暗示されている。原文では、「貧しい未亡人」はeine arme Witweで、形容詞armは、一見すると「貧しい、哀れな」を意味するごく一般的な形容詞のようにしか見えない。しかし、このarmという形容詞が、死後なお昇天できない「哀れな魂（arme Seelen）」をいう場合にも使われることに気づけば、貧しい未亡人は一気に生者と死者の間に結ばれる、浄罪の鎖をつなぐものへと昇華する。つまり、ユンカーに直訴する貧しい未亡人は、昇天を待つ死者の魂の比喩ともなっているとも読めるのである。富める者は、貧しい者に施すことで死後の救済が保証される。逆に言えば、昇天しようと思えば、施される者の存在が不可欠なのである。こうした、いわば救済の構図については、本論後半で詳細にみることになるので、ここでは確認しておくだけでよい。

次に、自らの職務に対して不誠実な行いをした役人が、死後いかなる罰を甘受しなければならなかったかについて描かれている類話を見よう。

【類話３－８】

（ルール地方の）レーンドルファータール（Rhöndorfer Thal）には、在任中に誠実でなかった役人が、死後燃える人として彷徨っているという言い伝えがある。今では、（その生前とは逆に、）地元の人々が彼の主人となっている。（たとえば、）人が山道を歩くときには、燃える人がその足元を照らさなければならず、彼らのタバコに火をつけなければならない。[15]

文中で「誠実でなかった」とされる役人は、同地域から収集された別の伝承によれば「ケルン選帝候の大臣」とあり、いずれにせよ明らかにエリート層の人物である。大臣として民衆を抑圧したがゆえに、死後地位が逆転し、いやしくも選帝候の大臣まで務めた男が、下々の者たちに奉仕をしなければならない。かつて圧政の元で苦しめられた人々にとってみれば、なんと痛快なことか。類話３－７でみたユンカーの場合も、民衆に対してあまりに冷酷だったがゆえに神からの断罪が下されていた。これらの類話は、身分制度や社会制度にみられる悪を、神による裁きに託して告発しているとも読める。おそらくは、こうした伝承を語り、聞くことが、民衆にとっての娯楽の一部をなしていたであろう。

いずれにしても、ここまでみてきてわかるのは、他人には気づかれなくても神が監視しているから違反行為を慎むべし、という戒めが伝承の背景に見え隠れする点である。換言すれば、こうした天上からの一望監視という発想こそ、「燃える人」伝承に見え隠れする倫理観の源泉ともいえる。また、ここでいう違反には、法として定められている規則への違反だけではなく、人として守るべき道徳への違反、すなわち背徳をも含まれる点も確認し

ておきたい。

さらにこんな話もある。これは、20 世紀初頭に、ハンガリーのドイツ人入植地で収集されたものである。下記伝承中にも出てくる、ブダペスト近郊のタタバーニャ（Tatabánya）が聞き書きされた場所である[16]。

【類話３－９　聖夜の冒? を咎めるシュティルツルシャイサー（Stilzlscheißer)】

この話は、クリスマス頃になると本当の話だとしてエーンル（Ähnl、人名）がよく話して聞かせていたものである。

彼らのところに、あるときコッチュ（Kotsch、現 Kocs）出身のハンガリー人が宿泊した。彼はビーハル（Biehall、現在名不明）とサンクティヴァン（Sanktiwan、現ピリシェンティヴァン Pilisszentiván）を越えてオーフェン（Ofen、現ブダ Buda）まで巡礼に行く途中だった。じつは彼は前年犯した罪を悔い改めるために巡礼に出たのだった。彼は、自分がどのような罪深き行いをしたのかについても話してくれた。

それによれば、この男は前年の待降節の時期に、屋根を葺くための木瓦づくりを始めたという。というのも、新年にかけてお金を稼ぐためだった。平日だけでなく、安息日である日曜日にも、彼は働いた。日曜だけでなく、クリスマスイヴの日中も、そして深夜ミサが行われている時間にも、彼は木瓦を作り続けた。荷車が木瓦でいっぱいになったので、新年が過ぎた頃、木瓦を売りに出た。バンヒット（Banhid、現在名不明）かガラ（Galla、現在名不明)、さもなければ、タタバーニャ、タタ（Tata、現在名不明）あたりだったら、きっと誰かが買ってくれると考えた。早朝自宅を出て、肉屋通り（Fleischhackerstraße）を通ってバンヒットに向かった。バンヒットの近くまで来たとき、馬が引けないくらい車が重くなった。何が起こったのかと、彼は車を点検して回った。すると、荷車に積まれた木瓦の上に、3 人の小さな人間が座っているのが見えたではないか。それがシュティルツルシャイサーだった。男は、車から降りろ、さもないと鞭でたたき落とすぞ、とハンガリー語で怒鳴りつけた。その答えは、こうだった。彼らはズボンを降ろし、排便するときのような格好で荷車の上にしゃがみ込むと、すぐに木瓦が燃え始めた。それから 3 人は荷車から飛び降り、側溝を飛び越えていなくなってしまった。その際、手をたたきながらこう言い残していった。「深夜ミサの時に教会に行かずに木瓦を作っていたせいだぞ！」　火から遠ざけるために、男は車から飛び降り、馬具から馬を外してやらなければならないほどだった。火勢はたいへん強かったので、彼の荷車は、荷ごとすべて燃え尽くしてしまった。彼には、馬とともにとぼとぼと家に帰る以外なかった。荷車をなくし、木瓦をなくし、金も得られずに。

深夜ミサのときに教会に行かず仕事をしていたりすると、こんな目に遭うのだよ。[17]

巡礼者に一夜のベッドを提供したエーンルは、旅人がおそらくは夜の語らいで告げた身の上話を、「深夜ミサにいく方が、仕事をするよりもよほど大切である」という教訓譚として語りなおしていることから、敬虔なカトリック教徒だったことがわかる。これを語ったというエーンルが、彼の地に入植してから第何世代目にあたるのかはわからないが、こうした伝承は、おそらくは、彼らの祖先が故郷で育んだものが入植地で受け継がれ、いつしか固有名詞が入れ替わったものかもしれない。ただし、伝承が歴史的事実を語っていると信じるならば、ハンガリー人の巡礼者が、本当にこうした話をした可能性を否定はできない。そして、あえて「ハンガリー人」と限定がかかっているのは、あるいは、ほかの宗教を信じる者、たとえばユダヤ人と、区別するためだったとも考えられる。ハンガリーには、今でもカトリック信者が比較的多い。キリストを裏切った者の末裔だとされ、ときに理不尽なまでの差別の対象ともなった異教徒ユダヤ人と、キリスト教徒、しかもカトリックの信者（であるのが一般的な）ハンガリー人とでは、伝承の話し手にとっても、聞き手にとっても、印象はまったく異なったはずだ。

文中に出てくる地名は、筆者が跡を追うことができた範囲でいえば、すべてブダペシュトの近郊にある集落の名前で、とくに、巡礼先でもある「オーフェン」は、ブダペシュト市のドナウ川西岸、ブダ地区のドイツ語名である。

シュティルツルシャイサー（Stilzlscheißer）およびそのヴァリエーションは、しばしば燃える人の別名とされ、類話３－９もそうした系譜の上にあるといえる。シュティルツルシャイサーを語源的にみれば、前半部のシュティルツル（stilzl）と後半部のシャイサー（scheißer）とに分けて考えることができる。前半のシュティルツルは、動詞stilzen（stelzen、「ぎこちなく歩く」の転訛か）の語幹stilz-に縮小辞-l（-leinと同義）がついたものと想定でき、後半は、名詞Scheiße（糞の意）に、行為者を示す接尾辞-erがついたものだろう。

「糞をひねり出す」というモティーフは、しばしば教会建築を飾る造形表現の中にみられる。たとえば、フランス、ボルドーのサン=スーラン教会内陣の共誦祈? 者席内側面には、道化師とおぼしき人物が、屋根の上で十字架つきの地球儀（？）の上に排便しようとしている姿が浮き彫りになっている（図３－２）。あるいは、フランドル派最大の画家ともいわれる、かのブリューゲル（Pieter Brueghel、1525頃～1569）が描いた油彩画『ネーデルラントの諺』（1559年、ベルリン国立博物館群の絵画館Gemäldegalerie蔵）にも同様の構図が見られる（図３－３、図３－４）。画面左上方、建物２階には窓枠に腰掛けた道化師がおり、彼の尻の真下にある十字架のついた地球儀めがけて排便している[18]。この諺の意味は、「地球の上に糞をする」すなわち、何かを蔑視したり、吐き気を催したりすることだという[19]。シュティルツルシャイサーなる燃える人もまた、こうしたスカトロジー（糞尿譚）の

(上左)【図 3-2】ボルドー、サン＝スーラン教会の道化（？）像と地球儀　15 世紀

(上右)【図 3-3】P.ブリューゲル『ネーデルラントの諺』部分）

(下)　【図 3-4】P.ブリューゲル『ネーデルラントの諺』1559 年

系譜に連なっていく。

そして、この類話では、「3人の小さな人間」とあることから、「シュティルツルシャイサーである」と明記されていなければ、燃える人とは関係のないいたずら好きなデモンの仕業であるとも読み替えることが可能だ。シュティルツルシャイサーにまつわる伝承が、入植したドイツ系住民によって持ち込まれた話なのかどうかは即断できないが、キリスト教的な教訓譚に、民衆的なイマジネールとスカトロジックな想像力が、ともに混入しているさまをみることができる。いずれにしても、これまでみてきた類話では、燃える人は神に処罰された人間だったが、ここでは人間に罰を与える側にいることは指摘しておきたい。

礼拝に参列することを信者の義務だというならば、この男がクリスマスの深夜ミサに参加せずに仕事をしていたというのは、神への叛逆であり、契約違反である。そしてここで燃える人は、むしろ神の代理として、不信心の職人（？）に罰を与え、聞く者／読む者に教訓を残す。クリスマスの深夜ミサに参加せず、仕事をするのは、悪徳以外の何ものでもない、と。

生前の行いが死んだ後に影響する。つまり、死後いかなる取り扱いを受けるのかは、生きている間に何をしたかに左右されるという、いわば因果応報的信仰が、ここには巧妙に仕込まれているのである。

３．１．２　生者への奉仕

本節でみるのは、第２のパターン、すなわち、燃える人が徘徊するという部分は同じだが、徘徊しつつもときに人間に接近し、両者が相互に何らかのやりとりをする類話である。たとえば以下のようなものだ。

【類話３－１０　燃える男が（闇を）照らす】

ライホルツハイム（Reicholzheim）とデアレスベルク（Dörlesberg）の間の道には、大昔から伝わる言い伝えによると、燃える男がさまようことがある。ずっと以前のある夜のこと、荷馬車牽きがこの道を、馬車を牽いて歩いていたとき、暗がりの中で荷馬車が故障してしまった。暗くてどうしようもなかったので、彼は燃える男を呼び、照らして欲しいと頼んだ。すると燃える男がやってきて、作業が終わるまで車のまわりをぐるりと照らしてくれた。荷馬車牽きは、礼として燃える男に１グロッシェンを渡した。[20]

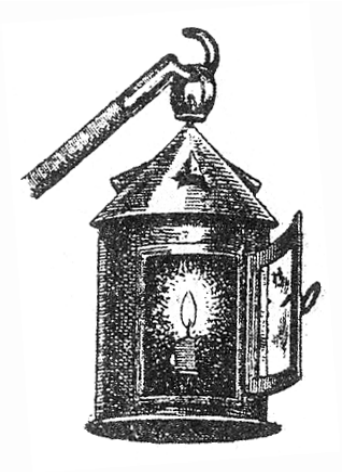
この類話中で荷馬車牽きは、燃える人を呼び出し、「荷馬車が故障してしまったので照らしてほしい」と依頼する。前節で挙げた伝承をみる限りにおいては、燃える男は非現実的な怪異であった。しかし、ここに挙げた類話３－１０で荷馬車牽きは、燃える人の出現に

恐怖を抱くでもなく、それどころか全く躊躇もしない。荷馬車牽きの言動は、あまりに冷静だ。その冷静さは、あたかも闇夜に光をもたらして照らすことを生業とする人間を呼び出したかのようである。はたして、伝承が採集されたバーデン地方に、夜道を照らすという職業が実際あったかどうか。その証拠はない。しかし、あったような印象さえ受けるほど、荷馬車牽きの対応は平然としており、伝承の語り手にも聞き手にも、話の異常さをまったく悟らせないほどである。

じつは、夜道を照らす職業は実際にあった。ときは 17 世紀、場所はパリ。夜になると町中の照明不足が原因で、泥棒や殺人が横行し、事故が頻発していた。1662 年、太陽王ルイ十四世は「街頭の往来を希望する人々を導き照らす提灯持ちおよび手燭持ち」なる職業を創設する許可を出し、営業権を得た者は、以下の条件を課せられた。

> その雇用者の使用する手燭は、パリ市内の香辛料取り扱い業者もしくは同製造業者から購入する者とする。この手燭は黄色の上質の? 製で、パリ市のマーク入りの、重量 1 リーヴル半のものでなければならない。また、この手燭は均等に 10 等分され、最後まで完全に燃焼しうるよう、燭台の受け口差し込み分として各ブース分の余裕を見込んだものでなければならない。この手燭の使用を希望するものは、10 等分された手燭 1 個につき、5 ソル支払うものとする。提灯持ちは、各人 800 歩、すなわち 100 トワーズごとに設置された部所に配属されるものとする。（中略）上記の提灯持ちは、四輪馬車もしくは駕籠による移動者にも照明を提供でき、この業務に対する報酬は 15 分につき 5 ソルとする。なお、上記の者は、パリ市のマーク入りの、正確に 15 分刻みの砂時計をベルトに携帯するものとする。[21]

この職業は行政当局の管轄の元におかれ、アンシャン・レジーム末期まであったというから、100 年あまり存続したことになる[22]。ただし名称は、1769 年には、理由は定かではないが、最初の「提灯持ち」から「照燈持ち（falotier）」あるいはたんに「照燈（falot）」となる（図３－５参照[23]）。この職業についての言及は、たとえば 17 世紀末から 18 世紀にかけてパリで活躍した小説家であり劇作家でもあったルサージュ（Alain-René Lesage、1668～1747）の著書『パリの地理学者』のなかにみられる。あるいは、ルサージュと同様、小説家・劇作家のメルシエ（Louis-Sébastien Mercier、1740～1814）は、次のように記している。



【図 3-5】ファロ

夜食が終わった頃になると「照燈(ファロ)でござい！」という声が聞こえる。彼らはこうして、互いに声を掛け合いながら、一晩中叫んでいる。窓ぎわに寝ている人たちの安眠をさまたげながら。舞踏会や集会を催している館の前にたむろして、客待ちをする者もいる。夜おそく家路につく人々にとり、ファロは便宜と安全を与えてくれる、ありがたい存在だ。彼らは客を、家はおろか部屋までも送ってくれる。たとえそれが 8 階でも。召使いも、女中も、マッチも、火口も、点火器もない客には、？ 燭の火だって付けてくれる……。[24]

はたして、こうした職業が大都市以外でもみられたかどうかはわからない。しかし、夜道での移動中、荷車牽きは平然と燃える人を呼びつけ、照らさせ、そしてその報酬として小銭（1 グロッシェン）を与えるとあり、構造があまりにも似通っていることだけは指摘しておかなければならない。突発的に発生した事故は荷車の故障だけであり、燃える人の登場は偶発的なものではなく、荷馬車牽きが自ら望んだことだった。呼び寄せた当人にとっては、いや、ひいてはこのザーゲを聞き、受け継いできた人々にとっては、夜道で車が故障したときに燃える人を呼ぼうとするのは、決して特別なことではなかったかもしれないとさえうけとれる。次にみる類話では、燃える人に与えるべき報酬について、異なったヴァリエーションが述べられる。

【類話３－１１】

燃える人は人畜無害。わずかな報酬で彼は誰でも家まで送り届けた。家に着くと、彼は無言のまま戸口に立ち、報酬がもらえるのを待った。たとえばパンのかけらや穀物粒、半クロイツァーで彼は充分満足した。彼の姿は大きく、全身が輝いており、炎のように燃える光りを放っていた。[25]

人畜無害で、人の役に立ち、ささやかな報酬で満足する燃える人には、欲がないかのごとくである。またここでも、燃える人に出会う人間は、怪異と出会ってもまったく動じる様子を見せず、当然のことのようにやりとりしている。

チェコとドイツの国境をなすボヘミヤ森のドイツ側、オーバープファルツ森 Oberpfälzer Wald 山中の集落、ヴァイトハウス Waidhaus で 1950 年に収録されたこの話は、フランツ・フォイトなる人物が、自分が年長者から聞いた話だとして語ってくれたものだ。クロイツァー硬貨は、13 世紀以来 19 世紀まで南部ドイツやスイス、オーストリアで使われていた少額硬貨で、たとえばモーツアルトが生きた時代、オーストリアで用いられていた貨幣単位

はこれだった。むろん類話３－１１が収集された当時は一般には流通していなかったが、現在でも「クロイツァー」が「なけなしの金」の意で用いられることもあることから、この単語が小銭を指すことは、一般常識として誰もが知っていたこととみてよい。

いずれにしても、燃える人は報酬を要求するが、それはささやかで、決して法外な金額ではなかったことだけは確認しておこう。また、照らしたことに対して報酬を渡すという職業、あるいは少なくとも習慣が、社会的な制度としてこの地にもあったことを筆者としては想定したいのだが、これはあくまでも仮説に過ぎない。

次にみる類話では、報酬をめぐって燃える人と人間との間に悶着が起こる。

【類話３－１２】

ある者が、燃える男に家路を照らしてもらったが、何も報酬を与えなかった。すると燃える男は家の壁にもたれかかり、家の中に向かってこう叫んだ。「俺の３ペニヒ、そうでなけりゃ黒い雌鳥、さもないと家に火をつけるぞ」。こういわれて、家の者たちは、家の外にいる男に、黒い雌鳥を投げ与えた。[26]

燃える人が、はたして、呼び出されたがゆえに現れたのかどうかについての言及はここにはないものの、ほかの類話と同様、おそらくは宵闇のなか、道行く男の家路を照らす。照らしてもらったおかげで無事帰宅できたにもかかわらず、男は労働の当然の対価であるはずの報酬の支払いを渋るが、このたくらみは成功しない。結局燃える人におどされ、望む返礼を免れることはできなかった。

類話３－１１で確認したとおり、燃える人が夜道を照らした報酬として要求するのはつねにささやかな金品だが、それでも、彼の行為は決して慈善ではない。照らしてもらう人と燃える人の間には、いわば契約ともいえる社会的な関係があり、聞く者＝伝承の消費者も、それを了解していることを、類話３－１２からは読み取らなければならない。「夜道を照らして報酬を受け取る」というパターンの伝承が、比較的まとまった数あることから導かれる帰結である。もし、燃える人をただ働きさせれば、それもまた違反行為とみなされるぞ、という脅しも、この伝承には含まれていると読める。

次にみる類話でも、不義理なことに、報酬の支払いが拒否されている。

【類話３－１３】

昔、（おそらくはヘッセン州ヴォルムス近郊の）ラウテナウ（Lautenau）に、粗野で不作法な男が住んでいた。彼は、昼間は飲み屋にたむろし、夕方家に帰ると、馬に乗ったまま居間まで上がり込んでくるような男だった。ある夜遅く、帰宅途中、彼は 2 つの

怪し火（Herrwische）が牧草地（Wiese）で踊っているのを目撃した。暗い夜だったので、男は怪し火に向かって、家路を照らしてほしい、照らしてくれれば 2 クロイツァーやるから、と大声で呼びかけた。すると怪し火が両方彼のところにやってきて、道中ずっと彼のそばで踊ってくれた。しかし家に着くと男は玄関の戸をばたんと閉めてしまい、約束した報酬を怪し火にやろうとはしなかった。怪し火は戸口で待ち続けたが、しびれを切らして男の家の窓をこれでもかというくらいたたき始めたので、今にも家が倒壊するのではないかと心配になった。びくびくと怯えながら、男は約束した 2 クロイツァーを差し出した。この後、男は二度と怪し火に道を照らしてもらおうとはせず、ランタンに火をつけて自分でもって歩くようになった。しかも、すさんだ生活を更正し、夜は家にいるようになったので、夜出歩くことも少なくなった。[27]

「怪し火が牧草地で踊っている」というモティーフは、「燃える人」伝承を見渡すとしばしばみられるが、実際、草原でダンスをするのは怪し火とは限らない。実社会では、たとえば、若い男女が集まって、集落の中でははばかられるようなどんちゃん騒ぎを伴うダンスパーティが行われるし、あるいは、市が立つ場所になったり、祝祭が行われたりもする。図３－６の絵は、19 世紀アルザスで描かれた。これは、ダンスパーティというよりむしろ

FEUX DE LA SAINT-JEAN A SOULTZBACH
Gravure d'après un dessin de F. LIX (milieu du 19e siècle)

【図 3-6】リクス（Theodole Lix）画、1886 年、アルザス
タイトルには、『スルツバック・レ・バンのヨハネの火祭り』とある。

祝祭の場面だが、教会を遠景に、男女が手を取り合ってかがり火を跳び越えており、観衆がそれを取り囲んで見物している。豊作予祝のための火跳び民俗慣行をモティーフに、現実に行われる祭りの情景がそのまま描かれた絵とされる。もっとも、教会側の論理をきくならば、遊びに耽った若者がやがて礼拝に現れなくなってしまうとすれば、それはいささかよろしくない。ゆえに若者たちのこうした行為は、不品行で恥ずべきもの、破廉恥なものとみなされた場合、ときに禁止の対象ともなった。

また、類話３－１３に登場する小物に注目してみれば、ふたたびクロイツァー貨がみられるが、この類話が収集されたヘッセン州では、当時クロイツァー貨は使われていなかった。つまり話を伝承する者たちは、人から語り聞かされた話を、自分たちの生活のすぐそばにある現実として捉えていたというよりむしろ、歴史化した伝承、あるいは言い伝えとして語り、聞いていたとも想定できる。

類話３－１２と同様、ここでも支払い拒否は成功せず、燃える人を呼びつけて夜道を照らしてもらった「不作法な男」は、やはり約束した報酬を徴収される。ここから読み取れるのは、たとえば、燃える人と関わった場合に人々がとるべき行動規範である。すなわち、助けてもらったらその代価は支払わなければならないというルールが、伝承を伝える者と聞く者の間には了解されている。そして、論を先取りしていってしまえば、燃える人と生者との関係は、いわば「相互扶助」ともいえるのである。

しかし、なぜ燃える人はこれほどまでに報酬の受け取りに執着するのか。それは次の類話をみればはっきりする。

【類話３－１４　神の報い（Das vergelt's Gott[28]）】

（ニーダーバイエルン地方、レーゲンスブルク近郊の）アーベンスベルク（Abensberg）のバウアー（Bauer、富農）は、薪を集めるためによく森（Wald）に入った。その途中、いつも１人の燃える男が彼の車に乗ってきて、彼に同伴した。燃える男は、荷物を積み込むときにバウアーの仕事を手伝ったので、バウアーは報酬として 2 ペニヒを支払っていた。報酬をもらうと燃える男は森に消えた。ある日のこと、バウアーはあいにく持ち合わせがなかったので、かわりに感謝の気持ちとして「神のお恵みがありますように（Vergelt's Gott）」と言った。すると燃える男はこう返事をしたのである。「これでやっと俺は解放される。あんたからもらった金は、あんたの家の戸口の敷居の下にあるよ！」。そう言い残して彼は消え、二度と現れなかった。[29]

バウアーが入った森が共有林だったのか、村有林だったのか、はたまた自己所有地だったのかは、文中に明記されていないのでなんともはっきりとは断言できないが、人目をは

ばからず荷車を牽いているところからみると、彼は森で薪となる木を盗んでいたのではなく、集める正当な権利をもっていたのだろう。それは、彼がバウアーであることからも容易に想像はつく。現在、Bauer という語には「田舎者」という意味合いも含まれ、ネガティヴなニュアンスで使われることもあるが、バウアーといえば、地域や時代によって差はあるものの、近世以降の農業従事者のヒエラルキーにおいては、かなりの富裕層である場合が多い。つまりバウアーとは、一般的には自作農で、ときに小作人も抱えるくらいの経営基盤を持つ、いわば農のブルジョアなのである。

類話３－１４で、どうやら燃える人は、金銭よりもバウアーから感謝の言葉をかけてほしかったようである。そういえば、３．１．１で確認したことをいまいちど思い起こしてみれば、燃える人は、罪を犯したために昇天できず現世に繋留されている死者の魂であった。彼らは浄罪中の死者で、いつか天に昇ることが許されるその日を心待ちにしつつ、日々幽霊として生き、生者と関わり、生者に尽くす。本章冒頭にみた類話３－１には、燃える人が彷徨っているさまが描写されていたのを思い起こしてみると、マテスなる男の何気ない一言で燃える男が消えたのも、彼の浄罪がすんだためであることが、ここで明らかになるだろう。「生者の取りなしにより昇天する」というモティーフには、死者が生者に依存するという構図をみることができるが、その分析は後回しにして、もうひとつ燃える人が消える類話をみてみよう。

【類話３－１５】

アーンスハウクト（Arnshaugt）とモーダーヴィッツ（Moderwitz）のあたりは、ずっと昔から頭のない燃える男が徘徊するので知られていた。男は人々に特別な危害を加えるでもなく、おとなしく気ままにあたりをうろつくのだった。しかし彼は、ブルクヴィッツ(Burgwitz)からアーンスハウクトを抜けて、アオルベルク(Aollberg bei Moderwitz)までも歩き、しばらくそこに立ち止まった後、消えてしまうのが常だった。

あるとき、手押し車を押した貧しい女性の前に男は現れ、ノイシュタットの粉挽き場（Neustädter Mühle）からモーダーヴィッツのジルバーベルゲ（Moderwitzer Silberberge）まで、彼女を照らした。「ありがとう（Habe Dank)、燃える人」。女性が男にそう言うと、男は消えてしまい、以後ふたたび現れることはなかった。[30]

以後ふたたび現れることはなくなった燃える人が向かった先は明白だろう。彼はついに神に召されたのである。

この類話中に出てくる男は頭がないだけだが、燃える人に関する伝承に限ってみれば、「頭部がなく、頭のかわりに藁束が燃えている」あるいは「頭を小脇に抱えている」とい

うパターンも散見される。

頭のない（kopflos）男というモティーフは、幽霊あるいは生ける屍の形状としても比較的よく伝承に登場し、類話３－１５もその系譜に連なると考えられる。キリスト教の聖人でも、聖アダルベルト（Adalbert）、聖アルバン（Alban）、や聖ディオニュソス（Dionysius）、聖エウセビウス（Eusebius）、聖カタリナ（Katharina）、聖リヴィヌス（Livinus）、聖マルガレーテ（Margarethe）、聖クウイリヌス（Quirinus）などは、ときに頭を脇に抱えるという姿で描かれることがある。それは、彼らが殉教者であることを象徴的に表現したものだという[31]。

あるいは、伝承に登場する頭のない男は、古い死者信仰の名残ではないかともいわれ、その根拠としては、たとえば、斬首刑が、詐欺者などの罰としてかなり古くからあること、または、キリスト教の信仰が入り込む以前は、供物として、動物や人間の頭が神々に捧げられたこと、そして、ヴァンパイアのような生ける屍をしとめるには、首を落とさなければならないという俗信があることなどが挙げられる[32]。

気になるのは、「貧しい女」が「手押し車」をおしつつ、「ノイシュタットの粉挽き場」からジルバーベルゲ（「銀の山」の意）まで移動したという部分である。貧しい女が、なぜ、粉挽き場に用事があったのか。しかも手押し車をおしている。もしも、手押し車で運んでいる粉がすべて女のものだとすれば、彼女が貧しいわけはない。最貧農であれば、それほど潤沢に穀物をもっているはずはなく、秋には、ミレーの「晩鐘」のさながらに落ち穂拾いをして糊口を凌ぐ、というのが一般的だったからである。ということは、車に積まれた荷は彼女のものではない。彼女が粉挽き場に現れたのは、誰か他人のため、たとえば領主のための賦役であったか、あるいは、彼女が誰かに仕える召使いだと考えるのが妥当だろう。

ノイシュタットとは、単に「新しい（ノイ neu）」「町（シュタット Stadt）」の意でしかなく、かなり一般的な地名である。しかしこの言い伝えが、ザクセン南部のフォイクトラント（Voigtland）地方で 19 世紀後半に編まれた伝承集に収録されているという事実とつきあわせてみれば、ここで言及のあるノイシュタットは、イエナ（Jena）近郊の Neustadt an der Orla であることはほぼ確実だ。しかも現在ノイシュタットの近郊にはモーダーヴィッツという地名も残っている。

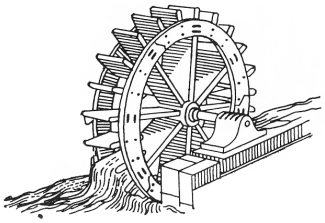
とはいえ、一般名詞でもある Mühle（水車または風車の意、粉をひく場所）を特定するのは難しく、このミューレが水車だったのか風車だったのかは正直なところわからない。ただ、この町の正式名称は、ノイシュタット・アン・デア・オルラ（オルラ川沿いのノイシュタット）であることから、「ミューレ」が水車だった可能性はきわめて高い。とすれば、そこは、自然現象としての怪し火が発生する場所として、格好の条件を備えていることに

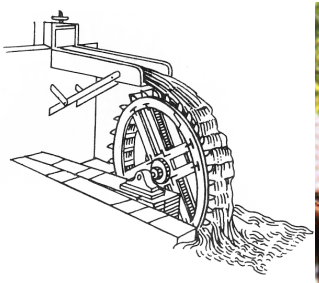
なる。これについては後述する。

一般に、粉挽きが働く水車小屋が各村に設置されるようになるのは、中世末期以後とされる。それ以前は、水車は大修道院に設置されるのが普通で、また、粉挽きという専門職がいたかどうかも不明だが、ともかく粉挽きの仕事は、粉を挽くばかりではなく、水車をいかに回すかも含まれた。

日本のように川の流れが速い場合には、水車は、川の流れに任せればさほど手間をかけずとも自ずと回転するが、地面の傾斜が緩い土地では、川はゆったりとしか流れない。この場合、いかに水車を回転させるか、特別な技術や知識が必要だったのである。明治初期にオランダから治水工事のために招かれた土木技師は、日本のとある川を見てこう言ったという。「これは川ではなくて、滝だ！」[33]。「川」をめぐる風景が、彼らの故郷と日本とでは異なっていたことが、ここに端的に示されている。それゆえ、ヨーロッパでは一般的に図３－７ａにみるような「下掛け式」水車が採用された。この方式であれば、川の流れがゆるやかな場所でも機能したからである。ちなみに図３－７ｂは「上掛け式」で、水車の上部に水が掛かって軸が回転する仕組みとなっており、川の流れが速い場合に採用された。

粉挽きは、中世ドイツでは刑吏や墓堀人、皮はぎ工、遍歴芸人などと同様、差別の対象となる職業だったとされている[34]。川の水をいかにコントロールするかという粉挽きの仕事は、天候や季節など、人智を越えたマクロコスモスを相手にするものだったことが、粉挽きという職業に従事する人々が賤民視される原因であったともいわれる。彼らは、民衆の

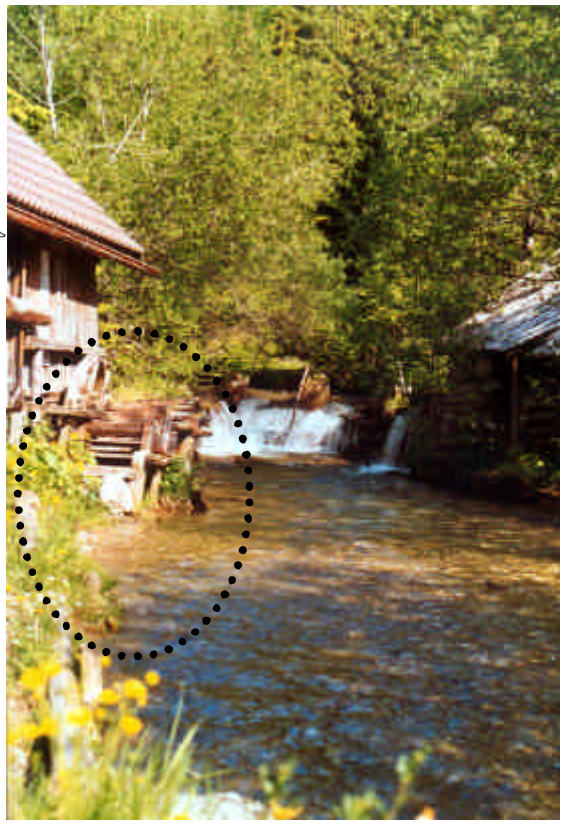




【図 3-7a】（上左）
下掛け式水車

【図 3-7b】（上右）
上掛け式水車

エッパーライン（Siegfried Epperlein）による
（阿部: 1987, p.256 より引用）



【図 3-8】（右）

水車小屋のある風景。円内が水車。ケルンテン、ボーデンタール（Bodental）。写真は、クラーゲンフルト大学のヘルタ・ラウゼッガー教授（Frau Dr. Prof. Hertha Lausegger）による

生きるミクロコスモスに属すると同時に、マクロコスモスとも交渉をもつ異能者、いわば両界的な存在だったがゆえに、人々から畏怖されたというのである。畏怖の帰結としての差異化が生む、区別の感情が差別のそれへと変化したとき、粉挽きは賤民へと転位していったのだ、と[35]。

はたして、ここで女を照らした燃える男が、粉挽きと関係するのかどうかは定かではない。しかし、すくなくとも、燃える男が出現したとされる場所が、ミクロコスモスとマクロコスモスの結節点であったことは、ここから読み取ることができるのである。

また、神に召されるまで地上で彷徨い続ける燃える人が、「生者には危害を加えない。人間に奉仕する」とされる類話は少なくない。それは、とりもなおさず、死者は、昇天を待ちわびているにもかかわらず、生者の助けなくして願いは叶わないことを知っているからといえよう。いや、願いが叶わないことを知っているのは、死者と言うよりも、むしろ伝承を維持し、伝えていく生者であると表現すべきだろう。

３．１．３　祈りと悪罵

生者が死者に語りかける言葉にはいったいどのような効果があるのか。また、効果をもたらすのは特定の言い回しなのだろうか。本節では、燃える人の昇天と言葉との関係について探ってみよう。

【類話３－１６】

赤々と燃える男（グレーニゲ・マン Glönige Männ、glünige Mann の転訛か）とは、天国と現世の間を彷徨っていて、誰かが救済するまで安らぐことのできない魂（Seelen）である。あるときのこと、テュム（Thum、場所不明）の男が車に乗って果物を売るためにツェルピヒ（Zülpich、ケルン近郊のローマ時代からの古都）のフロイツェム（Froitzhem）に向かっているときのこと。早朝であたりはまだ真っ暗だった。突然、燃える人が車の後部に乗り込んできたではないか。車を牽く馬はすぐに汗だくになった。馬車を駆る男は恐ろしくなって祈りだしたが、燃える人影は消えなかった。とうとう男は我慢しきれなくなり、大声を上げた。「こんちくしょう、車から降りやがれ！」その瞬間、霊（Geist）はこう言い捨てて消えた。「あともう一度主の祈りを唱えてくれていたなら、俺は救済されたのに」。[36]

あからさまには書かれていないが、燃える男が彷徨っているのが「天国と現世の間」であること、そして「誰かが救済するまで安らぐことのできない魂」、すなわち、誰かが救済してくれれば安らぐことのできる魂であることから、まぎれもなく男が煉獄（後述）で焼

かれている最中にあることがわかる。彼ら咎人が欲するのは、主なる神への祈りで、悪罵は忌避すべきもののようだ。類話３－１６では、なんとか救済してもらおうと、幽霊は生者の前に立ち現れた。しかし、燃える男の期待に反し御者が悪罵を口にしたせいで、昇天はあと一歩のところで成功しない。つまり、言葉ならなんでもよいというわけではないことがわかる。救済されるためには、なんとしても生者に祈ってもらわなければならないというわけだ。ただ、注意したいのは、「霊は（中略）消えた」と最後にあるが、これは、捨て台詞を残して霊はその場を去っただけで、決して救済されたから消えたわけではない点である。

燃える人にとっての祈りと悪罵について明快に記してあるのが、次の類話だ。

【類話３－１７　光の人（リヒターメンダー、Lichtermender）】

怪し火は、光の人（リヒターメンダー）と呼ばれる。それを見ても、祈ってはいけない。そんなことをすればどんどん数が増えていくだけだ。祈るのではなく罵声を浴びせるべきである。そうすればたちどころに消えてしまう。しかしロクトウ（Locktow、ポツダム近郊の集落）では逆で、光の人（リヒトメンダー、Lichtmender）は洗礼を受ける前に死んだ子供たちなので、祝福の言葉を受けると消える。プラーネニーダルンク（Planeniederung）、とくにロクトウとメァツ（Mörz）の間には怪し火がよく出没し、そこではこんなふうにいわれる。あるときある農夫が干し草を乗せた車で湿地を横断していた。湿地でどろだらけになる前に、農夫の前に光の人（リヒターマン、Lichtermann）が現れたので、農夫はこう話しかけた。「俺を照らしたいと思うなら、ちょっくら湿地を抜けるときに照らしてはくれんかね」。光の人（リヒターマン）は、農夫のいうとおりにした。彼らが無事に湿地を抜けると、農夫はいった。「あなたに神のお恵みがありますように（Gott segne dich）」。すると光の人（リヒターマン）は消えてしまった。[37]

怪し火の正体を「洗礼前に死んだ子どもたちである」とするのは、民間信仰にはよくあるパターンだが、キリスト教の教義の枠内では、洗礼を受けずに死んだ者が送り込まれるのは辺獄（リンブス、limbus）だとされる。ダンテの『神曲』によると、辺獄は、地獄の縁をとりまく第 1 の圏（たに）で、そこには、生きている間に悪事を働いたわけではなく、ただ、イエスより先に生まれたというだけで天国に迎え入れられることのない人々が、木々の生い茂るなかに住んでいるという。とはいえ、教会が提供する理解の枠組みをどれだけ民衆が受容していたかは別で、怪し火にまつわるこうした類話をみると、かならずしも民衆はリンブス思想を理解していたわけではなく、むしろ、彼らにとって慣れ親しんだ説明原理を、好んで採用していたかにも思われる。そして、同じ怪火現象に対して、洗礼前に死ん

だ子どもという説明と、燃える人だという説明とが、ここでは同時に語られ、両者が奇妙に錯綜しているありようがみてとれる。

類話３－１６で確認したとおり、「救済されて消える」のと「諦めて去る」のとでは意味合いがまったく異なっていた。この構造に少し角度をかえて向き合うと、類話３－１７では「光の人」をおぞましい存在として本質化したために、祈りの言葉を聞けば近寄ってきて、悪罵で退散するという、奇妙にねじれた表現となったことも理解できる。「祈れば祈るほど数が増える」のは、「光の人」が祈りを欲している死者であることを言外に示しているのである。次の類話にも、同様の構造がみられる。

【類話３－１８　インデタール谷（Indetal）の燃える人】

ある老人がこんな話を聞かせてくれた。昔は、夜になるとよく燃える人の一群が（ケルン近郊、エシュヴァイラー近くの）インデタール谷を通っていったものだった。彼らはまるで薪に火をつけたたいまつのようにもみえ、ちょうど大人の背丈ほどの高さのところに頭があるだけで、体のそれ以外の部分は何も見えなかった。一般的には、彼らは生きている間に何か悪いことをした人間の霊（Geister）とされ、それが死後、救済を求めて彷徨わなければならないのだと説明される。彼らを救済してやるには、何か話しかけてやればよいと伝え聞くが、多くの人々は彼らのことを恐がって、避けた。怖くなって祈り始める人がいると、彼らはその人に近づいてくる。しかし、ののしり言葉を口にすれば、その刹那彼らは消えてしまう。[38]

ここでも、祈りと罵言は対比的に配置されている。悪魔の眷属ならば、聖句を唱えれば退散するものと相場は決まっているはずなのに、燃える人は退散するどころか祈れば祈るほど近寄ってきて、ときには数が増えたりもする。彼らは祈りを恐れないのだ。ということは、彼ら燃える人が、一概に神に抗う悪の一味だとは考えられない。では、何者なのか。彼らはやはり死んだ人間、生きているときに行った悪事を浄め、浄罪するべく、死後死者がひととき滞留する場である「煉獄」で焼かれている、死者なのである。

煉獄とは、従来からあった天国対地獄という二項対立的な他界の構図に、12世紀になって新たに設けられた場である。ここには、まっすぐ天国に行くことができるほど清廉潔白でもなく、さりとて地獄落ちするほど悪くもない者たちが、死後、罪を浄めるために送り込まれる。つまり、煉獄とはいわば、天国へと至る前に通過すべき前庭ともいえる。

「煉獄」という日本語表記からは想像がつきにくいが、ドイツ語では煉獄を「フェーゲフォイアー（Fegefeuer）」という。前半部fege-は、現代ドイツ語では「箒で掃く、掃き掃除をする（北部ドイツ）、水拭き掃除をする（南部ドイツ）」を意味する動詞fegenから、

後半部feuerは、いうまでもなく「火」の意である。この語は教会ラテン語のignis purgatorius（pugãtõrius ignis, purgãtiõnis ignisとも[39]。「浄める場の、火」の意）から借用され、そこからドイツ語に翻訳されたことがわかっている[40]。purgatoriusとは、より正しくはpurg-（「浄める」の意）に「場所」を意味する名詞を作る接尾辞、-toriusが結合したものなので、語義通り「浄化の場」を意味する。英語およびフランス語ではそれぞれpurgatory、purgatoireが「煉獄」の意で、どちらもラテン語のpurgatoriusからそのまま借用されているのがわかる。

いずれにしても、地獄同様、火が燃えさかる場だが、その火は人々を苛むだけではなく、罪や穢れを浄化する。焼かれることで、そして熱さに耐え抜くことで、咎人は晴れて天国への階段を登ることが許されるようになる。このように考えてみれば、なぜ死者に「燃える」という属性が付加され、個別の伝承のカテゴリーとして考えることができるほどの数の「燃える人」伝承が成立したのかが明らかになってくる。次の類話にも、死者の霊が救済を求めて生者のところに現れる。

【類話３－１９】

ニーダーメァツ（Niedermerz）のある男が、アルデンホーフェン（Aldenhoven）で仕事をしていた。仕事場へ向かう道中、彼はいつも燃える人にちょっかいを出された。だから、ある日彼はパストール（村司祭か？）のところへ行き、いったいどうしたらよいのかきいた。彼はこう答えた。「次回燃える人が現れたら、そのときには、何をしてほしいのかきくとよい」。翌日、男はいつものように仕事に向かっていると、村の手前にまた燃える人が待ちかまえていた。そこで男はすぐさま燃える人に、望みをきいた。「あぁ！」燃える人はため息をつき、こう続けた。「私は霊（Geist）なのだ。実は生きている間にとある誓いをしたが、それが守れなかった。おまえ、私のために祈りを捧げ、サクラメント（秘跡）[41]を受けてはくれないだろうか。そうすれば私は救済されるのだが、それまではこうしてさまよい続けなければならず、安らぐことができないのだ」。「でも、あんたが救済されたということを、俺はどうやって知ったらいいんだ？」男の問いかけに、燃える人はこう答えた。「おまえに合図を送ろう」。男は霊との約束を忠実に果たし、祈りを捧げ、最後にサクラメントを受けたそのとき、いきなり、彼の眼前にある聖体拝領者のためのベンチに革のような茶色の手が現れ、聖体拝領の布に黒い焼けこげがついた。男はこの布を持って帰り、大切に保管した。後にこの布は、男の親類によって（アルデンホーフェン近郊の）デアボスラー（Dürboslar）の教会に寄贈された。[42]

聖体拝領の布に黒い焼けこげを残し、「革のような茶色の手の持ち主」は昇天していっ

たのだろう。図３－９の手形は、別の伝承からの引用だが、そこでも類話３－１９と同様「哀れな魂の、熱く焼ける手がつけた焼けこげ」とされている[43]。その手の中央には、釘の跡が残っているようにも見え、聖痕に見えないこともない。「デアボスラーの教会に寄贈された」という類話３－１９のものと同様、死者が残していったとされており、煉獄の実在を可視化するのに一役買っている。類話３－１６では、燃える人の正体として、業火に身を焦がす霊だと、はっきり述べられていた。

【図 3-9】手形の焼けこげ。燃える人が残したとされる

キリスト教世界で「布に残る残像」といえば、真っ先に思い当たるのは、キリストの埋葬に用いられたとされる屍布、聖骸布であろう。「聖骸布」とされる布はさまざまな地に伝承しているが、イタリア北部のトリノに伝わる聖骸布はとりわけ有名だ。写真技術を駆使した分析によれば、そこには髭の長髪姿で、キリストのように拷問を受けて横たわった男の肖像が映っているという。科学的調査からは、どのようにしてその像が変形もせず、ネガ状態を保っているのか説明できないものの、1998年に行われた炭素年代測定を用いての繊維の年代測定によれば、トリノの聖骸布が縫合されたのは1260年から1390年にかけてであり、ゆえにこの布は、よくできた捏造品であると結論づけられた。これで真贋論争は決着したかのように思われるが、いまだに、聖骸布の正統性について実証しようとする研究者もいる。

真偽の程は擱くとしても、ここで重要なのは、この布が、キリストの苦しみを喚起する力を有しており、教会がそれを一種のイコン（聖画像）とみなしている点であろう。つまり、聖骸布のイメージが、「燃える人の手形」なる残像に投影されているのである。

ここまで、燃える人が悪人ではあっても、悪魔とは明らか異なるという事例ばかりをみてきたが、以下に挙げるような類話も、稀有ではあるがないわけではない。ここでは、祈りの言葉によって、燃える人が退散する。

【類話３－２０　燃える人（フェーメン、Füemänn）】

ルヘム（Luchem）出身の、屈強で恐れを知らないある若者が、いつものように、夜、

“コルベルク”（Kollberg）(一般にはバルデンベルク、Bardenberg)に向かって車を走らせていた。朝には現地に到着していたいからだった。彼は、一度“フェーメン”にあってみたいと思っていたところ、ある夜、その希望が叶った。彼は、美しく大きな燃える人を見かけたのである。しかし、燃える人は、彼から遠ざかっていた。彼は、燃える人は口笛を吹くとよって来るという話を聞いていたので、口笛を吹いてみた。すると、あっという間に燃える人は彼のすぐ横までやってきたではないか。男は総毛立ったが、思いきって夜の放浪者に声をかけてみた。燃える男は彼に応えるかわりに、車に乗り込んできて、運転手の横にピタッと腰掛けた。車を引く馬は、精一杯の力を振り絞るので、馬具がぎしぎしと音を立てていた。自分で燃える人が近くに来てほしいと望んだにもかかわらず、若者にとって、すぐ横にいられるのはたくさんに思い、車から降りて馬の横を歩き始めた。彼の不安をさらにかき立てることに、燃える人がもうひとり近づいてきた。車の助手席に自分の仲間がいるのを見つけて、2 人目も車に乗り込んでこようとしたが、先に乗っていた方は、それを拒もうとし、車を後から来た仲間からなるべく遠ざけようとした。それゆえ、両者の間で殴り合いが始まり、2 人がまき散らす火の粉が、馬車を引く馬の向こう側まで飛んできた。元々車に乗っていた若者は敬虔なカトリック信徒だったので、切羽詰まってロザリオの祈り（聖母マリアへの祈り）を唱え始めた。彼は祈った。そして、十字を切ったとき、殴り合う 2 人の燃える人は、消えてしまった。[44]

類話中に、「十字を切ったとき、（中略）消えた」とあることから、ここでは、燃える人は悪魔の眷属と同一視されていると読み解くことができる。伝承は、その成立時期を特定することが難しい素材であるゆえ、「悪魔の眷属としての燃える人」というモティーフがはたしていつ頃形成されたものかはわからない。とはいえ、この話の根底には、祈りの言葉をとなえれば悪は退散するという発想があることはいえる。燃える人を悪ととらえるか、かならずしも悪ではないととらえるかの相違で、祈りを捧げることで人は神と接点を持つという発想自体は、どちらもその根源は同じといえよう。

３．２　「燃える人」伝承のヴァリエーション

一通り燃える人に関する伝承をみてきたところで、本節ではヴァリエーションについて言及する。本稿執筆にあたって参照した燃える人に関する伝承の数は 300 編をこえるものの、言い伝えはたいへん複製されやすい素材ゆえ、その数を話題にするのはふさわしくないと考え、ここではむしろいかなるヴァリエーションがあるのか、そちらに軸足をおいて分析していく。

３．２．１　燃える人の外見

燃える人に関する伝承には、「燃える」とあるだけに、何らかの形で火と関係づけて言及される伝承が集められており、基本的に燃えていないものはあり得ない。そして「燃える」を意味する動詞について、ドイツ語には大きく分けて 2 種類のヴァリエーションがみられる。「燃えている（フォイリヒ、feurig)」と「赤々と燃えている（グリューエント、glühend)」で、本稿においては feugig の場合はたんに「燃える」と、glühend の場合は「赤々と燃える」と訳し分けた。Feuer（「火」の意）に由来する feurig については説明を要さないだろうが、glühend とは、動詞 glühen の現在分詞形で、炭や金属などが熱せられて、炎は出ていなくても熱くなってじりじりと赤黒く焼けている状態を指す。こうした赤黒い火からは、煉獄あるいは地獄の灼熱を容易に連想できる。

燃える人の背格好については、矮人、人間と同じくらいの大きさ、巨人のように大きい、などさまざまだが、重さについては、言及のあるものはすべて、「異常なまでに重い」とされる。類話３－１６でも「（燃える人が乗ってくると）車を牽く馬はすぐに汗だくになった」とあったが、それ以外には、たとえば以下のような類話がある。

【類話３－２１　燃える人たち】

少年がこんな話をしてくれた。ノイアラート（Neuarad、現ルーマニアのアラドゥ・ノウ Aradu Nou）の人々は、昔は燃える人たちがいたと言い張っている。街道で車が壊れてしまったら、お祈りをすればたちどころに燃える人たちが現れたという。彼らが現れるとあたりは昼間のように明るくなり、車の修理ができたそうだ。僕の曾祖母の父は、それどころか、燃える人たちに命令することさえできたと伝え聞いている。曾祖母がまだ小さかった頃のこと。ある日、彼女は姉妹と一緒に夕方遅くまで庭で仕事をしていたところ、燃える人たちが現れたので、恐ろしくなった。少女たちは叫び声を上げ、父親の所に逃げ込んだ。しかし父が庭への扉を開けると、燃える人たちは垣根を越えて逃げ出してしまった。1820 年のことだったという。

朝早くブドウ畑に行き、夜遅く帰宅するときには、ひとりふたりの燃える人たちによく会った。彼らのことを恐ろしく思い、祈りをあげると、長く祈れば祈るほど燃える人の数は増え、全員車に乗り込んできたという。馬は牽く車の余りの重さに大汗をかき、ほとんど前進できなくなってしまう。それに怒って人々が罵り始めると、燃える人は次々と消えてしまい、やっと農夫は静かに帰途につくことができるようになった。同じ話を、ペルヤモシュ（Perjamosch、現ルーマニアのペリアム Periam）でも聞いた。そこでは、燃える人はテルガッセ小路（Tellgasse）にいて、車の後部の勾配に乗り込んできたとい

われた。暗闇の中、最初は火の粉が飛び散っているように見えるが、近づくに連れて、燃える男の姿となった。[45]

この話が採集された場所は、現在の国境線に沿えばルーマニア国内となるが、伝承を受け継いでいたのは、現在なおルーマニアに 20 万ほどいるという、ドイツ系のマイノリティ「ドナウのシュヴァーベン人たち（Donau Schwaben）」である。彼らが居住するのは、バナート（Banat）と呼ばれる、面積は 2 万 8000 平方キロメートルほど、日本でいえば、九州より狭く、四国より広い程度の広さの地域である。第一次世界大戦まで、そこはオーストリア=ハンガリー二重帝国の領土だったが、現在ではおもにルーマニアとユーゴスラヴィアとに分割された。ハンガリー領となった地域もわずかながらある。

オーストリア継承戦争が集結した 1748 年以来、ドナウ川の下流であるこの地には、ドイツ系の人々が大勢入植してきた。第一次世界大戦前夜には、ドイツ系住民の数は 200 万を越えたというが、現在は 20 万程度しかいない。とはいえ、ハンガリー国内のドイツ系マイノリティは、法によりマイノリティとして生きる権利が認められている。

類話に戻ろう。この類話では、「1820 年のことだったという」と絶対年代が挿入されていることで、聞く者によりもっともらしい印象を与える仕掛けになっている点がまず目を引く。あるいは、ペルヤモシュでは燃える人が「テルガッセ小路」に出るとも書かれている。「小路」とあるからには、おそらくは市街の内側と思われるが、そうであれば、燃える人が出没する場所としてはかなり珍しい例といえる。とはいえ注目すべきは、前節でみた、祈りと罵りが死者に対して与える効果について言及されている点で、そして同時に、燃える人の尋常ならざる重量についても言外に語られている。

なぜ燃える人は重いのか。はっきりした理由は正直なところわからない。たとえば、燃える人がしばしば境界標識石を担いでいるため、石の重さもあわせて重いのかもしれないとも推測できる。とはいえ、車に乗り込んできた燃える人が重い荷物を担いでいるという明示的な表現は、筆者が参照した限りにおいてはどこにもなかったので、この仮説はあくまでも推測の域を出ない。

あるいは、別の視点から重さにこだわってみれば、その名が「キリストを担うもの」を意味する聖クリストフォロスの伝承との類似性が指摘できる。現在でも、ペストや伝染病のほか、船乗りやいかだ乗り、最近では自動車の運転手（ドライバー）などの守護聖人として信仰を集めるクリストフォロスの伝説は、かいつまんで述べれば以下のようなものだ。

クリストフォロスは巨人のような大男で、一番強い主人に使えることを望んでいた。しかし、地上の王たちだけでなく、地獄の王でさえ、彼の求める主人ではなかった。理想の主人を捜すため、川の浅瀬のそばで生活していたクリストフォロスは、ある夜、ひとりの

子どもを向こう岸に渡そうと、肩に背負って川を渡り始めた。しかし、その子どもは、なりは小さいが、進めば進むほど重くなっていったので、彼は川を渡りきるのにかなり難儀した。やっとの思いでようやく川を渡りきると、子どもはこう言ったという。「驚くことはない、あなたは全世界を背負っていたのだ。私は、あなたが探し求めていた王、イエス・キリストである」。[46]

キリスト＝世界を担いで川を渡った聖クリストフォロスの伝説との類似性以外では、逆に、羽のように軽いとされる悪魔や魔女たちとは、重さの面で対照的であることも指摘しておきたい。

【図 3-10】

肩に幼児キリストをのせた聖クリストフォルスのキーホルダー。スロヴェニアにて、2003 年、筆者蔵

３．２．２　現れる時間帯

燃える人が出現しやすい時間帯はいつごろか。時間帯について言及があるのは、参照した伝承の約 60%程度（200 例ほど）だが、ヴァリエーションは少ない。「夜（Nacht、140 例）」、「晩（Abend、30 例）」、「深夜（Mitternacht、7 例）」で 90%近くを占める。残りの 10%には、たとえば「早朝」が 8 例あった。ただしこの中には、「日の出前」と限定されているものもいくつかあり、基本的には「夜」の延長上にあるとみてよいだろう。逆に、「夜」以外では、「白昼」が 1 例あっただけで、それ以外は「昼も夜も」と実質的に時間限定がかかっていない例が 2 例、「普段は夜だが、気分を害すれば昼も」が 1 例だった。その他、職人が仕事をしている最中、堆肥を運んでいる途中、雷雨のとき、などがおのおの 1 例ずつみられた。

つまり、燃える人が出現するのは、たいてい太陽の出ていない時間だということがわかる。しかも、太陽の出ている時間に出没するものがあっても、現れる場所は「昼間でもいかがわしい」ところで、そこは、昼であっても実質的には夜の延長といえる。こうした場所は、負性を担わされたものたちが跋扈する時空と同一であることから、燃える人は、負性を帯びた存在ではないかと考えられる。とはいえ、燃える人は暗いところに現れるからこそ見る者に衝撃を与えるのであって、仮に日中こうした怪異に出会ったとしても、さほど恐ろしいとは感じるまい。

３．２．３　現れる季節

燃える人が現れる季節については記載のないものがほとんどだが（300 例以上、全体の約

80%)、記載のあるもののうちでは、単純に数を数えると「秋」および「冬」に集中している。秋と明示的に書かれているもの（9 例、）のほか、11 月から 1 月の期間にある、キリスト教と関連するあるいはキリスト教暦に取り込まれた祭日に出る（あるいは出た）という記述も多い。祭日とは、諸聖人の祝日（万聖節、11 月 1 日)、死者の日（万霊節、11 月 2 日)、待降節[47]、大晦日と元日などである。たとえば次のような例がある。

【類話３－２２】

（現ヘッセン州ダルムシュタット近くにある）カイルバッハ（Kailbach）近郊、フライエンシュタイン行政区(Amt Freienstein)にあるホッペルライン（Hoppelrain）と呼ばれる場所に住むゲオルク・ミルテンベルガーが、こんな話を語ってくれた。「待降節第 1 日曜日の夜、11 時と 12 時の間、私の家からほど遠からぬところで、火だるまの男を私は見かけた。彼の身体は、肋骨の本数を数えられるほどだった。境界石の間をここあそこと彷徨っていたが、真夜中過ぎに突然消えてしまった。彼を目撃した多くの人々は恐怖におののいた。というのも、彼は口と鼻から炎を噴きながら、飛ぶような速さであちらへこちらへと走り回ったからである」。[48]

なお、秋冬以外の祭日としては、四季の斎日（Quatember）[49]が 2 例あった。また、農事などの生活暦と関係づけられて書かれているものも少なからずあった。たとえば、ブドウ畑に行く、堆肥を運ぶ、ジャガイモの収穫、果物の収穫期、果物を売る、牛市へ行く、ケルメス祭（教会祭、後述）に行く、ダンスをするなど。これらの表現から、ある程度季節を類推はできても、特定は難しい。満月の夜、満月以外、日曜日、金曜日といった具合に、月齢や曜日が特定されている例もわずかながらあった（各 1 例ずつ)。

11 月から 1 月に多い理由としてひとつ指摘しておきたいのは、農事暦および教会暦との関わりである。この時期はちょうど農閑期にあたり、しかも、11 月 1 日は、キリスト教の暦では１年最初の日である。また、祭日も比較的多く、人々が教会へと赴く頻度も夏場と比較すると高くなるようで、それゆえ、彷徨いでてくる死者の魂も、人々の目を引きやすく、救済を求めやすいのではないだろうか[50]。あるいは、後述するように、秋は自然現象としての怪し火が発生しやすい条件が整う時期でもある。

３．２．４　現れる場所

場所についての記載は比較的ヴァリエーションに富み、言及がないのは全体の 15%（55 例）にすぎない。とはいえ、記載のある約 280 例のなかで多いのは、「移動中の道で（85 例)」、「集落と集落の間、あるいは集落のはずれ（約 20 例)」、「外で（10 例)」など、漠然

としたものが多い（記載のあるうちの 40%）。具体的な景観と絡めてあるものとしては、沼や川、湿地など水に関係するところ、というのが最も多く 45 例（16%）あった。人間の生活圏の外側では、たとえば「森の中（20 例）」、「森のそば（5 例）」、「丘または山の上（7 例）」、「谷（7 例）」、「野原（9 例）」、「城または城跡（5 例）」、「切り通し（3 例）」など、あわせて 56 例（20%）。あるいは、日常的な生活空間からは若干はずれるものの、かならずしも外側とはいえないマージナルな領域としては、たとえば「牧草地または放牧地（14 例）」で 5%、日常的な生活空間の内側「家の中あるいは家の前や家のすぐ外（12 例）」、「生け垣のそば（2 例）」、「畑（6 例）」、「集落の中（3 例）」で計 23 例（8%）、また、特定の地名が挙げてあるため判断できないものが 10 例あった。希少な事例としては、「車の上（3 例）」、「壕／堀（2 例）」、「岩場（1 例）」も挙げておく。宗教関係の施設やモノ、出来事と関連づけてある例としては、「十字架（磔刑像）が立っているところ（4 例）」、「礼拝堂のそば」、「教会の墓地」、「修道院または修道院跡）」、「教会の中庭」、「魔女の火あぶりが行われたところ」（各 1 例）があった。また、何らかのランドマークと関連づけて書かれているものとしては、木とからめてあるものが 7 例あった。ここに登場する木は、カシワ（Eiche）、ブナ（Buche）、ニワトコ（Holunder）、ナシ（Birnbaum）のほか、単に「巨木」とだけのものもあった。

これらの樹木あるいは果実は、よくみるとどれも実にシンボリックな意味を持っている。たとえばカシワは、ゲルマン人にとっては偶像崇拝の対象ともなる、聖なる木であった。ゲルマン人の神・雷神トールがもつカシワの木を、聖ボニファティウスが切り倒したという伝承は、ゲルマン民族がキリスト教化したことを比喩的に表現しているものと解釈されている。現在、カシワには「聖なる木」と「呪われた木」の正反対の伝承があるが、それも、キリスト教とゲルマン人の宗教との対立構造が反映したものであるというのが定説だ。ブナは、カシワとくらべればシンボリックな意味あいは薄いが、それでも、キリスト教の伝説において、巡礼地になったり、聖なる木として崇拝の対象になったりする場合もある[51]。ちなみに、燃料用として用いる場合、ブナの薪は着火しにくいが、いったん火がつくと熱量も多くしっかりと燃える堅木（Hartholz）に分類される。そして、薪は、８月の満月の日に切り倒して 1 年間寝かせてほどよく乾燥させたものがもっともよい、とくにブナの場合、このような手順を踏んで薪に加工すると、「石炭のように熱くなりよく燃える」ということを、筆者は、オーストリア南部のケルンテン州でインタビュー調査をした際、何度か聞いたことがある。

ニワトコは、よく集落の近くに自生する、有益植物である。民間医療では薬草としてしばしば使われ、「生きた家庭薬局」の異名ももつ。だが、切り倒したりすると禍をよぶともいわれる。ナシはリンゴと同様、豊穣の象徴であるだけでなく、占いにも使われる。たと

えば、シュレジエンやチェコとドイツの国境付近のエルツ山地では、大晦日やクリスマスの夜に未婚の娘がナシの木を揺すると、未来の夫が来る方向がわかるといわれた[52]。

怪し火が荒唐無稽な作り話ではなく、自然界で発生する何らかの現象の説明であるとするならば、とくに注目しておくべきなのは、自然景観との関連であろう。

これまでみてきた類話であれば、たとえば類話３－７でみた、強欲なユンカーが城ともども沈んだとされる場所や、類話３－１７の「光の人」が出たのは、湿地であった。また、以下のような類話もある。

【類話３－２３　燃える人】

昔は、人々は燃える人たちがいると信じていた。燃える人は、私たちの村にも棲息していた。夕方、ある女性が隣家に行こうとしたとき、ちょっと近道をしようと思い、牧草地を抜けていった。すると小川のほとりに赤い火の粉が飛んでいるが見えた。近づくと、それは燃える人だった。彼女が帰るときには、何もなくなっていた。[53]

怪火現象は自然界でどのように発生するのか。「怪火研究家」としてユニークな研究をする角田義治は、狐火が発生しやすい地形条件として、河川が蛇行して流れる箇所を挙げる。蛇行する箇所の多い河川ほど、狐火の出現場所が多い、というのである[54]。熊本県と天草諸島の間に広がる八代海で見られる不知火と狐火は、出現のメカニズムが同じで、どちらも光の屈折異常に起因するという。暖まった地表面の上に、急激に冷たい大気が入り込んできて、地表面付近は暖気、その上に冷気、さらにその上に暖気、冷気、と、気温分布が層状になっているとき発生しやすい、そう角田は結論づけている。これに見合う季節は、夏を過ぎ、大気の気温が徐々に下がっていく時期、すなわち、秋にあたる。上記類話は、おそらくはこうした現象についての語りが文字テクスト化していった例なのではないだろうか。

また、湿地でいえば、その下には数メートルからときに 20 メートル近くもある泥炭層が発見されることも多い。泥炭地は、朽ち果てた植物が分解せずに有機物質の厚い層をなして堆積している場所なので、地中からメタンガスなど可燃性のガスが発生した場合、何らかの原因で引火して火災を引き起こすこともある。こうした自然現象を民衆なりに理解した、その表現が、さまざまな怪し火のヴァリエーションとなっているとも考えられる。たとえば次のような類話がある。

【類話３－２４　ブレスラウの燃える人の話】

この地方では、燃える人は一般的には怪し火と同じように人間に対して悪さばかりす

る妖怪と見なされるが、たった一度だけ善行をしたという。

ブレスラウの南西には、今ではツォプテン（Zobten）を越えてシュヴァイドニツ（Schweidnitz、現スヴィドニツァ）方面に向かう舗装道路がのびているが、18 世紀にはひどい道だった。とくに、クラインブルク（Kleiburg）とクライン・リンツ（Klein-Linz）の間の村々を通る道はすさまじかった。これらの村々を通る道は不吉といわれるが、その原因は、そこを通る車屋たちの口から出た、夥しい数の悪罵が招いているのかもしれない。たとえば、シュレジエン地方の言い回しで、「すべてが呪われてしまう」という悪罵である。たった 1 マイル（約 7.5 キロメートル）の距離なのに、悪路のためときに 2 日もかかることもあるからだ。

ある霧のかかったじめじめと冷たい 11 月の晩のこと、シュヴァイドニツのある車屋が、石灰と石臼を積んだ 3 頭立ての荷車を 3 台牽いて、ブレスラウへ向かっていた。途中、この「不吉な区間」にさしかかったとき、突然、夕闇の中で何者かが彼に襲いかかってきた。彼はこれまでにそのような目にあったことはなかったが、今回ばかりは車軸までぬかるみにはまってしまった。それはまるで地面が落ち込んでしまったかのようだった。明らかにそれは夢などではなく、彼はたちの悪い霊（Geist）に出会ってしまったのだった。やがてあたりは真っ暗になり、3 歩先も見えなくなってしまった。もはやこれ以上この場所にとどまることはできない、そんなことをしたら馬が死んでしまう。彼は従者を呼び、テコと巻き上げ機を使って持ち上げるよう指示した。しかしすでにあたりは真っ暗。手元が滑り、うまくいかない。これ以上何の手だてもないことを、彼らは悟った。近くの村からランタンと助けを求めるのも無理だった。というのも、彼らのうち誰も、自分たちがいったいどこにいるのか言うことができなかったからである。とうとう車屋の口から、罵り言葉が飛び出した。だがしかし、それがなんになっただろう！　彼は大声で嘆き、叫んだ。「ああ、燃える人が来てくれたらなぁ。あの、呪われた妖怪（Gespenst）が。現れて私たちを照らしてくれ！」。

従者はこの罵言に仰天した。わずか 3 秒後、彼らの前には燃える人がいた。まるで地面からにょきにょきと生えてきたかのように。燃える人は小さく体をゆすっており、火の粉が飛び散っていた。車屋もこれにはびっくりしたが、それでもすぐに気を取り直し、従者を呼び、遠くまで照らす明かりを用いて荷車を持ち上げるよう指示した。彼らは何も言わず、主人の言葉に従った。全員が作業に取りかかり、いくばくかの苦労の後、ようやく荷車は再び前進し始めた。誰もが押し黙ったままだったので、聞こえるのは道を行く荷車の音と、地表をざわざわと鳴る風の音ばかり。燃える人はつねに一番照らしてほしい場所に移動し、進み始めた荷車に付き従った。荷車が安全なところまでくると、燃える人は奇妙にも空高く跳び上がった。それはまるで子供が喜んでいるかのようだっ

た。あたかも神の祝福が与えられたかのごとく、作業は早く運び、荷車はとうとう石畳の上に戻され、先に進むことができるようになった。馬の驚異的な本能も、前進を後押しした。しかし、こうなると、従者は燃える人に対しての支払いが心配になってきた。だが、主人は冷静で、馬たちも、普段は何か変わったことが起こるとすぐに脂汗を流し身震いしだすにもかかわらず、このときはまったく恐怖の色を見せていなかった。燃える人は先頭車両の前に立ちはだかり、褒美を待っていた。車屋は、いつもはぶっきらぼうな男だったが、このときばかりは気の利いたことを言った。「燃える人よ。私はあなたを罵り言葉で呼びだした。というのも、あなたがサタンの側にいると思っていたからだ。しかし、あなたはあたかも善き精霊であるかのごとく手助けしてくれた。もしかして、あなたは罪を浄めるために追放されていたのではないか。金銀はあなたには何の価値もないだろうし、実際、あげようにも持ちあわせがない。もしかして、私がこんなふうに言ったらあなたの役に立つだろうか。あなたの善き行いに対し、父なる神が、息子なる神が、三位一体なる神が報いますように。そうしてあなたが赦免に預かり、永遠の至福へと至りますように。アーメン！」。

燃える人は地面に崩れ落ち、天に向かって炎を噴き出し、静かにこう言った。「3 つの聖なる名の元に、あなたに礼を言う。あなたがアーメンといってくれるまで私には禁じられていた、その名を唱えることが。もう 500 年間も燃えながら彷徨い続け、もはや昇天できないかと思っていた。私はかつてこの土地の騎士だったが、生前は悪人だった。すべての聖人や神父さまたちを冒? してしまった。（中略）しかし、あなたが私を解放してくれた。神は必ずやあの世であなたに報いるだろう。（後略）[55]

実際、この伝承の舞台となっている、現在ポーランド領のシロンスク地方（文中ではシュレジエン地方）は、石炭を含む地下資源が豊富な地域として知られる。伝承の冒頭にあるように、これが書き留められた 19 世紀には、石炭輸送のために炭鉱と工業地帯を結ぶ立派な道路がすでにひかれていたが、以前は通り抜けるのが困難な湿地が広がっていた可能性は高い。こうした自然環境が上記類話のような伝承を育んでいた可能性は、否定できないだろう。

意外なことに、墓場に出るという例は、既述の通り 1 例しかなかった。「燃える人」伝承の基盤となった自然現象は、土葬された死体から発生するガスが放つ燐光よりも、むしろ水辺に発生する怪火現象である可能性が高いとは考えられないだろうか。また墓は、たしかに公共の空間ではあったが、事実上聖職者の管理下に置かれてきたため、幽霊、ひいては燃える人が出現する余地がなかったともいえる。なお、キリスト教における幽霊の位置づけについては次章以降で検討することになるので、幽霊について言及があったことにつ

いて、記憶の片隅に留めておいていただきたい。

３．３　怪し火にまつわる伝承

本節では、燃える人を怪し火の一形態としてどのあたりに位置づけることができるのか確認するため、おもに、怪し火に関する伝承についてみてみよう。19 世紀フランスの作家コラン・ド・プランシーの『地獄の事典』には、悪魔や精霊、魔女など 19 世紀当時のデモン観をみるうえで貴重な資料となりうる記述が数多く見られる。彼はそこで怪し火に関しても記しており、たとえばイングランドのカーディガンに住むある男が見たという火について、バーター（Barter）の『精霊の確実性について（De la certitude des esprits)』から以下のように引いている。

【類話３－２５　イングランドの怪し火】

ある男が真夜中すぎに目覚めたときのこと。彼は、自分の部屋に 12 個の怪し火が次々と入ってくるのを目の当たりにした。それらの怪し火は小さな子供を抱いている女性の姿をしていた。室内には完全に明かりがついていた（「すっかり明るくなった」の意か）。怪し火たちは踊りを踊ったあと、絨毯のまわりに車座になり、気楽な格好で夕食をとっているように思えた。怪し火たちは、一緒に食べようと彼を招いた。この幻視（ヴィジョン）が見えている間、男は一心に祈っていたので、こんな風に告げる声が聞こえてきた。恐れることはない、と。4 時間もすると、彼らの姿（ヴィジョン）は消えた。後日、男は誓ってこう言った。あのときは自分は確かに目覚めていたし、幻影にもてあそばれたわけではなかった、と。彼は良識ある、信頼に足る男でもある。[56]

4 時間もの間室内で踊っていたという、かなり人間くさい怪し火の姿がここにみられる。あるいは、怪し火にまつわる伝承に妖精のイメージがオーバーラップしたのかもしれない。いずれにしてもこの話は、怪し火の室内侵入に関する記述のひとつといえる。日本では怪火が家の中まで入ってきたという記録は稀だが、ヨーロッパではさほど珍しいものではない[57]。「踊った」とか「招いた」といった怪し火の擬人化については差し引くとしても、何か燃えるものが室内に入ってきたという事実があり、それを口述・筆記したものと考えても、あながち的はずれではないだろう。次にみるのは、室内ではなく、屋外での怪し火との遭遇例である。

【類話３－２６　ロルシュ（Lorsch）のヘァヴィッシュ】

ヘンライン（Hänlein）の山道ぞい、そしてロルシュのあたりでは、怪し火はヘァヴィッシュと呼ばれる。それは待降節の間にだけ現れ、人々の間にはヘアヴィッシュを挑発する唄が伝わっている。「ヘァヴィッシュ、ホー、ホー、カラスムギの麦わらみたいに燃えている、叩いておれに青あざ作れ」というものだ。伝承によると、今から 30 年以上昔（採集されたときから単純に逆算すれば、18 世紀末）のある日の夕方、ひとりの少女がヘァヴィッシュを見て、この挑発唄を歌いかけたという。すると、ヘァヴィッシュは彼女に向かって一直線に飛んできた。少女は逃げ出し、両親の家にかけ込んだが、それは背後にぴったりとついてきて、少女と同時に部屋の中に入り込み、中にいた者たち全員を燃える翼でたたきのめした。そのため人々は音と光を失ったという。[58]

ヘッセン州マンハイム近郊のロルシュは、現在ではなんの変哲もないいわば「田舎町」だが、じつは、ここはかつてベネディクト会修道院の一大拠点であった。ロルシュ修道院（Lorscher Abtei）とも呼ばれるこの修道院の創設は 8 世紀だが、11 世紀に火災に遭い[59]、創建時の建物の大半はこのとき焼失した。12 世紀に一度再建されたものの、16 世紀に再度焼失したため、現在残るのは、カロリング様式の門と建物の一部だけである[60]。

ロルシュという、キリスト教とゆかりの深い場所で語られる怪し火の伝承が、かつてここに大修道院があったことと関係するのかどうか、何らかのメッセージが仮託されているのかいないのか、即断は控える。とはいえ、こうして文字化され定型化しているからには、伝承していく者たちの意図が、いくばくかは反映していると考えられる。

いずれにしても、類話３－２６でみることができるのは、凶暴なまでに擬人化された怪し火である。挑発に対しての仕返し。描写の際に人間のかたちをしていると明記されていないだけで、その役回りは、人間の姿で描かれている燃える人の類話と、大差ないといえるだろう。ただし地域によっては、両者は厳密に区別される場合もあるので、完全に同一のカテゴリーにまとめてしまうわけにはいかない[61]。なお、人間に対してネガティヴな怪異として語られる場合、擬人化されないタイプが多い傾向があることは付記しておきたい。

怪し火は、人が発する挑発に対して感情をむき出しにして怒り、攻撃を仕掛ける。怪火現象が実際に発生し、室内にまで侵入してきたと想定するならば、この類話においては、現象発生を理由づけ、解釈するために、「怪し火の仕返し」というコード、つまり規範的表現が用いられたと解読できよう。次に見る類話では、怪火現象が２種類に分類されており、怪し火と燃える人が別に登場する。

【類話３－２７　ドゥルッグレーデ（Drugglede）と燃える人】

デュッフェスマール（Duffesmaar）とその周辺は、「昼間ではない（do dog et net）」

と人々にいわれるように、とても不気味な場所だった。 夜になると、いや真昼でも、デュッフェスマールから 「ルヘム（Luchem）のビルト（Bild)」という名で呼ばれる五叉路に向かって、燃える人（Füemann）が出たという。当初こそその正体は不明だがやがて全身が赤々と燃えている姿が見えだし、炎に身を包まれながら道を行く男の姿となる。彼は誰にも危害を加えないよき霊とみなされた。たちの悪いのはイルリヒトで、それは小さな炎のように見え、よくデュッフェスマール近郊の荒れ野に出没する。イルリヒトに惑わされた人々は、知らぬ間に道を外れて夜通し迷い続け、目的地には明け方になってやっと到着することができたという。たとえば、メルケン（Merken）のある女が、隣村ルヘムのキルメス祭（教会祭[62]）に参加したときのこと。彼女が帰路についたときにはすでに夕方遅く、案の定、道中イルリヒトに出くわしてしまった。彼女はイルリヒトに夜通し引きずり回され、（村へ向かう道にある）ルーハーベルク（Lucherberg）付近まで3度も来たにもかかわらず、どうしても帰り道をみつけることができなかった。ようやくみつかったときには、すでに明け方になっていた。家に着くと、彼女はすぐさまベッドに横になり、そして二度と起きあがることはなく、それからまもなく恐怖のために死んだ。彼女と似たようなことは他の者の身にも降りかかった。何時間も野原を彷徨い、別の村に来てしまったりもしたが、自宅にはどうしても到着できなかったのである。このように、イルリヒトは悪質で、人間に対して悪意を抱いている。[63]

文中で言及される地名は、現在もアーヘン近郊に集落の名称としてみられる。ただし、デュッフェスマールだけは確認できなかった。類話３－２６では仕返しとしての攻撃だったが、類話３－２７では、人を攻撃する正当な理由については語られていない。とはいえ、両者とも「イルリヒトは人に対して危害を加えるものだ」という了解が根底にある点では共通している。また、人間に対して危害を加えない霊は燃える人として別立てで扱われており、《たちの悪いのはイルリヒトで》と形容されるように、人に対して悪しき干渉をしてくる怪火現象のみをイルリヒトとして分離させている。さらには、悪さをするというよりも、むしろイルリヒトとの遭遇が死の予兆となっていると読み解くことも可能だ。予兆としての怪火というコードは、たとえば次のような話に見ることができる。

【類話３－２８　燃える車】

ある暗い夜のこと、ある若者はミラノからの帰途、雷鳴が聞こえたのでひどく驚いた。さらに、遠くに光線が走るのが見え、また左の方からは、なにやら声がするようだった。しばらくして、彼は炎に包まれた車（荷馬車もしくは馬車、牛車）が自分の方に走ってくるのに気づいた。車を操っていたのは牛飼いたちで、口々にこんな叫びを連呼してい

た。「用心しろよ」。びっくりした若者は馬を急がせたが、走れば走るほど車が近づいてくる。1 時間ほど走った末、彼はようやくとある教会の入り口にたどり着いた。そこで彼が神にあらん限りの力で縋ると、一切は消えてしまった。カルダーノは若者の見た幻視について、これはまもなく猛威をふるうようになる大ペストと、それに伴ってやってくるいくつかの災厄の予兆であったとしている。[64]

ここでは、牛飼いが御す《炎に包まれた車》が、災厄の予兆と解釈されたことが示されている。こうした怪現象が本当に発生したかどうかを棚上げにしても、少なくとも「燃える車」なる怪異について、何らかの形で「カルダーノ」が聞き及んだこと、そして彼はそれがペストの予兆だったと解釈した[65]ことについては、上記のような記録から確認することができるだろう。文中で言及されている「カルダーノ」なる人物が、はたして 16 世紀ミラノ公国パヴィア生まれの医者で、神秘思想家でもあったジェロラモ・カルダーノ（Gerolamo Cardano、ラテン語名 Hieronymus Cardanus、1501～1576）[66]と同一人物かどうかは、原本に明記されていないため定かではないが、実際、カルダーノが占星術にも通じていたことから、現象を予兆として読み解く文中の「カルダーノ」と同一人物である可能性は決して低くない。しかもミラノは、カルダーノが生きた 15 世紀から 16 世紀にかけても、繰り返しペストに見舞われているという記録もある。具体的な年代を表３－１に挙げる。なかでも 1522 年から 1527 年にかけての流行は広域に及んでいることから推測すると、「燃える

【表 3-1】ミラノでペストが発生した年。また、ミラノでのペスト発生と同年にペストが発生したイタリア半島の都市と地域[67]

発生年	発生都市・地域数	おもな発生地
1451	3	ミラノ、パヴィア、ボローニャ
1452	1	ミラノ
1478	22	ミラノ、ピサ、ナポリ、ローマ、ヴェネツィアなど
1482	4	ミラノ、フェラーラなど
1484	5	ミラノ、ヴェネツィアなど
1485	10	ミラノ、ヴェネツィア、モデナ、ボローニャなど
1486	11	ミラノ、シエナ、パルマなど
1501	6	ミラノ、コモ、ジェノヴァなど、ロンバルディア地方
1512	2	ミラノ、ヴェローナ
1514	3	ミラノ、ヴェネト、ロンバルディア地方
1522～1527	イタリア半島ほぼ全域	ミラノ、シラクーサ、ローマ、ナポリ、フィレンツェなどの 14 都市と、シチリア、ロンバルディア地方、サルディーニャ地方、リグリア地方
1550	1	ミラノ
1566	1	ミラノ

車が予兆であった」とされる「大ペスト禍」とは、これを指すのではないだろうか。

ところで、「火の玉（Fireball）」と呼ばれる現象も怪火の一つといえる。とりわけスコットランドには火の玉目撃譚が多く見られたという。この火の玉はゲールガン（gaelghan）ともいわれ[68]、たとえば 17 世紀末に編まれた文献中にもそれはみられる[69]。ここでは、マクレガーが収集した話から類話を引こう。

【類話３－２９　スコットランドの火の玉】

たとえば、（スコットランド中部グランピアン山地にある湖）ロッホ・ランナホ湖畔（Loch Rannoch-Side）の住民もまた、球形をした奇妙な光について私に語ってくれた。それはときどき湖面の特定の範囲を滑るように飛んでいくという。また、セントラル州のブレダルベーン（Breadalbain）では、数年前にロッホ・テイ湖（Loch Tay）で同時にふたつ目撃されたと噂されており、それが当地でもっともよく知られた幽霊光ではないだろうか。1935 年頃、私はこの土地で出会ったある老人から次のような話を聞いた。彼だけでなく、他の少なからぬ人もこんな火の玉を見たとはっきり認めている。地元出身の若い兵士 2 人の遺体が、埋葬のために故郷へ運ばれる前夜のこと、ふたつの明るい球体がロッホ・テイの湖面をすばやく渡っていった。翌日、棺を乗せた舟が辿った航路は、明るい球体が移動していたコースと一致していた。[70]

ここでも、類話３－２８でカルダーノが解釈したと同様に、湖の上を渡っていく怪しげな火は、その翌日行われる葬送儀礼の予兆であったとみなされている。また、火と死んだ兵士との関係について、明示的な言及はないものの、「棺を乗せた舟が辿った航路（中略）と一致していた」という言葉が付加されることで両者が関係づけられ、さらには、怪しげな光が死者の魂であることを暗示しているとも読めるだろう。そうした不思議な光が死者の魂と解釈される話を、次に引こう。

【類話３－３０　光る少年　（Radiant Boy）】

（イングランド北西部の）カンバーランド地方にあるコービー城（Corby Castle）は印象的な城である。そこは、もっぱら「光る少年」と呼ばれる、チラチラと光る小さな霊が出没することで知られている。なぜ霊が出現するのか、その原因は詳かではないが、とにかく 200 年あまりも現われ続けている。おそらくこの霊は、不可解な死を遂げた、かつてこの城の召使いだった者なのだろう。キャサリン・クロウも『自然の夜の側』で、この「美しい少年（beautiful boy）」について書いており、そこには「白い服を着て、

黄金のようなピカピカの錠前を持ち、柔和なやさしい顔つきをしている」[71]と言及されている。[72]

人間の言説によって構築されて初めて、幽霊は存在として形を得て目撃される。そう考えるならば、怪死した少年の幽霊が死後徘徊するという話の裏側には、「燃える人」伝承でもみてきたように、死後にも生があるという信念がなければならない。

類話３－３０の光る少年の場合は、徘徊の理由が詳しく述べられることはなかったが、燃える人をめぐる伝承では、生前の行いが死後の生に影響を与えるという、因果応報的信仰が提供する他界観念に裏打ちされたモラルが如実に現れて語られていた。繰り返しを恐れずにあえていうならば、人知れず実行されたために生前露見しなかった悪事も、たとえ死んでも必ずや処罰されるから、罪を浄めるまで天国への道は開かれないというモラルである。以下に挙げるウィリー・ザ・ウィスプの起源譚は、こうした他界観をメルヒェンの語り口で語ったものだ。

ウィリーという名の大酒のみの鍛冶師がいた。彼は悪魔に魂を売り渡すのと引き替えに、7 年間遊んで暮らせるだけの金を手にした。その金を元手に町を作り鍛冶場を作った男は、聖人を助け、その礼にと 3 つの願いを叶えてもらう。その場面を見てみよう。

【類話３－３１　①　ウィリー・ザ・ウィスプ】

「それでは」と男は言った。「まず一番目の願いは、誰であれわしの大槌を手に取ったが最後、わしが取り上げるまではその手から離れんようになること」

「二番目の願いは」、と男は続けた。「誰であれわしの肘掛け椅子に腰を下ろしたが最後、わしが立たせるまではそこから動けんようになること」

「それから三番目の願いは」、と男は言った。「どんな金であれ一旦わしの財布に入ったが最後、わしが取り出すまでは出てゆけんようになること」

「おお……天国を望んでさえいたら、お前はそこへ行けたものを」とお聖人さまは言った。[73]

7 年後、約束通り悪魔が迎えに来た。「さあ、来るのだ……」という悪魔の促しに、ウィリーは「承知した」と従順に従うようにみせかけるが、悪魔に「その大槌を取って、蹄鉄を叩いてくれんかね」と一見些細に思える願いをいう。それは、聖人に礼としてもらった、一度手に取ったら最後、ウィリーが取り上げるまでその手から離れない例の大槌だった。それを手にしてしまった悪魔は、大槌から解放されることなく鍛冶場で働き続けなければならなかった。3 日後、悪魔は観念し、結局ウィリーにさらに 7 年間の猶予と金を与える。

7年後、再びやってきた悪魔を、最初と同様――今度は聖人に叶えてもらった２番目の願い、肘掛け椅子を使って――悪魔を陥れ、さらにもう7年の猶予と金を手に入れる。その7年後、三度(みたび)ウィリーの前に悪魔が現れた。鍛冶師は三度悪魔を騙し、とうとう悪魔にこう言わせることに成功する。

【類話３－３１　②　ウィリー・ザ・ウィスプ】

「わしを放してくれたら、この前よりも金はもっとたっぷり出そう、それに、もう二度と一緒に来てくれとは言わん」

「よし、わかった」とウィリーは言った。（中略）　ウィリーはそれからまた仕事を続けた。やがて、ウィリーは死んで天国へ行ったのだが、門の所で呼び止められた。

「おお、お前はここには入れん。悪魔に魂を売り渡したのだからな。お前が行くのは、このずっと下の方だ」

ウィリーは地獄へと降りて行ったが、ここでも魔王に追い払われてしまった。もしもウィリーに入り込まれたら地獄は荒れ放題に荒らされてしまうと思ったからだ。そこで魔王は枯れ草の束に火をつけ、それをウィリーに持たせて送り返した。そういうわけで、今でもウィリーは天国と地獄のあいだを行ったり来たり歩き続けておって、そいつがいわゆる〈狐火〉とか〈鬼火〉というやつだ。[74]

天国からも地獄からも見放されたウィリーが彷徨い続けるのは地上である。救済されることなく永遠に下界を彷徨い続ける彼は、明示的な表現はないものの、まぎれもなく幽霊といえる[75]。ウィリーは燃える身体こそもたないものの、話の構造に着目すれば、「悪事のせいで地上を彷徨う」彼以外の怪異と同じであることがわかる。

３．４　「燃える人」伝承の分布

ここまで燃える人および怪し火全般について概観してきた。とくに３．１では、燃える人について語られる伝承に特徴的と思われる、いくつかのパターンを念頭に置きながら、類話を参照していった。本節では、ザーゲ資料に立ち返り、３．１でみられたパターンの地理的分布に偏りがあるのか・ないのか検討する。

３．１でみたパターンをいまいちど確認しておこう。最初のパターンは、何か怪異が徘徊し、それが「死者である」とされているものであった。なかでも、「罪としての徘徊」をおもに取り上げた（３．１．１）。次に、死者が生者に奉仕するパターンをみた。たとえば、夜道を照らすといったものがあった。死者がしてくれた奉仕に対して、生者からは報酬と

してささやかな金品が支払われた（３．１．２）。金品以外の報酬としては、「祈り」があり、「生者の祈りが死者を昇天させる」というパターンについてもみた（３．１．３）。

上記のメルクマールをいまいちど整理したものを表３－２に示した。AからDまで４つのタイプに分け、おのおの下位タイプを設けてある。

【表 3-2】 燃える人」伝承に顕著にみられるパターンの細目

タイプ A　徘徊する怪異		
	A0　徘徊するが理由について言及のないもの	189
	A1　罪としての徘徊	39
	A2　徘徊の理由が、死者自身にないもの	6
	A3　おぶさる、車に乗り込む	54
タイプ B　生者への奉仕		
	B0　生者への奉仕（移動中以外）	2
	B1　移動中の出来事	67
	B2　生者が死者を呼び出す	35
	B3　生者が死者に報酬（金品）をやる	42
タイプ C　祈りと悪罵		
	C1　生者が祈る	52
	C2　生者が罵る	26
	C3　死者が昇天する・できない	33
タイプ D　その他		
	D1　予兆として	12
	D2　聖職者が追い払う	6

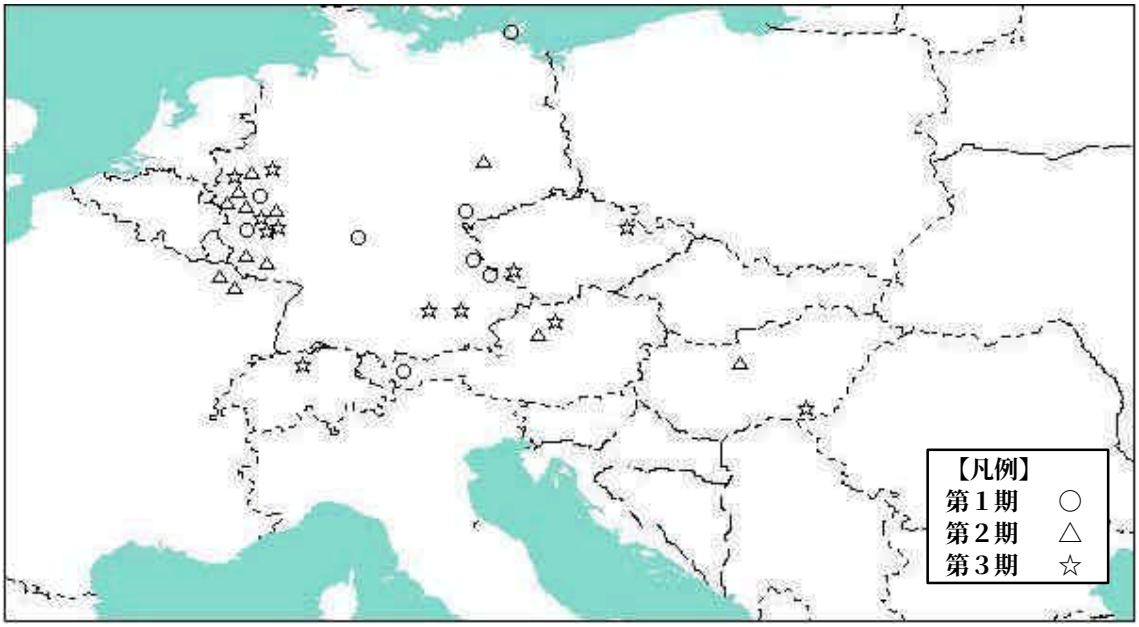
（上記数字は類話の編数）

３．４．１　タイプA：徘徊する怪異

「徘徊する怪異」に関する類話については、まず上位カテゴリーとしてタイプAに分類した。タイプＡ０には、徘徊はするが理由については言及のない類話が分類される。数からいえばこのカテゴリーに分類できる類話の数が最も多く、189 あった。それらの類話がどの地域から収集されたかを図３－１１に示す。ただし、伝承１編ずつについて記述すると煩雑になるため、マークの基準は伝承集（ないしコレクション）とした。というのも、便宜上おしなべて「類話」といっているが、おのおのをみてみれば、数ページに及ぶ長いものもあれば、わずか数行、場合によっては 1 行しかない短いものまで幅があり、それらを全て同列において地図上に落とすのは無理があると考えたためである。それゆえ、当該タイプに分類できる類話を１編以上含む類話集について、類話が採集された場所を、出版年代から３期に分け（分類方式は、第１章　１－３と同様。19 世紀、20 世紀前半、20 世紀

後半)、地図上に示した。以下、本節で提示する全ての地図についてこの方式をとっている。

さて、タイプAに戻ろう。ライラント＝プファルツ州付近に偏っているようにもみえるが、１．３で確認したとおり、この地域は「燃える人」伝承が収録されている伝承集自体の数も多いので、かならずしも偏っているとはいえない。分布はドイツ国内のみならず、スイス、オーストリア、そしてドイツ系住民が近世以後数多く入植したハンガリー、さらには第二次世界大戦後ドイツ系住民が強制退去させられたチェコまで、広域に及ぶことがわかる。

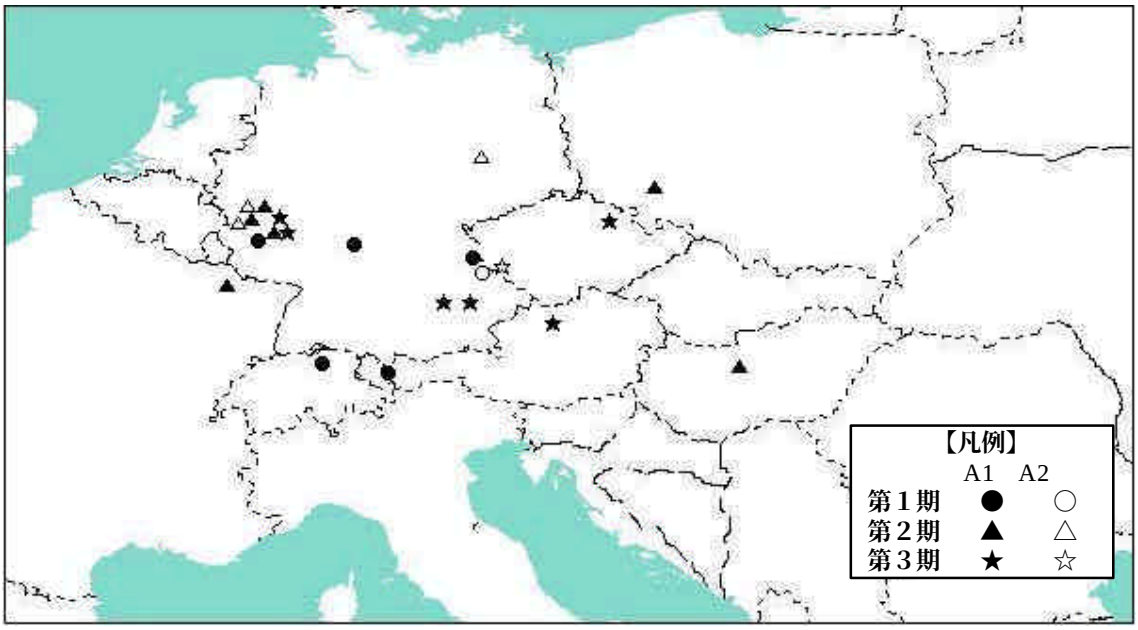


【図 3-11】タイプA0 徘徊するが、理由については言及のないもの

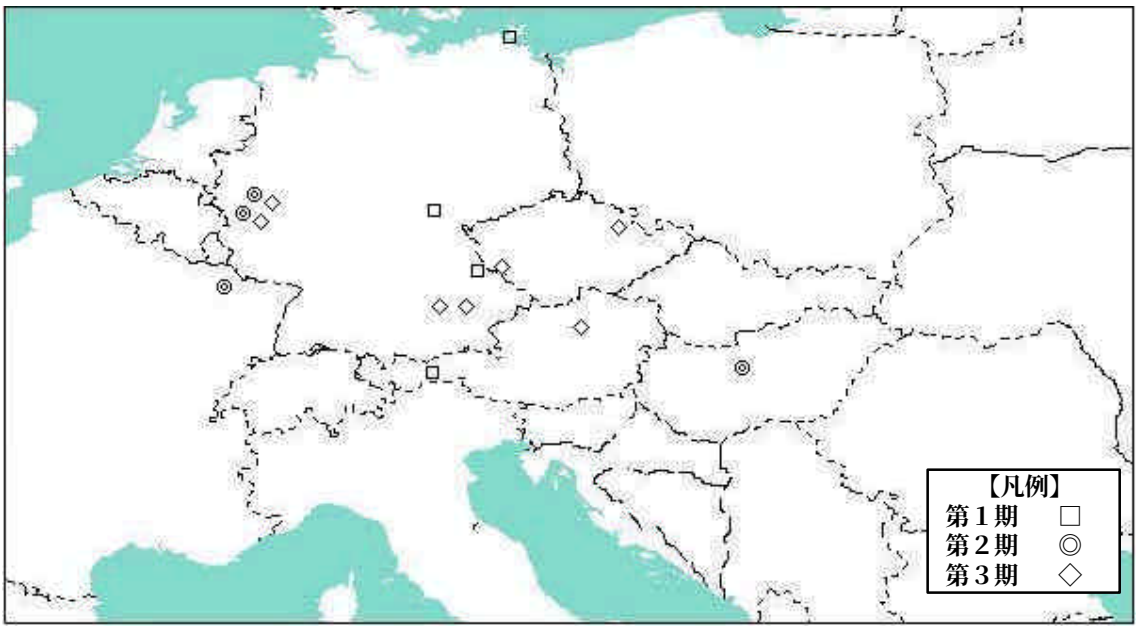
タイプＡ１は、怪異が徘徊しなければならない理由として、「生きている間に罪を犯したから」と明示的に書かれているもので、39 編あった。タイプＡ２は、殺された者や洗礼前に死んだ者などで、戦場で死んだ兵士や、悪漢に殺された旅人などもここに入る。タイプＡ２の場合、徘徊する理由としては、「臨終の際、適切な宗教儀礼を受け（られ）なかったから」と説明できる。独立のカテゴリーを設けてはみたものの、数は少なく、6 編しかなかった。図３－１２は、タイプＡ１とＡ２をあわせて地図上に落としたものである。

タイプＡ３には、「車に乗ってくる」または「背中におぶさる」という記述があるものを集めた（図３－１３）。54 編みられ、ドイツ国内から入植地まで、幅広く分布している。彼らが乗ってくると「たいへん重くなる」とある類話もここに分類されている。３．２．１でも言及したとおり、重くなるとされる理由については不明である。重さについて言及のないものはあったが、たとえば「乗ってくると軽くなる」といったものはみられなかった

ことは付記しておきたい。



【図 3-12】タイプA1 生きている間に犯したことに対しての罰として徘徊するもの
タイプA2 徘徊の理由が、死者自身にはないもの

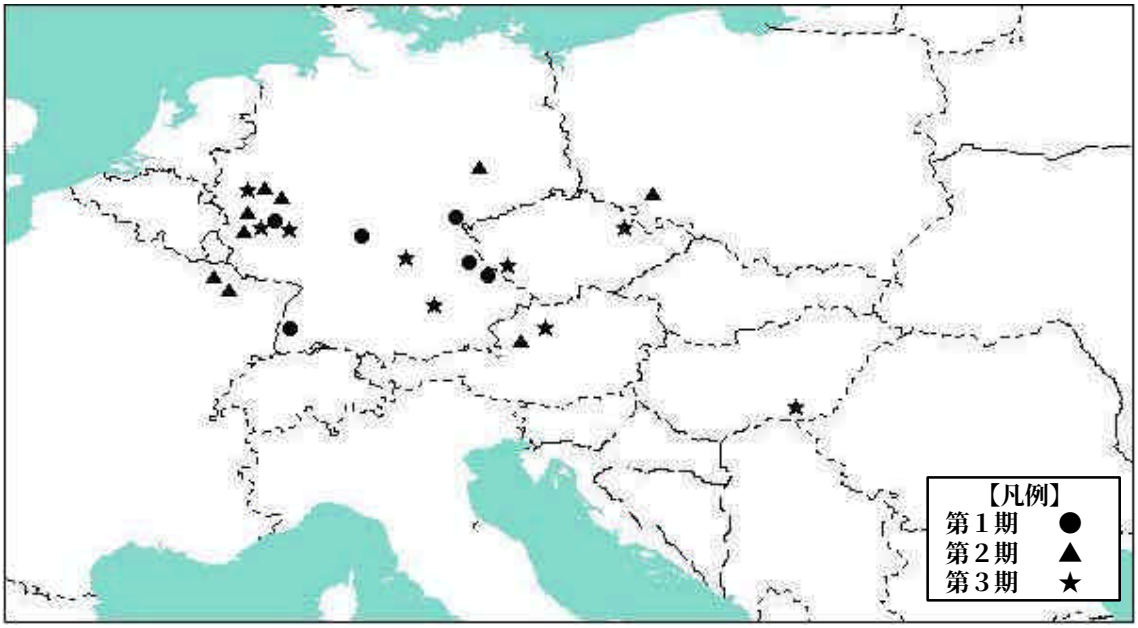


【図 3-13】タイプA3 車に乗ってくる（「おぶさる」を含む）

３．４．２　タイプＢ：生者への奉仕

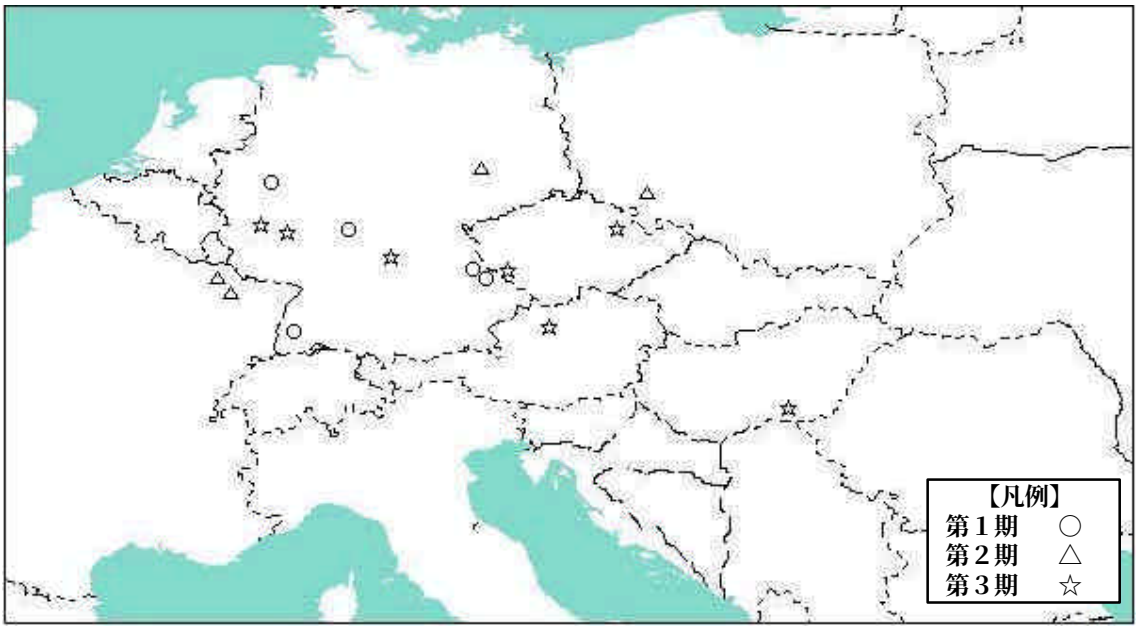
さて、次はタイプＢである。タイプＢでは、基本的な分類コンセプトとして、「生者に奉仕する」を採用した。タイプＢ０として「移動中以外に生者に奉仕する」というカテゴリーも設けたが、該当する類話は「ジャガイモ畑で収穫物を車に載せる際に手伝う」と、「(燃える人は）森の木と似ていて、全身で照らす」の 2 編のみだったため、地図上には示さなかった。「森の木と似ていて」というのは、おそらくは、朽木に付着した菌糸が闇夜に光ることからの連想ではないかとも想定できる。

タイプＢ１は、奉仕が移動中に行われたものを分類した。「車での移動中に燃える人に照らしてもらった」などがこれにあたり、67 編を数えた（図３－１４）。

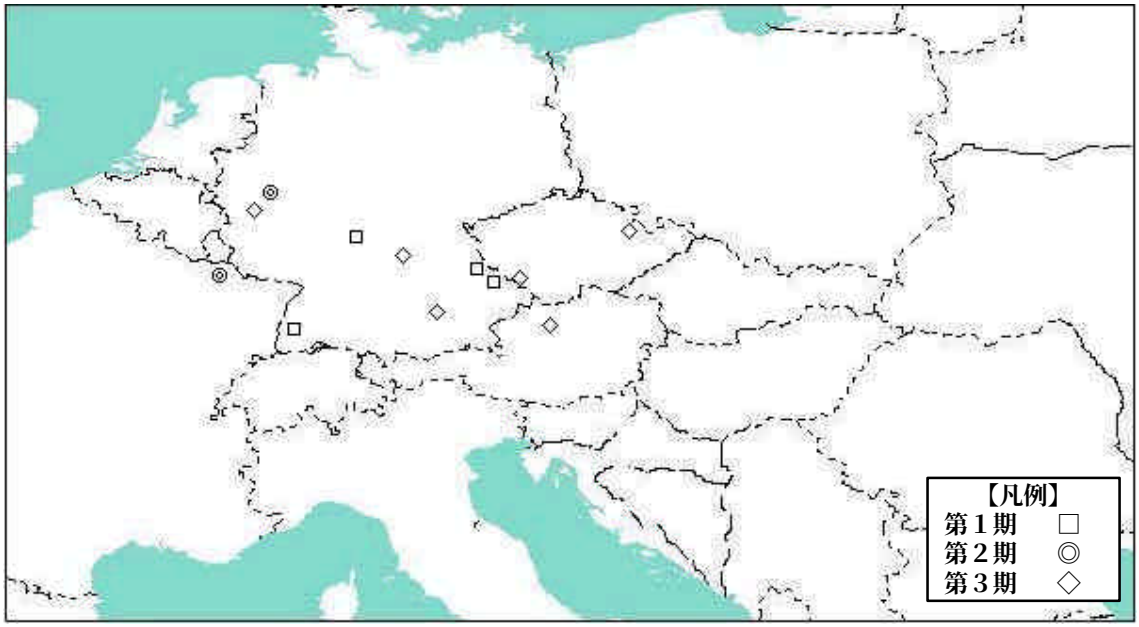


【図 3-14】タイプB1 移動中の出来事

タイプＢ２には、生者が何かをしてもらう際、積極的に燃える人を呼び出した類話について分類した（図３－１５）。35 編あり、うち 5 編を除きすべてがタイプＢ１と重なっていた。すなわち、「移動中に呼び出して手伝ってもらった」という類話が 30 編あったということになる。Ｂ１と重複しない 5 編については、移動中ではなく、「夜間家の見回りをした際、暗くて鍵穴がよく見えなかったため」や、「ナシを泥棒しようとナシ林入ったときに手元を照らしてもらうために」、「宴会の最中に、照らしてもらおうと」（各 1 編ずつ）、「少女が、キスをしてほしいと」（2 編）燃える人を呼び出したものが挙げられる。なお、何らかの依頼を伴わず、なかば遊び半分で燃える人を呼び出した類話については、タイプＢの条件である「奉仕」から外れるため、ここでは除外した。



【図 3-15】タイプB2 生者が死者を故意に呼び出す



【図 3-16】タイプB3 礼として、生者が死者に報酬（金品）をやる

タイプＢ３には、奉仕のあと、生者が何らかの金品を燃える人に渡すことについて言及のある類話を集めた（図３－１６）。細かい類話も含めると 42 **編あり、うち** 13 **編はタイプＢ１およびＢ２と重複していた。つまり、「移動中、手助けしてもらうことを念頭に燃える**

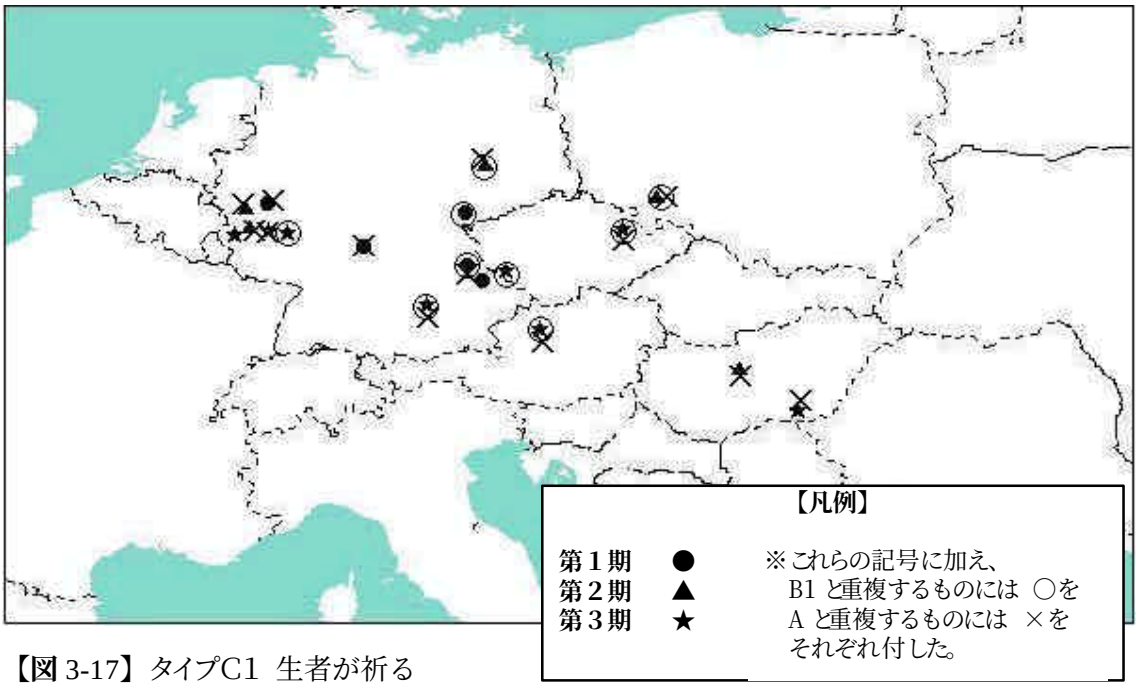
人を呼び出し、手助けしてもらい、礼として金品を与えた」という類話が 13 編あった。タイプＢ１とタイプＢ３との重複「移動中、手助けをしてもらい、金品を与えた」はタイプＢ３中に占める割合が高く、42 編中 31 編あった。重複しない 11 編のうち 2 編は、「少女が室内で燃える人を呼び出したら、報酬をもらうまで立ち去ろうとしなかった」というものと、「移動中、森の中で勝手に現れては旅人を脅し、金品を巻き上げた」類話がある。とくに後者については、燃える人を悪としてとらえ、報酬を与えることを「巻き上げられた」としてあるだけなので、一般的なタイプＢ１＋Ｂ３の読み替えであるともいえる。つまり、金品を与える場合、そのほとんどが移動の際の奉仕への、返礼としてであることがわかる。なお、残り 9 編はすべて、燃える人に何かを手伝ってもらったときにどのような処置をしたらよいのかについてのみ、おのおの 1 行程度書いてある類話で、すべて同一の伝承集の同一箇所での言及であった。これらの類話については、編数には参入したが、文中に含まれる情報量が少なすぎるためパターン分類は不可能である。

３．４．３　タイプＣ：祈りと悪罵

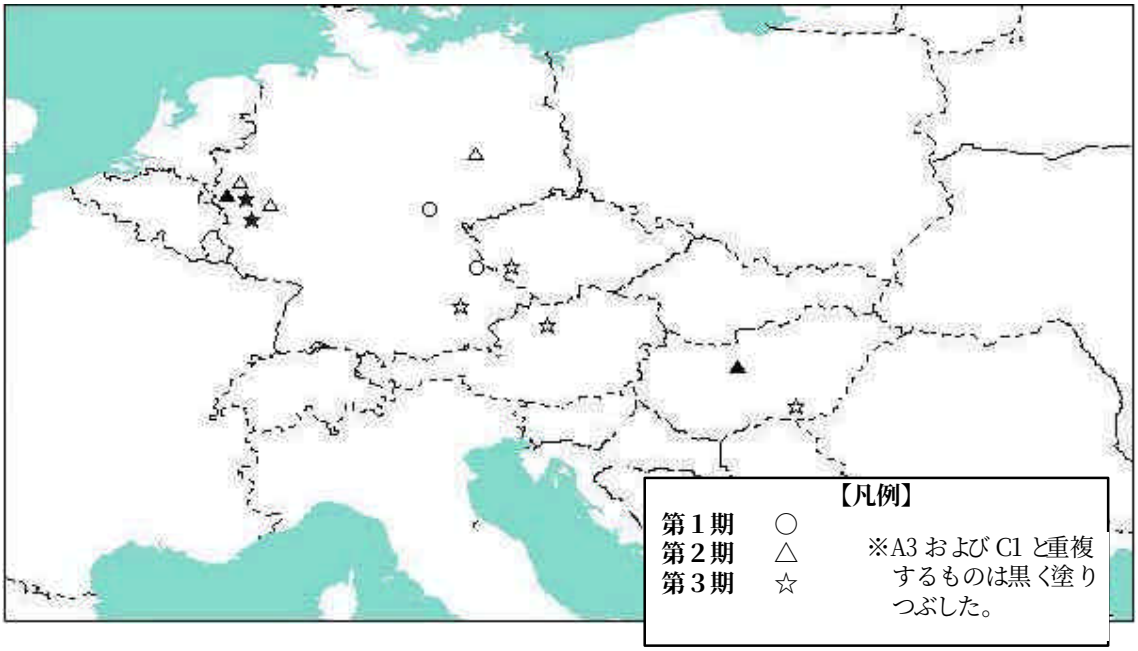
さて、次にみるのはタイプＣである。祈りと悪罵が、生者と燃える人を仲介しているものについて集めてみた。

タイプＣ１には、生者が燃える人に対して、祈りを唱えるか、または礼として「神のお恵みがありますように」という言葉を口に出す、という類話を抽出した（図３－１７）。52 編あり、うちＢ１と重複していたもの、つまり、「移動中に手助けをしてもらい、礼として祈りをあげた・礼を言った」という類話が 21 編あった。それ以外で多かったのは、タイプＡの下位タイプに分類される類話と重複するもので、「徘徊する怪異を追い払うために祈った」類話である。28 編あった。ということは、「生者が祈る」というモティーフに限ってみれば、Ｃ１＋Ｂ１とＣ１＋Ａがおおむね拮抗しているようである。ただし、両者の分布状況には若干ずれがあることが図３－１７から読める。後者がまんべんなく分布していたのに対して、前者はラインラント＝プファルツにはあまりみられず、むしろ南部地域に多かった。これが意味するところについては、正直なところよくわからない。しかし、あえて推測するとするならば、あるいは、カトリックかプロテスタントかといった、キリスト教の宗派の違いによるものだろうかとも考えられる。

なお、どちらにもあてはまらないもの 3 編あり、「ジャガイモの収穫の際、収穫物を車に乗せるのを手伝ってくれたので礼を言った」、「燃える人がニワトコの木の下で泣いていたが、司祭が祈りをあげると昇天した」というもの、そして一般的説明として「燃える人は罵れば消え、祈りは彼らを引きつける」とあるものが各 1 編ずつとなっている。



【図 3-17】タイプC1 生者が祈る

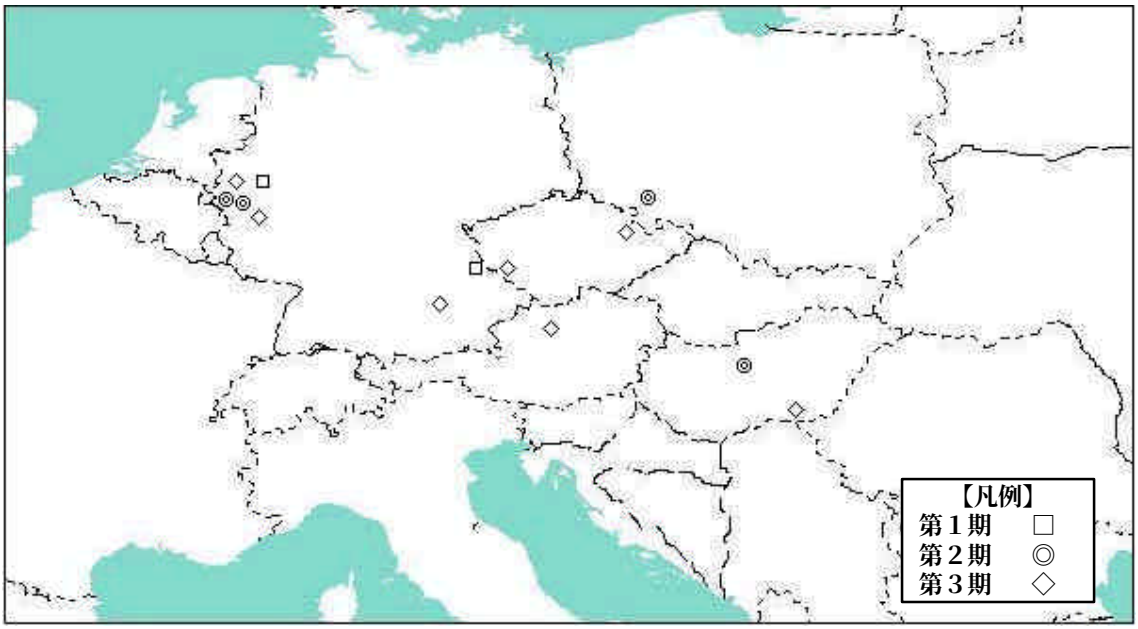


【図 3-18】タイプC2 生者が罵る

タイプＣ２は、生者が悪罵をとなえるもので、祈りよりは若干少ないものの、それでも 26 編あった（図３－１８）。罵りの結果は、すべて、何らかの形で燃える人は生者の前から消滅した。また、Ａ３およびＣ１との重複で、「移動中に乗り込んできた怪異を追い払おう

と思って祈ったがうまくいかず、思わず罵ったら消えた」と、3 つの分類が重なっている類話も 8 編あり、これが全 26 編中の 1/3 近くを占めている。いずれにしても、タイプＣ２に分類されるのは、移動中か移動中でないかを問わず、「燃える人にあったら罵れば消える・罵ったら消えた」というものであった。

タイプＣ３には、燃える人の昇天について言及のある類話を集めた（図３－１９）。全部で 33 編あり、Ｃ１と重複する類話「祈りの結果として昇天」が 26 編、Ｃ１ではなくＣ２との重複、「悪罵の結果として昇天」も 2 編あった。祈りとも悪罵とも関係なく昇天について言及のある類話が 5 編あったが、たとえば、「燃える人の願いを生者がかなえてやれば、彼らは昇天できる」（4 編）といったものだ。願いのうち 3 編は、「かつて動かしてしまった境界標識石を元に戻すこと」で、残り 1 編は具体的な願いについてふれるのではなく、「燃える人に出会ったらどうすべきか」について言及したものだった。残りの 1 編は、「燃える人が、下女に、おまえのベッドに入れてくれれば俺は昇天できると依願する」という、読みようによってはかなりエロティックな内容のものだった。

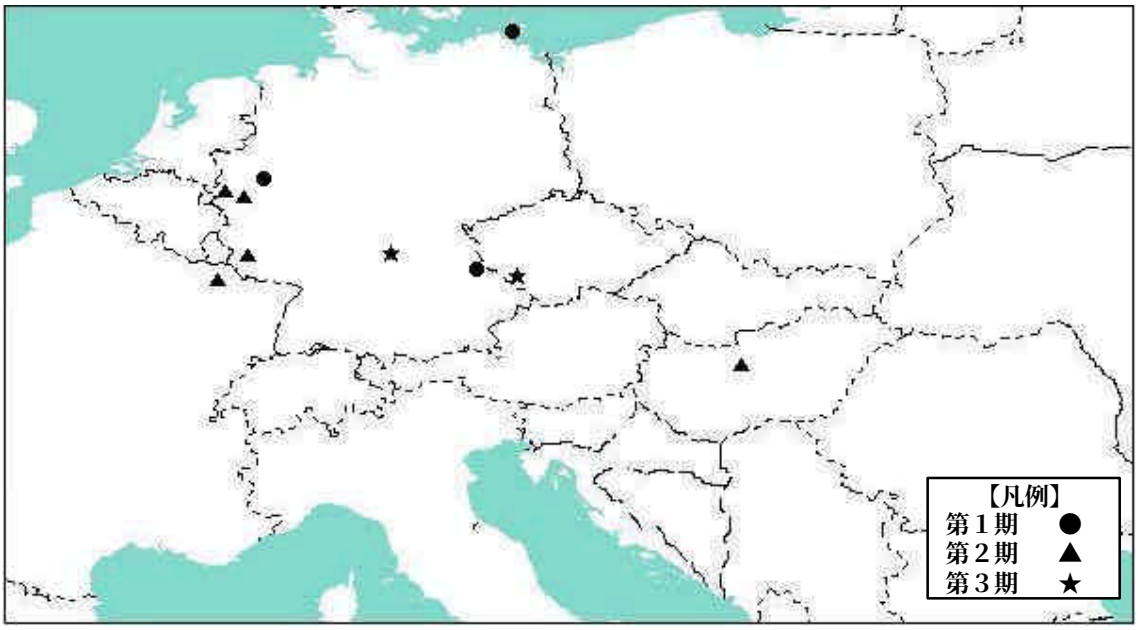


【図 3-19】タイプC3 死者が昇天する･昇天できない

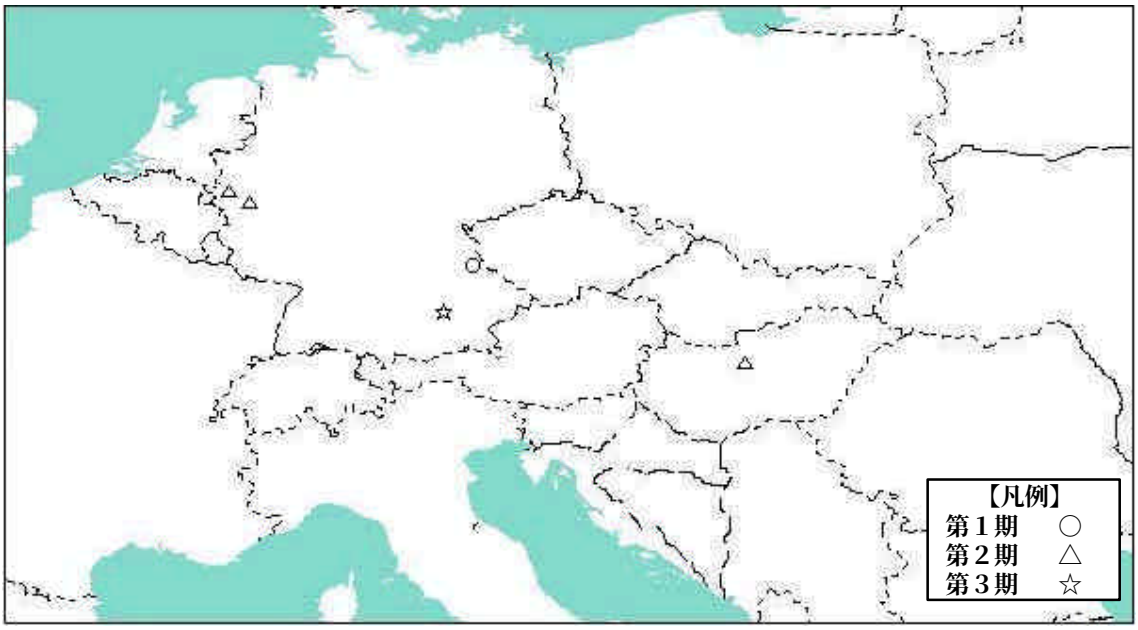
３．４．４　タイプＤ：その他

最後に、上記以外に顕著にみられたパターンについて、タイプＤとして補足的に述べる。燃える人との遭遇が、何らかの予兆とみなされる類話が比較的まとまってみられたため、Ｄ１として独立のカテゴリーを設けた。12 編しかないにもかかわらず、各地に分散しているありようが図３－２０から読み取れる。他のタイプとのからみでいえば、「徘徊する怪異

に出会ったせいで、病気になった／数日後に死んだ」というものが最も多く 9 編で、残りの 4 編のうち 2 編は、「道中燃える人に照らしてもらったが、数日後に死んだ」というもので、どちらも同一の伝承集からのものだった。残りの 1 編は、燃える人の出現が「良い年の予兆」としてとらえられるものである。



【図 3-20】タイプD1 予兆として



【図 3-21】タイプD2 聖職者が追い払う

タイプＤ２は、燃える人を現世から消し去るために聖職者が関与したとある類話で、6 編しかないものの、これも各地に分散しているのがわかる（図３－２１）。聖職者としては、教皇が 4 編と最も多く、村司祭と、具体的な職位が記されずたんに「聖職者」とのみあるものが 1 編ずつあった。

３．４．５　分布から読めること

ここまでみてきた分布状況からみえるのは、いったい何か。本節執筆にあたって参考にした「燃える人」伝承はすべてドイツ語によるものであったから、ドイツ語話者が居住する（居住した）地域から収集された類話に限定されてしまうのは当然としても、それ以外に何らかの傾向はあっただろうか。

歴史的・文化的な差異を念頭において、地図を大きく北（西）ドイツ、南ドイツおよびスイスとオーストリア、そしてドイツ系住民が入植した地の３つの地域に区分して考えても、タイプＡからタイプＤのすべての分類において類話が収集されていた。とすれば、燃える人にまつわる類話を仲介したのは、ローカルな組織ないし個人というよりもむしろ、もっと広域なネットワークをもつ「何か」ではないのかとは考えられないだろうか。

「何か」とは何か。論を先取りしていってしまえば、キリスト教会および聖職者が、「燃える人」伝承成立に一役買っていたのではないか――。筆者はこのように推定する。

[1] Schell: 1897, S.279-280, Nr.43.

[2] 邪視（英語では evile eye、邪悪な眼の意、ドイツ語では böse Blick、悪しき視線の意）に関しての文化人類学的研究としては、たとえば、（Moloney,C.(ed.): 1976）や（清水芳見: 1983）がある。また、邪視という日本語の命名は、南方熊楠による。

[3] Hoffmann: 1914, S.4-5, Nr.11.

[4] Hoffmann: 1911, S.98, Nr.246.

[5] Kühnau: 1926, S.152.

[6] レプゴウ: 1977, p.iii-iv および p.202-203, 90, 2, 50. なお、『ザクセンシュピーゲル・ラント法』は、アイケ・フォン・レプゴウ（Eike von Repgow）がラテン語で書いたものが最初だが、レプゴウの封主ファルケンシュタイン伯（Graf Hoyer von Falkenstein）がドイツ語への翻訳を依頼、1224／1227 年にラテン語から訳出された。ドイツ語版の方が現存するテクストが多いため、こちらからの引用が一般的である。

[7] 成立時期については、６－７世紀であるという説と、８世紀前半であるという説がある。世良: 1946, p.8-9.

[8] バイエルン部族法典, p.284-285.

[9] 旧約聖書中、「地境」についての記述は、文中に引用した部分以外では、以下の各所にある。検索には（近藤・編: 1992）を参照した。なお、以下の訳文はすべて新共同訳による。

- 『申命記』27,17　隣人の地境を移すものはのろわれる。
- 『箴言』22,28　あなたの先祖が立てた昔からの地境を移してはならない。
- 『箴言』23,10　昔からの地境を移してはならない。みなしごの畑に入り込んではならない。
- 『ヨブ記』24,1-4　なぜ、全能者によって時が隠されていないのに、神を知るものたちがその日を見ないのか。

  ある者は地境を動かし、群れを奪い取ってこれを飼い、
  みなしごのろばを連れ去り、やもめの牛を質にとり、
  貧しい者を道から押しのける。その地の哀れな人々はともに身を隠す。
- 『ホセア記』5,10　ユダの首長たちは地境を移す者のようになった。私は彼らの上に激しい怒りを水のように注ぐ。

また、新約聖書では、『使徒言行録』17,26 に《神は、1人の人からすべての民族を作り出して、地上の至るところに住まわせ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました》とあるのが、筆者が確認した限りにおいて唯一「境界」について言及のある部分である。ここでは、民族の境界は神が与えたもうたものだとされており、とすれば、それを動かすとい

う所行が神への叛逆とみなされるのも頷ける。

[10] Vernaleken: 1970, S.271, Nr.193.

[11] 本稿冒頭で紹介した『和漢三才図絵』挿絵以外に、「狐火」をテーマにした絵として、ここでは安藤広重の「王子装束ゑの木大晦日の狐火」（神奈川県　広瀬家蔵、大判錦絵、33.5×22.0cm）を挙げる（図注３－１）。シリーズ「江戸名所百景」の一枚として描かれたこの錦絵には、毎年大晦日の夜、王子稲荷の榎のもとに、諸方退き常が燈火をともして夥しく集まるという言い伝えを描いたものである。原典は「江戸名所図絵」の《其のともせる火の連なりつづける事、そくばくの松明を並ぶるが如く、数斛（すこく）の蛍を放飛しむるに似たり》という記事で、ここから想像力豊かに美しく、描かれている。辻: 1980, p.140.

【図注 3-1】　王子装束ゑの木大晦日の狐火

[12] Grimm, (Hrsg.): S.315, Nr.284.（グリム: 1987, p.322, 285 番）. 本稿の訳文は筆者によるものだが、訳出にあたって桜沢・鍛冶訳も随時参照した。なお、原本と桜沢, 鍛冶・訳との番号の相違は、底本が異なるためである。邦訳本は 1891 年の Winkler 版を底本としており、この版では 70 番に「ボニカウの奥方」が挿入されている。そのため筆者が参照した版とは１番ずつ番号がずれている。

[13] Landmesser-Instruction vom 25.Januar 1704. In: Christian Otto Mylius: Corpus

constitutionum Marchiarum. 5. Teil, Berlin-Halle 1751. GstA Bibliothek Sign. 42 a M4.

[14] Hoffmann: 1914, S.71, Nr.184.　また、『グリムドイツ伝説集』には同じく罪深いユンカーの話として以下のような類話が収録されている。

エーガー川付近にある畑のあたりには、地元の人がユンカー・ルートヴィヒと呼ぶ、人間の姿をした妖怪（Gespenst）がしばしば出没する。ここには昔、そういう名前の人がいて、畑の境界標識石をごまかし、ずらしたといわれている。死後、まもなくしてから、彼（の幽霊）はあたりを徘徊するようになり、それを目撃する人を恐れさせた。最近、町に住む少女が彼に出くわした。あるとき、彼女はひとりで城門の外側を歩いていて、知らずに例の不吉なあたりに入り込んでしまった。境界標識石がずれているといわれる場所に来ると、男が 1 人、少女の方に向かって歩いてきた。男の姿は、少女がこれまでに何度も聞いていた、あの悪しきユンカーのそれと同じだった。男は少女に近づいてきたかと思うと、彼女の胸ぐらをつかみ、そして消えた。心の底から驚いた少女は、家に戻り、家族に「私が悪かったの（Ich habe mein Teil.）」と言った。彼女の胸には、幽霊（Geist）が触った跡が黒々と残っていた。少女はすぐ床につき、3 日後に亡くなった。Grimm: 1994, S.315, Nr.285（グリム: 1987, p.322, 286 番）.

[15] Schell: 1897, S.561, Nr.42.

[16] ただし、この伝承に関しては、語り手および収録した人物に関する記録は、第二次世界大戦中に失われ現存しない。

[17] Sammlung Karasek: Ungarndeutsche Volkserzaehlungen aus dem Bakonyerwald, Schildgebirge und Ofner Bergland (Manuskript), Ung.2309.

[18] 蔵持: 1986, p.14-16.

[19] 森: 1978, p.190.

[20] Baader: 1978, S.365, Nr.411.

[21] ロレンツ・監修: 1995, p.89.

[22] ファロは、革命政府によって排除されるが、帝政時代に再登場している。1807 年当時の彼らの賃金は、コースによって 6 スー、8 スー、10 スーに分かれていた（ロレンツ・監修: 1995, p.90）。

[23] ロレンツ・監修: 1995, p.89 より引用。

[24] ロレンツ・監修: 1995, p.90.

[25] Benzel: 1957, S.11, Nr.33.

[26] Schönwerth: 1958, S.95, Nr.4.

[27] Wolf: 1853, S.92-93, Nr.136.

[28] “vergelt’s Gott”は、「ありがとう」を意味する慣用的な表現。

[29] Böck: 1975, S.15, Nr.17.

[30] Eisel: 1871, S.68, Nr.161.

[31] Bächtold-Stäubli & Hoffmann-Krayer (hrsg.), Bd.5, Sp.216.

[32] Erich & Beitl (hrsg.): 1974, kopflos の項。S.467-468.

[33] 明治 6 年に来日したオランダの技術者ヨハニス・デ・レイケ（Johannis de Rijke、1842～1913）が、荒れ川として有名な常願寺川を見ていった言葉とされる。なお、彼の日本における功績については、建設省中部地方建設局: 1987 がある（ただし、筆者は未見）。

[34] Danckert: 1963.

[35] 阿部: 1987, p.256-257.

[36] Hoffmann: 1911, S.49, Nr.117.

[37] Brachwitz: 1937, S.67, S.102.

[38] Hoffmann: 1914, S.13, Nr.33.

[39] Pfeifer: 1993, „Fegefeuer“の項。

[40] Fegefeuer は、中高ドイツ語では vegeviur と表記されていた。Scholze-Stubenrecht, Werner: 2000, „Fegefeuer“の項。また、この語ができたと推定される中世当時、vege-を語幹とする動詞 vegen は、「洗浄する、磨き上げる」の意であった。また、10 世紀、古高ドイツ語では、vegen ではなく fegõn と書かれ、やはり「きれいにする、磨き上げる」の意で用いられている。Pfeifer: 1993, „Fegefeuer“の項。

[41] サクラメント（Sacrament）とは、「神のみえない恩寵のみえるしるし」を意味し、キリスト教の儀式を表す用語である。宗派によって、具体的にどの儀式を指すかが異なるだけでなく、日本語では訳語も異なっている。プロテスタント教会では「礼典（聖礼典）」と訳され、洗礼と聖餐の 2 つのみがサクラメントとして認められている。カトリックの教会は「秘蹟」 と訳し、洗礼、堅信、聖餐、悔俊、終曲、叙階、結婚の 7 つの儀式を指す。初期教会は、洗礼と聖餐のみをサクラメントとしたが、のちに種類が増え、12 世紀初めには神学者サン＝ヴィクトルのフーゴーは、30 のサクラメントを挙げている。その直後，ペトルス＝ロンバルドゥスは『神学命題集』のなかで 7 つに限定し、第 4 ラテラノ公会議（1215）で彼の見解が採用され、公式に認定された。フェラーラ＝フィレンツェ公会議（1438～45）およびトリエント公会議（1545～63）においては、七秘蹟の教義が定められた。

[42] Hoffmann: 1914, S.32-33, Nr.96.

[43] ドイツ南西部、バーデン地方のゲアラッハスハイム（Gerlachsheim）の貧しい家に生まれたマルガレーテ・シェフナー（Margarete Schäffner）という霊感の強い女性は、18 才の

ときから死者の魂と交流することができたという。彼女はしばしば幻視体験をした。それが悪魔の仕業などではないという証拠がほしいと、彼女はあるとき神に懇願した。司祭から聖体拝領をうけている、まさにそのとき、彼女の聖体拝領布に黒い手形の焼けこげができた。図は、そのときにできた「手形の焼けこげ」だという。なお、筆者は未見だが、マルガレーテ・シェフナーの神秘体験については、たとえば以下の冊子がある。Grabinski & Oster : o.J.; Grabinski: 1953.

[44] Hoffmann: 1914, S.13, Nr.34.

[45] Diplich & Karasek: 1952, S.77-78.

[46] アットウォーター, ジョン: 1998, p.156.

[47] イエス・キリスト降誕の日（12 月 25 日）を迎える準備の期間で、11 月 26 日以降最初の日曜日からの 4 週間を指す。

[48] Grimm: 1994, S.314, Nr.283（グリム: 1987, p.321、284 番）.

[49] 四季ごとの最初の水、金、土曜日。

[50] むろん、ここで筆者は「彷徨いでてくる死者の魂」の実在について言及しているつもりはない。後段で述べるように、幽霊は、生者の視線があって初めて幽霊として見られ、「存在する」ことができるというのが筆者の立場である。

[51] Höfler: 1894, S.73ff.

[52] Marzell: 2000, Sp.1341.

[53] Dietz: 1965, S.101, Nr.411.

[54] 角田: 1990, p.72.

[55] Kühnau: 1926, S.152-157, Nr.97.

[56] Plancy: 1993, p.271（プランシー: 1990, pp.73-74）. 訳出にあたって床鍋訳も参照したが、本稿の訳文は筆者による。以下同様。

[57] 角田: 1990, pp.136-149.

[58] Grimm: 1994, S.308, Nr.276（グリム: 1987, p.315、277 番）.

[59] たとえば、ロルシュ修道院に伝わる手写本「コデックス・ラウレスハメンシス・ディプロマティクス（Codex Laureshamensis Diplomatics）」中の記載によれば、1090 年の火災の原因は、前夜に行った「円盤とばし」なる慣行だったと記載されている。「円盤とばし」慣行については、（嶋内: 2001）を参照のこと。

[60] それでもこれらは、ロマネスク以前の様式をもつ歴史建造物として、1991 年、ユネスコの世界遺産に指定された。

[61] グリムは、怪し火に関する伝承を、燃える人に関するかつてあった大きな伝承が断片化

したものであるという仮説を立てたが（Ranke: 2000a, Sp.1406）、現在ではこの説はほとんど受け入れられていない。

62 キルメス祭は、本来的には教会の記念日であったものだが、そこに農民の収穫祭が結びついたもの。教会によって開催日が異なるのは、祭りの暦日が守護聖人の祝日にちなむからである。この日の礼拝自体は、カトリック教会ならばどこでも行われるといってよいが、教会での礼拝終了後に、「祭り」が行われるかどうかは、土地によりけりである。日頃教会に通う習慣のない人々にとって「キルメス」とは、祭り＝蕩尽の機会でしかない。少なくとも、筆者が数年来野外調査を行っているオーストリア南ケルンテンではそうだ。教会での礼拝が行われなければ始まらない行事であるにもかかわらず、大半の人間が楽しみにするのは、「祭り」の部で、さながら「精進落とし」のごとき飲めや踊れの大騒ぎが、この日ばかりは夜半までつづけられる。図注３－２は、ケルンテンで、伝統的にはキルヒタークの日のみに食される「キルヒターク・ズッペ」（Kirchtag Suppe、「教会の日のスープ」の意）と呼ばれる、ポタージュ状のスープである。

【図注 3-2】キルヒターク･ズッペ。オーストリア、ケルンテン州マチャハ Matschach にて。
撮影は筆者による。2003 年

なお、「キルメス」とは、キルヒメッセ（Kirchmesse）の省略形である。キルヒメッセとは、「教会」を意味するキルヒェ（Kirche）と、「ミサ」を意味するメッセ（Messe）からの合成語。「キ」が「ケ」に転訛し、ケルメスという地域もある。また、キルヒメッセ以外の呼び名としては、キルヒヴァイ（Kirchweih、ヴァイは「聖別式」などの意。ドイツ語で「クリスマス」を意味する「ヴァイナハト、Weihnacht」の「ヴァイ」も同義）、キルヒターク（Kirchtag、「教会の日」の意）などもある。

63 Hoffmann: 1914, S.42 f. Nr.120.

64 Plancy: 1993, p.271（プランシー: 1990, p.73）.

[65] ただし、この予兆という解釈は、未来予知とは異なっている。予兆といった場合、現象が目撃されたそのときに、「何かが起こるであろう」と予知されるのではなく、何かが起こったあとに、「そういえばあのとき発生したあの現象は、このことの予兆だったのだろう」と後付で関連がつけられるというからくりがある。つまり、時系列とは逆に、話の発端はあくまでも後発の事件なのである。

[66] 医者として知られるカルダーノだが、彼の守備範囲は医学に留まらず、数学や占星術などにも通じており、数多くの科学的・数学的・占星術的・医学的著作を出版している。1552年、51才のときに、スコットランド、聖アンドレ大司教の侍医となるが、その後ロンドンに行き、当時15才だったエドワード六世（在位1547～1453）の占星術師となった。ちなみにエドワード六世は、ヘンリー八世（在位1509～1547）の息子で、「血のメリー」の異名をもつメリー女王（在位1553～1558）、およびエリザベス一世（在位1558～1603）とは、異母きょうだいの間柄である。カルダーノは、若い王エドワードが長生きすると予言したが、まもなく王は結核のため夭逝してしまった。のちにイタリアに戻ったカルダーノだったが、イエスキリストのホロスコープ（星占い）をしたかどで教会から断罪され、1570年、69才のときに、異端と魔術のかどでボローニャにて投獄。すぐに釈放されるものの、教会は彼に、一切の執筆活動や教育活動を禁止した。それでも、70才になったとき、医者としての能力によって教皇から年金を受け取り、以後死ぬまで給付を受けた。75才の誕生日を迎える3日前に、自分の死を予言して食を断ち、死を待ったという逸話まで残っている。

[67] Biraben: 1976, pp.1485-1490.

[68] 火の玉は光を放つ球体をしており、普通は水面をすべるように一定のスピードで移動していくという。Haining: 1982, p.84（ヘイニング: 1995, p.197）. なお、阿部による邦訳ではゲールガム（gaelgham）となっているが、原著にはgaelghanとあるため、これを尊重した。

[69] ジョン・オーブリー（John Aubrey）は、『雑録集』（Miscellanies）, London: E.Castle, 1696で火の玉について取り上げている。そのほか、イギリスの科学評論家フランク・レイン（Frank Walter Lane）も、『四大が荒れくるう』（The Elements Rage）, London: Contry Life, 1945で、この現象をくまなく論じている。Haining: 1982, p.84（ヘイニング: 1995, pp.197-198）.

[70] MacGregor: 1955. 本稿の訳文は筆者によるが、翻訳にあたっては阿部訳も参照した。以下同様。

[71] Crowe: 1986, p.325.

[72] Haining: 1982, pp.202-203（ヘイニング: 1995, p.194）. なお、カンバーランドに限ら

ず、「光る少年」の話はイギリスやアイルランドにはかなり存在するらしく、日本語訳には「きらきら坊や」「光小僧」などもある。

[73] Murphy: 1975, pp.120-.

[74] Murphy: 1975, pp.120-. なお、シュロップシャーに伝わるヴァリアントを要約すると以下のようになる。

「鍛冶師のウィルは聖ペテロに 2 度目の生を与えられながら、2 度目もあまりにひどい生き方をしたので、地獄と天国の両方から閉め出されてしまった。悪魔はウィルに暖をとるための燃えている石炭のかけらをいっぺん与えただけで追い払ってしまった。ウィルは、そのひとかけらの石炭を携え、沼地の上を去来し、不運な旅人を死へ誘うことになったが、最終的には策を弄してまんまと天国に入り込むことに成功する」。Briggs: 1977, p.231（ブリッグス: 1992, p22）.

[75] また、ハローウィン（10 月 31 日夜）のカボチャ製ランタン、「ジャック・オ・ランタン」の起源説明譚にはさまざまなヴァリエーションが知られているが、類話３－３１にみたウィリー・ザ・ウィスプの起源譚とほとんど同じモティーフ構成を持つものがもっとも有名である。それは以下のような話だ。

アイルランドに、ジャックという名前のやくざ者がいた。彼は泥酔とむさ苦しい生活で悪名高かった。ある万聖節（1 月 1 日）の宵祭（ハローウィン）に、ジャックは地元のパブでへべれけになり、魂が体から脱け出し始めた。すかさず悪魔が現れ、彼を犠牲にすると宣言した。ジャックは必死になって運命を逃れようとし、去る前に最後の 1 杯を飲みたいと悪魔に嘆願した。悪魔は承知した。だが、悪魔は金をもっていなかったので、その飲み代は自分で払えと男に言った。ジャックは、金は 6 ペンスしか残っていないと言い、好きなようにどんな姿をも取れる悪魔に、自分が飲み代を払えるように 6 ペンスに化けてくれないかと言った。その後で、悪魔はもとの姿に戻ればいいと。

悪魔は、それは理屈に合った思いつきだと考え、6 ペンス貨幣に化けた。ジャックは貨幣をさっと取ると、がまぐちの中へ突っ込んだ。悪魔は出ることができず、呪い始めた。

ジャックは、悪魔に、もし1 年間彼を放っておいてくれると約束するなら、放してやると言った。悪魔は承知した。

ジャックは、来年は改心し、妻子に優しくし、パブで金を浪費する代わりに借金を支払い、教会へ行き、貧乏人に恵んでやろうという心算だった。しかし、間もなく彼は、ずるずると昔の生活に戻ってしまった。

次の万聖節の宵、ジャックがパブから家に帰ろうと急いでいると、悪魔が横に現れ、彼の魂を取り上げるぞと言った。もう一度、ジャックは、悪魔を騙そうとした。彼は木になっている林檎を

指差し、悪魔にひとついかがと言った。そして、悪魔に、林檎をもげるように肩に乗せてやろうと言った。

悪魔が木に登るやいなや、ジャックはポケットナイフを取り出し、木の幹に十字の印をつけた。悪魔は、降りて来られなくなった。どなり、わめいたが、無駄だった。絶望のあまり、悪魔は、自由と引換えに10年間仲良くしようとジャックに申し出た。ジャックは、二度と彼の邪魔をしないようにと悪魔に主張した。やけくそで、悪魔は承知した。

ジャックは、むさ苦しい生活にまた戻った。しかし、次の万聖節の宵祭が来る前に、彼は体が弱り切って、死んだ。彼は天国の門を入ろうとしたが、むさ苦しい生活だったために、追い返された。そこで、地獄の門へ行った。悪魔は、俺はけっしてお前の邪魔をしないと約束したのだからと言って、彼を突き返し、もとの所へ帰れと言った。ジャックが暗闇で道を探すのを援けるために、悪魔は、地獄から石炭を1個投げた。ジャックは、それを蕪(かぶ)の中へ入れた。それはジャック・オ・ランタンになり、それからずっと永遠に地上を彷徨うジャックの灯火となった。

Guiley: 1992, pp.178-179（**グイリー**: 1995, pp219-221）.

第４章　伝承の解体

前章末では、「燃える人」伝承に限定して、そこからみえる伝承におけるタイプについて言及した。そこでみえた「徘徊」や「浄罪」といったモティーフには、燃える人以外の伝承にも視野を広げると、いったいどのような解釈を付与されているのか本章では検討する。それによって、「死後を生きる人々」という発想が依拠する準拠枠組みについても、考えることになる。

４．１　燃える人

４．１．１　「徘徊する」

いったいに伝承には語り手たちによる脚色がいかほどか施されているものだが、燃える人の場合、無名のドラマトゥルグたちははたしてどのような脚色を行っているのだろうか。前章で検討したように、燃える人がその姿で移動する理由は、生前罪を犯したゆえであり、彼らは昇天できない。あるいはまた、煉獄で自分の罪を贖(あがな)っているがゆえであった。そしてこうした彼らの移動は多くは「徘徊する」と表現された。彼らは、醜い姿で俗界をさまよい、いつか昇天するその日が来ることを待ち焦がれていた。

自然界で発生する発火現象に対峙したとき、合理的説明を求める心性は恐怖という感情を擬人化し、そうすることで納得しようとした。擬人化のひとつのあらわれが、怪し火あるいは燃える人だったと想定してみても、必ずしも的はずれではないだろう。むろん、その表現型には、脅威をもたらす現象と向き合う、個人の、というよりはむしろ社会の想像力が反映していることはいうまでもない。そしてこの説明のための語りは、反復によって次第に形式化し、一般型を形成し、特定の型に収斂するようになる。伝承モティーフの輪郭の少なくとも一部は、このようにして整っていくと考えられるだろう。

ところで、昇天できない理由は何だったろうか。たとえば、境界標識石を移動させたことであり、これはすなわち土地制度に対する違反であった。職務に不誠実だった土地測量人と説明されることもあり（類話３－６）、この場合、彼の違反は職業に対する違反ともいえる。祝祭日に礼拝することを怠ったこと、すなわちキリスト者としての宗教生活に対する違反もあった（類話３－９）。これらはすべて、凶悪犯罪ではないものの、隠れたところで犯される、社会生活に対する由々しき違反行為だといえる。

４．１．２　幽霊の彷徨

「燃える」という特性を留保して、死後彷徨い出てくるというモティーフのみに着目すれば、伝承に登場するのは燃える人に限らない。たとえば幽霊である。幽霊に関する言及

は、すでに 10 世紀頃のアイスランド・サガにみることができる。

【類話４－１　殺しのフラップが死んで幽霊に出ること】

フラップはますます性悪で手に負えぬものになっていったといわれる。今では隣り近所の者たちにのべつ暴行を働いたので、彼らはほとんど身を守ることができぬほどだった。だが、オーラーヴが成長してからはフラップはソールズに少しも手出しができなかった。気質が変わったわけではなかったのだが、寄る年波には勝てず力も弱くなり、やがて床に臥すようになった。フラップは妻のヴィークディースをそばに呼んでいった。

「俺は一度も病気などかかったことはなかった。だからこの病気で俺たちが一緒に暮らせるのも多分終わりじゃなかろうか。ところでだ。俺が死んだら台所の敷居の下を掘って墓をつくらせ、立ったまま敷居の下に葬ってもらいたいのだ。そうすれはずっと念入りに家の監視ができるからな」。

こういい残して彼は死んだ。万事彼が命じた通りにされた。そうせずにおく勇気はとても彼女にはなかったからだ。さて生前も始末が悪かったが、死んでみると余計始末に負えなかった。というのはよく幽霊になって出たからだ。出てきては召使いの多くの者を殺したという噂だった。近所に住んでいる多くの人々に大変な迷惑をおよぼした。フラップススタジルの屋敷はさびれた。フラップの妻ヴィークディースは西の兄ソルステイン・スルトのところに移った。彼は彼女とその財産を引き受けた。さて人々は以前と同じようにホスクルドのところにやってきてフラップが人々にかける迷惑を訴え、何とかして助けてくださいと頼んだ。ホスクルドはそうせねばなるまいといって数名の者を伴ってフラップススタジルに出かけ、フラップを掘り起こさせて近くに動物の通る道もないところに運び去らせた。こうしてからはフラップの幽霊がでることはかなり少なくなった。（後略）[1]

死後も生き続けながら、生者に何らかの影響を与え続ける死者像が、ここにははっきりと刻印されている。上記のサガが成立した頃、死は生活空間に遍在していた。命を落とす瞬間がいったいいつ、どのようなタイミングで訪れるのか、現代以上に予測不可能だった当時、死んだ者に対して生者が施す儀礼は、生きていく者にとって欠かせない処置であった。死者は、死んだ理由の如何に関わらず、生者の世界を脅かす存在となる可能性を持ち、それゆえあとに遺った者たちが自分たちの世界を死者から防御するのは、必然的な処置だったのである。

４．１．３　荒野の軍勢、あるいはメスニィ・エルカンと燃える人

「燃える人」伝承に共通してみられる「徘徊」が、単独ではなく集団で行われた場合、そのモティーフは、じつはキリスト教会が煉獄を発明する以前から、ゲルマン世界にみられる。ドイツ語にいう wildes Herr で、たとえば阿部謹也はそれを「荒野の軍勢」と訳した[2]。ここで軍勢に連なっているのは、罪人や犯罪者のほか、未洗礼のまま死亡した幼児、終油の秘蹟を受けなかった者、改悛しない者たちなどの宗教的逸脱者たちである。彼らは、類話４－１のフラップ同様、生きる者にとっては恐怖の対象にほかならなかった。また、先頭には白髪の老人あるいは片眼の巨人が歩いているともいわれる。これについては、一連の幻視体験に基づく記録が残されており、たとえば 1140 年頃に編まれたオルデリクス・ヴィターリスの『イングランドおよびノルマンディの教会史』に紹介されたものが、現在わかっている範囲ではもっとも古い。次にそれを参照してみよう。

【類話４－２】

1091 年 1 月のある日、サン・アウビラ・デ・ボンネヴィレの僧グァルチェルモが夜道を歩いていたところ、突然、軍隊が行進するような物音が聞こえてきたという。先導するのは、棍棒で武装した巨人ヘルレキン。その後ろには、野獣の毛皮をまとい、什器や道具を手にしながら棺桶をかつぐ 50 人ほどの男たちがつづき、棺桶の上には、赤子数人が大きな篭を手にして座っていた。つぎに従うのは 2 人のエチオピア人で、彼らが運ぶ絞首台の上では、2 人の男が悪魔に拍車を突き立てられていた。行列は炎に見え隠れしながらさらにつづき、そこにはさまざまな方法で拷問されている男女の一団があったが、その中ほどには、好色そうな女たちや聖職者、兵士などの姿も見えた。

そこで僧は、これこそは噂に聞く《エルカン軍団》familia herlechini であることを悟った。一瞬たじろぎはしたけれど、勇気を奮い立たせて行列に近づき、拷問の理由を尋ねると、彼らは寿命を待たずに死んだ者たちで、生前の過ちを「煉獄の業火」（イグニス・プルガトリウス）によって贖っているのだという。そんな拷問にあっている兵士のなかに、僧は死別した兄弟の姿を認めた。その告白によれば、彼は戦場で馬に拍車をかけて敵を大勢殺したために、いま、こうして言語を絶するほどに重く、そして火に包まれた拍車に苛まされているのだという。そして彼は、グァルチェルモが司祭に叙任されれば、自分の苦しみが和らぐはずだともいった。[3]

ここで注目すべきは、煉獄の業火と死者の軍勢の双方について言及されている点だろう。そこにはゲルマン的要素とキリスト教的要素とが、ふたつながらともに編み込まれているさまを読みとることができるからである。ラテン・キリスト教世界は、11 世紀初頭から 13

世紀中葉にかけて大きな転機を迎える。耕地面積の拡大と生産性の向上、人口倍増、そして余剰生産物の利用、手工業の充実。ル・ゴフは、人々を取り巻く社会経済的な状況の変化にともなって、宗教的な想像力も膨張し、そこから新たな信仰が発生したという。これこそが煉獄だった[4]。

なるほど上記のテクストに、罪人自身が炎に包まれているという描写こそないものの、僧の兄弟は《火に包まれた拍車に苛まされて》おり、しかも、燃える人の類話をみた際にも特徴的にみられた、生者のとりなしにより幽霊が救われるというモティーフがここにも登場している。《グァルチェルモが司祭に叙任されれば、自分の苦しみが和らぐ》という部分である。

そして、巨人ヘルレキンを先頭に夜の世界を行進する死者の群れは、阿部のいう「荒野の軍勢」の枠を越え、周期的にこの世に戻ってくる他界からの来訪者であった、ルクトゥーが指摘する「メスニィ・エルカン(Mesnie-Hellequin)」[5]にも連なると推定できる。「エルカン」という語の変遷を遡行してみれば、8 世紀の古高ドイツ語にみられる「地獄の子供（ヘレンキント）Höllenkind」にまでいきつく。子供たちを略奪・殺害するといって脅迫する恐ろしい存在で、民間信仰においては、たとえば聖ニコラウスの祝日前夜（12 月 5 日）、聖人に付き従い悪い子供たちに罰を与える、「鞭打ちじいさん」として現在なお生き続けている[6]。

他界からの来訪者としての色彩がより強い類話を次に挙げる。

【類話４－３】

ザール地方中部では、夜になると燃える人が出現するので人々に恐れられている。彼は炎が揺らめくような姿で、赤々と燃える肋骨をみせ、髭をたくわえ、髪をなびかせており、嵐の夜になると現れる。ある人は、燃える人は「永遠の猟師」であるという。また、彼が出現した後はたいてい火事が起こる。[7]

ここで燃える人の出現は、火事の予兆でもあった。ただし、彼が単なる「永遠の猟師」であるならば、ここで語られているような燃える人の姿で登場するはずはない。

【類話４－４】

（ケルン市近郊、ベルギッシュ・グラードバッハ付近）パフラース村とクルミ農場の間の道際に、巨大な珪石の岩がある。その岩の付近には、夜になると火を吐く男がうろつきまわり、ときに村付近まで近づくという。村近くの道際には石灰石の岩がある。火を吐くその人はこの岩のそばまで来ると、もう 1 人の男が現れて行く手を遮る。2 人の間

で小競り合いが始まることも稀ではなく、そうなると火の粉が遠くまで飛び散った。[8]

ここに登場する 2 人の男　――つまり幽霊――　のうち、一方は集落の守護神格なのだろうか。また、「小競り合い」とは、幽霊同士のなわばり争いなのだろうか。それをここから読みとることはできないが、いずれにしても、生身の人間の生活とは無関係に幽霊が相互に牽制し合っている。しかし、ここでは、両者の立場は攻撃と守備とに明確に分かれている。戦いの場が岩場である点に注目すれば、競り合う幽霊たちは妖精かもしれない。というのも、岩場を妖精たちの住処とする伝承も西欧にはあるからだ。しかも、この類話で語られている場所は、ジークフリートがドラゴン退治をしたとされるズィーベンゲビルゲにも近い。

ここでテーマとなっている岩場での戦いは、はたして何に由来するのか。議論の余地があるものの、本稿では、夜の世界を我が物顔で闊歩する、人ならぬ存在に対する畏怖を読みとっておけばよい。

４．２　怪し火とは

では次に、燃える人の周辺についての理解を深めるために、前章でみた怪し火にまつわる伝承のパターンをいまいちどまとめ、いくつかのモティーフを追加したい。

４．２．１ デモンとしての怪し火

まず、類話３－２６と３－２７で顕著にみられたのが、デモンとしての怪し火である。擬人化され、ときに人間と対等に張り合う姿がそこにはあった。怪し火が人々を惑わすデモンだとして擬人化されるパターンは、ドイツだけでなく、イングランドやアイルランドにも比較的多い[9]。揺らめく光を道案内の灯火と勘違いした旅人が、沼地や断崖へとおびき寄せられることから生まれた説明かもしれない。アイルランドでは、ジャック・オ・ランタンにおびき寄せられるのを防ぐため、子供は夕方以降屋外にいる場合には、上着を裏返しに着用するとよいといわれた[10]。異装することで正体を隠す意味合いがあるのだろう。ブルターニュのフィニステール県アルチュ（Arthus）では、アーサー（Arthur）王が円卓を授かった陣営跡を怪し火が守っていたとされる[11]。

16世紀、スウェーデンはウプサラの大司教をつとめたオラウス・マグヌスは、『北方民族文化誌』の中で怪し火らしき現象について言及し、《夜の旅人や家畜の群れの見張りをしようとする者は、さまざまな怪異なものに取り囲まれるのが常である》[12]と述べている。そして、1世紀のスペインの地理学者ポンポニウス・メーラや3世紀のローマの地誌学者ソリ

ーヌスの言葉を引きながら、以下のような結論を導き出している。

このように（豊饒の神）ファウヌスもサチュルヌスも、北方の国々の多くの地方で、特に夜中、芸術の女神ムーサたちのあらゆる歌の伴奏で踊りまわるのを常とする、あの幽霊の同類であることは確かだと思う。しかし、そうしたことがあった時は、日が昇ったあと、大地の露でぬれた跡でそれとわかる。（中略）怪物たちはその時、踊った跡を大地に深く押し付けるので、いつも彼らの足が踏んだあたりは大変な熱で丸く焼け焦げ、その枯れた草地にはふたたび草の生えることはない。この夜の怪物たちの遊びを、住民は妖精の輪舞と呼んでいる。そしてそれについて、次のような意見を持つ。すなわち、彼らは肉体の欲望にふけり、いわばその奴隷になりさがり、情欲の刺激に従い、神と人間の法を犯し、肉体の形をとって、大地のまわりをころがりまわる、と。[13]

彼が「怪異なもの」の正体として名指すのは、ファウヌスやサチュルヌスなどの「流竄（るざん）の神々」。「光る怪異」という明示的な記述はないものの、「彼らの足が踏んだあたりは大変な熱で丸く焼け焦げ」とあることから、マグヌスは、デモンたちが何らかの熱を発すると考えており、デモンと怪火現象とを同一視していたと類推することができる。

４．２．２ 予兆

類話３－２７、３－２８、３－２９は、何かの予兆、とりわけ死の予兆としての怪し火にまつわる話と読める。火を人の生命のアナロジーであるとする俗信、つまり炎が消えると人間は死に、逆に、人間が死ぬと炎も消えるという「生命の燈火」（Lebenslicht）に関する観念は、ヨーロッパでは古代から現在に至るまで認められ[14]、たとえば、KHM[15]44 番収録の「死神の名付け親」（Der Gevatter Tod）にみられるモティーフはその好例といえよう。「とある地下の洞穴の中に無数の燈火が並んでおり、その各々が特定の個人の生命を顕している」というものだ。前段は割愛し、生命の燈火がまたたく場面だけみてみよう。

そこで男の目に入ったのは、何千という数の燈火が列をなして見わたす限り並んでいる光景だった。（中略）燈火のうちのいくつかは、彼が見ている間に消え、その間に別の燈火が点るので、まるで小さな炎が、縦横無尽に飛びはね回っているかのように見えた。『どうだね』。死神が男に声をかけた。『これは人間たちの生命の燈火だ。大きいのは子供ので、中くらいのは働き盛りの夫婦、小さいのは年寄りたちのだ。もっとも、子供や若い奴らでも燈火が小さい場合もあるがね』。[16]

飛び跳ねまわる炎という光景が、はたして沼沢の上に出現した怪し火を目撃したことから考案されたのかどうかは擱くとしても、燃え続ける炎を生命のアナロジーとみるイマジネールが、少なくともこうした伝承が伝えられていた人々の間にあった点については、もはや説明の必要はないだろう。そして、怪火が人の生命そのものと説明され始めれば、本来生者の身体とともにあるはずの生命＝魂が遊離していることになる[17]。こうして怪し火は、ある人物の死の予兆となっていくのである。

怪し火が人を死に導く予兆であるがゆえに、軽率にそれを追いかけるものではない、そんなことをすれば危ない沼地に引き込まれるという教訓譚[18]は、こうした観念から派生したヴァリアントといえよう。また、ウィル・オ・ザ・ウィスプの場合、その正体は人の体から遊離した魂で、現われるのは死の前兆としてか、行方不明の宝物を守っているときだという伝承もある[19]。

４．２．３ 幽霊というブラックボックス

類話３－３０と３－３１は、幽霊という枠組みでくくることのできる話を集めてみた。イングランドでは、たいていの場合怪し火は人間に敵対する存在というよりむしろ共存しており、自殺者や洗礼前に死んだ子供の魂と考えられている。洗礼前に死んだ子供が怪し火となるというフォークロアは、そのほかにたとえばドイツやフランス、スウェーデンなどにもあり、彷徨う幼児の霊が旅人を水辺にさそうのは、洗礼を受けさせてもらいたいからだとも説明される[20]。ロシアの伝承によれば、怪し火は死産したため天国にも地獄にも入ることのできずにさまよう子供の魂だといわれたり、また、ポーランドから採集された伝承と同様、たんに死者の魂だとも言われたりもする[21]。

怪し火を、あくがれでる幽霊のイメージに重ねる例は少なからずある。たとえばパリ近郊ウール県のポン=トードメル（Pont-Audemer）の近くでは、罪を犯した一部の女性は、7年間夜通し怪し火の姿で彷徨って浄罪しなければならないという伝承があるという[22]。類話３－４でもみたように、生前犯した何らかの罪のため休息することを許されない霊魂が怪し火だとするフォークロアもある。

いずれにしても、ここでは怪し火は、燃える人同様、天国にも地獄にも入れない彷徨える魂である点で共通している。自分がどっちつかずの状態であるため、軽率に追いかけてきた人間に対して悪意を抱いて攻撃を仕掛けてくるという伝承もある[23]。

繰り返しをおそれずにあえて言うならば、４．２．１で確認した「デモンとして描かれた怪し火」も、類話４－１でみたような生ける屍としての死者と結合し、キリスト教的エッセンスで味付けされたなら、すぐさま幽霊という説明原理に統合されうる。また、怪し火と死の予兆というモティーフも、怪し火を遊離した魂とみたて、「戻るべき身体が失われ

た魂」と考えるならば、死者の魂へと自ずと収斂していく。

不可解な出来事を説明しようとしたとき、幽霊とはじつに便利な説明原理といえる。「なぜ？」という問いかけに、「幽霊のせいだ」と答えれば、幽霊を信じる者ならばそれ以上の言葉は不要だからだ。つまり、幽霊というブラックボックスを説明原理として獲得したキリスト教は、デモン的な要素も、予兆としての怪し火のコードも、ともに内側に取り込むことに成功したのである。こうして、怪し火は幽霊と等価になっていった。

幽霊とは、かつて生きていた人間の死後の姿だ。すでに何度か述べているように、彼らは、彼らの存在を信じるものたちによって、この世に生かし続けられている。

「燃える人」伝承が伝わっていくにはいくつかの前提がある。たとえば、生前の行いによって、死後どのような目に遭うかが左右されるとか、あるいは、生者のとりなしが死者に影響を与えると信じられていなければならない。しかしもっとも重要なのは、死んだ後も“生き続ける”ことがあるという観念だろう。

実際、死者は死なない。生物として生命を終えても、「故人」という新たな地位を得て、当該社会の中にある程度の期間は居場所を確保し続けるからだ。彼／彼女が生きている間に占めていた「場」は、その人の死後もしばらく記憶され、あたかもまだその人が生きているかのごとく、「空席」として取り扱われる。この空隙を埋めようと遺された者たちが執り行うのが、一連の葬送儀礼である。

人類学的見地からいえば、世界各地・各時代から類似した死者儀礼が報告されており[24]、それらを総合してみれば、この世を去った者が何らかのかたちで現世に影響を及ぼしたり、再び舞い戻ってきたりするという発想は、普遍的なものだということがわかる。しかし、たとえば日本の祖霊信仰では、死んだ者（先祖）がこの世に舞い戻り、生者（末裔）と交歓するというように、ポジティヴに解釈される。他方では、キリスト教や、輪廻からの解脱をいう仏教においてそうであるように、ネガティヴな価値づけがされる場合もある。また、科学的に説明できない超常現象に対峙したとき、それが成仏できない霊のしわざであるとする民間信仰は、現代日本にも根強く息づいているなど、個別の事例を比較すれば、各々の間にはかなりの相違がみられる。

死んだ者が現世に幽霊として出現するという「現象」は、生きている者のまなざしがあってはじめて成立するという点で、語る側の世界観と密接にからみあっている。幽霊が「現象」というよりもむしろ現象に対する「説明」であるがゆえに、幽霊に与えられる社会的位置づけは、当然のことながら文化的に大きな差異が出てくるのである。幻想文学や怪奇小説・映画などにしばしば登場する生ける屍や幽霊たちは、そこではあたかも本当に実在し、生者を恐怖に陥れているかのように描かれるが、実際のところは、彼らを実在させているのはあくまでも記憶を受け継いでいく生者の側である点は、しっかりとここで確認し

ておかなければなるまい。確かに、ある人が「白い影が見える」「音が聞こえる」などと幽霊目撃について語るのを、筆者自身も実際に聞いたことがある。現象を知覚している当人にしてみれば、白い影の存在は現実以外のなにものでもありえないのだが、それでも、そこで見えた白い影から、いかなる情報を切り出すかは、見る者の文化的脈絡に大いに依存する。

とはいえ、そこには少なからず共通点もある。幽霊が出現するには、生者の中にかならずその出現を感じたり告げたりする者がいなければならないという点だ。文化によっては専門訓練を受けた職能集団がそれにあたることもあるし、素人が突然開眼する場合もある。また、生者の周到な計画によれば、人は死ぬと生者の世界から一度分離され、通過儀礼を経た後、故人として再び統合される。そして彼／彼女にまつわる記憶が生者の間で薄れるに従って、徐々に、ついには完全に現世から放逐されることになる点も、通文化的にみられる観念といえる。

では、死んだ者はどんなときに幽霊となって現れると信じられるだろうか。たとえば、分離・統合過程に何らかの障害が生じてしまった場合、埋葬・墓参など必要な供養が行われていない場合。あるいは、一般的な儀礼が実施されたにもかかわらず生者に危害を及ぼす場合もある。こうしたことに対する説明原理として、周知のように、しばしば浮遊霊や怨念、祟りという伝統的な観念が引き合いに出されるが、それらが自発的に生者に働きかけてくることはない。というのも、説明原理とは、情報を切り取る側が知覚したと信じる現実を、「納得いくもの」に変換するためのコードでしかありえないからだ。

西欧的他界観の提供者であるキリスト教において、幽霊がいかなる位置を占めるのか・占めないのか。次章ではこの点を明らかにする。そのためには、キリスト教の原点、聖書に立ち戻らなければならない。

[1] アイスランド・サガ: 1979, pp.329-.

[2] 阿部: 1989, pp.27-.

[3] 蔵持: 1991, pp.64-.

[4] ル・ゴッフ: 1988, p.193.

[5] ドイツ語では「wildes Heer」、「wilder Jäger（野蛮な猟師）」あるいは「wilde Jagd（野蛮な狩）」、フランス語の「chasse sauvage（野生の軍勢）」、スカンディナヴィアの言葉では「オスコレイア（恐るべき騎行）」と呼ばれるモティーフにあてる日本語訳としては、野猟、野生の狩、猛り狂った軍団、荒猟師、荒ぶる軍勢、猛り狂った軍団、夜の狩などさまざまな語が用いられているが、統一的な訳はない。各々の意味する内容が若干ずつ異なっていることもその理由として挙げられるが、ルクトゥーは、ある程度共通する要素をそこに見いだし、以下のように抽出している。①厳密な意味での「荒猟師」。「呪われた猟師」のテーマと「超自然的な猟師」のテーマが融合している。②「地獄の猟師」。魂を追い求め続ける悪魔を指す。③「超自然的な猟師」。聖なる婚姻を求めて聖なる処女を追い回す。④「空飛ぶ軍勢」。奇蹟に属し、死後も戦いを続ける戦士のテーマと結合する。⑤ディアナやヘロデアの後について駆けめぐる女性たちの群れ。そして、フランス語の「メニィ・エルカン」をそれらをとりまとめる上位概念として用いた。ルクトゥー: 1999, pp3-6.

[6] ドイツ語圏の場合、名称に地域差があるため、ここでは「鞭打ちじいさん」を包括概念として用いた。地域の名称はたとえば以下のようなものがよく知られている。Knecht Ruprecht（おもに南西部）、Krampus（おもに南西部）、Perchta（おもに南西部）。

[7] Lohmeyer: 1935, S.102, Nr.161.

[8] Schell: 1897, S.315, Nr.44.

[9] Briggs: 1977, p.231（ブリッグス: 1992, p.22）.

[10] Guiley: 1992, p.179（グィリー: 1995, p.220）.

[11] Mozzani: 1995, pp.736-737. なお、ここで言及されているのは、おそらくはあの伝説のアーサー王。アーサー王伝説は、元々イングランドに住み着いたノルマン系部族が語っていたようだが、大陸においてはブルトン人の間で語られたのが最初らしい。中世、吟遊詩人が好んで唄ったため、フランスのみならず大陸各地に様々な形でヴァリアントがみられる。ともあれここでは、アーサー王という固有名詞よりも「陣営跡を怪し火が守護する」という構図がたいへん興味深い。

[12] マグヌス: 1991, （上）, p.192.

[13] マグヌス: 1991, （上）,pp.193-194.

[14] Röhlich: 1991/1994, “Lebenslicht”の項（CD-ROM 版では 3734-3738）; Brednich: 1964, S.17-18（ブレードニヒ: 1989, pp.25-27）. バースデーケーキにロウソクを立て、それを誕生日を迎える本人が吹き消す（＝本人以外が消してはいけない）という慣行も、生命の燈火と関係があるという。場所によっては、バースデーケーキのロウソクは吹き消してはならず、燃え尽きるまで灯しておかなければならないといわれる。Röhlich: 1991/1994, “Lebenslicht”の項（CD-ROM 版で 3735）.

[15] KHM とは、グリム兄弟が編んだ『子供と家庭のメルヒェン集』いわゆる『グリム童話集』（Jakob& Wilhelm Grimm, *Kinder- und Hausmärchen*）の略。その最終版である第 7 版に基づいてこの番号が付けられている。

[16] Grimm: 1980, Bd.1, S.230.

【図注 4-1】　ジャン・ポワイエ 時? 書』月暦図 12 月 良い死に方と悪い死に方」

[17] 死に際して魂が肉体から抜けるという考え方が反映した図像としては、たとえば、図注４－１のようなものがある。これは、ジャン・ポワイエ（Poyer, Jean）の『時? 書』に所収されている写本画で、月暦図 12 月「良い死に方と悪い死に方」。1490 年頃フランスで作成された。現在はマドリッド国立図書館蔵。Ms.vit.24-3 fol.14（イシェ: 2003, p.226）. 画

面右側には「良い死」の例が、左側には「悪い死」の例が描かれている。どちらの人物も、今まさに臨終の時を迎えているところで、室内のベッド（右側）ないしは屋外の草むら（左側）に横たわっている。右側の人物は両手をあわせ、安らかな臨終を祈っている様子がわかる。その上方には、翼をもった姿で描かれている天使が、死者の魂を天国へと誘おうと、手をさしのべている。それに対し、左側の人物の魂を迎えるのは、黒い姿で有翼の悪魔である。よく見ると、こちらの死者の場合、死期を待つのが屋外であるだけでなく、両手をあわせてもいない。臨終に際して自らの罪を告解することもままならなかった様子がうかがえる。

[18] Haining: 1982, p.126（ヘイニング: 1995, p.11）.

[19] Haining: 1982, p.262（ヘイニング: 1995, p.22）.

[20] Guiley: 1992, p.175（グィリー: 1995, p.30）.

[21] Haining: 1982, p.262（ヘイニング: 1995, p.22）.

[22] Mozzani: 1995, pp.736-737.

[23] Haining: 1982, p.262（ヘイニング: 1995, p.22）.

[24] 事例については、（Fabre: 1987, pp.105-106）などを参照のこと。

第５章　聖職者の眼

５．１　信じる者の復活

紀元 2 世紀前半にはほぼかたちが整ったとされるマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書には、キリストが伝道の際に起こしたとされる奇跡が数多く記述されている。わけても多いのが治癒奇跡で、そのうちもっとも奇抜なのが、死人を蘇生させるという奇跡だろう[1]。一例を見てみよう。

> イエスが舟に乗って再び向こう岸に渡られると、大勢の群衆がそばに集まって来た。イエスは湖のほとりにおられた。会堂長のひとりでヤイロという名の人が来て、イエスを見ると足もとにひれ伏して、しきりに願った。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば娘は助かり、生きるでしょう」。そこでイエスはヤイロと一緒に出かけて行かれた。（中略）イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」。イエスはその話をそばで聞いて、「恐れることはない。ただ信じなさい」と会堂長に言われた。（中略）一行は会堂長の家に着いた。イエスは人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て、家の中に入り、人々に言われた。「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ」。人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子供の両親と 3 人の弟子だけを連れて、子供のいるところへ入って行かれた。そして、子供の手を取って、「タリタ、クム」と言われた。これは、「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」という意味である。少女はすぐに起きあがって、歩き出した。もう 12 歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。[2]

ここでイエスは、呪文を唱えて死んだ子供を蘇生させるという奇跡を起こしている。屍が再び息を吹き返したのである。次の例でも、イエスは呪文を唱えて奇跡を呼ぶ。

> それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。イエスが門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。主はこの母親を憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、

大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。[3]

「ヤイロの娘」のときには、遺体はまだ納棺されておらず、死んでからさほど間がなかったと類推されるが、ここに描かれている「ナインの若者」の場合は、すでに葬儀が始まっている。しかも、偶然の出会いであるはずなのに、みごとに若者の肉体はふたたび命を得る。イエスの超人的な能力をさらに強調する話となっている。次に見る「ラザロ」の場合は、イエスの到着は若者のときよりもさらに遅い。

ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。（中略）姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられるものが病気なのです」と言わせた。イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれで栄光を受けるのである」。（中略）ラザロが病気だと聞いてからも、なお 2 日間同じ所に滞在された。それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう」。（中略）イエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう」。（中略）さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られてすでに 4 日もたっていた。（中略）墓は洞穴で、石でふさがれていた。イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、4 日もたっていますから、もうにおいます」と言った。イエスは、もし信じるなら、神の栄光が見られると言っておいたではないか」と言われた。人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです」。こう言ってから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。すると、死んでいた人が手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやって、行かせなさい」と言われた。[4]

姉妹をして「もうにおいます」とまでいわせる生々しい屍を、イエスは蘇らせる。蘇った後も、手足を布で巻かれた姿はあまり気持ちのよいものではなさそうだ。それゆえ、すぐさま「ほどいてやって」と助け船が入る。いずれにしても、上記 3 例すべて、復活の際には肉体を伴っており、ラザロ以外は、あたかも一度死んだという事実が全くないかのご

とく普通の生者の生活に戻っていくさままで描かれている。

５．２　最後の審判と死後の世界

エジプトのミイラにまで遡らずとも、死後の生あるいは復活に備えての遺体の保存は、洋の東西を問わず信仰上の大きな関心事であった。キリスト教は他の宗教と比較すると、肉体の保管にはまったくといってよいほど無頓着であったが、それでも葬儀の際、遺体自体に人為的に手を加えるのは嫌われた。聖書には、磔刑の 3 日後人々が気づいたときには、キリストの遺体は棺から消えていたと書かれており[5]、それゆえ、キリストは肉体を伴って復活し昇天したのだと説明される。ヤイロの娘やナインの若者、ラザロもまた、復活の際には肉体を伴っていた。遺体が再び息を吹き返すという生々しいまでの描写は、キリスト者にとって最大の関心事の一つである、最後の審判の場面を思い起こさせる。すべての死者が墓から起きあがるという終末の時に、いったいいかなる光景が繰り広げられると聖書に書いてあるのか。次にそれを確認しよう。

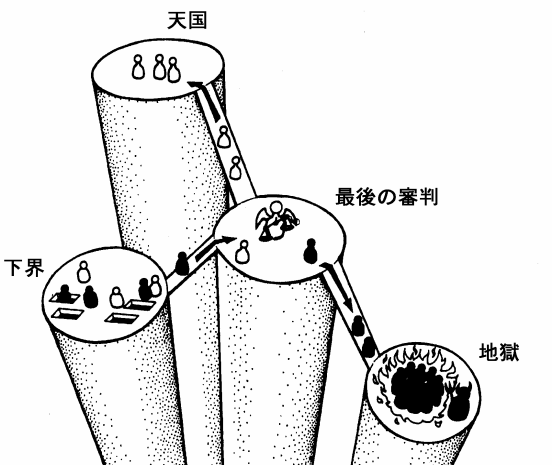
５．２．１　善き者の天国、悪しき者の地獄　――マタイによる福音書

新訳聖書『マタイによる福音書』（以下、『マタイ』とのみ記す）には、「最後の審判の様子」として以下のように記されている。

> 人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、<u>すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け</u>、羊を右に、山羊を左に置く。そこで、王は右側にいる人たちに言う。「さあ、私の父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。（中略）」それから、王は左側にいる人たちにも言う。「呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渇いたときに飲ませず、旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ」。[6]

ここに記されている世界観を模式化して表現したのが図５－１である[7]。最後の審判の時が来ると、すべての死者たちは死の床から起き上がり、裁きの場へと赴く。そこでは、生前の行いに従い、各々の行く先を振り分けられる。すなわち、善き者は天国へ、悪しき者は地獄へと送られるのである。両者の間の領域は存在せず、人は天国ないし地獄のいずれ

かで永遠の時を過ごすことになる。人は善悪のみに 2 分類される。しかし、裁きの場である最後の審判は、いったいいつどの時点で行われるのだろうか。『マタイ』にある記述を文字通り読みとけば、それは、世界が終わる時に一度だけ行われるということになる。決して、各人が死んだ後、個人的に裁かれることはないのである。



【図 5-1】『マタイによる福音書』の他界

こうした福音書にある世界観は、人々のうちでどこまで具体化され、受容されていたのだろうか。それを示す挿絵がパリ国立図書館所蔵の写本に残っている（図５－２）[8]。「最後の審判」の様子が描かれているその絵の作者および製作地は不詳だが、15 世紀に作られたということだけはわかっている。製作年代が比較的新しいため、中世の作品というよりむしろルネサンスの文脈で読み解くべきかもしれないが、画面には注目したいモティーフが的確に表現されている。そこであえてこの作品を見てみよう。

画面は 2 つのモティーフから構成されている。左側にみえるのは天秤を手にした正義の

【図 5-2】最後の審判

大天使ミカエル。人々の魂を計量し、善き者と悪しき者とを選り分けるのが彼の任務だ[9]。天秤の左側の人物は天使が、右側はベリアル(Belier／Belial)[10]とおぼしき悪魔が連行しようとしているのがわかるだろう。悪魔の側に傾いたときには、その死者は地獄へと引き立てられていくのだが、この場合、右側に乗せられている死者も左側の死者と同様に助かりそうだ。よく見ると、画面左上の天使が、聖ゲオルクよろしく、手にした槍で天秤上の人間を我がものにしようとしている悪魔に対し攻撃をしかけ、救出しようとしているからである。

絵の左側が天使すなわち救済を表現していたのに対し、右半分には永遠の絶望とも言うべき地獄の光景が描かれている。地獄の業火を象徴するレヴィアタン、「地獄の口[11]」がぱっくりと口を開け、その中に置かれた大釜では、悪しき者たちが灼熱に苛まれ焼かれ続けるという責め苦にあっている。なかには冠を戴く貴顕の姿さえ見られる。大釜内にいる一番左側の人物の背中を、悪魔が手にした錐のような道具で突き、痛めつけている。その悪魔の下には、臀部にも顔を持つ悪魔がおり、彼がふいごを手にして釜の火を炊き続けているので、火勢が衰えることはない。画面右上部にはさらにもう一人の悪しき者、「7 つの大罪」の一つ「虚飾」を犯した女の姿が見える。あろうことか彼女は、この世の終わりにいたってもなお鏡を手にし、髪を結い上げようとしている。それを毛むくじゃらの悪魔は、容赦なく煮えたぎった釜の中に放り込む。

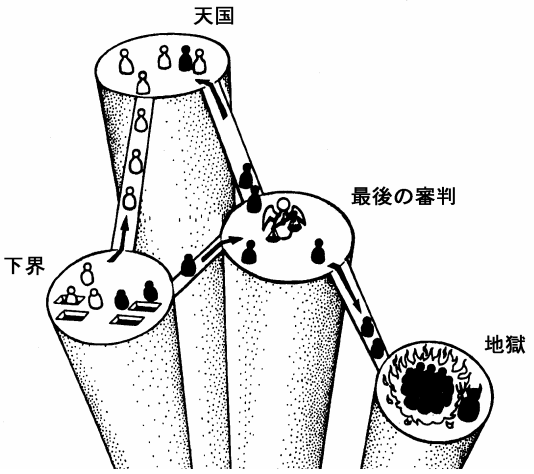
５．２．２　善き者、悪しき者、善くもあり悪しくもある者　――ヨハネによる福音書

『ヨハネによる福音書』（以下『ヨハネ』とのみ記す）においては、『マタイ』におけるそれとは若干異なる世界観が繰り広げられている。

> そこで、イエスは彼らに言われた。「（中略）はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、子から命へと移っている。はっきりと言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やそのときである。（中略）驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出てくるのだ。（後略）」 [12]

最後の審判が行われるのが、終末の時に 1 度だけであるという点では共通しているものの、復活した者すべてが裁きの場に連行されるわけではないという点で、『マタイ』とは異

なっている。『ヨハネ』に描かれている世界観によると、最後の審判に際して、人間たちは以下の3カテゴリーに分類されている。すなわち、第1のカテゴリーは「善を行った者」であり、彼らは墓から起き上がった後、裁かれることなくそのまま「復活して命を受ける」。第2と第3のカテゴリーは、生前「悪を行った者」たちであり、彼らは「復活して裁きを受け」なければならない。その裁きの後に、善を行った者同様に天国の門をくぐることが許される者と、地獄へ送られる者とに分けられるのである。つまり、「善き者」、「悪しき行いをしたが、善き者」、「悪しき行いをした、悪しき者」に3分類されることになる。

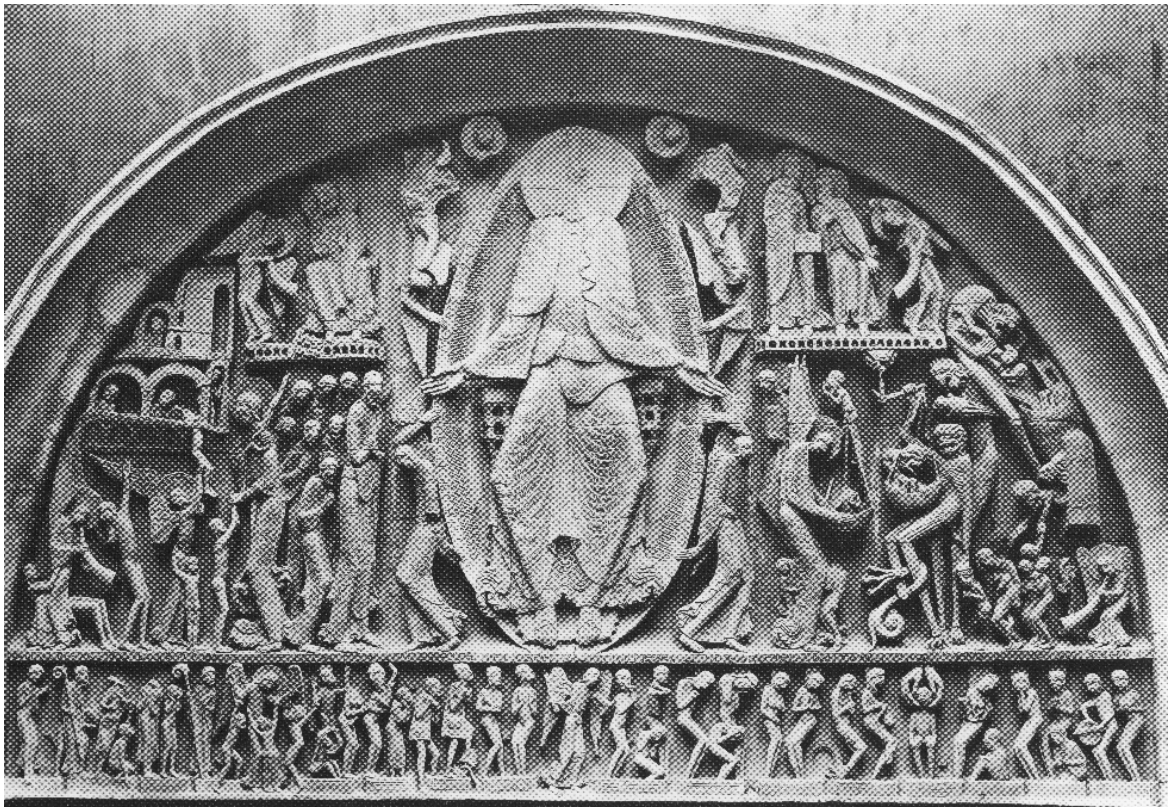


【図5-3】『ヨハネによる福音書』の他界

この他界観を模式化したのが図５－３である[13]。図５－１とは異なり、死者のうち、「善き者」は裁きの場を経ずに天国へと至ることができるための、下界から天国への直通ルートが設けられている。それ以外の者はすべて裁きの場で裁かれ、そこで、少々の悪行を行ったけれど天国への入場が許される者と、許可されず、地獄へと送られる者にふるい分けられる。その結果、天国に入場している者たちの顔ぶれには、真っ白な者以外に、少々黒の混じった者もみられるのがわかるだろう。むろん真っ黒な者は地獄へと送られ、彼らは、『マタイ』における場合と同様、業火の中で死後を永遠の苦しみの中で過ごすことになるのだが。

フランスのブルゴーニュ地方に現存する代表的なロマネスク建築のひとつである、オータンのサン=ラザール教会ティンパヌムは、『ヨハネ』の世界観が図像化されている数少ない例のひとつである（図５－４）[14]。図像の最下段には、墓から立ち上がりつつある人々の姿がある。その一部、すなわち中央にあるキリスト像の右手側には、天使に導かれて墓からそのまま天国へと至ろうとしている人々の造形をみてとることができる。彼らが裁かれることはない。キリスト像の左手側に刻まれているのは、「善き者」と対照的な「悪しき行いをした者」たちだ。彼らには裁きの時が待っている。そこには、手にした天秤で魂の重さを計量し、人々に救いの手をさしのべている大天使ミカエルの姿がある。彼のとなりにみえるのは悪魔の姿である。悪魔が天秤に人間の悪行を乗せ、まさに計量されている人の魂を我がものにしようと画策しているが、いささか分が悪い。天秤がミカエル側に傾いており、この人物は天国へと導かれようとしているからである。そして、地獄へと送られる

者たちは、復活の時を迎え永遠の命を得たその後に、地獄の責め苦の中で永久に悶え苦しみ続ける。



【図 5-4】　オータンのサン=ラザール教会　ティンパヌム

５．３　布教者の熟考：「煉獄の父」アウグスティヌスと、幽霊の胎動

興味深いことに、神は、死者が生前いかなる行いをしていたのかに鑑みて裁きを下すのだと説かれるものの、その裁きがはたしていつなのかについては、聖書は寡黙である。とすれば、最後の審判を墓の中で待ち続ける間、死者は蠢（うごめ）いたりしないのか。初期キリスト教会は、死後、死者が幽霊となって生者のもとに出現することはあり得ないという死生観を採用した。じつはその背景には、初期キリスト教会の、巧妙な戦略がある。初期キリスト教では自らを異教と差別化し、それと訣別するために、祖先の霊を弔うという古習を基本的に禁じたからである。たとえば、5 世紀、キリスト教の信仰を弁証法的に合理化しようとしたアウグスティヌスは、その主著『神の国』（426 年完成）のなかで、キリスト者は異教の風習とどのように対峙すべきか、以下のように述べている。

しかしながら、わたしたち（＝キリスト教徒）は、そのような殉教者たちのために神殿

を建てたり、祭司職や祭儀を定めたり、犠牲の供え物を捧げたりはしないのである。なぜなら、彼ら（＝殉教者）自身が神ではなく、彼らの神がわたしたちにとっての神であるからである。（中略）

しかし、たとえ殉教者の聖なる身体の上に建てられているとはいっても、神の栄光をたたえ神を礼拝するために建てられた祭壇の前に立ってキリスト教の司祭が、祈りの中で、「ペトロ、パウロ、キプリアヌスよ、わたしはあなたがたに犠牲を捧げます」というのを聞いた人がかつていたであろうか。なぜなら、殉教者たちを記念して礼拝が捧げられるのは神に対してだからである。そしてその神が彼らを人間とし、殉教者とし、天の栄光の中で聖なる天使との交わりに入らしめるのである。それゆえにこそ、わたしたちはそうした栄誉の中で、彼らの勝利に対して真の神に感謝を捧げるのである。そして、その神はわたしたちが神に助けを求め、彼ら殉教者たちの記憶を新たにすることによって、そうした同じような栄誉の冠と勝利を得べく、彼ら殉教者たちにまねるようにとわたしたちを鼓舞するのである。であるから、信仰者たちのどのような恭順が殉教者たちの墓前で捧げられようとも、それらは彼らに対する記憶を飾るためであって、彼らが神々であるかのように使者たちに対して宗教儀式をとり行ったり、犠牲を捧げたりするためではないのである。[15]

ここで彼は、異教徒たちが「あたかも神格であるかのように死者を取り扱っている」として、伝統的な儀礼をきっぱりと拒絶している。また、『告白』第 6 巻第 2 章では、敬虔なキリスト教徒であった母モニカが、それまで彼女が習慣として行っていた、聖者たちを記念して建てられた聖堂に供犠を捧げることを、聖アンブロシウスが禁止したと知ると、すぐさま受けいれてきっぱりとやめた、と、賞賛してもいる[16]。

初期中世におけるキリスト教は、祖先が後裔を守護するという発想の枠組みを持ち合わせておらず、いやむしろそれを一刀両断に否定していた。たとえば五世紀にキリスト教の信仰を弁証法で合理化しようとした教父アウグスティヌスは、当時の人々が行っていた「異教的な」儀礼行為である祖先崇拝を断固として拒否する。ここから読みとるべきは、たとえ祖先といえども一度生者の世界を去ったならば、以後二度と生者と直接接点をもつはずはないという、キリスト教会側の論理である。

当時のキリスト教徒は、死者の葬儀を華美に営んでいたため、それをまるで異教徒のようだとアウグスティヌスは憂慮した。そして、遺族を慰めるのならば供養は最小限にとどめ、異教時代の葬儀の慣習は早く捨てるように勧告したのである。そして、死んだ者が生者の前に出現するという話についても、彼は聖書にはない新たな解釈を行う。アウグスティヌスの新解釈が如実に現れている「死者のための供養について(De cura gerenda pro

mortuis)」という論文（421～423 年）の当該部分をみてみよう。

世上、ある種の幻を見たという話が語られるが、それはこの議論に無視できない一つの問題を付け加えるように私には思われる。睡眠中や、これとはまったく別の情況で、生きている人の前に死者が姿を現したというのである。それを見た人々は、死者の亡骸が墓もないままどこに埋められているのか、その場所を知らなかった。死者は彼らにそれを教え、自分たちには欠けている墓を作ってほしいと彼らに頼んだ。これに対して、そういう幻は虚偽であると答えることは、キリスト教の著述家たちの書き残した証言や、それを見たと断言する人々の確信を、臆面もなく否定することになろう。これについては次のように答えるのが妥当である。すなわち、われわれに報告された事柄を、夢の中で死者たちが言ったり、見せたり、尋ねたりしているように見えるとき、死者がそれを意識し、かつ現実の存在として行動していると考えてはならない。生者もまた生者の夢に現れて、しかもそのことを知りもしないからである。（中略）

私としてはこうした幻については天使が介入していると信じたくなる。神の許しを得て、もしくはその指図に基づいて、天使たちがしかじかの死者を埋葬してやる必要があることを、夢見る人に知らせるのであり、しかもそれが、死者たち自身の知らぬ間になされるのだと。[17]

アウグスティヌスは、死んだ者が夢に出てきて生者にメッセージを伝え、それが正しい場合があることまで認めている。しかし、生者に働きかけたのは死んだ者自身ではなく天使で、その介入があって初めて可能になったのだという部分で、旧来の祖霊に対する信仰とは一線を画そうとする。とはいえ、初期キリスト教の教義ではきっぱりと禁止されていた死者のための供犠が、その後、遠回しな表現ながらも肯定されていくのである。

こうして、問題がすべて解決された上は、死者に対するわれわれの供養のうち、死者は、祭壇に捧げられる犠牲やわれわれの祈りや施しの供えにおいて、彼らのためになされる大祈願の恩恵にのみ与るものと考えよう。ただし、（中略）これらの祈願もすべてのものに役立つわけではなく、ただ生きていたあいだにその利益を受けるに値した人々のみに役立つ、と。しかし、われわれはその資格を得た人々を識別することができないので、その恩恵を受けることが可能な、またそう推測される人々のうち誰ひとり洩れることのないように、洗礼によって生まれかわったすべての人のために懇願すべきである。なぜなら、われわれの慈善行為は、その利益に与ることができる人々に対して欠けるよりは、それが薬にも毒にもならない者たちのために空しくなされることの方がまだまし

だからである。とはいえ、誰しも近親者が自分たちのためにも同じようにしてくれることを期待して、彼らのために一層熱心に祈願するものである。[18]

死者のためのとりなしは有効だから、生者は死んだ者のためにミサと祈? と施しをすべきである。のちに西方教会最大の教父と謳われるようになるアウグスティヌスのこの主張は、こうして異教的・土着的な風習を論理的な転位によって認めるものであり、それだけ一般に普及していったものと思われる。

５．４　『黄金伝説』における諸聖人の祝日と死者の日

ハローウィンの語源の「オール・ハロウ」すなわち「諸聖人の祝日（万聖節）」とは、殉教したすべての聖人を祀るための祭日で、609 年に時の教皇ボニファティウス四世（在位 608～615）がローマのパンテオンをキリスト教の教会に変更し、それを聖母マリアと殉教者に捧げたのが起源とされる[19]。祭日が制定された理由については、『黄金伝説』（1255～1266）[20]中に詳しく、その第 155 章冒頭には、導入の第一の理由として《異教の神殿をキリスト教の聖堂として奉献するため》[21]とある。つまり、アニミズム的信仰世界に暮らす人々に対し、唯一絶対神への信仰を広める拠点を築き、布教するのがキリスト教会側のもくろみだったと読み替えることができるのである。

諸聖人の祝日の翌日は、一般に「死者の日（万霊節）」と呼ばれ、今日なおキリスト教徒、とりわけカトリック教徒にとっては諸聖人の祝日と並んで重要な祭日となっている[22]。死者の魂が遺族の元へ帰ってくるとされる日であるため、日本では便宜的に「ヨーロッパのお盆」などと単純化して紹介されることもある。

しかしじつは、今日なお広く祝われている年中行事であるにもかかわらず、聖書には死者の日については全く記述がない。聖書の世界では、死者が生者の暮らす世界に再来して生者に接触してくることがあるとすれば、それは悪魔の仕業でしかなく、ましてや死者が生者を守護するなどと記述された部分は、どこにもみられない。こうしたずれはいったいいかなる事実を反映するのだろうか。

ウォラギネは、この日がキリスト教暦に導入された経緯について記している。第 156 章「奉教諸死者の記念」がそれで、死者のための記念日は、元を辿ればクリュニー修道院の院長オデュロンが 998 年に取り入れたものであったという。祝日の導入当時、死者への追悼ミサは同修道院内だけであげられていたが、次第に修道院の外部にも反響を呼びおこし、やがて当時の西欧キリスト教社会に波及していった[23]。導入のきっかけは、修道院長オデュロンの幻視体験が元になっていると、ウォラギネは以下のように書いている。

ペトルス・ダミアーニ[24]によると、クリュニーの大修道院長オデュロンは、施物や祈りによって死者の魂が自らの手から奪われていくと嘆く悪魔どものうめき声を、シチリア島のエトナ火山の近くで聞いた。そこで、傘下の修道院で諸聖人の祝日の翌日に奉教諸死者の記念日をおこなうように命じた。その後、全キリスト教会がこれを踏襲するようになったのだという。[25]

『黄金伝説』は、いわば中世における宗教的《民衆本》の性格を備えていたとされるとはいえ、ここに描かれた死者の世界に関する逸話が、どの程度一般信者に浸透していたかは攔かなければならない。たとえそうであるとしても、死者が滞留する場が、生者の世界と同一平面上の某所にあると、少なくとも布教する側がみていたことはわかる。オデュロンの幻視(ヴィジョン)は、おそらくは彼が個人的に「体験した」ものにすぎなかっただろうが、それが語られ、こうした形でテクスト化されたところをみると、死者に対する施物や祈りを追認する契機を、現実的に布教の現場にあったキリスト教の聖職者たちが求めており、彼らをとりもつネットワークを伝って、修道院長が見た幻視(ヴィジョン)に関する言説がウォラギネまで到達したであろうことが想定できる。そしてさらには、「施物や祈りが人を悪魔の魔手から救う」という幻視(ヴィジョン)が示す他界観は、その後拡大解釈され、祈りの効果について強調する際の根拠ともなっていったのである。

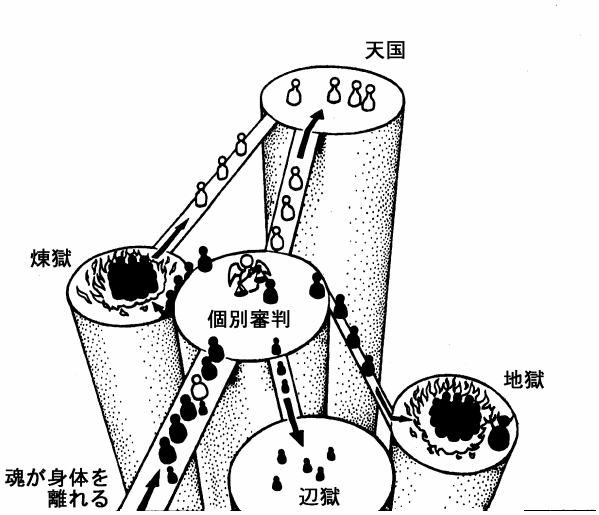
５．５　拡大解釈される他界の情景

５．５．１　幽霊の誕生

死後の世界を、聖書における記述にのっとったうえ、論理的整合性をもったものとして模式化しようと試みる者たちにとって、最後の審判が黙示録のときただ一度だけ行われるとしか読みとれない記述は、やがて、大きな疑問としてのしかかってくる。人はいつか必ず死ぬ。その後、死者たちは地の下で裁きの時を待ち続ける。人々は、埋葬され肉体が朽ち果てた後も、裁きの場が設けられるまで、長きにわたり、墓に横たわったまま時が満ちるのを待つ、という死生観に対しての疑問である。

これではいかにも不安定ではあるまいか。時が満ちるまで、なにも起きないのだろうか。信者にしてみれば、神の創りたもうた世界は完全な論理に満ちているはずである。こうして中世の宗教者たちは、文字テクストから若干距離を置き、その不安定な時を鎮めるための新しい理念型が考案する。それが、図５－５にみるような精神と肉体とを分けて考える構図である[26]。ここでは、死後肉体を離れた魂は、最後の審判を待たずにそのまま個別審判

の場面へと向かう。個別審判の場面で各々が裁かれ、行く先が割り振られる。「悪しき者」たちは地獄へ、「善き者」たちは天国へと送られるのである。キリスト教が成立する以前に生まれた異教徒や、洗礼前に死亡した乳児の魂は、辺獄での永遠の時が申し渡される。そして、生前悪事を働いたものの、永久に地獄で過ごすほどの大悪党ではない場合は、煉獄へと送られ、そこで天国へ至る前に浄化の炎に身を任せることになる。地獄と同様の業火であるものの、浄化の場としての煉獄は、同時に天国へ至る前庭でもある。前節まででみたように、忠実に福音書にそった他界観においては、時間の経過というベクトルが入り込む余地はなかった。あるのはただ、最後の審判の時のみであり、各人が生命を全うした後に迎えるのは、永遠の極楽あるいは永遠の責め苦以外の何ものでもなかった。しかし、煉獄の誕生とともに、死後の世界に時間軸が発生する。1898 年にエミール・マールがすでに指摘しているように、《実際、煉獄というものは時間の中にあるのであり、時の法則に従っている》[27]のである。こうして死者はときに生者の住む世界にまで越境してくるようになった。彼らに取りなしを乞うために。そして、それを目撃した生者は言うだろう。「幽霊がでた」と。



【図 5-5】煉獄が導入された他界 (1)

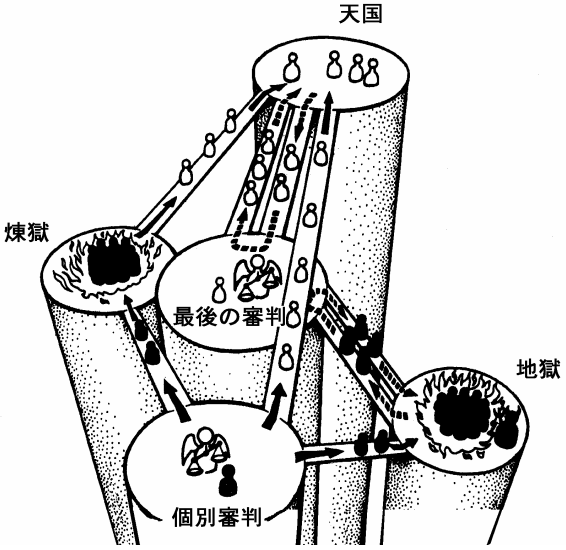
【図 5-6】 神学大要』「D」タイトル画

煉獄の死者は火の中で両腕を高く挙げ、救済の時を待ち焦がれているように描かれることがしばしばある。その一例が図５－６だ[28]。この細密画が描かれたのは 15 世紀後半とされる。13 世紀に編まれた、全 7 巻からなる『神学大要（コンペンディウム・テオロジカエ・ウェリタティス、Compendium theologicae veritatis）』の、数多くある写本のうち、メディンゲン(Medingen)のドミニコ会修道院版として知られるもので、ここで挙げたものは、第 3 巻「罪」の巻頭を飾

る第 64 葉、「D」の項目のタイトル画だ。D の文字の内側が、ゴシック教会の柱を思わせる T 字形の縁によって三区画に区切られている。画面の上部には、鎌あるいは鍬とおぼしき道具を手にして森林を切り開こうとしている男の姿がある。左右に区切られた下部は、どちらの区画にも例の「地獄の口」の中で焼かれている人々の姿がみてとれる。しかし彼らの頭上を飛行しているのが、右側が悪魔なのに対し左は天使であることから、右側には地獄の情景が、左側には煉獄のそれが描かれていることがわかる。そして天使は、罪深き人々のうちの一人、手を頭上に挙げる者を今まさに煉獄から救出しようとしているのがみられるだろう。厳密にいえば、現世と並行した時を刻む煉獄と、終末の日の後に訪れる永遠の業火による苦しみが同時に起こることはあり得ないにもかかわらず、この絵において煉獄と地獄は対照的な場として描かれている。こうして終末は骨抜きになっていく。

５．５．２　最後の審判の失墜あるいは相対化

この世の終わりに行われるという審判にスポットライトがあてられていた『マタイ』『ヨハネ』における他界観をみた私たちは、図５－５にあらわされている世界が一見美しい整合性を見せているようにみえながら、じつはそこには大きな欠陥が潜んでいることに気づかなければならない。つまりここには、「最後の審判」がないのである。煉獄という「罪を浄化する場」が設けられる前には、絶対的な威圧感をもって人間を凌駕し、締めつけていた最後の審判に、霊肉二分という建前のもとで個別審判がこっそりすり替わっている。



【図 5-7】煉獄が導入された他界 ⑵

個別審判とは別に最後の審判を盛り込んだのが図５－７である[29]。黙示録の時が満ち、最後の審判に際しては、天国にいる者も地獄にいる者も、個別審判で下された判決が覆されることはないにもかかわらず、最終判決を聞くためにだけ、再び裁きの天使の前に呼び出される。こうして最後の審判は、もはや象徴的に設定された儀礼となりはて、かつての圧倒的な権威はまったく失われてしまった。個別の審判に移った判決権は、天の神の手から放れて生身の人間にゆだねられることとなり、それが数世紀をへて宗教改革への伏線ともなっていく。先に見た図５－２であるが、この「最後の審判」が描かれたのは 15 世紀、すなわち宗教改革が勃発する直前である。ロ

ーマ教皇を頂点とするキリスト教会は、似たような類の図像を利用して信者を脅し、終末観をあおり、免罪符を販売し続けた。最後の審判と魂の救済。いまだ疫学が発達しておらず、ペストをはじめとする疫病に倒れ、あるいはその他の災厄で死亡する者も多かった当時、恐怖や神の恩寵を可視化する道具として、絵画は大いに利用されたのである。かくして頂点の地位を明け渡した最後の審判は、解釈されるためのテクストとなり、そこから創られたテクストこそが、新たなる解釈の世界を創造するに至る[30]。

５．５．３　他界観をめぐる教会の弁明

西方教会においては、聖アウグスティヌスの確言以来、聖書の世界観はどんどん拡大解釈され[31]、たとえば聖人信仰などの豊かな表現が許されるようになる。聖書が柔軟に読み解かれるようになっていったことにともない、教会建築や細密画などにみられる死後の世界をめぐる図像表現は、次第に多様にそして具体的になっていくのである。まさに聖書解釈が整備されていく時期である 13 世紀から 16 世紀にかけて、それは起こっている。

「最後の審判」解釈の精緻化、あるいは揺れ。アリエスはそれを中世前半の普遍的・共同体的な理想と、近代的思考ともいえる個人主義との妥協の産物とした[32]。理由はどうあれ、初期中世の造形表現、すなわちビザンチン期の宗教観には見られなかった特徴が、時代が下るにつれて刻み込まれるようになっていったことは、現存する造形をみれば明らかだ。社会的・経済的環境の変化にともなって、造形表現を見る側＝消費する側の他界観あるいは宗教観に起こった変化は、ここからも裏付けられるのではないだろうか[33]。

[1] 下田: 1987, pp.97-98.

[2] 新共同訳『マルコによる福音書』5, 21-42。その他、『マタイによる福音書』9, 18-19 および『ルカによる福音書』8, 40-56 にも同じ事柄に関する記述がある。

[3] 新共同訳『ルカによる福音書』7, 11-16。

[4] 新共同訳『ヨハネによる福音書』11, 1-44。

[5] 『マタイによる福音書』28, 2-8、『マルコによる福音書』16, 5-8、『ルカによる福音書』24, 3-7。

[6] 新共同訳『マタイによる福音書』25, 31-43。

[7] Jezler: 1994, S.14.

[8] Akoun: 1990, p.169.

[9] 「魂の計量」、すなわち善と悪との最終的な比較というモティーフは、西ユーラシアに広がるオリエント／オクシデント世界に伝統的にみられるもので、元を辿ればゾロアスター教起源であるとされる。キリスト教で天秤は「公正さ」を象徴し、しばしば教化に際して利用されてきた。

[10] ベリアルとは元々ヘブライ語で「役立たず・ろくでなし」を意味し、ユダヤ教のアポクリファにしばしば登場する、悪魔の別名である。『コリントの信徒への手紙 2 』6, 15 には《キリストとベリアルにどんな調和がありますか。信仰と不信仰に何の関係がありますか》とあり、キリストとベリアルとが並列的に書かれていることから、すくなくともここでは現在サタンと理解されるものの別名として用いられている。ベリアルは庶民の間にも伝わり、たとえば 16 世紀アウグスブルクの鉄砲鍛冶ツィンマーマン(Zimmermann)は、「ベリアル」の語から「ベリアリア(Belialia)」なる新語を造り、そこでは「魔法の薬」の意として用いている。Jacoby: 2000, Sp.1027.

[11] 「地獄の口」が美術史的にどのように展開していったかについては、（ヒューズ: 1997, pp.194-219）に詳しい。

[12] 新共同訳『ヨハネによる福音書』5, 19-29

[13] Jezler: 1994, S.14.

[14] Jezler: 1994, S.15.

[15] アウグスティヌス: 1982, pp.233-234, 『神の国』第 8 巻第 27 章.

[16] 『告白』第９巻にも、死者供養をやめるように言及がある。

[17] ル・ゴッフ: 1988, pp.119-120.

[18] ル・ゴッフ: 1988, pp.122-123.

[19] 最初は 5 月 13 日が祝日とされていたが、教皇グレゴリウス三世（在位 731～741 年）が暦日を 11 月 1 日とした。すべてのキリスト教徒に対しこの祝日を祝うように布告が出されたのは、それから 1 世紀後の 835 年で、教皇グレゴリウス四世（在位 872～844 年）の治世下だった。

[20] 後にジェノヴァの大司教となるヤコブス・デ・ウォラギネ（Jacobus de Voragine, 1230～1298 年、大司教在位 1292～1298）が 1263～1272 年に編集した聖人伝集。聖人伝とは、キリスト教における聖人や殉教者たちの、言行や生涯を伝説化したものをいう。4 世紀初頭、パレスティナのサマリア地方、カイサリアの司教エウセビオス（263 頃～339 年）の『教会史』10 巻をもって嚆矢とし、その後 1000 年の時をかけて土着の信仰や異教の伝承を呑み込みつつ、成熟していった。ウォラギネは、13 世紀当時伝わっていた聖人伝を編集・集成したのである。

[21] ウォラギネ: 1987, 第４巻, p.160.

[22] たとえば、筆者の知人（オーストリア人）は毎年この日には墓参を欠かさず、その際墓は花で飾られており、ロウソクには灯がともされる。

[23] 公認は 1006 年、時の教皇ヨハネス十四世による。

[24] ラヴェンナ出身で 1060 年頃枢機卿までなった人物。当時すでに祈? 共同体だった隠修道士グループにおいて、死者を追悼する祈? に大きく貢献したことで知られている。1063 年または 1072 年に編まれたとされる『さまざまな出現と奇跡について（De diversis appartionibus et miraculis）』は、彼の著作とされる（後述）。

[25] ウォラギネ: 1987, 第４巻, p.181.

[26] Jezler: 1994, S.19.

[27] マール: 1998, 下巻, p.238.

[28] ヴュルツブルク大学図書館蔵, Gesellschaft für das Schweizerische Landesmuseum (Hrsg.): 1994, S.289.

[29] Jezler: 1994, S.19

[30] アリエスは、「最後の審判」解釈の精緻化は、中世前半の普遍的・共同体的な理想と、近代的思考ともいえる個人主義との妥協の産物であるとする。アリエス: 1990, p.231.

[31] Lemaître: 1994, p.39（ルメートル: 2002, p3; p.160）.

[32] アリエス: 1990, p.231.

[33] ただし、煉獄が抽象的な概念としてではなく、具体的な表現形態をとるようになるのは、じつは煉獄誕生から数世紀を経た後となる。現在知られているうちでは、文学に煉獄が登場するのは、14 世紀前半に書かれたダンテの神曲が最も古く、図像は、ヴィルヌーヴ・レ・

サヴィニョンのシャルトルー会修道院にある、15 世紀後半に描かれた聖母戴冠の図をもって嚆矢とし、実質上、図像表現は 16 世紀になるまで存在していなかった。爆発的に増加するのは 17 世紀以後で、18 世紀から 19 世紀を経て 20 世紀初頭まで、庶民の信仰のなかで並外れた成功を収めた。アリエス: 1990, pp.250-263.

第６章　教訓逸話集

本章で俎上に上げるのは、おもに 9 世紀から 13 世紀にかけて編まれた教訓逸話集（exemplum）および奇跡集（miracula と miraculious）[1]である。なかでも、キリスト教の聖職者および信者が出会った「幽霊」との交流に関する記録を取り上げた。この時期は、キリスト教における教義の基礎が確立されていった頃でもあり、たとえば、中世末期以降社会的にも多大な影響を及ぼすことになる、煉獄を含む他界観などは、この頃公に認められた。それ以外にも、前章でみたように「死者の日」を導入するなど、さまざまなレヴェルで大転換となる決まりごとが数多く制定されていることから、聖職者サイドがこの時期いかなる発言をしていたかに耳を傾ければ、ひいてはキリスト教の現在を知ることにもなるだろう。

６．１　生前の行いと死後の生

キリスト教において死後の救済とはどのような意味を持つのだろうか。繰り返しになるが、聖書によれば、世界の終末のときに全ての人間が墓から蘇り最終審判が執行され、その際、善き者は楽園への、悪しき者は地獄の業火への裁きを受け、その後人々は終末の後に創造される新たな世界で永遠の時を過ごすのである。つまり、地獄の業火に罪の意識を重ね合わせ、神の視線という「一望監視システム」（M. フーコー）を投入することで、キリスト教は、現世に生きる信者たちが自ら生前の行いを律する規範を提供するのに成功したといえる。それゆえ、生前いかに神と対峙したかが、たいへん重要な意味を持って信仰を同じくする者たちの間に迫ってくる。

こうした観点が盛り込まれた事例が、たとえばすでに 11 世紀にみられる。当時一世を風靡し、修道院改革に重要な役割を果たしたクリュニー修道院の院長ユーグに関する伝記には以下のような話が記されている。

【類話６－１　モワサック修道院長デュラヌスの幽霊】

モワサック修道院長で、トゥールーズ司教も務めたデュラヌスなる人物の幽霊が、修道院長ユーグの前に現れた。幽霊の唇は、生前雑談で修道士を笑わせていたことに対する罰として腫れあがっていた。デュラヌスがユーグ修道院長も死後に罰を受けると予言したので、院長は修道士たちに 7 日ごとに 2 日の断食を命じ、幽霊が再び現れて救われたことを告げるまで続けるように徹底させた。[2]

「笑い」という禁をおかした罪の深刻さや、民間伝承の重要な主題の一つである異能者

としての「運命の女神」にも連なる、「死期を告げる幽霊」というモティーフもここには含まれるが、とりわけ注目したいのは「デュラヌスの唇が、生前の行いに対する罰として腫れ上がっていた」という部分と、そして「幽霊が再び現れて、（ユーグが）救われたことを告げるまで（断食を）続けるように徹底させた」という部分である。つまり、そこには、死後浄罪のために受ける罰が生前の行いによって左右されるという観念が見え隠れしているのである。しかも過去が現在に働きかけるだけではない。幽霊を目撃した修道院長ユーグは修道士たちに断食を命じる。それは、彼が自分の死期、すなわち未来を、神の力に縋(すが)ればコントロールできると考えていたからにほかならない。

修道院長ユーグの後継者でもある第 8 代修道院長の尊者ペトルス（Petrus Venerabilis, 1092 頃～1156）は、リヴラドイス（Livradois）地方の名門貴族モン・ボアシエ（Mont Boissier）家の出身で、各地を歴訪してクリュニー修道院会の素地固めに尽力した人として知られる。彼の著作は現在まで多数伝わっており、そのうちのひとつ『奇跡について（De miraculis）』は全 2 巻 28 章（版によっては 32 章）から構成され、当時の幽霊譚を含む 60 におよぶ神の奇跡に関する出来事が報告されている。たとえばフランス中部のヴィエンヌ地方で司祭を務めていた、エティエンヌなるものからの報告をみてみよう。あるとき、モラ城主のギーという騎士が戦いで瀕死の重傷となり、臨終の告解のために司教が呼ばれ、司祭エティエンヌもそれに随行した。告解の後騎士は亡くなり、クリュニー修道院の支院であるマント修道院に丁重に葬られた。しかしその数日後、驚いたことに、死んだはずのギーが幽霊となって現れたというのだ。以下はギー出現の場面である。

【類話６－２　モラ城主ギーの幽霊】

そのあとわずかな時が過ぎたある日の真昼頃、私はモラ城近くの森を通りかかっているとき、突然背後に多くの軍勢のようなざわめきを聞いた。恐れおののいて、私は身を隠すべく近くの森に入った。茂み深く入り込んだので、軍勢から見られずに彼らの通り過ぎるのが見える場所に身を置いた。武装した大軍団の列が通り過ぎると、私が前に述べた、死んだ騎士ギーが馬に乗って、楯を胸に持ち、槍を持って突然私の前に現れた。（中略）「恐れるな。私は恐れさせるために来たのではない。あなたの哀れみを乞いに来たのだ。私は犯した過ちのために、告解のときに言い忘れてしまった 2 つの罪のために厳しい罰を受けている。第 1 の罪は、他の騎士たちとともに、多くの村人が安全だと思って財産をもって避難している墓地を荒らし、ひとりの農夫から彼が 1 頭しか持っていなかった牛を力ずくで盗んだことだ。もうひとつは、自分のものではない土地に不法な税を課し、長い間住民に支払いを強いてきたことだ。そこであなたに頼みたい。私の兄弟アンセルムスを探し、かわりに盗んだものを私の名で返してもらうよう、私が損害を与え

た人々に返してくれるように頼んでくれ」。[3]

そこで司祭はギーの兄弟アンセルムスに会おうとするが、連絡が取れない。待ちきれなくなった幽霊が司祭の前にふたたび現れ、「兄弟に遣わす使者の、人選を間違えた」と嘆き、再度催促し、司祭を怖がらせる。エティエンヌは、その後幽霊の兄弟からは賠償を拒否されたため、農夫に牛の代金を自分で支払い、ミサ、祈? 、施しを行ったと書かれている。

騎士の幽霊がその後どうなったかについては何一つとして伝わっていない。とすればつまり、これを記した尊者ペトルスにとって、幽霊の行方などどうでもよかったのではなかろうか。彼にとって重要だったのは、犯した罪がかならず罰されることを信者に諭し、日々の営みにおける清貧を守るよう強調する寓話を、紹介することだったかもしれない。いずれにしても、ここで幽霊は生者に依存する存在であり、自分では何もできず、頼み事を託すだけだった。さらにもう一点重要なのは、「告解のときに言い忘れてしまった２つの罪のために厳しい罰を受けている」という部分である。裏返せば、臨終の床での告解の際に、生前犯した罪を自白するかしないかによって、死後与えられる罰の軽重がコントロールできるという発想が、ここには巧妙に織り込まれているのである。終油の秘蹟の授与は聖職者の仕事であったから、キリスト者である以上、こと宗教儀礼に関していえば、聖職者と信徒の間には権力関係すらはらむ不均衡があったともいえる。いやむしろ、この一方通行が宗教的権威を支えていたとさえ換言できよう。生者と死者による浄罪の連鎖は、両者を取り持ち死者の声を聞き分ける技能職としての聖職者の介在があってはじめて可能になっているからである。

死者が生者に具体的に何か依頼をするという話は、尊者ペトルスから遡ること 1 世紀以上、10 世紀に書かれた『聖女ヴィボラダエ伝（Vita S. Wiboradae）』にもみられる。これは 976 年頃、すなわち聖ヴィボラダエの死から 50 年ほどたった頃にボーデン湖からほど近い、ザンクト・ガレン修道院の修道士エッケハルト（Ekkehart、書かれた年代からみて、おそらくはエッケハルト一世）によって編まれた聖人伝だ。

【類話６－３　『聖女ヴィボラダエ伝』の死者】

かつて彼女の従者だった者が死んだ後ヴィボラダエの前に現れて、死者が生前担当していた仕事を引き継いだ者がきちんと仕事をしているか、どうかもっとよく監視してほしい旨を告げた。[4]

城主のギーの場合と同様、死者が生者の元にやってきて、頼み事を託していく。死者が生者にできる働きかけは、ギーよりはるかに少ない。ヴィボラダエはかつての従者の働き

かけを知覚するが、死者はあくまでも生者に付随した存在でしかなく、自分は死んでしまった身がゆえに、後継者が怠けていようともたかだか女主人に告げ口する程度しかできない[5]。しかしそれも、話の発信者と受信者の関係に注目してみると異なった位相がみえてくる。つまりこの話は、いかに死者が生者に依存しているか、いかに生者のとりなしが死者にとって有効かという思考パターンを、聞き手に、無意識のうちに刷り込むのに貢献していると考えられるのである。

次に挙げる話も、「モラ城主ギー」と同様、クリュニー修道院長尊者ペトルスが聞き知り、書き残した記録の中にある。1142 年に尊者ペトルスはイスパニアを訪れており、その際クリュニー修道院の支院のひとつナヘラ修道院を訪問した。そこで知り合った修道士ペトルス・エンゲルベルトゥス（Petrus Engelbertus、生没年不詳）から、かつて彼自身が実際に出会った幽霊について聞き及んだ。

当時から遡ること 28 年前、すなわち 1114 年のこと。当時エンゲルベルトゥスはまだ神の道に入っておらず、イベリア半島北東部の都市エステラの富裕な市民だった。カスティリャーナ（カスティリア）で戦乱があり、彼は使用人のサンチェスを軍役に送り出し、サンチェスは遠征から無事に帰還するが、間もなく病死。死の 4 ヶ月後サンチェスの幽霊がエンゲルベルトゥスの家に現れた。

【類話６－４　ペトルス・エンゲルベルトゥスの使用人サンチェスの幽霊】

私はエステラの家で、火のそばの寝台で横たわっていた。真夜中頃、サンチェスが突然私の目の前に現れた。その時まだ私は目覚めていた。彼は火のそばに腰掛け、火をおこすというより、明るくするために火かき棒で薪をかき回し、次第に姿がはっきり見えてきた。彼は裸で、着物を纏わず、秘所を覆う小さなぼろ布のみを身につけていた。（中略）「私はカスティリャーナに行くところだ。私と同じ道を大軍勢が進んでいる。私たちは犯した過ちによって科せられた苦痛から逃れるために、過ちを犯した場所に行くのだ」。私は彼に尋ねた。「なぜお前はここに寄ったのだ」。彼は言った。「それは贖罪を望むからだ。もしあなたが私を哀れんでくれるのなら、私はより速やかに安らぎが得られる」。私は言い返した。「どうしたらよいのか」。彼は言った。「あなたが知るように、最近私は遠征に行った。戦いの許可が出て、私は何人かの仲間と教会に攻め込み、そこにあったものを略奪した。そして聖職者の衣服をそこから持ってきてしまった。その罪によってこのような罰を受けて、激しい苦痛に喘いでいる。私の主人であったあなたが、必要な祈りをして私を救ってくれることを願う」。「また私は願う。女将さん、つまりあなたの奥さんが、私に仕事の報酬として支払うはずだった 8 スーをくれるのを猶予しないように伝えてほしい。女将さんが、私が生きていたあいだに私の生活のために与えるべきだっ

たものを、私の魂のために与えてほしい。私の魂はそれを貧者に施すことを必要としている」。（中略、幽霊が消えた後）、私は声を荒げて、私の隣で寝ていた妻をすぐに起こした。私が今見て聞いたことを言う前に、使用人だったサンチェスに給料を払うことになっていたかどうか聞いてみた。私が幽霊から聞くまえは知らなかったことを妻は話した。サンチェスに 8 スーの給料を払うことになっていたと。幽霊の話と妻に確認したことを比べあわせてみて、私はもう疑わなかった。朝が来て、私は妻から 8 スーを受け取って、現れた幽霊を救うために貧者に施した。幽霊の罪が完全に許されるように、私の熱意と願いから、司祭たちに聖なるミサの援助をしてもらった。[6]

ほとんど裸に近い状態で現れたかつての使用人サンチェス[7]。ここでも幽霊は生者に依存し、その願いは具体的である。自ら過ちを犯しても誰かが神にとりなしてくれれば苦しみの期間が短縮されるというのは、この時期以降の伝承にしばしばみられる典型的な説明原理だ。しかし、これまでみてきた例にはなかった観念がここには盛り込まれている。祈りの効能だ。具体的な施しだけでなく、祈るという行為そのものが死者の贖罪に効果をあらわすというのである。

中世ドイツ史の記録としてしばしば引用される『フルダ年代記（Annales Fuldenses）』にも、死者が現れたという記述がみられる。9 世紀後半、カール大帝（768〜814、在位 800〜814）の孫にあたる東フランク王国の初代王ルートヴィヒ（在位 843〜876）の時代を記した部分である。

【類話６－５　敬虔王ルイ（在位 814〜840）[8]の懇願】

876 年、四旬節期間中のある夜のこと。国王ルートヴィヒがいつものように礼拝している最中に、死んだはずの父、敬虔王ルイが現れてこう懇願したという。自分は今苦痛の中にいるが、キリストと三位一体に祈って、その痛みから解き放ってくれ、と。驚いた息子は、この幻視体験を記録させ、王国内にあるすべての修道院にそれを知らせる伝令を出し、修道士は全員、前王の魂の救済を神に祈るようにと伝えられた。[9]

王の前に現れた亡き父王は、神への取りなしを乞い、しかも痛みから解き放ってくれと息子に告げる。具体的にどのような責め苦だったのかについての言及はなく、死者が必要とするのは生者による取りなしの祈りだけである。実際に王ルートヴィヒが幽霊を「見た」かどうか、そして祈りが効果的だという考え方が一般的だったかどうかは別にしても、年代記が編まれたときには、少なくとも「取りなし」と「祈りの効用」がある程度は受容されていた、ということをみてとってもよかろう。

ラヴェンナのペトルス・ダミアーニ（Petrus Damiani）は、1060 年頃枢機卿までなった人物で、当時すでに祈? 共同体だった隠修道士グループにおいて、死者を追悼する祈? を積極的に評価したことで知られている。その彼は『さまざまな出現と奇跡について（De diversis appartionibus et miraculis）』という書を書き残している。1063 年あるいは 1072 年に編まれたとされるこの書物の第 2 部において、贖罪中の死者が町中に出現した話が紹介されている。場所はローマ、時は聖母昇天の祝日（8 月 15 日）の夜、人々が市内の教会で祈りを唱えている真っ最中、サンタ・マリア・イン・カンピテルロ大聖堂にいたある女の体験だという[10]。

【類話６－６　聖母昇天の祝日に出会った亡き代母】

1 年ばかり前に死んだ、代母の姿を見た。ひしめく群衆にさまたげられて近づいて声をかけることができないので、女は代母が聖堂から出てきたときに見失ってしまってはいけないと思って、路地の隅で待ち受けることに決めた。代母が通りかかると女はすぐに尋ねた。「私の代母のマロジアさまではありませんか、すでにおなくなりになった……」。相手は答えた。「そう、私はマロジアです」。「で、いったいどうしてここにおいでなのでしょうか」。マロジアは言った。「今日まで私は軽くない罰を受けるために自由を奪われておりました。それというのも、まだ年端もゆかぬ娘だった頃、私は恥知らずな淫蕩の誘惑に身をゆだねて、同い年の娘たちと破廉恥な行為に及んでしまったのです。司祭さまにはちゃんと告解したのですが、何ということでしょう、そのことばかりは忘れてしまっていて、まだ（改悛の）お裁きはいただいていなかったのです。けれども今日は、世の女王マリアさまが私どものために津々浦々に祈りを溢れさせてくださり、私を懲罰の場（de locis poenalibus）から解き放ってくださいました。今日、おとりなしによって苦業から救い出されたものの数はおびただしく、ローマの人口をしのぐほどです。だから私どもは、こんなにも大きい恩恵に対してお礼を申し上げるために、栄光のマリアさまに捧げられた聖所を訪れているのです」。この話が信じてもらえそうもないので、代母はこう付言した。「私の言ったことが本当だという証拠に、今から 1 年後、今日と同じ日にあなたは死ぬということを覚えておきなさい。もしそれ以上あなたに命があったら、そんなことはないことですが、その時こそ私の嘘をとがめたらよいでしょう」。こう言うと、代母は女の前から姿を消した。女は死の予言が気がかりで、その日から以前よりも用心深く暮らした。それから 1 年近くたって祝日の前夜に女は病に倒れ、祭りの当日、予言されたように死んだ。銘記すべきは、甚だ恐ろしいことであるが、この女が自分では忘れてしまっていた罪のために、汚れなき神のみ母のおとりなしがあるまで、責め苦を受けたという事実である。[11]

モラ領主ギーと同様、この女も、迂闊にも告解を忘れてしまったために、死んだ後にも苦しみの生を生きさせられた――、話がそう締めくくられている点も興味深いが、本稿の主旨からみてもっとも刮目すべきは、祈りのもたらす成果についての言及である。人々の祈る声が「汚れなき神のみ母」である聖母マリアに届いたゆえに、恩赦が下り、死後浄罪の苦しみに苛まれていた咎人が責め苦から解き放たれ天へと昇る道が開かれたという。祈りの効果はそれほどまで絶大と考えられ、おそらくこうした信仰心は、礼拝に訪れる人々の心に深く刷り込まれていったのではないだろうか。

代母の幽霊と会った話を書き残したペトルス・ダミアーニは、別のところで、祈りの言葉が死者救済にどれだけ役立つか触れている。それは、彼が 1063 年にクリュニー修道院を訪問した際、修道院長ユーグ（前述）から聞いた報告の中にあり、その内容は、死者の冥福のためにミサ、祈? 、施しが有効であることを教示するきわめて教訓的なものとなっており、たとえば以下のようなものがある。

【類話６－７　祈りの効用】

ある未亡人が、夫の魂のために祈ってほしいと司祭に依頼して毎日供物を寄進していた。ところが司祭は祈? を怠り、供物だけ受け取っていた。ある日、未亡人は下女を自分の代理として司祭のところに遣いに行かせた。その道すがら、下女は女主人に託された供物の鶏とパンと葡萄酒をすべて平らげてしまい、「神様、天の使者が食しますようにと」と祈りを捧げた。翌日、亡夫が未亡人の夢枕にたち、昨日初めて「食物」にありつけたと感謝の言葉を述べた。[12]

この話が、メルヒェンにありがちな「悪意の善意への逆転」という構造を備えている点も指摘できるが、同時に興味深いのは、祈りの言葉を届けるのにかならずしも聖職者の介在は必要ないという見解である。供物が死者の元に届くには、祈りの言葉という架け橋がかかりさえすればよく、その技術は決して聖職者が独占していたわけではなかった。この話はそのように読める。

６．２　幽霊とは誰か

さて、以上縷々事例をみてきたが、このあたりでそれらを整理してみよう。表６－１は、６．１で縷々みてきた幽霊出現に関する類話を、①幽霊が出現した場所、②幽霊の正体、③幽霊の目撃者、④幽霊が出現した理由、⑤幽霊と目撃者の関係についてまとめてみたも

のである[13]。①幽霊が出現した場所については明示的記述のないものもあるが、大きく分けて生活空間ないしその延長（家の中、礼拝堂の中、町の中）である場合と、異界との境界にある場合（森）と２つのパターンがみられた[14]。②の「幽霊の正体」はすべて死者、すなわちかつて一度は人間としてこの世に生を受けた者であり、生まれながらの「流竄（ル）の神（モ）々（ン）」ではなかった。③「目撃者」についても、「幽霊の正体」同様に人間で、しかもキリスト教の信仰の枠組内部にいる者であった。具体的には、高位の聖職者や王、市民、さらには聖母マリアに祈りを捧げるために教会に赴いていた一般信者の場合もあった。つまり、キリスト者であれば誰でも目撃者となる可能性と隣り合わせであったということを指摘できる[15]。④幽霊が出現した理由としては、いずれも生者に何らかのメッセージを伝えるために現れている（＝現れた幽霊を見て、生者が何らかのメッセージを読みとっている）点ですべて共通している。ただしその内容については、類話６－７の、幻視ではなく夢に登場した例を除き、予言（とくに死期の予言）と懇願という２つのパターンがみられた。もっとも興味深いのは、なんといっても⑤「幽霊と目撃者の関係」であろう。本稿第 1 節で挙げた事例をみる限りにおいては、幽霊が不特定多数の前に姿を見せることはなく、目撃者はいずれも故人の生前を知っている人物であった[16]。

【表 6-1】　6. 1に挙げた話の比較

		(記録された年代)	① 出現の場所	② 幽霊の正体	③ 幽霊の目撃者	④ 幽霊が出現した理由	⑤ 幽霊と目撃者の関係
類話 6-1	修道院長デュラヌス	11 世紀	記述なし）	修道院長	修道院長	予言	同僚
類話 6-2	城主ギー	12 世紀？	森	城主	司祭	具体的懇願	知人
類話 6-3	聖女の従者	10 世紀	記述なし）	従者	聖女	具体的懇願	主従
類話 6-4	使用人サンチェ	12 世紀	家の中	使用人	富裕な市民	具体的懇願	主従
類話 6-5	敬虔王ルイ	9 世紀	礼拝堂の中？	敬虔王ルイ	王ルートヴィヒ（息子）	祈りを懇願	親子
類話 6-7	代母の幽霊	11 世紀	町の中	女（代母）	ある女	予言	代母と子
類話 6-8	ある未亡人の夫	11 世紀	夢の中	ある男	ある女	予言	夫婦

そういえば日本では柳田國男が「（人に出るのが）幽霊の特性である」としており[17]、目撃者と故人のあいだに関係性があることを示唆しているが、⑤にみた分類は柳田による定義とも過不足なく重なり合う。となると、「見る者と見られる者が何らかの関係を持つ」のが幽霊の普遍的な特性と考えてよいのだろうか。この問いに答えるため、「幽霊を見る者」と「幽霊として見られる現象」の関係について、分析してみよう。

「幽霊が出た」といわれるとき、目撃者は、彼／彼女が体験したと信じるある現象を、「幽

霊」として意味づけ、何らかの形でアイデンティファイしている。この事実を裏返せば、アイデンティファイできるから「幽霊」として知覚可能なのであり、できなければ「幽霊」としては意味づけられないことがわかる。とすれば、幽霊は幽霊として知覚されたとたんかならず記名され、「固有名詞を持った誰か」となる。少なくとも幽霊の目撃者にとっては、自分が目の当たりにした「現象」に「特定の誰か」が関わっていて初めて、意味ある情報として知覚され、そこには「匿名の何か」が入り込む余地はない。幽霊という具体的な実態を伴わない存在を存在せしめているのは、見る者の視線にほかならず、まなざしが照射されるからこそ、幽霊は幽霊として切り出されるからだ。

この構図は、柳田が「場所に出る」とした妖怪（＝化け物、オバケ）と対比させて考えることで、より一層明確になる。「匿名の何か」であればそれは特定の人物には還元されず、無記名（＝匿名）のまま「妖怪」という説明原理に収斂されるであろう。

とするならば、匿名の幽霊、つまり名のない幽霊はいないのだろうか。柳田の定義を忠実に敷衍するならば、そうした怪異はもはや幽霊ではなく、「妖怪」の範疇に含まれることになる。表の⑤にみた「幽霊と目撃者の関係」と対比させると、珍妙なくらいぴったりとこの柳田の構図に符合してしまう。

しかしここで、燃える人をいまいちど想起したい。彼もかつては生身の人間であったのだから、まさしく一般的な枠組みにおいては「幽霊」といえるが、彼らは、多くの場合匿名のまま不特定多数に目撃されるという「妖怪」の特徴を備える[18]。つまり、こと燃える人に限って言えば、「土地に出るか」「人に出るか」という柳田の分類をそのまま援用しようとすると、どうしても不具合が出てしまうことになる。保留しておいた問いかけ「人に出るという幽霊の特性は普遍的か？」に戻れば、燃える人を反証とし、この命題は偽と判定されることがわかるのである。

「匿名の幽霊」の存在、それが、キリスト教世界における他者の死、そして自己の死へのまなざしが備えているある特徴を象徴しているのではないか――。筆者はそう考えている。両者の間にある齟齬は、いったいどこに由来するのだろうか。ありていに言ってしまえば、宗教が提供する社会的コンテクストが全く異なっているからということになろう。すでにみたように、日本の民俗宗教にも幽霊は登場し、なかには死後恨み言を言い続けて生者を苦しめる幽霊や、あるいは御霊信仰のように、超人格的な霊力となって信仰の対象となる例もある。しかしそこには「神による救済」という概念が欠如している点に注目しなければならない。日本の場合、生者と死者の力は拮抗しており、ときに戦い、ときに縋（すが）る。日本の民間信仰には、人々の日常を天空の高みから監視する唯一神の目はありえないといってよい。この点で、神の前ではすべての人間が無力な子羊と化すキリスト教とはまったく相容れないのである。絶対的な力に対する畏怖の感情という点ではキリスト教の世界観

と共通するものの、神への人格移譲の次元に注目してみれば、両者の違いは明らかとなろう。絶対的な神が人に与えてくれる安心感の希求、それが救済の思考の源といえる。

６．３　生者による死者への弔い：隣人愛と救済の行方

「燃える人」伝承に突出してみられたモティーフ、すなわち生者が彷徨える死者を救済するという発想は、生者の死者に対する絶対的な優越性を前提としており、さらには、生前の行いが、死後の生をどのように生きさせられるかに影響を与えるという、暗黙の了解をも内包している。

中世末には「1 度祈れば、1 人を煉獄から救う」ともいわれ[19]、そうした発想は、喜捨やロザリオの祈りという形態をとりながら、現代のカトリック信仰にも受け継がれている。しかし、類話４－１でみたように、アイスランド・サガの死者は生者と対等に渡り合っていた。生と死とが拮抗しており、そのとき葬送に関する儀礼は、死者のためというよりも、むしろ生者がつつがなく生き続けるための厄払い的な意味合いが強かったとみるべきだろう。また拮抗した関係は、類話３－２６では嘲笑する人間と仕返しする怪し火というかたちでも読みとることができる。

煉獄を発明したことにより、人が死んだ後の時間をも方向づける術を手中に収めたキリスト教は、夜の世界を生きる存在たちから、その力強く気ままだった特性を剥奪する。幽霊たちの弱体化の裏側にぴったりと貼りついた煉獄観。こうして死者たちの彷徨える魂は、自らの行動を自分で決定することはできず、生者がなにかを「してやる」ことによってのみ解き放たれるようになってしまった。しかも、その行き先は天国以外にはあり得ない。死者には昇天する以外の道は残されておらず、そのためには、生者の手助けが不可欠なのだ。かつては敵味方に分かれての勝負だった拮抗関係から、死者から生者への、祈りを介してのバトンリレーへと劇的な変化を遂げたのである。

[1] クリュニー修道院第 8 代院長の尊者ペトルス（Petrus Venerabilis, 1092 頃-1156）は、神の摂理が介在するかしないかで両者を区別した。

[2] Cowdrey: 1978, p.42-100; Neiske: 1986, S.167. ユーグの伝記は死後数種類書かれており、往時の彼の社会的影響力を忍ばせる。なお、ここで取りあげたモワサック修道院長の話はそのいずれにも採用されている。

[3] 杉崎: 2002, pp.207-212.

[4] Berschin (hrsg.): 1983, Kap. XXIII, S.63ff. また、Wittmer-Butsch: 1990, S.287 も参照のこと。

[5] これは、10 世紀という時期にあっては、生者に死者が接触してきたことを記した希有な例だ。とはいえ、一般的にはこのような些細な事柄のためにではなく、ある程度社会的な事件について語ることの方が多い。たとえば、クレルモンのバジリカ建築と、黄金の聖母子像製作にあたり、修道院長モザート（Robert von Mozat）が見た夢について、助祭のアールノ（Arno）が 946 年に書き留めたものなどがある。Schmitt: 1995, S.76.

[6] 杉崎: 2002, pp.203-205. なお、固有名詞の表記を本文にあわせ一部改めた。

[7] なにも纏っていないというのは、死者をあらわす表現として比較的よくみられるパターンである。

[8] ルイ一世が「敬虔王」とあだ名されるのは、彼が各地に教会や修道院を寄進したためである。たとえばハノーファー近郊のヒルデスハイム（Hildesheim）にある大聖堂は、ユネスコの世界遺産に指定されているが、ここに初めて司教座をおいたのは彼である（815 年）。ただし、現在みられる建築物の原型は、11 世紀からのもの。いくどもの戦災により破壊されたため、オリジナルな部分はほとんど残っていない。

[9] Kurze: 1978, S.82. また、Carozzi: 1990, p.369.も参照のこと。

[10] ペトルス・ダミアーニに情報を提供したのは司祭ヨアネスで、この記録が書き記される数年前に実際に起こったことであるという。ペトルス・ダミアーニと死者の追悼に関しては、Dressler : 1954 が参考になる。

[11] ル・ゴッフ: 1988, 265-266 頁より引用。原文は第 2 部第 34 編にある。

[12] Schmitt: 1995, S.78-79.

[13] むろん、ここに挙げた事例は全体のうちの数例にすぎず、それらを持って全体を語ることは早計との誹りを免れないのは承知している。とはいえ、歴史事例であるゆえ、統計処理できるほどの事例は集まるべくもないこともまた事実である。じつは、本稿で列挙した事例は、筆者が恣意的に選択したことを白状しなければならないが、その恣意の裏側にあ

るのは、現代まで伝わる多数の事例との比較の結果みえてきた筋道である。

[14] 森は、一般的な生活をしている人々からしてみれば日常的に立ち入る空間とはいえず、それゆえ境界領域とみなされた。そこは幽霊以外にもさまざまな怪異が出現する空間として位置づけられ、猟師や鍛冶師など、日常的に森で仕事をする人間が特殊な能力を備えているとする伝承も少なくない。たとえば、シャルル・ペローが伝承集中に採用し、のちにグリム兄弟によって『家庭と子供のためのメルヒェン集（いわゆるグリム童話集、Kinder- und Hausmärchen）』にも採り上げた、「赤ずきん」の舞台は森の中だった。日本でも、具体的にどこを境界領域と設定するかについては相違があるものの、生活空間から離れたところに禁忌の場所が設けられるという構造自体は、過不足なく重なる。また、境界と怪異の関係については、宮田: 2001 も参照のこと。

[15] キリスト者以外の人間も幽霊を目撃することはあったかもしれないが、本章でみた資料は全てキリスト教の枠組みにおいて成立したものであるから、その当否についてここでは言及できない。

[16] たいていの場合、「幽霊」を目撃するのは特定の人物だけで、同席した者たちは同じ場所にいたにもかかわらずそれを目撃しない。現代の精神医学における分類に照らし合わせれば、こうした体験は「幻覚」とみなされ、場合によっては「統合失調症」という診断が下されるかもしれない。しかし中世当時にあっては、こうした体験は神秘体験に分類され、神の意が反映しているとして積極的に解釈された。この点で、ときに「悪魔の仕業」ともされた睡眠中に見る夢とは全く異なった解釈がされている。Schmitt: 1993, S.353. また、たとえば奄美大島や沖縄のシャーマンであるユタをめぐる「神ダーリ」と呼ばれる巫病などと比較してみると、西欧中世の幻視体験との類似が指摘できる。

[17] 柳田國男は『妖怪談義』のなかで「オバケ」と「幽霊」を演繹的に区別し、《前者は、出現する場処がたいていは定まっていた。避けてそのあたりを通らぬことにすれば、一生出くわさずに済ますこともできたのである。これに反して幽霊の方は、足がないという説もあるにかかわらず、てくてくと向うからやって来た。彼に狙われたら、百里も遠くへ逃げても追い掛けられる。そんな事はまず化け物にはないと言ってよろしい。》としている。彼はそこで、「オバケ」「化け物」に限定して論じているのである。柳田: 1989, pp.16-17.

[18] そのほか、イギリスとりわけロンドンには幽霊譚が多い。ブルックス: 1993 などを参照のこと。

[19] 次章でも言及するが、宗教改革者マルティン・ルターは、『贖宥の効力を明らかにするための討論』第 75 条で、「ペニヒ硬貨が金箱の中でちゃりんと響くとき、魂は天に連れて行

かれると彼ら（＝カトリック教会）は教えた」と書き、贖宥の有効性について疑問を投げかけている。ルター: 1971, p.81.

第７章　宗教改革の果てに

７．１　動揺する他界観　――煉獄の禁止

周知のように、シェイクスピア作『ハムレット』（初演 1600 年頃）で主人公であるデンマーク王子ハムレットは、生きるべきか、死ぬべきかと苦悩し、ついには殺害された父の仇討ちを遂げ、自らも自害して果てるが、話の出発点はある幽霊との出会いだった。その幽霊はハムレットにこのように告げている。

> われこそは、汝の父の亡霊、夜は幾許かの時を地上にさ迷い、昼は煉獄の業火の中で飢えに苦しみ、生前この世で犯せし罪の穢れが焼き浄められるのを待つ身の定め…[1]

幽霊は、自分がデンマークの前王であること、そして今では煉獄において浄罪に勤しむ身であることを王子にうち明ける。苦悩するハムレット像については、現代日本でも広く知られている。しかしなぜ彼は苦悩したのだろうか。井出新によると、幽霊が出現したという事態、そしてその言葉そのものが、ハムレットを苦悩させた理由だったという。つまり、亡き父が煉獄におり、しかも幽霊として現世に出没したということを知ったことが、苦悩を生み出したというのである。煉獄での責め苦、そして幽霊としての彷徨。それはプロテスタンティズムの信仰を持つハムレットにとって、決して受け入れてはならないものに違いなかった[2]。

宗教改革の大波に飲まれたヴィッテンベルクの大学で学んだというハムレットは、作者の設定によると、当然のことながら新教徒である。それゆえ、教義の上では、煉獄、すなわちカトリックの他界観においては、その存在が信じられていたはずの、死後における浄化の場であり、天国の前庭ともいえる場の存在を否定する立場にあった。プロテスタンティズムの教義に忠実に従うならば、聖書に書かれていない煉獄などという場は死後の世界にはなく、現世を徘徊する幽霊は悪魔であり、それゆえ、父の名をかたる幽霊もまた、忌まわしき悪魔であるはずだった。父か、悪魔か。2 つの答えの間で板挟みになり、苦悩していたのが、ハムレットその人であった。いや、より厳密に表現すれば、ハムレットは劇作家シェイクスピアがそのように描いたことから、苦悩させられていただけで、苦悩していたのは、12 世紀末に編まれた『デンマーク史話（Historia Danica）』に初出するアムレトゥス（Amulethus）の物語を、エリザベス朝ロンドンに「ハムレット」という名前で翻案し、復活させた、劇作家シェイクスピアと、その時代を生きた人々だった[3]。苦悩のコノテーションがハムレットなのである。

いまさらいうまでもないことだが、16 世紀のヨーロッパは、教科書的な区分に従えば「大

航海時代」と呼ばれ、非西欧各地で簒奪した富を資本にして、西欧各国が絶対主義の基礎を築きつつあった時代である。また、腐敗し堕落しきったとされるカトリック教会への不信感から宗教改革が叫ばれた時代でもあり、新しく出現した反ローマの勢力には、政治の世界もいち早く対応した。たとえば、ザクセン選帝候はルター派教会を支持するが、それは、既成の権力構造に対して反旗を翻していることの表徴にほかならなかった。ルターが説いた宗教改革の出発点は、純粋に宗教界を改革する試みから始まったものであったが、革新の波が支配階級に到達したとき、教義云々とはまったくレヴェルの異なる、覇権争いという駆け引きにまで移行していった。

そんななかにあって、イギリスは、国王が率先して宗教改革を推進した国として知られている。ルターによる宗教改革が現在進行形で進んでいた当時、イギリス国王であったヘンリー八世が教会改革に踏み切った理由は、周知のように、宗教的な信仰心からというよりもカトリック教徒であった王妃との婚姻解消のためという、ご都合主義的なものではあった。それでも、彼が創設した国教会はいまなおイギリスの地で信仰の拠点となっている。そしてヘンリー八世の娘エリザベスは、先代女王であった異母姉失脚の後王冠を戴き、エリザベス一世となる。彼女の治世は、いわゆる「エリザベス時代」といわれ、古典作品に対する興味が復興した時期である。また宗教的には、英国国教会による改革がふたたび推し進められた時期でもあり、たとえば、カトリックの教義に基づいて布教活動の一環として上演されていた聖史劇[4]が禁止され、また煉獄も完全否定されている。

いささか本題から外れてしまったが、シェイクスピアの同時代人で、パンフレット作者であったフィリップ・スタッブス（Phillip Stubbes、1550 頃〜1593 頃）は、反劇場主義者としてのみならず、反カトリック教会主義者としても名の知れた人物である。1593 年に著された、彼の最後のパンフレット『善行の勧め（A motiue to good workes）』には、以下のような一節がある。

> 煉獄などという馬鹿げた俗信の無益さは誰の目にも明らかだ。もし死者のためのミサや聖歌、贖罪の祈りやロザリオといったがらくたが、来世の苦しみや審判から我らを救い、魂を天国に入れてくれるなら、それこそキリストの血が我々の救いに入り込む余地など、これっぽっちもない。[5]

イエスや使徒たちの受難を題材にした聖史劇は、当時の庶民にとって格好の娯楽となっており、その意味では、カトリック教会の戦略は成功していたといってよい。人々は、そこで上演された作品から、カトリックの世界観を学習した。また、浄化の場としての、あるいは天国と地獄の中間領域としての煉獄についても、知らぬ間に聞き知り、記憶の奥底

に刷り込まれていたことだろう。

７．２　彷徨える煉獄観

9 世紀から 12 世紀にかけての西洋世界の飛躍的発展を背景にして、死後人間が赴く第三の場所として誕生した、煉獄。前記ル・ゴフは、キリスト教の教義で禁じられていた「金貸し」を営み、それゆえかつては地獄に堕ちるとされていた金融家を救うために煉獄が誕生したことを指摘した。プロテスタンティズムの倫理が資本主義の精神を育むそれ以前に、すでに資本主義の芽生えがあったというのだ[6]。もちろん、そこには教会当局関係者の生臭い計算高さもあったかもしれないし、1 人でも多くの人を救い上げたいという宗教的な使命感もあったかもしれない。

いずれにしても、当時、煉獄が担っていた社会的役割は、現代に生きる我々が想像する以上に大きかったと推測される。それゆえ、宗教改革を経た後、プロテスタンティズム世界で煉獄の存在が否定され、死者のための祈りが空疎化したことは、民衆の日常生活に大きな打撃を与えたに違いない。煉獄が生者に提供したのは何か。それは、地獄堕ちの恐怖からの迂回路である。だが、プロテスタンティズムの他界観においては、1 度地獄に堕ちたならば、残された縁者がいかに神に祈ろうと、取りなしを乞おうと、それは無益な行動とされる。どんなに弱い人間であっても神の前には平等で、平等であるがゆえに自らの責は自分自身で負う以外に、なかったのである。では、プロテスタンティズム世界では、煉獄にまつわる思い出はすぐさま消え失せてしまったのだろうか。そうでないことは、ハムレットの苦悩が如実に示してくれた。改めて言及するまでもなく、人々の生活は教会の中だけで完結しているわけではない。数世紀の時をかけ、徐々に精緻化されていった煉獄という浄化の場は、すでに宗教者の思惑を越え、説教を聞かされる人々の心の奥深い部分に刻み込まれ、「自明の存在」となっていたのではないか。

７．３　ルター『煉獄の無効宣言』

それでも、煉獄誕生から 400 年後に巻き起こった宗教改革においては、中世に花開いた多様なキリスト教の他界観はプロテスタントの聖職者から完全否定される。たとえば、ルターがコーブルクに蟄居中の身であった 1530 年に著した『煉獄の無効宣言（Widerruf von Fegefeuer）』には、「怪し火（Irrwische）は哀れな魂だという考えがある」とする部分がある[7]。むろん彼は怪し火＝哀れな魂という定式には猛反対し、別の著作ではそれは「漂う悪魔である」と言い切っている[8]が、それでもそこには当時すでにしてこうした発想が流布

していたか、すくなくとも流通しつつあったことを垣間見ることができる。ルターばかりではなく、宗教改革に与する者たちは、聖書にその明確な記載のないことから煉獄の存在を否定し、人は死ぬとすぐに天国か地獄に送られるのだと主張した。つまり、カトリックの聖職者が布教の過程で民衆の論理を取り入れながら構築していった「浄化途上の死者」というカテゴリーを、少なくとも「プロテストする人々」の指導者は全否定したのである。彼らにとっては、ルターが書いているのと同様、生者の前に現れる死者すなわち幽霊は、悪魔が人を惑わせるために行っている仕業に違いなかったのだ。

また、反宗教改革サイドすなわちカトリックは、プロテスタントとの差別化を図るために、あえて敵が拒否した儀礼・典礼あるいは教会建築内の華美な装飾などを、その後積極的に利用していくことになる。そこで利用された説明原理のうちのひとつが、死者に対しての祈りと死後の浄罪観念だった。たとえば、オーストリア南部、ケルンテン州の州都であるクラーゲンフルト市の教区教会である聖エギット（St. Egid）教会[9]の南側回廊には、いわゆる「哀れな魂（Armen Seelen）の祭壇」が配置されている（図７－１ａおよびｂ）[10]。1703年に設置されたこの祭壇の壁龕には、4体の哀れな魂たちが、めらめらと燃え上がる炎の中で熱さをじっと堪え忍び、救済

【図 7-1a】 (上)哀れな魂の祭壇

【図 7-1b】 (下)哀れな魂の祭壇 部分)

(上下とも撮影は筆者による)

の時を待ちつつ苦しんでいる像が置かれている[11]。煉獄における浄罪と救済の物語が、ここには凝縮している。

７．４　英国国教会下における怪し火：『ヘンリー四世』より

すでに述べたように、宗教改革の波が巻き起こった頃、イングランドでは、国王ヘンリー八世の離婚問題からカトリック陣営を離脱して英国国教会を創立し、国王自らがその首長となった。ここでは、ヘンリー八世の娘エリザベス一世の統治下において怪し火がどのように考えられていたかをみてみたい。シェイクスピアの『ヘンリー四世』（初演は、第一部 1596～1597、同第二部 1597～1598）で騎士フォールスタッフがごろつきバードルフの赤鼻を罵倒する、以下のシーンがそれだ。

フォールスタッフ　おまえ、その顔つきを改めたらどうだ、そうしたらおれもいまの生活を改めてやる。おまえはおれたち艦隊を指揮する旗艦ってとこだ、艦にあかりまでつけている、かと思ったら、そのどまんなかの赤っ鼻か。おまえはまさに「燃えるあかりの騎士」だ。

バードルフ　おい、サー・ジョン、おれの顔がおまえに迷惑をかけてるとでも言うのか?

フォールスタッフ　とんでもない、それどころかおおいにおれの役に立っている。世間のやつらが指輪に髑髏を彫りこんで死を忘れまいと心がけるように、おれはおまえの顔を見ては焦熱地獄を思い出し、大金持ちのダイヴィーズが生前着ていた真赤な衣のままそこで深紅の炎に燃えあがったという聖書の話を思い浮かべるんだ。おまえに少しでも美徳があれば、おれは誓言するときおまえの顔にかけて誓うんだがな、「神のみ使いであるこの炎にかけて」とな。ところがおまえはすっかり悪魔に引き渡されている、その顔のどまんなかにあかりがなけりゃあ、暗黒地獄の申し子と言うほかない。こないだの晩も、おまえ、おれの馬をつかまえようとしてギャッズヒルを駆けのぼったろう、あのときおれはてっきりおまえを鬼火か狐火だと思ったぜ。まったく、おまえってやつは、年から年じゅうお祭り花火だ、永遠に燃え続けるかがり火だ。おまえのおかげで、松明代が 1000 マルクは助かったぜ、居酒屋から居酒屋へ歩きまわっても夜道を照らすあかりはいらんからな。もっとも、おまえに飲まれた酒代を考えりゃあ、それでヨーロッパ一高い蝋燭屋にあかり代を払ってもお釣りがきたかもしれないがな。おれはこの 30 年間、おまえの顔に棲む火食いトカゲを養うために、一時も休まず火を飲ませてやってきた、そのご褒美を忘れないでくださいよ、神様！

バードルフ　うるさいやつだな、おれの顔のことはもう口にするな。

フォールスタッフ　するもんか！おまえの顔を口にしたらこの舌が焼けただれちまうだろう。[12]

バードルフの赤鼻をさんざん罵倒する騎士フォールスタッフ。彼が言い放った悪罵の数々は、単なる意地の悪い罵言にすぎないともいえるが、それでも、こうした表現が用いられるのになにか背景があってもおかしくはない。そこで、以下、フォールスタッフがバードルフの赤鼻を形容するのに用いた表現のうち、光に関する部分を抽出して分析を試みる。

まず、バードルフの鼻を直接的になにかにたとえているヴァリエーションをみよう。「鬼火か狐火」（ignis fatuus or a ball of wild fire）のほか、艦隊を指揮する旗艦のあかり（bearest the lanthorn in the poop）、「燃えるあかりの騎士」（the Knight of the Burning Lamp）、「年がら年中お祭り花火」（a perpetual triumph）、「永遠に燃え続けるかがり火」（an everlasting bonfire-light）、「火食いトカゲ」（salamander）といったものがみられる。これらの表現は、かならずしもポジティヴではないかもしれないが、ひとしなみにネガティヴな価値付けがされるものでは決してないだろう。

そして、騎士が「鬼火か狐火」だと思ったという、顔の真ん中にある「あかり」（light）。文章のつながりから考えると、どうやらこのあかりのおかげで、バードルフは「暗黒地獄の申し子」（the son of utter darkness）とみなされずにすんでいる。とすれば、あかりは地獄に帰属しないことになる。それに対し、直前では「おまえに少しでも美徳があれば、おれは宣誓するときおまえの顔にかけて誓うんだがな」と言っており、あかりを持っていても美徳がないからそれを「神のみ使いである炎」（this fire, that's God's angel）とはみなさない。つまり、ここであかりは地獄にも天国にも属さない、中間的な存在として描かれているのである。

また、髑髏を彫り込んだ指輪をみて人々が死を思う（memento mori）のに対し、フォールスタッフはバードルフの顔を「焦熱地獄」（hell-fire）を思い出す契機にするという。ここで焦熱地獄は、おそらく地獄ではなく煉獄を指すと思われる。というのも、すでに述べたように、あかりのおかげで彼は「暗黒地獄の申し子」とはみなされていないうえ、焦熱地獄と memento mori とが対比的に使われているからである。しかも memento mori とは、いまさら指摘するまでもなく、キリスト教の救済観を考える際に重要なキーワードのひとつで、ペストが大流行した当時の中世ヨーロッパでとりわけよく使われた表現かつモティーフであった。

17 世紀、たいていの清教徒たちはさまざまな妖精たちを悪魔の眷属と信じて疑わなかったとされるが[13]、すくなくともここにみる限りにおいては、怪し火には禍々しきもの、忌まわしきものといった意味づけはされていない。つまり、建前上はカトリックと決別したはずのエリザベス朝ですら、ロンドンの民衆が好んで見た芝居の台詞中にこのような揺れがみられるのである。ここに、16 世紀当時の他界観がまさに変化のまっただ中にあったこと、

そして、構築される途上にあったことを読みとることができるのではないだろうか。

７．５　自然現象としての視線

やがて、科学の進歩と足並みをそろえるようにして、幽霊を非科学的だとして退ける人々が登場する。それと平行して、宗教現象であると強行に主張する人々の声は、小さくなるどころか逆に大きくなっていく。たとえば、類話３－１９で紹介した「煉獄で焼かれる人の手形」は、本当に幽霊が残した刻印であると、信者からは信じられている。そして科学と宗教という両陣営が形成されるのである。

オカルト的な意味を付与された怪し火の存在を、自然科学的なまなざしから否定するものとしては、たとえばミラノ公国生まれの医者にして数学者、神秘思想家でもあったカルダーノ（前述）[14]やガルカエウス（Johannes Garcaeus）[15]など、枚挙に暇がない。また、科学とは別に、好奇心が怪し火の正体を暴いた以下のような例もある。

（1834 年 4 月の新聞によると、フランス南西部の港町ラ･ロシェルでこんなことが起こったという）。

青く謎めいた燐光の幽霊が、このところ毎晩現われて住民を悩ませていたが、ついに罠で捕らえることに成功した。幽霊とは真っ赤な偽りで、近在の陽気な百姓が 5 人して毎晩高い木に登り、燐の玉を黒糸で操っていたものと判明した。かれらが自在に操る火の玉は、人が追うと急に見えなくなり、すぐ反対側に別のが現われて人の注意を惑わせる。これを数回繰り返したあと、今度は複数の火の玉が同時に現われる。こんないかさまが分別あるはずの者までおびえさせていたわけだが、ついに肝のすわった者が現われて、垣根の陰から一部始終を観察して茶番を見抜いたのである。5 人のペテン師は現行犯で逮捕されたが、目的がなんであったのか定かではない。この話でおもしろいのは、悪ふざけ屋たちのいかさまを、ある科学委員会が"驚くべき気象学的現象"として報告しようとしていたことである。[16]

はたして犯人たちが何を思ってこうしたペテンを行ったのか、理由は知るよしもない。おそらく全ての怪し火に上記のようなトリックが隠されていた訳ではないだろうが、当時収集された伝承の中に、嘘や勘違いが含まれていた可能性も、往々にしてあっただろう。とはいえ、自然科学的な視座から怪し火を観察し、純粋に美しい現象だと述べている記録もある。1812 年に上梓されたゲーテの『詩と真実』第 2 部中で言及される、ハーナウ近郊に出現したという怪し火のことだ。

われわれは万聖門を通って市外へ出、やがてハーナウをあとにした。ついでわれわれの到った地方は、いまの季節ではかくべつ目を楽しませてくれるものはなかったが、その目新しさによって私の注意をひきつけた。降りつづく雨のために道は極端に悪くなっていた。（中略）そのためわれわれの旅は愉快な楽しいものではなかった。しかし私はこの湿った天候のおかげで、おそらくきわめて珍しいといえるような自然現象を目にすることができた。きわめて珍しいというのは、その後私はこれに似た現象を二度と見たことがないし、ほかの人もそれを認めたということを聞かないからである。すなわち、われわれは夜になってからハーナウとゲルンハウゼンのあいだにある高地をのぼっていた。そして、外は暗かったが、この行程の危険と困難に身をさらすよりは、むしろ徒歩で行こうと考えた。突然私は道の右手の下のほうに、奇妙な具合に照らしだされている一種円形劇場めいたものを見た。つまり、じょうご状になった場所に、無数の小さな光が階段状に上下に重なってきらめいていて、目もくらむほど明るく輝いていたのである。しかし目をいっそう混乱させたのは、それらがじっとしていないで、上下左右に飛びまわっていたことである。しかしたいていのものは一カ所にじっとして、ちらちらと輝いていた。私はもっと念入りに観察したいと思っていたが、しぶしぶこの見ものから呼びもどされた。御者に尋ねてみても、この現象にはなんの関心も示さなかったが、近くに古い石切り場があり、その真ん中の深くなったところに水がたまっているといった。これが鬼火の伏魔殿であったのか、それとも光を発する生物の集団であったのか、私はそのいずれとも断定しようとは思わない[17]。

ゲルンハウゼンへ向かう途中、ハーナウ郊外でゲーテ一行が目撃した怪火は、窪地でちらちらまたたき、上下左右に飛び回っていたとある。なにゆえこうした現象が発生したのか、目撃されたのか。その原因は棚上げにするとしても、ゲーテはここで、宗教的な説明は一切加えておらず、自然現象として理解しようと試みている点に注目したい。『詩と真実』が書かれた 19 世紀初頭には、すでにして、合理的視線により、オカルト的世界もしくは不合理な謎への、浸食が始まっていたと読み解くことができるからである。

ゲーテは怪し火に関するザーゲについては言及しないが、ここで彼は彼なりに、怪火現象を「鬼火の伏魔殿」か「光を発する生物の集団」なのか、と類推している。むろんゲーテは当代きっての知識人であって、決していわゆる民衆ではなかったから、民衆の言説ともいえるザーゲと同レヴェルで比較することはできないが、それでも、何らかの自然現象に対してのフォーク・エティモロジックな説明、すなわち現象の（民衆的）理解が、民衆の間で独自に類推され、編み出された可能性があるということは、できるのではないだろうか。

[1] シェイクスピア: 2002, pp.65-66.

[2] 井出: 2001, pp.54.

[3] 『ハムレット』の初演は 1600 年だと推定されているが（野島: 2002, p.372）、ストーリーの原型は 12 世紀末に編まれた『デンマーク史話(Historia Danica)』までさかのぼるという。その第３話にアムレトゥス(Amulethus)の物語があり、あらすじはシェイクスピアのものに酷似している。しかしそこには幽霊は登場せず、息子は自発的に復讐へと向かう（野島、372 頁以下）。じつは、シェイクスピアの『ハムレット』における幽霊のアイディアは、セネカの復讐悲劇に源泉がある。エリザベス時代、古典作品の復興が流行し、さかんに翻訳・上演され、たとえばプルタークの『英雄伝』、オウィディウスの『変身譚』などとならんで、セネカの痛ましいまでに残酷な復讐劇も英訳されている。たとえば、1587 年に初演されたトマス・キッドの『スペインの悲劇』は、セネカの復讐劇を翻案したものとして知られているが、シェイクスピアは、ロンドンのどこかの芝居小屋で、おそらくこの作品を観劇し、自作のヒントを得、さらに洗練された心理劇を創造する源としていただろう。

【図注 7-1】　中世における聖史劇の上演（ルメートル: 2002, p.174 より引用）

[4] 聖史劇とは、キリストの受難や聖人の殉教などのキリスト教的な物語を、演劇形式で上演する宗教劇で、中世末期に成立した。成立当初は教会堂の内部で上演されていたものが、やがて市中で、しかも数日間も連続上演されたりするようになった（図注７－１参照）。

聖史劇は、当初、キリスト教に対しての理解を民衆が深めるための素材として考案されたはずだったが、民衆にとっては、教義の内容云々はさておき、聖史劇の観劇はうってつ

けの娯楽となった。とはいえ聖史劇の場合、題材は必ず宗教的な物語にとられていたから、民衆は愉しみながら同時にキリスト教的な考え方を教育されていたことになる。聖史劇の舞台が教会堂の中から市中に出たことで、より多くの人の目に触れるようになった。ルネサンス時代、絵画にドラマ性が付加されていくが、それは、画家たちが聖史劇からインスピレーションを得ていたからだともいわれる。

また、ドイツ南部の小市オーバーアマガウ（Oberammergau）で 10 年に一度上演され続ける聖史劇・キリストの受難劇は、ペスト退散を記念して 17 世紀に始まったものである。いまなお営まれ続けるものとしてつとに有名で、次回上演は 2010 年。

[5] 井出: 2001, p.56 より引用。

[6] ル・ゴッフ: 1988; 1989 を参照。

[7] Luther: 1964, S.385.

[8] Luther: 1970, Nr.21（13. November 1530）, Predigt am 22.Sonntage nach Trinitatis nachmittags, S.177.

[9] 聖エギッド教会はクラーゲンフルト最古の教会で、すでに 1255 年の記録にみられる。現在ある建物は華やかなバロック様式のため、一見しただけではそれほど伝統ある教会のようには見えないが、じつはこの地域一帯は 16 世紀末から 17 世紀末にかけて数度にわたり大震災に見舞われている。教会堂自体は 1690 年 12 月 4 日の地震で壊滅的な被害を受けたが、のちに現在見られるように全面修復されている。

[10] 祭壇のメインである十字架祭壇の中央には磔刑像、左右にはマリアと洗礼者ヨハネの像がそれぞれ配置されている。しかしこれは十八世紀に設置されたものではなく、19 世紀後半に、隣州シュタイアーマルクの州都グラーツの彫刻作家ヤーコプ・クシエル（Jakob Gschiel）の手になるものに交換されている。

[11] ただし、4 体のうち 2 体は盗難にあったためのちに作り直された。しかしそれがどれなのかについては、記録がないためはっきりしない。

[12] シェイクスピア: 1983, pp. 127-128. なお、当該部分の英語の原文は以下の通り（テクストは、日本放送協会・編: 1982 によった）。

Falstaff　Do thou amend thy face, and I'll amend my life: thou art our admiral, thou bearest the lanthorn in the poop, but 'tis in the nose of thee: thou art the Knight of the Burning Lamp.

Bardolph　Why, Sir John, my face does you no harm.

Falstaff　No, I'll be sworn; I make as good use of it as many a man doth of a death's head, or a memento mori: I never see thy face but I think upon hell-fire and Dives

that lived in purple; for there he is in his robes, burning, burning. If thou wert any way given to virtue, I would swear by thy face: my oath should be, 'By this fire, that's God's angel'. But thou art altogether given over, and wert indeed, but for the light in thy face, the son of utter darkness. When thou ran'st up Gadshill in the night to catch my horse, if I did not think thou hadst been an ignis fatuus or a ball of wildfire, there's no purchase in money. O, thou art a perpetual triumph, an everlasting bonfire light! Thou hast saved me a thousand marks in links and torches, walking with thee in the night betwixt tavern and tavern; but the sack that thou hast drunk me would have bought me lights as good cheap at the dearest chandler's in Europe. I have maintained that salamander of yours with fire any time this two-and-thirty years; God reward me for it!

Bardolph 'Sblood, I would my face were in your belly!

Falstaff God-a-mercy! So should I be sure to be heart-burned.

[13] Briggs: 1967, p.11（ブリッグス: 1991, p.18）.

[14] Cardanus: 1557, Lib.14, Cap.69.

[15] Garcaeus: 1568, Cap.9.

[16] Plancy: 1993（プランシー: 1990, p.254）.

[17] ゲーテ: 1979, p.216, 第２部６章.

終章　伝承のトリアード

民間伝承において、燃える人に仮託されて語られる死生観が依拠する枠組みは、キリスト教会が提供する他界の構図に着想を得ているのではないか。これが、本稿第 3 章で縷々事例を参照した末に導かれた帰結であった。第 4 章以降、とくに第 5 章から第７章にかけては、「燃える人」伝承が成立するにあたっての不可欠な前提、キリスト教会が提供した他界観が、はたしてどのような来歴をもっているのかについて検討した。旧来からあった祖先崇拝がキリスト教会の論理に取り込まれ、死者と生者と聖職者とが、「祈り」を介してつながれたこと。そして、初期キリスト教会が提供する枠組みにおいては公には許されていなかったはずの、「死後を生きる者」すなわち幽霊という観念が、煉獄の誕生により実質的に公認され、キリスト教徒も死後の生を得たこと。同時に、生きている間に犯した違反を、死の前後を問わず金銭や祈りで贖（ってもら）うことも可能になったため、何らかの形で浄罪さえすれば、罪ある者にも天国への門扉は開かれるようになったこと。これが、キリスト教会が時間をかけて作り上げていった他界の構図の概要であった。

本章では、本稿の締めくくりとして、祈りと浄罪の連鎖を担う人々の構図、すなわち、聖職者、生者、死者の三者が織りなすトリアード（三角形）について、「燃える人」伝承とからめて考えていきたい。

８．１　燃える人をめぐる三角関係

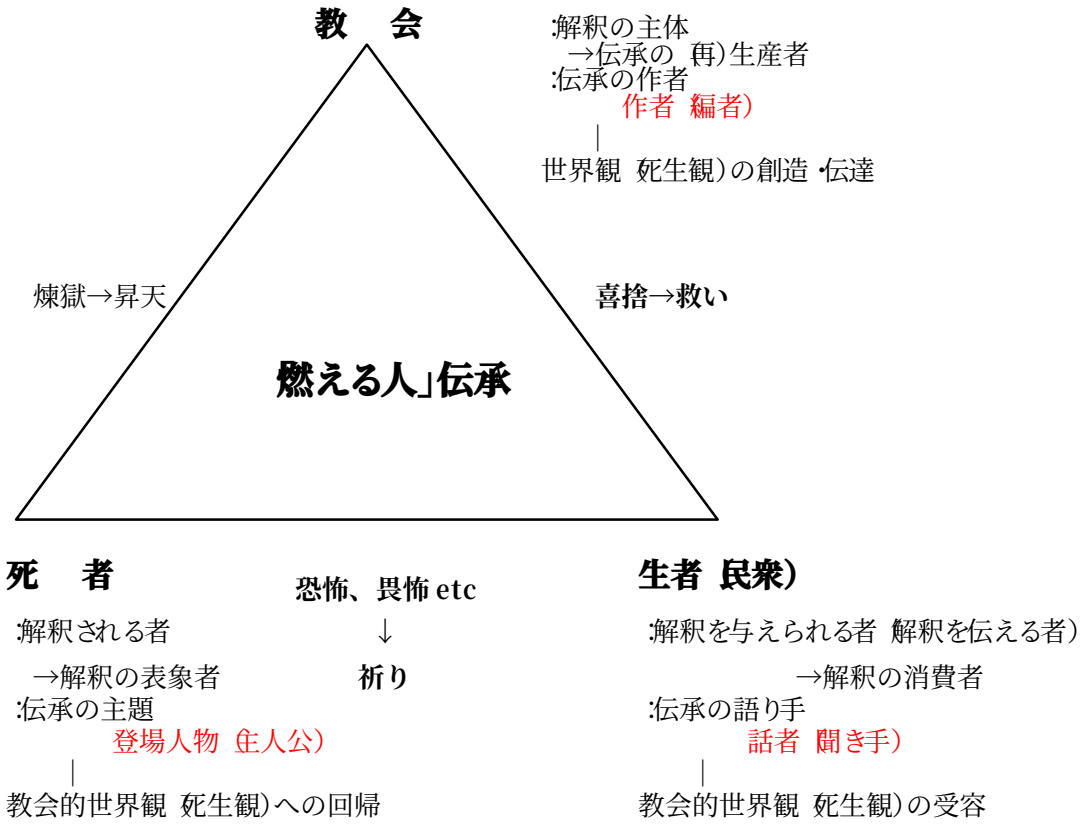
図８－１は、本稿で検討してきたキリスト教会が提供し構築してきた関係性を、模式的に示したものである。これを、《「燃える人」伝承をめぐるトリアード》と呼ぼう。補足として言を添えると、トリアードをより厳密に描こうとするならば、図にあるような美しい正三角形にはならないと筆者も承知している。とはいえこの模式図は、あくまでも三者の関係を簡便に把握するために提示するものであり、便宜的に簡略化して表しているものだという点について、前もってお断りしておく。

さて、三角形の３つの頂点には、おのおの、伝承を解釈する主体としての教会と、解釈を与えられ、伝える者としての生者、そして解釈される者としての死者がいる。ここで生者は、教会の論理の発信者たる聖職者を除くという意味で、民衆と置き換えてもさしつかえない。民衆は、解釈を与えられる者・伝える者、すなわち解釈の消費者でもあるし、教会から与えられた枠組みをブリコラージュする、伝承の再生産者でもある。そして死者は、解釈される者、解釈の表象者であり、伝承の主題でもある。

上記の枠組みを、文学的な用語に置き換えてみると、以下のようにもなるだろう。キリスト教会は、伝承の作者あるいは編者。燃える人としての死者は、伝承の登場人物あるい

は主人公。そして、「燃える人」伝承を語り継いでいく、話者・聞き手（オーディエンス）が生者としての民衆である。死者は、最終的には教会的世界観（死生観）へと回帰し、教会はそれを受容する。両者を結ぶラインにあって、両者を有機的に結合させているのが煉獄→昇天の観念ということになろう。また、教会と生者は、喜捨という紐帯で結びついており、救いの観念へと向かう。死者と生者を結ぶのは何か。それが祈りである。祈りが制度化する前、すなわち、死者がキリスト教の体系に取り込まれるまで、死者は、その死穢によって生者に恐怖を呼び起こし、両者は相互に対立しあういわば仇敵であった。しかし、死者がキリスト教における救いの構図に絡め取られ、自力では地上から消えることができなくなって以来、恐怖の感情は転位し、浄罪の鎖をリレーする宗教共同体内の、たのもしい隣人同士へと変換していったのである

３つの頂点および 3 辺のうちのいずれかひとつでも欠落すれば、もはやこのトリアードは機能せず、雲散霧消してしまう。しかし、欠落さえしなければ、教会を介して死者と生者を結ぶ浄罪の鎖は、際限なく続いていくのである。燃える人という、一見荒唐無稽な怪異は、こうした浄罪の鎖の存在を具現化し、聞く者が自らの死後の生についてより生々し



【図 8-1】　燃える人」伝承をめぐるトリアード

く想像する、インデックスとして機能していたともいえる。

８．２　祈りと浄罪の連鎖

トリアードを構成する辺と頂点についてみていこう。まず、死者と生者を結ぶ辺は、「恐怖」や「畏怖」から転位した「祈り」である。「死」という、誰もが一度は経験するのに、この世には誰ひとりとしてそれを実体験として語りえるものはいない謎めいた出来事を、はたしていかに理解するか。中世の教会文学にエッダやサガの世界観が反映していることを指摘したルクートーや[1]、煉獄が導入された当時に死生観が変化していくありさまを、「贖罪規定書」を手掛りに読み解いた阿部謹也[2]の指摘からもいえるように、生者が死者と対峙するその姿勢は、キリスト教が定着する以前はあくまでも恐怖と畏怖に満ち、両者の関係は拮抗していた。この論理に従えば、死者と生者はいわばライバル関係にある。それに対し、キリスト教の論理では、死は、神の膝元への永遠の回帰として説明される。善人であれば神の御許へ赴くのだから、恐るるには足らず、と。

類話４－１でみたアイスランド・サガにおいては、死者たちは生者を恐れさせ、生者と対等に渡りあう存在であった。厳密に聖書に依拠する他界観、すなわち天国対地獄という二項対立の図式では説明しきれない中間領域、死者が生き生きと死後を生きる場が、そこにはみられたのである。

キリスト教における他界観では、建前上、死後も生き続けている死者、つまり幽霊は、煉獄の誕生以前は、公式にその居場所が認知されることは決してなかった。しかし、それ以前の他界観、少なくとも類話４－１で参照したアイスランド・サガのフラップをみる限りにおいては、死者もまた生者と同じくらい生き生きと、この世に居場所が振り分けられていたことになる。

幽霊についてはとりあえず棚上げにし、祈りに戻ろう。キリスト教の聖職者コミュニティーは、教義解釈を発展させ、キリスト教に死者の日（11 月 2 日）を導入することで、祖先を崇拝する人々を自らの体系の中に取り込もうともくろみ、そしてそれに成功した。「異教徒は死者に祈り、キリスト教徒は死者のために祈った」。[3]　20 世紀初頭のフランス歴史考古学界を代表するサロモン・レナックのこの言葉には、異教的な儀礼とキリスト教的なそれとの違いが端的に表れている。

教父アウグスティヌスはたしかに祖先崇拝を否定したが、じつは、死者にまつわる祈りそのものを否定したわけではなかった。彼は、死者への祈りは無意味だが、キリスト教徒として、死んでしまった者のためにミサをあげ、祈? し、施すのは生者の勤めだ、と主張していた（本稿第５章　５．３）。拒否するためには、「拒否される対象」が多かれ少なか

れすでに実体化していなければならない。つまり、死者＝祖先への崇拝を、アウグスティヌスがあえて拒否すると明言した姿勢から、当時いかに祖先崇拝が一般的に行われていたか、読みとることができるのである。つまりは、キリスト教会が提供する他界観も、じつは、民衆の信仰を取り入れながら、聖職者たちが構築していったものだったのである。

祖先崇拝の枠組みのなかでは、祈る対象は、あくまでも祈る人物が生前縁故をもった故人に限られ、不特定多数の死者に対して捧げられたのではなかった。しかし、祈りを仲介とすることで、不特定の死者と生者とが結ばれたのである。こうして祈りは、トリアードが機能するために不可欠な一要素となった。

「死者のために祈る」という構図が採用された場合、祈りは直接死者には届かない。祈りを送る生者と祈りを受け取る死者の間に、両者をとりもつなにものかが不可欠になってくる。仲介者とは誰か。端的に言ってしまえば、キリスト教会にほかならない。三者を結ぶ架け橋が具体的にどのように機能していたかについて示す逸話が、ペトルス・ダミアーニの著作といわれる『さまざまな亡霊出現と奇跡について』にみられる。聖母への祈りが、贖罪中の死者（代母マロジア）を死後の苦しみから救うという、例の話だ（類話６－６）。

そこには、聖母昇天の祝日に信者たちが唱える祈りの言葉が聖母に届き、その結果、聖母から恩寵が下り、それが、マロジアのみならず《おびただしい数の》人々、つまりは同じ神を信仰する不特定多数の同胞たちを、苦業から救ったことが描かれていた。そしてそれは、祈りを捧げ、代母を目撃した「ある女」もまた、死後は罰を受けなければならないことを暗示し、彼女が業罰から解放され天国へと到るためには、同胞の祈りを必要とするという依存の構図をも同時に物語っている。神の元へと至る前に、人は罪を浄めなければならない。死後通過しなければならない浄化の場、天国の前庭、それが煉獄なのである。それゆえ、トリアードのもう一辺、教会と死者を結ぶ辺には、「煉獄」と、そこを通過することで得られる「昇天」が配置されている。

教会と生者を結ぶ辺は、「喜捨」と、それによってより確実になる「救い」である。煉獄という浄化の場が誕生し、受容されていった背景には、9 世紀から 12 世紀にかけての西洋世界における飛躍的な発展があったことはすでに述べたとおりである。経済発展の一翼を担ったのは、旧来のキリスト教の枠組みでは決して救われることのなかった職業に従事する者たち、たとえば高利貸しだった。煉獄は、社会の発展を支えた彼らにとって死後を照らす光明となった。光明と捉えたのはもちろん高利貸しだけではない。喜捨や祈りによる浄罪という原理を得た中世のキリスト教信者たちは、遺された者たちが自分のために取りなしの祈りを、そして喜捨をしてくれることによって、死後の苦しみの期間は短縮され軽減されることを信じ、求め、与えた。中世末期の聖職者たちが説いたのは、死後煉獄の苦しみから、より確実かつより早く解放されるには、より多くを教会に寄進するのがもっと

も早道であるという、他界への道であった。

８．３　死者と生者と教会の構図

教会、生者、死者が配置されている各頂点についても付言しておきたい。「教会」および「生者」については、おおむね、「エリート（文化）」と「民衆（文化）」と換言できるが[4]、「死者」については若干の説明を要するだろう。筆者の考えでは、死者は生者に認識されて初めて死者となる。生者のまなざしが死者を生きさせるという認識枠組みについては第４章の最後で言及したため繰り返しを避けるが、いずれにしても、生者がいなければ死者もいないことだけはいっておこう。

死者が生者の前に現れたとき、彼らは「幽霊」と呼ばれる。繰り返し述べているように、初期キリスト教会が提供した枠組みの中では、幽霊という現象は決して公式に現れることはなく、現実世界から切り取られることも決してなかった。しかしキリスト教会は、さまざまな妥協の末に、民衆が持っていた土着の信仰に基づく幽霊という説明原理を、自分たちの体系の中に取り込んでいったのである。

初期キリスト教が世界宗教としての地位を確立していこうとしていたその過程で、布教活動に励むものたちは、「異教的な」人々の宗教心とたえず対峙していた。それは、原理原則を貫こうとすれば唯一絶対の神を頂点に戴く信仰とは、全く相容れないものであったはずだ。にもかかわらず、聖職者や信者たちは従来の世界観を再解釈し、折り合いをつけつつ、世界をヴァージョンアップさせながら構築していったのである。本稿第６章では、聖職者が語る幽霊譚をみたが、これなどはキリスト教会の論理が変化したことの証左であるとみることができる。一見キリスト教化されたと思える非キリスト教的な慣行は、多少なりとその身をよじらせながらも、綿々と営まれつづけた。蔵持がいみじくも指摘するように、《キリスト教化における<吸収>とは、成立宗教による土着文化の単なる再解釈（ラベリング）として捉えるだけではなく、むしろ前者が後者のシナリオをほとんどそっくり温存することによって、民衆とのあいだの乖離を縮小しようとした仕掛けとも考えられるのだ》[5]。

死者が幽霊として生者のとなりに出現し、居場所を獲得すると、生者は、異端と断罪されることなく堂々と、幽霊についての物語を消費することができるようになる。むろん、そこには、幽霊についての大枠を設定する、キリスト教会の論理がなければならないが、伝承の話者として、民衆は幽霊話を受け継ぎ、語り聞かせていく。幽霊の存在が、祈りの連鎖を支えていたともいえる。

祈りを介して、死者は生者に完全に依存する。生者が祈らなければ、死者は昇天できないからだ。また生者は、救いを求めて教会に依存する。教会が神にとりなしてくれなければ、

生者の唱える祈りは死者に届かないからだ。死者と生者、生者と教会という２つの関係については明白だが、教会と死者の関係はどうだろうか。死者は、「昇天」という永遠の解放を教会から得ていることから、一見、教会が、生者だけでなく死者をも依存させているようにも思える。しかし思い起こしてみれば、初期中世には隠蔽されていた死者たちに、再び息吹を吹き込んだのは、まぎれもなくキリスト教の聖職者たちであった。つまり、生者が暮らす世界、現世に死者を幽霊として甦らせ、死後受けるはずのおぞましい仕打ちについて死者に語らせることで、自らの存在意義と正当性をネガティヴな形で補強するのに利用してきたのは、キリスト教会にほかならない。死者なくしては、キリスト教会の正当性は保証されない。つまり、より端的に言ってしまえば、じつはキリスト教会は死者を依存させているのではなく、死者に依存しているといえるのである。

こうしてみると、死者と生者と教会を結ぶトリアードが、じつは死者＜生者＜キリスト教会＜死者……の順に、三つ巴の構図をなしていることがわかる。煉獄、そして浄罪という観念が編み出されたことから、キリスト教は無関係な他者を関係づけられた隣人へと変換するメカニズムを手中に収めた。かつて祖先崇拝の枠組みにあって自らの祖先のみに捧げられた祈りが、宗教共同体を介して、不特定多数へと届き、不特定多数から届くようになったのである。死者と生者の間に結ばれた直線的な互酬性が、教会という第三の局の登場により、三つ巴のトリアードへと転換し、しかも、教会が祈りを信者の隅々にまで再分配する役目を請け負ったのである。こうした構図に支えられつつ語られてきたのが、たとえば「燃える人」伝承であったといえよう。

８．４　「燃える人」伝承からみえるのは

煉獄の誕生により、教会は、死後の時間がいかに過ごされるかについての説明原理を得た[6]。この説明原理は、聖職者の思惑を越え、元来民衆がもっていた「強い死者」像と結びつき、死者は幽霊としてふたたび現世に現れる口実を得たのだ、ということもできる。ただし、かつてのように生者のライバルとして跳梁するのではなく、弱々しく救済を求める哀れな魂として。生者が暮らす世界を彷徨う幽霊と、その救済を前提とする他界の構図は、やがて民衆に浸透していったはずだ。というのも、教義が民衆に浸透して初めて、「燃える人」伝承は言い伝えとして成立することができ、しかも浸透にあたっては、おしきせの世界観とは異なる民衆的理解がされており、それに基づき物語化がされていなければならないからだ。つまり、教会が提供する他界観が読み替えられた末、「燃える人」伝承として結実したと考えられる。

たとえば地獄の口や最後の審判といった、この世の終末の表現を目にしたとき、人は自

らの死後に思いをめぐらし、底知れない恐怖を感じたに違いない。自らのうちにわき起こったアモルフな恐怖が、キリスト教の枠内で培われた「救いを求めて徘徊する幽霊」という説明原理と結合したことが、「燃える人」伝承が誕生し、維持されてきた理由ではないだろうか。民衆は、彼らの手持ちの素材を駆使しつつ、死への恐怖を彼らなりに転位させ、ブリコラージュし、説明した。そして説明の結果が、「燃える人」という具体的な伝承モティーフとして昇華していった。――これが、本稿の最後に、筆者がかかげる仮説である。

この仮説を裏付けるのは、「燃える人」伝承が散見されるフィールドの位置である。すでにみたようにこのモティーフは、幽霊たちとは異なり、中世に編まれた文献にみられるものでも、キリスト教の聖職者が記録したモティーフでもない。民衆が語り継いできた言い伝えのなかに（のみ）みられるモティーフだからである。

教会が提示する信仰のイメージを、民衆は、自分たちの文化的コンテクストのなかに確実に据え、再解釈して絡め取っている。つまり、民衆文化がキリスト教の《温存装置》ともなっているのである[7]。言い換えられたエリートの言説が、民衆的理解というフィルターを経て民衆の元から発信されたとき、民衆の文化を取り入れたエリート文化が亜種とみなされないのと同様、もはやそれは、エリート文化の亜種ではない。そうではなく、独自に育まれ、独自のメカニズムを備えた民衆の文化なのである。

とすれば、「燃える人」伝承は、エリート文化と民衆文化がせめぎあい、しのぎを削る界面を活性化させ、教会が民衆文化に根付くための大きな戦略の一翼を担っていたのではないか。だが、エリート層から発信される情報を、民衆は、自らの思考的枠組みを駆使して彼らなりに理解・操作し、さらにそれを自分たちの言葉で言い換えてもいた。その言い換えられた言葉のひとつが、まさしく「燃える人」伝承だった。伝承のもつ社会的・歴史的・文化的な役割がここにある。

[1] Lecouteux: 1987. **および** Fées, Sorcières et loups-garous au Moyen-Age, paris, 1992, **とくに** pp.171 **以下**。

[2] **阿部**: 1989

[3] Reinach : 1900, p.164.

[4] **本文中にも明記したように、エリート（文化）が、民衆（文化）に一方的な影響を及ぼすとは筆者は決して考えていない。エリートといえど民衆理解を無視して自らの理解を押しつけることはできないし、しかも、エリートが編みあげた言説は、また、エリートたち自身をも拘束するのが常であるからだ。**

[5] **蔵持**: 1986, p.238.

[6] **マール**, **エミール（田中仁彦他訳）『ゴシックの図像学（下）』国書刊行会**, **東京**, 1998, 283 **頁**.

[7] **蔵持**, 1986, p.239.

あとがき

本稿ができあがるまでに、さまざまな方々にさまざまな形でお世話になった。

学部学生時代から指導して頂いている蔵持不三也先生は、筆者がヨーロッパ民族学へと足を踏み入れるきっかけを与えてくれただけでなく、筆者がフライブルクに在学中も、アルザスやロレーヌでのフィールドワークへの参加を呼びかけてくれた。そのおかげで、６年に及ぶ留学期間中、メンタルな面で日本への関心がとぎれることはなかった。蔵持先生は、本稿執筆にあたっても、最後まで根気よく指導してくださった。修士課程１年のときにＴ．Ａ．を務めさせていただいた谷川章雄先生からは、研究姿勢などの面で多大な影響を受けた。

フライブルク大学の Prof. Dr. Werner Mezger は、筆者が同大学に在学中、博士論文の指導を引き受けてくださった。教授の民衆文化に対してのまなざしが、筆者の研究姿勢に色濃く反映していると言っても過言ではない。また、ザーゲ資料所の実質的な管理者である Frau Gertraud Meinel は、Rutz Röhrich 元教授の弟子で、本稿執筆の最初のきっかけ、ザーゲ資料との出会いをとりなしてくださった。

演習指導の同輩や後輩たちからは、執筆の際、さまざまな形でサポートを受けた。フライブルク大学への留学経験が本研究にとって決定的な意味を持っているのと同様、６０５実験室という「場」がなければ、この研究は生まれなかったと言っても過言ではない。この場を借りて全ての関係者に、心より感謝の言葉を述べたい。

ありがとうございました。

2004 年 4 月

筆者誌す

● 引用・参考文献

1979 アイスランド・サガ, 谷口幸男・訳, 新潮社, 東京.

1946 バイエルン部族法典, 世良晃志郎・訳, 弘文堂, 東京.

2000 DUDEN - Das grose Worterbuch der deutschen Sprache, PC-Bibliothek Version 2.01 mit Plus-Paket, Dudenverlag, Mannheim-Leipzig-Wien-Zurich

1993 聖書 新共同訳

1999 Oxford English Dictionary, CD-ROM, Version 2.00, Oxford University Press, New York.

Aarne, Annti & Stith Thompson

1961 The Types of the Folktale, Suomalainen Tiedeakat, Helsinki.（ただし、筆者が参照したのは 2. revision, 4. print., Acad. Scient. Fenn., Helsinki, 1981）

阿部謹也

1974 ドイツ中世後期の世界, 未来社, 東京.

1978a 刑吏の社会史, 中央公論社, 東京.

1978b 中世を旅する人びと ―ヨーロッパ庶民生活点描, 平凡社, 東京.

1987 甦る中世ヨーロッパ, 日本エディタースクール出版部, 東京.

1988 ハーメルンの笛吹き男 ―伝説とその世界, 筑摩書房, 東京

1989 西洋中世の罪と罰 ―亡霊の社会史, 弘文堂, 東京.

Akoun, Andre

1990 L'Europe, Brepols, Paris.

Alpenburg, Johann Nepomuk, Ritter von

1861 Deutsche Alpensagen. Gesammelt und hrsg. von -. Wien.

荒俣宏ほか

1987 バロックの愉しみ, 筑摩書房, 東京

アリエス, フィリップ（Aries, Philippe）

1983 死と歴史：西欧中世から現代へ, 伊藤晃, 成瀬駒男・訳, みすず書房, 東京（Essais sur l'histoire de la mort en Occident du Moyen-Age a nos jours, Seuil, Paris, 1975）.

1990a 図説 死の文化史 ―ひとは死をどのように生きたか, 福井憲彦・訳, 日本エディタースクール出版部, 東京, 1990（Images de l'homme devant la mort, Seuil, Paris, 1983）.

1990b 死を前にした人間, 成瀬駒男 訳, みすず書房, 東京 (L' Homme devant la mort, Seuil, Paris).

Assion, Peter

1972 Weisse, Schwarze, Feurige, neugesammelte Sagen aus d. Frankenland; Badenia-Verlag, Karlsruhe.

アットウォーター, ドナルド, キャサリン・レイチェル・ジョン (Donald Attwater & Catherine R

1998 聖人事典, 山岡健 訳, 三交社 (The Penguin dictionary of saints, Third Edition, Penguin Books, Harmondsworth, Middlesex, 1995).

アウグスティヌス

1979-2002 アウグスティヌス著作集, 教文館, 東京.

1982 神の国, in: アウグスティヌス著作集 第12巻, 茂泉昭男ほか 訳, 教文館, 東京, 1982.

Baader, Bernhard

1973 Volkssagen aus dem Lande Baden und den angrenzenden Gegenden, Olms, Hildesheim, Volkskundliche Quellen 4: Sage (1851, 1859版のリプリント).

Bachtold-Staubli, Hanns & Eduard Hoffmann-Krayer (hrsg.)

2000 Handworterbuch des deutschen Aberglaubens. 10Bde., Walter de Gruyter, Berlin-New York (1927～1942年版のリプリント).

バーバー, ポール (Barber, Paul J.)

1991 ヴァンパイアと屍体 : 死と埋葬のフォークロア, 野村美紀子 訳, 工作社, 東京 (Vampires, burial and death : folklore and reality, Yale University Pr., New Haven, Conn., 1988).

バラクラフ, ジェフリー 編 (Barraclough, Geoffrey)

1993-1994 図説キリスト教文化史, 全3巻, 別宮貞徳 訳, 原書房, 東京 (The Christian world, a social and cultural history of christianity, Thames and Hudson, London, 1981).

Bartsch, Karl

1879 Sagen, Marchen und Gebrauche aus Meklenburg. Gesammelt und hrsg von -. Bd.1: Sagen und Marchen, Wilhelm Braumuller, Wien.

1880 Sagen, Marchen und Gebrauche aus Meklenburg. Gesammelt und hrsg von -. Bd.II: Gebrauche und Aberglaube, Wilhelm Braumuller, Wien.

Benzel, Ulrich

1957 Volkserzahlungen aus dem nordlichen Bohmerwald, Schriften des Volkskunde-Archivs, Bd.5, Elwert, Marburg.

1962 Sudetendeutsche Volkserzahlungen, (=Schriften des Volkskundearchivs Marburg, Bd.10), Elwert, Marburg.

1965 Volkserzahlungen aus dem oberpfalzisch-bohmischen Grenzgebiet, (Marchen aus deutschen Landschaften ; 6), Aschendorff, Munster.

Berschin, Walter (hrsg.)

1983 Vitae Sanctae Wiboradae, die altesten Lebensbeschreibungen der heiligen Wiborada (Mitteilungen zur vaterlandischen Geschichte, 51), Histor. Verein d. Kantons St. Gallen, St. Gallen.

ベルティ, ジョルダーノ (Berti, Giordano)

2001 ヴィジュアル版 天国と地獄の百科 ―天使・悪魔・幻視者, 竹山博英, 柱本元彦・訳, 原書房, 2001（mondi ultraterreni, Mondadori, Milano, 1981）.

ベッテルハイム, ブルーノ（Bettelheim, Bruno）

1978 昔話の魔力, 波多野完治, 乾侑美子・共訳, 評論社, 東京（The uses of enchantment, the meaning and importance of fairy tales, Penguin Books, Harmondsworth-Middlesex, 1979, リプリント）

Bindewald, Theodor

1873 Oberhessisches Sagenbuch, aus dem Volksmunde gesammelt. Neue vermehrte Ausgabe, Heyder und Zimmer, Frankfurt/M.

Biraben, Jean-Noel

1976 Les hommes et la peste en France dans les pays europeens et mediterranees, II, Mouton, Paris.

Birlinger, Anton

1874 Aus Schwaben: Sagen, Legenden, Aberglauben, Sitten, Rechtsbrauche, Ortsneckereien, Lieder, Kinderreime : neue Sammlung, 2Bde.(Bd.1), H. Killinger, Wiesbaden.

Bock, Emmi

1973 Sagen und Legenden aus Ingolstad und Umgebung, gesammelt von -. 1. Auflage, Pinsker, Mainburg.

1975 Sagen aus Hallertau, gesammelt und herausgegeben von -, illustrieret von Guido Zingerl, Pinsker, Mainburg

1977 Sagen aus Niederbayern, gesammelt u. hrsg. von Emmi Bock. Ill. von Guido Zingerl, Pustet, Regensburg.

Bodens, Wilhelm

1937 Sage, Marchen und Schwank am Niederrhein, ges. u. hrsg. Wilhelm Bodens, (Deutsches Volkstum am Rhein ; 3), Rohrscheid, Bonn.

Bolte, Johannes & Georg Polivka

1982 Annmerkungen zu den Kinder- und Hausmarchen der Bruder Grimm, 5Bde., Georg Olms Verlag, Hildesheim-New York（リプリント版）.

Brachwitz, Oskar

1937 Sagen aus dem Kreis Zauch-Belzig. Balzer in Komm., Belzig, 1937 (=Schriftenreihe der Heimatkundlichen Arbeitsgemeinschaft fur den Kreis Zauch-Belzig. Reihe IV, Bd.1).

Brednich, Rolf Wilhelm

1994 Grundriss der Volkskunde, Einfuhrung in die Forschungsfelder der europaischen Ethnologie,2.Aufl..Reimer, Berlin）.

Brednich, Rolf Wilhelm（ブレードニヒ, ロルフ・W.）

1964 Volkserzahlungen und Volksglaube von den Schicksalsfrauen, Suomalainen Tiedeakatemia, Helsinki（運命の女神 ―その説話と民間信仰, 竹原威滋・訳, 白水社, 東京, 1989）.

Bremond, Claude & Jacques Le Goff & Jean-Claude Schmitt

1982 L' "Exemplum", Brepols, Turnhout.

Briggs, Katharine（ブリッグス, キャサリン）

1967 The fairies in tradition and literature, Routledge & Kegan Paul, London（イギリスの妖精, 石井美樹子, 山内玲子 訳, 筑摩書房, 東京, 1991）.

1977 A Dictionary of fairies. Penguin Books, Middlesex（妖精事典, 平野敬一他訳, 冨山房, 東京, 1992）.

ブルックス, ジョン A.（Brooks, John A.）

1993 倫敦幽霊紳士録, 南條竹則, 松村伸一 訳, リブロポート, 東京（Ghosts of London, Jarrold Colour Publ., Norwich, 1982）.

Bruckner, Wolfgang (hrsg.)

1974 Volkserzahlung und Reformation, ein Handbuch zur Tradierung und Funktion von Erzahlstoffen und Erzahlliteratur im Protestantismus, Erich Schmidt, Berlin, 1974.

Burde-Schneiderwind, Gisela & Ina-Maria Greverus

1967 Vorbericht, in: Deutsches Jahrbuch fur Volkskunde. Akademie-Verlag, Berlin, Jg.1967, Bd.13, S.339-345.

Caesarius von Heisterbach

1910 Dialogus miraculorum, dt. von Ernst Muller-Holm, karl Schnabel, Berlin.

Cardano, Geronimo

1557 De Rerum Varietate, Petri, Basileae.

Carozzi, C.

1990 Les Carolingiens dans l 'au-dele, In: M. Sot, Nanterre (hrsg.): Haut Moyen-Age. Culture, education et societe. Etudes offertes Pierre Riche, Universite de Paris-X, 1990.

カステラン, イヴォンヌ（Castellan, Yvonne）

1993 心霊主義 ―霊界のメカニズム, 田中義廣 訳, 白水社, 東京（Le spiritisme. 7. ed., Que sais-je? no.64, P.U.F., Paris, 1954）.

コグラン, ローナン（Coghlan, Ronan）

1996 図説アーサー王伝説事典, 山本史郎 訳, 原書房, 東京（The illustrated encyclopaedia of Arthurian legends. Element Bks, Shaftesbury. , 1994）

Cowdrey, H.E.J.

1978 Two studies in Cluniac Histrory（1049-1126）, Studi Gregoriani 11, LAS, Roma.

Crowe, Catherine

1986 The night-side of nature, or, ghosts and ghost-seers , The Aquarian Press, Wellingborough（1848年版のリプリント）.

Danckert, Werner

1963 Unehrliche Leute. Die verfemten Berufe. Francke, Bern-Munchen.

Daxelmuller, Christoph

1985 Auctoritas, subjective Wahrnehmung und erzahlte Wirklichkeit. Das Exemplum als Gattung und Methode, in: G. Stotzl (hrsg): Germanistik ?Forschungsstand und Perspektiven, Teil 2. Berlin-New York, S.72-87

Deecke, Ernst

1911 Lubische Geschichten und Sagen, gesammelt von -. 5. Auflage mit Quellen und Literatur nachweisen versehen von HeinrichWohlert, Schmidt, Lubeck.

ドリュモー, ジャン (Delumeau, Jean)

1997 恐怖心の歴史, 永見文雄, 西沢文昭 訳, 新評論, 東京 (La peur en Occident, XIV. - XVIII. siecles, une cite assiegee, Fayard, Paris, 1978).

Depiny, Adalbert

1932 Oberosterreiches Sagenbuch, hrsg. von -, Pirngruber, Linz

Dietz, Josef

1965 Aus der Sagenwelt des Bonner Landes, (=Deutsches Volkstum am Rhein, Bd.7), Rohrscheid, Bonn.

Diplich, Hans & Alfred Karasek

1952 Donauschwabische Sagen, Marchen und Legenden. Donauschwabische Beitrage. Heft 6. Unterwegs, Munchen.

Dittmaier, Heinrich

1950 Sagen, Marchen und Schwanke von der unteren Sieg, von Heinrich Dittmaier, Rohrscheid, (Deutsches Volkstum am Rhein ; 5), Bonn.

Dold, Paul

1940 Die Sagenwelt Tuttlingens und seiner Umgebung, Bofinger, Tuttlingen.

Dorler, Adolf Ferdinand

1895 Sagen aus Innsbruck's Umgebung mit besonderer Berucksichtigung des Zillerthales, gesammelt u. hrsg. von Adolf Ferdinand Dorler, Wagner, Innsbruck.

Drescher, Karl

1929 Johann Hartliebs Ubersetzung des Dialogus miraculorum von Caesarius von Heisterbach : aus der einzigen Londoner Handschrift, Weidmann, Berlin.

Dressler, Fridolin

1954 Petrus Damiani, Leben und Werk (Studia Anselmiana / Pontificio Ateneo di Santo Anselmo ; 34), Herder, Romae.

Dunninger, Josef

1964 Frankische Sagen vom 15. bis zum Ende des 18. Jahrhinderts. Hrsg. von -. Zweite durchgesehene Auflage. (=Die Plassenburg. Schriften fur Heimatforschung und Kulturpflegen in Ostfranken Bd.21), Freunde der Plassenburg, Kulmbach.

エーレンライク, バーバラ, ディアドリー・イングリシュ

1996 魔女・産婆・看護婦 ―女性医療家の歴史, 法政大学出版局, 東京

Eisel, Robert

1871 Sagenbuch des Voigtlandes, Griesbach, Gera.

Engelien A. und W. Lahn

1868 Volksmund in der Mark Brandenburg. Sagen Machen, Spiele, Sprichworter und Gebrauche, gesammelt und hrsg von-, Schultze, Berlin.

Erich, Oswald Adolf & Richard Beitl (hrsg.)

1974 Worterbuch der deutschen Volkskunde, Kroner, Stuttgart.

Fabre, Daniel

1987 Le retour des morts, in: Etudes Rurales, 1987.

Fielhauer, Hannelore und Helmut

1975 Sagen des Bezirkes Scheibbs. Vollst. Sammlung aller bisher bekannten Sagen, Legenden, Schwanke und anderer Volksberichte. Red. v. Hannelore u. Helmut Fielhauer. (Heimatkunde des Bezirkes Scheibbs; 1), Radinger, Scheibbs.

Findeisen, Hans

1925 Sagen, Marchen und Schwanke von der Insel Hiddensee : aus dem Volksmunde gesammelt, sowie mit einer Einleitung und Anmerkungen versehen von -, L. Saunier, Stettin.

Fink, Hans

1969 Volkserzahlungen aus Sudtirol. Unveroffentlichte Quellen, gesammelt und zusammengestellt von -. (Veroffentlichung der Gesellschaft zur Pflege des Marchengutes der europaischen Volker 1969)

フーコー, ミシェル

1977 監獄の誕生 ―監視と処罰, 田村俶 訳, 新潮社, 東京

Frauenfelder, Reinhard

1933 Sagen und Legenden aus dem Kanton Schaffhausen. Gesammelt, erlautert und hrsg von -, Schoch, Schaffhausen.

Freudenthal, Herbert

1931 Das Feuer im Deutschen Glauben und Brauch, De Gruyter, Berlin-Leipzig.

Garcaeus, Johannes

1568 Meteorologia conscripta a Johanne Garcaeo, J.Scwerter, Witeberge.

Gath, Goswin Peter

1949 Rheinische Sagen. Von der Quelle bis zur Mundung. 3.Aufl. Staufen, Koln.

1957 Sagen und Legenden vom Siebengebirge, Greven, Koln.

ギアリ, パトリック (Geary, Patrick J.)

1999 死者と生きる中世 ―ヨーロッパ封建社会における死生観の変遷, 杉崎泰一郎 訳, 白水社, 東京 (Living with the dead in the Middle Ages, Cornell Univ. Pr., NY, 1994).

ティルベリのゲルウァシウス (Gervasii Tilberiensis)

1997 皇帝の閑暇, 池上俊一 訳, 青土社, 東京 (Otia Imperialia)

Gesellschaft fur das Schweizerische Landesmuseum (Hrsg.)

1994 Himmel, Holle, Fegefeuer. Das Jenseits im Mittelalter, Wilhelm Fink Verlag, Munchen.

ゲティングズ, フレッド (Gettings, Fred)

1994 オカルトの図像学, 阿部秀典 訳, 青土社, 東京 (Visions of the occult, a visual panorama of the worlds of magic, divination and the occult, Rider, London, 1987).

Ginzburg, Carlo

1981 Charivari, associations junnelles, chasse sauvage. In: J. Le Goff & J.-Cl. Schmitt: Le charivari. E.H.E.S.S et Mouton, Paris, 1981.

ジオベッティ, パオラ (Giovetti, Paola)

1994 天使伝説, 鏡リュウジ 訳, 柏書房, 東京 (Angeli - esseri di luce, messageri celesti, custodi dell'uomo, Ed. Mediterranee, Roma, 1989).

Glaettli, K.W.

1959 Zurcher Sagen, (Mitteilungen der Antiquarischen Gesellschaft in Zurich; Bd.41), Rohr, Zurich.

Glassie, Henry

1987 Irish folktales, Penguin Books, Harmondsworth (グラッシー, ヘンリー: アイルランドの民話, 大沢正佳, 大沢薫 訳, 青土社, 東京, 1994).

ゲーテ, ヨハン・ヴォルフガング・フォン

1979 ゲーテ全集 (9)詩と真実, 山崎章甫ほか 訳, 潮出版, 東京 (Goethe, Johann Wolfgang von: Dichtung und Wahrheit aus meinem Leben, Offenburg : Lehrmittel-Verl, Offenburg, 1947).

Graber Georg

1914 Sagen aus Karnten, ges. u. hrsg. von Georg Graber, Dieterich, Leipzig.

Grabinski, Bruno

1956 Fegefeuer-Visionen der badischen begandeten Margarete Schaffer, der 68 Jahre lang arme Seelen erschienen sind. Markus Verlag, Eupen.

Grabinski, Bruno & Leo Oster

(出版年不明) Fegfeuer-Visionen der begnadeten Margarete Schaffner aus Gerlachsheim. Christiana-Verlag, Stein am Rhein.

Gradl, Heinrich

1913 Sagenbuch des Egergaues. Hrsg von -., Eger.

Gredt, Nikolaus

1963 Sagenschatz des Luxemburger Landes, Kremer-Muller, Esch-Alzette.

Grimm, Bruder (グリム兄弟)

1980 Kinder- und Hausmarchen, 3Bde., Reclam, Stuttgart (第7版のリプリント).

1994 Deutsche Sagen, Deutsche Klassiker Verlag, Frankfurt/M (1816年版のリプリント), (グリムドイツ伝説集 (上), 桜沢正勝 鍛治哲郎訳, 人文書院, 京都).

Grimm, Jacob

1875-1878 Deutsche Mythologie, 3Bde., VMA, Wiesbaden.

Grosler, Hermann

1880 Sagen der Grafschaft Mansfeld und ihrer nachsten Umgebung. Gesammelt von -. Eisleben.

Gugitz, Gustav

1952 Die Sagen und Legenden der Stadt Wien. Nach den Quellen gesammelt und mit kritischen Erlauterungen hrsg. v. G.Gugitz, (=Buchreihe "Osterreichische heimat" Bd.17), Hollinek, Wien.

Guiley, Rosemary Ellen (グイリー, ローズマリー・エレン)

1992 The Encyclopedia of Ghosts and spirits. Fact on File, New York (妖怪と精霊の事典, 松田幸雄 訳, 青土社, 東京, 1995).

Haas, Alfred

1912 Rugensche Sagen und Marchen, gesammelt und hrsg von -. 4. Aufl. Burmeister, Stettin

1914 Stubbenkammer, Herthasee und Herthaburg in Geschichte und Sage, Sasnitz.

1925 Sagen des Kreises Grimmen, gesammelt und hrsg. von A. Haas, Greifswald.

Haining, Peter （ヘイニング, ピーター）

1982 A Dictionary of Ghosts, Robert Hale, London 図説世界霊界伝承事典, 阿部秀典 訳, 柏書房, 東京, 1995).

Hebel, Friedrich W.

1912 Pfalzisches Sagenbuch, hrsg. von F. W. Hebel, Crusius, Kaiserslautern.

Hellinghaus, O.

1925 Hundert auserlesene, wunderbare und merkwurdige Geschichten des Zisterziensers Casarius von Heisterbach (+ um 1240) / in dt. Ubertr. hrsg. von O. Hellinghaus, Deutschherren, Aachen.

Hensen, Gottfried

1927 Neue Sagen aus Berg und Mark: vom Donberg und Deilbach, ges. und hrsg. von Gottfried Hensen, Martini & Gruttefien, Elberfeld.

1935 Volk erzahlt: munsterlandische Sagen, Marchen und Schwanke, ges. u. hrsg. von Gottfried Hensen. (Veroffentlichungen der Volkskundlichen Kommission des Provinzialinstituts fur Westfalische Landes- und Volkskunde : Reihe 3 ; [2]), Aschendorff, Munster/Westf

1935b Sang und Sage am Rhein, (=Volk am ewigen Strom, hrsg. v. Gottfried Hensen und Adam Wrede, Bd. II), Westdt. Verl.- u. Vertriebsges, Essen a.d. Ruhr.

1951 Uberlieferung und Personlichkeit: die Erzahlungen und Lieder des Egbert Gerrits, (Schriften des Volkskunde-Archivs Marburg ; 1), Aschendorff, Munster/Westf.

1955 Sagen, Marchen und Schwanke des Julicher Landes, aus dem Nachlas von Heinrich Hoffmanns hrsg. und durch eigene Aufzeichnungen verm. von Gottfried Hensen, (Deutsches Volkstum am Rhein ; 6), Rohrscheid, Bonn.

Herles, Helmut

1991 Von Geheimnissen und Wundern des Caesarius von Heisterbach : ein Lesebuch, 2. Aufl.. Bouvier, Bonn.

Hilka, Alfons

1937 Die Wundergeschichten des Caesarius von Heisterbach, (Publikationen der Gesellschaft fur Rheinische Geschichtskunde ; 43), Band: 3 Die beiden ersten Bucher der Libri VIII Miraculorum, Leben, Leiden und Wunder des heiligen Engelbert, Erzbischofs von Koln.

Hoffmann, Heinrich

1911 Zur Volkskunde des Julicher Landes. 1. Teil: Sagen aus dem Rurgebiet. Dostall, Eschweiler.

1914 Zur Volkskunde des Julicher Landes. 2. Teil. Sagen aus dem Indegebiet, Dostall, Eschweiler.

Hofler, Max

1894 Wald- und Baumkult in Beziehung zur Volksmedizin Oberbayerns. Munchen, 1894. S.73ff. Zit. nach: Marzell, Heinrich: Buche, in: Handworterbuch des deutschen Aberglaubens. Bd.1, Sp.1692).

ヒューズ, ロバート

1997 西欧絵画に見る天国と地獄, 山下主一郎・訳, 大修館書店, 東京（Hughes, Robert: Heaven and Hell in Western Art, Weidenfeld and Nicolson, London, 1968）

Hupfauf, Erich

1956 Sagen, Brauchtum und Mundart im Zillertal, (=Schlern-Schriften Bd. 148), Wagner, Innsbruck.

イシェ, フランソワ（Icher, Francois）

2003 絵解き中世のヨーロッパ, 蔵持不三也・訳, 原書房, 東京（La societe medievale: codes, rituals et symbols, Editions de la Martiniere, Editions de La Martiniere, Paris, 2000）.

井出新

2001 イングランド宗教改革とシェイクスピア, in: 月刊 言語, vol.30, 大修館書店, 東京.

井上圓了

1893 妖怪学講義緒言, 哲学館, 東京.

1896 妖怪学講義. 合本第1冊～第6冊, 哲学館, 東京.

Jacoby, A

2000 Belial, in: Handworterbuch des deutschen Aberglaubens, Bd.1, Walter de Gruyter, Berlin-New York, 2000（1927年版のリプリント）.

Jahn, Ulrich

1886 Volkssagen aus Pommern und Rugen: ges. und hrsg. von Ulrich Jahn. Dannenberg, Stettin.

Jezler, Peter

1994 Jenseitsmodelle und Jenseitsvorsorge. Eine Einfuhrung, in: Gesellschaft fur das Schweizerische Landesmuseum (Hrsg.): Himmel, Holle, Fegefeuer. Das Jenseits im Mittelalter, Wilhelm Fink Verlag, Munchen, 1994, S.13-26.

上智大学中世思想研究所・編訳・監修

1992-2002 中世思想原典集成, 平凡社, 東京.

樺山紘一・編

1995 西洋中世像の革新, 刀水書房, 東京

神田左京

1992 不知火・人魂・狐火, 中央公論社, 東京（初版は春陽堂, 東京, 1931）.

建設省中部地方建設局・発行

1987 デ・レーケとその業績, 建設省中部地方建設局, 東京.

Kluge, Friedrich

1884- Etymologisches Worterbuch der deutschen Sprache

Knoop, Otto

1885 Volkssagen, Erzahlungen, Aberglauben, Gebrauche und Marchen aus dem ostlichen Hinterpommern. Gesammelt und hrsg von -, Joseph Jolowicz, Posen.

1913 Sagen der Provinz Posen. Gesammelt und hrsg von -. Mit Abbildungen. (Eichblatts deutscher Sagenschatz ; 3), Eichblatt, Berlin (Friedenau).

近藤司朗（編）

1992 新共同訳 旧聖書語句辞典, 教文館, 東京.

Kramer, Karl-S.

1972 Volkssage und Volksglauben Glaubenssagen und Glaubenswirklichkeit. in: Festschrift Matthias Zender. Studien zu Volkskultur, Sprache und Landesgeschichte, hrsg. von Edith Ennen und Gunter Wiegelmann, Bd. 2, Rohrscheid, Bonn, S. 888-899.

Kuhn, Adalbert

1843 Markische Sagen und Marchen : nebst einem Anhange von Gebrauchen und Aberglauben, gesammelt u. hrsg. von Adalbert Kuhn. Reimer, Berlin.

1887 Markische Sagen und Marchen, F.A.Herbig, Berlin.

1973 Sagen, Gebrauche und Marchen aus Westfalen und einigen anderen besonders der angrenzenden Gegenden Norddeutschlands, Olms, Hildesheim, 1973, Bd.2 （1859年版のリプリント）.

Kuhn, Adalbert & W. Schwartz

1848 Norddeutsche Sagen, Marchen und Gebrauche aus Meklenburg, Pommern, der Mark, Sachsen, Thuringen, Braunschweig, Hannover, Oldenburg und Westfalen, F.A.Brockhaus, Leipzig.

Kuhnau, Richard

1926 Breslauer Sagen, Ostdeutscher Verlag, Breslau.

蔵持不三也

1986 異貌の中世 ―ヨーロッパの聖と俗, 弘文堂, 東京.

1991a 祝祭の構図 ―ブリューゲル・カルナヴァル・民衆文化, ありな書房, 東京

1991b シャリヴァリ ―民衆文化の修辞学, 同文舘, 東京.

1995 ペストの文化史 ―ヨーロッパの民衆文化と疫病, 朝日新聞社, 東京.

Kurze, Friedrich

1978 Annales Fuldenses sive annales regni Francorum orientalis, ab Einhardo, Ruodolfo, Meginhardo Fuldensibus Seligenstadi, Fuldae, Mogontiaci conscripti cum continuationibus Ratisbonensi et Altahensibus (Monumenta Germaniae historica : Scriptores rerum German

ラーンシュタイン, ペーター （Lahnstein, Peter）

1988 バロックの生活 ―1640年～1740年の証言と報告, 波田節夫・訳, 法政大学出版局, 東京 （Das Leben im Barock, Zeugnisse und Berichte 1640 bis 1740, Kohlhammer, Stuttgart, 1974）.

Landau, Marcus

2000 Holle und Fegfeuer in Volksglaube, Dichtung und Kirchenlehre, Konig, Greiz （1909版のリプリント）

ルゴフ, ジャック （Le Goff, Jacques）

1988 煉獄の誕生, 内田洋, 渡辺香根夫・訳, 法政大学出版局, 東京 （La naissance du Purgatoire, Gallimard, Paris, 1981）.

1989　中世の高利貸 ―金も命も, 渡辺香根夫・訳, 法政大学出版局, 東京 (La bourse et la vie : economie et religion au Moyen Age, Hachette, Paris, 1986).

1992　中世の夢, 池上俊一・訳, 名古屋大学出版会, 名古屋.

ル・ロワ・ラデュリ, エマニュエル (Le Roy Ladurie, Emmanuel)

1991　モンタイユー ―ピレネーの村 1294～1324, 上下巻, 井上幸治, 渡辺昌美, 波木居純・訳, 刀水書房, 東京 (Montaillou, village occitan de 1294 a 1324, Gallimard, Paris, 1975).

Lecouteux, Claude

1987　Geschichte der Gespenster und Wiederganger im Mittelalter, Bohlau, Koln (Fantomes et revenants aux Moyen Age, Imago, Paris).

ルクトゥ, クロード (Lecouteux, Claude)

1999　基調講演, in: 比較神話学シンポジウム 荒猟師伝承の東西 (1998年, 名古屋大学) 報告書, pp3-6.

Lecouteux, Claude & Philippe Marcq

1990　Les esprits et les Morts, Champion, Paris.

Lemaitre, Nicole et al

1994　Dictionnaire culturel du christianisme, Cerf et Nathan, Paris, 1994 (レメートル, ニコルほか, 図説キリスト教文化事典, 第2版, 蔵持不三也・訳, 原書房, 東京, 2002).

レヴィ=ストロース, クロード (Levi-Strauss, Claude)

1976　野生の思考, 大橋保夫・訳, みすず書房, 東京 (La pensee sauvage, Plon, Paris, 1962)

リンク, ルーサー (Link, Luther)

1995　悪魔, 高山宏・訳, 研究社出版, 東京 (The Devil, A Mask without a Face, Reaktion Books, London, 1995).

ルーサー, リンク

1995　悪魔, 高山宏・訳, 研究社, 東京

Lohmeyer, Karl

1935　Die Sagen von der Saar, Blies, Nahe, vom Hunsruck, Soon- und Hochwald / gesammelt von Karl Lohmeyer, 3.Aufl., Hofer, Saarbrucken.

ロレンツ, ポール監修・F. クライン=ルブール

1995　パリ職業づくし ―中世から近世までの庶民生活誌, 北澤真木・訳, 論創社 (sous la direction litteraire et artistique de Paul Lorenz, documentation et txtes de Klein-Rebour: Metiers Disparus, G.hM. Perrin, Paris, 1968)

ロイン, ヘンリー・R・編 (Loyn, Henry R.)

1999　西洋中世史事典, 魚住昌良・監訳, 東洋書林, 東京 (The Middle Agas, A concise Encyclopaedia, Thames and Hudson, London, 1989).

Luther, Martin

1964　Wiederruf vom Fegefeuer, in: Werke (Weimarer Ausgabe), Bd.30-2, Akademische Druck- und Verlagsanstalt, Graz (Bohlaus Nachfolger, Weimar, 1909のリプリント).

1970　Werke (Weimarer Ausgabe), Bd.32, Akademische Druck- und Verlagsanstalt, Graz (Weimar: Bohlaus Nachfolger, 1909のリプリント).

ルター, マルティン（Luther, Martin）

1971　ルター著作集, 第1集第8巻, ルター著作集委員会 編, 聖文舎, 東京

Luthi, Max（マックス・リューティ）

1970　Volksliteratur und Hochliteratur, Menschenbild, Thematik, Formstreben, Francke, Bern（民間伝承と創作文学：人間像・主題設定・形式努力, 高木昌史 訳, 法政大学出版局, 東京, 2001）.

1975　Volksmarchen und Volkssage : zwei Grundformen erzahlender Dichtung, 3.durchges. Aufl.. Francke, Bern（昔話と伝説：物語文学の二つの基本形式, 高木昌史, 高木万里子 訳, 法政大学出版局, 東京,1995）.

1976　So leben sie noch heute : Betrachtungen zum Volksmarchen, 2.durchges. Aufl.. Vandenhoeck und Ruprecht, Gottingen（昔話の解釈：今でもやっぱり生きている, 野村ひろし 訳, 福音館書店, 東京, 1982）.

1985　Das europaische Volksmarchen : Form u. Wesen, 8.Aufl.. Francke, Tubingen（ヨーロッパの昔話　－その形式と本質, 小沢俊夫 訳, 岩崎美術社, 1976）.

1992　Das europaische Volksmarchen. Form und Wesen. 9. Aufl., Nachdr. d. 8. Aufl.. Francke, Tubingen, 1992.（UTB fur Wissenschaft, Uni-Taschenbucher, 312, Literaturwissenschaft; Marchen. Bearb. von Heinz Rolleke, 10. aktualisierte Aufl.., Metzler, Stuttgart-Wei

1998　Es war einmal ... : vom Wesen des Volksmarchens, 8., neu bearb. Aufl.. Vandenhoeck & Ruprecht, Gottingen（昔話の本質, 野村ひろし 訳, 筑摩書房, 東京, 1994）

MacGregor, Alasdair Alpin Douglas

1955　The Ghost Book; Strange Hauntings in Britain, R. Hole, London. Haining: 1982, p.84; ヘイニング: 1995, pp.197-198より引用。

マグヌス, オラウス

1991-1992　北方民族文化誌, 上下巻, 谷口幸男 訳, 渓水社, 広島（Magnus, Olaus: HISTORIA DE GENTIBVS SEPTENTRIONALIBVS, 1555）.

Maierbrugger, Matthias

1957　Sagen aus dem Glodnitztal. Hrsg und erlautert von Osker Moser, in: aus Karntens Volksuberlieferung, Karntner Museumsschriften XVII., Klagenfurt.

Mailly, Anton von

1931　Sagen aus dem Burgenland, Osterreich. Bundesverl, Wien.

マール, エミール（Male, Emile）

1980　ヨーロッパのキリスト教美術：12世紀から18世紀まで, 上下巻, 柳宗玄, 荒木成子 訳, 岩波書店, 東京.

1991　キリストの聖なる伴侶たち, 田辺保 訳, みすず書房, 東京

1996　ロマネスクの図像学, 上下巻, 田中仁彦ほか 訳, 国書刊行会, 東京.

1998　ゴシックの図像学, 上下巻, 田中仁彦ほか 訳, 国書刊行会, 東京.

2000　中世末期の図像学, 上下巻, 田中仁彦ほか 訳, 国書刊行会, 東京.

Maloney, Clarence (ed.)

1976　The Evil Eye, Columbia University Press, New York.

Map, Walter

1983 De nugis curialium = Courtiers' trifles / Walter Map. Ed. and transl. by M. R. James, revised by C. N. L. Brooke and R. A. B. Mynors, Clarendon Press, Oxford.

Marzell, Heinrich

2000 Birnbaum, in: Bachtold-Staubli, Hanns & Eduard Hoffmann-Krayer (hrsg.), Handworterbuch des deutschen Aberglaubens, Bd.1, (1927年版のリプリント), Sp.1339-1342.

松本富士男・編

1987 図説歴史の中の聖書, 燦葉出版社, 東京.

メクゼーパー, コルト; エリーザベト・シュラウト・編 (Meckseper, Cord & Werner Goez)

1995 ドイツ中世の日常生活 : 騎士・農民・都市民, 赤阪俊一, 佐藤専次・訳, 刀水書房, 東京 (Mentalitat und Alltag im Spatmittelalter, Vandenhoeck & Ruprecht, Gottingen, 1985).

Meiche, Alfred

1929 Sagenbuch der Sachsischen Schweiz und ihrer Randgebiete, von -. 2., wesentlich vermehrte Auflage., Dresden.

Mensing, Otto (Hrsg.)

1927 Schleswig-Holsteinisches Worterbuch, Wacholtz, Neumunster

メルシエ, ルイ・セバスチャン (Mercier, Louis Sebastien)

1989 十八世紀パリ生活誌 : タブロー・ド・パリ, 上下巻, 原宏・編訳, 岩波書店, 東京 (Le tableau de Paris)

Merkelbach-Pinck, Angelika

1936 Lothringer erzahlen. 2.Bd. Sagen, Schwanke, Spruche, Brauche, Saarbruckener Dr. u. Verl., Saarbrucken.

1943 Aus der Lothringer Meistube : Sagen, Schwanke, Legenden, Bauerngeschichten, Redensarten, Sprichworter, Bd.1. Barenreiter, Kassel.

Meyer, Gustav Friedrich

1925 Amt Rendsborger Sagen, Moller, Rendsburg.

Mezger, Werner

1991 Narrenidee und Fastnachtsbrauch : Studien zum Fortleben des Mittelalters in der europaischen Festkultur, Univ.-Verl. Konstanz, Konstanz.

ミリス, ルドー・J.R. (Milis, Ludovicus)

2002 異教的中世, 竹内信一・訳新評論, 東京 (De Heidense Middeleeuwen, Bibliotheque de l'Institut Historique Belge de Rome, 1991).

宮田登

2001 妖怪のトポロジー, in: 小松和彦・編, 怪異の民俗学⑧ 境界, 河出書房新社, 東京, pp.44-91 (妖怪の民俗学 日本の見えない闇, 岩波書店,東京, 1985より再録).

森洋子

1978 解説, in: ボス・ブリューゲル 世界美術全集10, 集英社, 東京

Moser-Rath, Elfriede

1964 Predigtmarlein der Barockzeit. Exempel, Sage, Schwank und Fabel in geistlichen Quellen des oberdeutschen Raumes, De Gruyter, Berlin.

Mozzani, Eloise

1995 Le livre des superstitions, Robert Laffont, Paris.

ミュッシャンブレ, ロベール (Muchembled, Robert)

2003 悪魔の歴史 : 12-20世紀 西欧文明に見る闇の力学 , 平野隆文 訳, 大修館書店, 東京 (Une Histoire du Diable, Seuil, Paris, 2000)

Mullenhoff, Karl

1845 Sagen, Marchen und Lieder der Herzogthumer Schleswig Holstein und Lauenburg, 4.Aufl., Schwerssche Buchhandlung, Kiel.

Muller, Friedrich

1885 Siebenburgische Sagen, ges. u. hrsg. von Friedrich Muller. 2. verand. Aufl.. (Siebenburgisch-deutsche Volksbucher ; Bd.1), Graeser, Wien.

Muller, Ingeborg & Lutz Rohrich

1967 X. Der Tod und die Toten, in: Deutsches Jahrbuch fur Volkskunde. Akademie-Verlag, Berlin, Jg.1967, Bd.13, S.346-397.

Muller, Josef

1926 Sagen aus Uri. Aus dem Volksmunde gesammelt von -. Hrsg. von Hanns Bachtold-Staubli. Band I. (Schriften der Schweizerischen Gesellschaft fur Volkskunde. 18.), Schw. Gesellschaft fur Volkskunde, Basel.

Murphy, Michael J.

1975 Now You're Talking… Folk Tales from the North of Ireland, Blackstaff Press, Belfast. Henry Glassie: 1987, pp.312-314 (グラッシー: 1994, pp.469-472) より引用。

Muus, Rudolf

1932 Nordfriesische Sagen, hrsg von -, Nordfries. Rundschau, Niebull

ナタフ, アンドレ (Nataf, Andre)

1998 オカルティズム事典, 高橋誠ほか 訳, 三交社, 東京 (Les maitres de l'occultisme, Bordas, Paris, 1989).

Neiske, Franz

1986 Vision und Totengedanken, in: Gerd Althoff, Hagen Keller und Christel Meier (hrsg.): Fruhmittelalterliche Studien, Jahrbuch des Institut fur Fruhmittelalterforschung der Universitat Munster, Walter de Gruyter, Berlin-New York, Nr. 20, 1986.

Nimtz-Wendlandt, Wanda

1961 Erzahlgut der kurischen Nehrung : ein Buch der Erinnerung, (Schriften des Volkskunde-Archivs Marburg ; 9), Elwert, Marburg.

日本放送協会 編

1982 ヘンリー四世 第1部, 日本放送出版協会, 東京.

野島秀勝

2002 解説, in: ハムレット, 岩波書店, 東京.

Oeke, Wilhelm

1907 Von Werwolfen und Irrluchten, in Zeitschrift des Vereins fur rheinische und westfalische Volkskunde, Martini & Gruttefien, Elberfeld, Nr.4. S.223-224.

Petzoldt, Leander

1970 Deutsche Volkssagen. Herausgegeben und erlautert von -, Beck, Munchen.

2003 Kleines Lexikon der Damonen und Elementargeister, 3.Aufl., Beck, Munchen.

Peuckert, Will-Erich

1959 Hochwies. Sagen, Schwanke und Marchen mit Beitragen von Alfred Karasek, hrsg. von Will-Erich Peuckert, (Denkmaler deutscher Volksdichtung ; 4), O. Schwartz, Goettingen.

1961-1963 Handworterbuch der Sage, Vandenhoeck & Ruprecht, Gottingen.

1964 Niedersachsische Sagen. Hrsg von -. (=Denkmaler deutsche volksdichtung, 6-1), Schwartz, Gottingen.

1966 Niedersachsische Sagen II. Hrsg von -. (=Denkmaler Deutscher Volksdichtung 6-2), Schwartz, Gottingen.

Pfeifer, Wolfgang

1993 Etymologisches Worterbuch des Deutschen, 2Bde., Akademie-Verlag, Berlin.

ピクネット, リン (Picknett, Lynn)

1994 超常現象の事典, 関口篤 訳, 青土社, 東京 (The Encyclopaedia of the Paranormal, MacMillan, London, 1990).

Plancy, J. Collin de (プランシー, コラン・ド)

1993 Dictionnarire Infernal, Slatkine, Geneve (1863版のリプリント), 地獄の辞典, 床鍋剛彦 訳, 講談社, 東京, 1990).

プラトン

1965 饗宴, 久保勉, 岩波書店, 東京.

Prohle, Heinrich

1886 Harzsagen, Hermann Mendelssohn, Leipzig.

プロップ, ウラジミール・ヤコブレヴィチ

1978 口承文芸と現実, 斎藤君子 訳, 三弥井書店, 東京.

1988 魔法昔話の起源, 斎藤君子 訳, せりか書房, 東京

Ranke, F.

2000a Feuermann, in: Bachtold-Staubli, Hanns & Eduard Hoffmann-Krayer (hrsg.), Handworterbuch des deutschen Aberglaubens. Bd.2, Walter de Gruyter, Berlin-New York, (1930年版のリプリント).

2000b Irrlicht, in: Bachtold-Staubli, Hanns & Eduard Hoffmann-Krayer (hrsg.), Handworterbuch des deutschen Aberglaubens, Bd.4, Berlin-New York: Walter de Gruyter, 2000, (1932年版のリプリント)

Ranke, Kurt (hrsg.)

1975ff. Enzyklopadie des Marchens, de Gruyter, Berlin-New York.

Reinach, Salomon:

1900 De l 'origine des prieres pour les morts, in: Revue des Etudes juives, 41 (1900).

フォン・レプゴウ, アイケ

1977 ザクセンシュピーゲル・ラント法, 久保正幡他訳, 創文社, 東京.

Rohlich, Lutz

1991/1994 Lexikon der sprichwortlichen Redensarten, CD-ROM, Herder, Freiburg.

Rohrich, Lutz

1962-1967 Erzahlungen des spaten Mittelalters und ihr Weiterleben in Literatur und Volksdichtung bis zur Gegenwart. Sagen, Marchen, Exempel und Schwanke. Francke, Bern.

1979 Marchen und Wirklichkeit. Wissenschaftliche Paperbacks. Germanistik. 4.Aufl. Steiner, Wiesbaden.

Rolleke, Heinz （レレケ, ハインツ）

1975 Die "stockhessischen" Marchen der "alten Marie", das Ende eines Mythos um die fruhesten KHM-Aufzeichnungen der Bruder Grimm. Germanisch=romanische Monatsschrift, NF, 25, Heft 1, 1975, S.74-86 （「マリーばあさん」の「きっすいのヘッセン」のメルヒェン, in: 現代に生きるグリム, 岩波書店, 東京, 1985, p.

1992 Die Marchen der Bruder Grimm : eine Einfuhrung, 3., durchges. Aufl.. Bouvier, Bonn-Berlin. （グリム兄弟のメルヒェン, 小澤俊夫 訳, 岩波書店, 東京, 1990）

ルドー, ファンシュほか （Roudaut, Francois）

1996 天国への道 －民衆文化と司祭たち, 原聖 訳, 日本エディタースクール出版部, 東京 （Les chemins du paradi, taolennou ar baradoz, Le Chasse-Maree, Douarnenez, 1988）

坂井洲二

1982 ドイツ民俗紀行, 法政大学出版局, 東京

1995 年貢を納めていた人々, 新装版, 法政大学出版局, 東京.

Sammlung Karasek

- Ungarndeutsche Volkserzahlungen aus dem Bakonyerwald, Schildgebirge und Ofner Bergland (Manuskript) in: Johannes Kunzig Institut, Freiburg/Br.

サンド, ジョルジュ （Sand, George）

1988 フランス田園伝説集, 篠田知和基 訳, 岩波書店, 東京 （Legendes rustiques, 1858）

Sauer, Herta

1936 Die Schuldvorstellungen in ostpreusischen und westfalischen Volkserzahlungen der Gegenwart, Junker u. Dunnhaupt, Berlin.

Schambach, Georg

1967 Worterbuch der niederdeutschen Mundart der Furstenthumer Gottingen und Grubenhagen oder Gottingisch-Grubenhagen'sches Idiotikon, Sandig, Wiesbaden, （1858年版のリプリント）.

Schell, Otto

1897 Bergische Sagen. Gesammelt und mit Anmekungen hrsg. v. Otto Schell, Baedeker, Elberfeld

1922 Bergische Sagen. Gesammelt von Otto Schell. 2., verm. Aufl.. Martini & Gruttefien, Elberfeld.

1925 Einige Bemerkungen uber die Irrlichter im Bergischen, in Zeitschrift des Vereins fur Rheinische und Westfalische Volkskunde, Martini & Gruttefien, Elberfeld, 1925, Nr.22, S.84-85.

Schenda, Rudolf

1969 Stand und Aufgaben der Exemplaforschung. in: Fabula 10, 1969, S.69-85.

1987 Tendenzen der aktuellen volkskundlichen Erzahlforschung im deutschsprachigen Raum, in: Chiva, Isac; Jeggle, Utz (hrsg.): Deutsche Volkskunde ? Franzosische Ethnologie. Zwei Standortbestimmungen. Campus-Verlag, Frankfurt(M)-New York- Paris, 1987, S.271-291

シッペルゲス, H. (Schipperges, Heinrich)

2002 ビンゲンのヒルデガルト ―中世女性神秘家の生涯と思想, 熊田陽一郎,戸口日出夫 (訳), 教文館, 東京 (Hildegard von Bingen: Beck, Munchen, 1995).

Schlosser, Paul

1956 Bachern-Sagen : Volksuberlieferungen aus der alten Untersteiermark, ges. und hrsg. von Paul Schlosser, (=Veroffentlichungen des Osterreichischen Museums fur Volkskunde Bd. IX), Selbstverl. des Osterreichischen Museums fur Volkskunde, Wien.

Schmitt, Jean-Claude

1993 Bilder als Erinnerung und Vorstellung. Die Erscheinungen der Toten im Mittelalter, In: Historische Anthropologie. Kultur-Gesellschaft-Alltag. 1993, 1.Jg. Bohlau, Koln-Weimar-Wien, S. 347-358.

1995 Die Wiederkehr der Toten: Geistergeschichten im Mittelalter, Klett-Cotta, Stuttgart (Les revenants. Les vivants et les morts dans la societe medievale, Gallimard, Paris, 1994).

シュミット, ジャン=クロード (Schmitt, Jean-Claude)

1998 中世の迷信, 松村剛 (訳), 白水社, 東京 (Les "superstitions", in: Le Goff, Jacques & Paul-Albert, Fevrier (hrsg.), Histoire de la France religieuse, tome 1, Des dieux de la Gaule a la papaute d'Avignon, des origines au XIV. siecle, Seuil, Paris, 1988, chapitre 4).

Schmitz, Johann Hubert

1858 Sagen und Legenden des Eifler Volkes. Hrsg. von -.

Schonwerth, Franz Xaver v. u. Karl Winkler

(出版年不明) Oberpfalzische Sagen, Legenden, Marchen und Schwanke. Aus dem Nachlas Franz X. v. Schonwerths gesammelt von Karl Winkler.

Schonwerth, Friedrich

1857-1859 Aus der Oberpfalz. Sitten und Sagen. 3Bde., Rieger, Augsburg.

シュルツェ, ハンス・K, (Schulze, Hans K.)

1997 西欧中世史事典 ―国制と社会組織, 千葉徳夫 (訳), ミネルヴァ書房, 京都 (Grundstrukturen der Verfassung im Mittelalter, 3Munchen, Kohlhammer: Stuttgart-Berlin-Koln-Mainz, 1885).

Segschneider, Ernst Helmut

1972 Zur mundlichen Uberlieferung der Sage in Sudoldenburg. In: Edith Ennen (hrsg,): Festschrift Matthias Zender. Studien zur Volkskultur, Sprache und Landesgeschichte, Bd.2, Rohrscheid, Bonn. 1972.

世良晃志郎

1946 第1部 レックス・バユワリオールム研究, in: バイエルン部族法典, 弘文堂, 東京.

シェイクスピア, ウィリアム

1983 ヘンリー四世 第1部, 小田島雄志 (訳), 白水社, 東京.

2002 ハムレット, 野島秀勝 訳, 岩波書店, 東京.

嶋内博愛

2001 火祭りのある風景 ―ヨーロッパ文化再考 火の円盤とばし慣行を起点に, in: 文化人類学研究, 第2巻, pp.104-121.

清水芳見

1983 邪視研究の動向, in: 民族学研究, 48巻1号.

下田哲

1987 奇跡物語一覧, in: 松本富士男 編, 図説歴史の中の聖書, 燦葉出版社, 東京, 1987, pp.97-98.

シンプソン, ジャックリーン (Simpson, Jacqueline)

1992 ヨーロッパの神話伝説, 橋本槙矩 訳, 青土社, 東京 (European mythology, Hamlyn, London, 1987).

Simrock, Karl

1874 Handbuch der Deutschen Mythologie, 4. Aufl. Adolf Marcus, Bonn.

Steig, R

1904 Volksgebrauche, Volksglauben und Volkssagen im Landchen Barwalde, in Zeitschrift des Vereins fur Volkskunde, Nr.14, S.423-427.

Storch, Karl

1958 Sagen des Kreises Mies, gesammelt von Karl Storch, Heimatkreis Mies-Pilsen e.V., Dinkelsbuhl.

Stumvoll, Rudolf

1908 Der Magdeburger Dom in Sage und Geschichte, Neumann, Magdeburg.

杉崎泰一郎

2002 欧州百鬼夜行抄 ― 「幻想」と「理性」のはざまの中世ヨーロッパ, 原書房, 東京.

角田義治

1990 自然の怪異 ―火の玉伝承の七不思議, 創樹社 東京.

高階秀爾

2001 バロックの光と闇, 小学館, 東京.

田中仁彦

1995 ケルト神話と中世騎士物語 ― 「他界」への旅と冒険, 中央公論社, 東京.

種村季弘

1994 ビンゲンのヒルデガルトの世界, 青土社, 東京

谷口幸男

1987 ゲルマンの民俗, 渓水社, 広島.

谷口幸男ほか

1985 図説ドイツ民俗学小辞典, 同学社, 東京.

Temme, Jodokus Donatus Hubertus

1976 Die Volkssagen von Pommern und Rugen. Gesammelt von -. (Volkskundliche Quellen. Neudrucke europaischer Texte und Untersuchungen IV: Sage), Olms, Hildesheim-New York (1840年Berlin版のリプリント).

1976 Volkssagen aus der Mark Brandenburg, (Volkskundliche Quellen. Neudruck europaischer Texte und Untersuchungen IV: Sage), Olms, Hildesheim-New York, 1976 (1839年Berlin版のリプリント).

寺島良安

1987 和漢三才図会 (8), 東京, 平凡社.

Thompson, Stith

1955-1958 Motif-Index of Folk Literature, 6vols., Rosenkilde and Bagger, Copenhagen (筆者が参照したのは、Indiana Univ. Pr., Bloomington, 1989版).

Treutwein, Karl

1969 Sagen aus Mainfranken, ausgew. und bearb. von Karl Treutwein, Sturtz, Wurzburg.

辻惟雄

1980 図版解説, in: 山根有三ほか, 現職日本の美術18 風俗画と浮世絵師, 改訂版, 小学館, 東京, 1980.

上野千鶴子

2003 市民権とジェンダー ―公私領域の解体と再編, in: 思想, 岩波書店, 東京, 2003年11月, No.955, p.10-34.

Veckenstedt, Edmund

1880 Wendische Sagen, Marchen und aberglaubische Gebrauche, Leuschner & Lubensky, Graz.

ヴェルドン, ジャン (Verdon, Jean)

1995 図説夜の中世史, 吉田春美・訳, 原書房, 東京 (La nuit au Moyen Age, Perrin, Paris, 1994).

Vernaleken, Theodor

1970 Alpensagen : Volksuberlieferungen aus der Schweiz, aus Vorarlberg, Karnten, Steiermark, Salzburg, Ober- und Niederosterreich, Verl. fuer Sammler, Graz (1858版のリプリント).

ウォラギネ, ヤコブス・デ

1979-1987 黄金伝説, 全4巻, 前田敬作, 山中知子・訳, 人文書院, 京都.

Wiepert, Peter

1964 Volkserzahlungen von der Insel Fehmarn ; gesammelt und erlautert von Peter Wiepert. Mit Anm. von Kurt Ranke, (Niederdeutsche Denkmaler ; 10), Wachholtz, Erschienen.

ウィルキンズ, ロバート (Wilkins, Robert)

1997 死の物語 ―恐怖と妄想の歴史, 斉藤隆央・訳, 原書房, 東京 (The fireside book of death, Health and Company, London, 1990).

Wittmer-Butsch, Maria Elisabeth

1990 Zur Bedeutung von Schlaf und Traum im Mittelalter, Medium Aevum Quotidianum, Krems.

Witzschel, August

1878 Sagen, Sitten und Gebrauche aus Thuringen. (=Kleine Beitrage zur deutschen Mythologie, Sitten- und Heimatskunde in Sagen und Gebrauchen aus Thuringen, 2. Theil. Hrsg. v. G.L. Schmidt), Verlag Braumuller, Wien.

Wolf, J.W.

1853 Hessische Sagen, hrsg. von -. Dieterich, Gottingen; Vogel, Leipzig.

ウーフィット, ロビン（Wooffitt, Robin）

1998 人は不思議な体験をどう語るか ―体験記憶のサイエンス, 大橋靖史, 山田詩津夫 訳, 大修館書店, 東京（Telling tales of the unexpected, the organization of factual discourse, Harvester Wheatsheaf, Hemel Hempstead, 1992）.

Wossidlo, Richard

1952 Reise, Quartier, in Gottesnaam. Das Seemannsleben auf den alten Segelschiffen im Munde alter Fahrensleute. Im Auftrage des Kuratoriums der Wossidlo-Stiftung aus dem Nachlas Richard Wossidlos bearbeitet u. Hrsg v. paul Beckmann, 4. Aufl.

柳田國男

1989 妖怪談義, in: 柳田國男全集(6), 筑摩書房, 東京, pp.7-212.

ザーネッキ, ジョージ（Zarnecki, George）

1979 ロマネスク美術, 斎藤稔 訳, グラフィック社, 東京（Romanik. Belser Stilgeschichte 6, Belser, Stuttgart, 1970）.

Zender, Matthias

1966 Sagen und Geschichten aus der Westeifel gesammelt und herausgegeben von -. Rohrscheid, Bonn.

Zimmerische Chronik

1881/82 Zimmerische Chronik, hrsg v. Barack, Karl August, Bde I-IV, 2. Verb. Aufl.

Zingerle, Ignaz von

1891 Sagen aus Tirol, ges. und hrsg. von Ignaz V. Zingerle, Wagner, Innsbruck.

ザイプス, ジャック（Zipes, Jack）

2001 おとぎ話の社会史－文明化の芸術から転覆の芸術へ, 鈴木晶・木村慧子 訳, 新曜社, 東京（Fairy Tales and The Art of Subversion. The classical genre for children and the process of civilization, Heinemann Educational, London, 1983）.

資料１　フライブルク・ザーゲ資料所「デモンに関するザーゲ　キーワード集」

（“Dämonologische Sagen” Stichwortliste）

※　（1）～（３００）までの番号および下位カテゴリー（「 a)、b)、c) ～」）は、オリジナルにあるもの。
※　元のインデックスに、筆者による翻訳および説明を加えた。

（1）Polyphem　（“ selbst getan ”）
ポリュペモス　ギリシア神話。ポセイドンの子。一つ目の巨人で、帰国途上のオデュッセイを悩ませた。Röhlich:Sagen und Maerchen にもあるので参照するとよい。

（5）Prokrustes
プロクルステス　ギリシア神話。メガラとアテネの途中に出没した盗賊。旅人を自分のベッドに寝かせ、体がベッドより長ければはみ出た部分を切り落とし、短ければ引き延ばして殺した。このタイプはドイツには少ない。

（１０）Todesbotschaft　（Der große Pan ist tot, Rorinde etc.）
死の取引　「偉大なるパンは死んだ」「ローリンデ」など

（１５）Basilisk　（aus Hahnenei）　バジリスク

（２０）　Tierherr　動物の王
a）Suchruf nach dem Verstämmelten, einäugigen oder stummelschwänzigen Tier
b）Gemsjäger　カモシカ猟師
c）Fischkönig　魚の王

（２５）Wiederbelebung aus den Knochen　（Haselhexe, Pelops）　骨からの再生

（３０）Zweiter Leib　第２の身体
a）Tiergestalt　（Guntramsage）　動物の姿
b）Menschengestalt　（Doppelgänger, Doppelgestalt）　人間の姿

（３５）Schicksal　運命
a）Schicksalsfrauen verkünden Schicksal, prophezeites Schicksal erfüllt sich.
運命の女神が運命を予言。運命は予言された通りになる。
b）Wetterpropheten　（nicht klassifizierbare）　天気を予言
c）Die Stunde ist da　（Jahresopfer）　その時がきた　（年ごとの犠牲）
d）Vorzeichen　（Tod, Unglück）　前兆　（死、事故）

ｅ）Zweites Gesicht　予知能力

（４０）Opfersagen　（Menschenopfer）　犠牲に関するサーゲ（人的犠牲）
ａ）Drachenopfer ドラゴンの犠牲
ｂ）Pestopfer　ペストの犠牲
ｃ）Menschenopfer bei Grundsteinlegung　（Deichbau）　礎石を築くときの人的犠牲（築堤）
ｄ）Menschenopfer bei Hungersnot, Mißwachs 飢饉や不作の際の人的犠牲
ｅ）Jonas　（Menschenopfer an das Meer, bei Sturm oder Windstille）
ヨナ（航海中、嵐や凪の際の人的犠牲）
ｆ）Elementaropfer　（Füttern des Windes etc.）　自然の犠牲（風の餌など）

（４５）Werwolf　人狼

（５０）Hundsköpfige　犬の頭を持った者

（５５）Zauberer　（Zauberkraeftige Menschen, Zaubermittel, Fluch）
魔術師　（魔力を持つ人間、魔力の薬、呪詛)
ａ）Fahrende Schüler 遍歴学生
ｂ）Schmied　鍛冶屋
ｃ）Venediger　ヴェネツィア人
ｄ）Zigeuner ジプシー
ｅ）Zauberbuch　（vor- und rückwärtelesen）　魔術の書
ｆ）Feuerbanner 火事を祓う人
ｇ）Tierbannung　動物祓い
ｈ）Rattenfänger　（von Hameln）　ネズミ取り人　(ハーメルンの)
ｉ）Faust und Faustgestalten　（Paracelsus etc.）
ファウストと、ファウストのような姿をした者　（パラケルススなど）
ｋ）Liebeszauber　愛の魔法
ｌ）Festbannen　（Fuhrwerks-, Diebesbann）　動けなくする魔法（荷車・泥棒を動けなくする）
（５７）Dämonisierte Heilige　悪魔に憑かれた聖人

（６０）Pumphut　プンプフート。魔力を持ち、水車から水車へと人知れず移動した粉挽きの弟子。

（６５）Hexe 魔女
ａ）Milchhexe　（Melken aus Axt, Holm, Handtuch, Hexenbutter）　ミルクの魔女
ｂ）Wetterhexe　（Hexenwetter, Hagelhaxe, Messerwurf i. d. Wolke）　天気の魔女
ｃ）Verwandlung der Hexe　（Hexe als Katze, Pferde etc; Verwundung oder Beschlagung des Hexentieres zeigt sich am nächsten Morgen an der Hexe selbst.）　魔女の変身
ｄ）Schadenzauber der Hexe　（Mißbrauch von Leihgaben, Läuse an Hexen etc.）
危害を与える魔法
ｅ）Teufelsbund der Hexe　（Abschwörungsritual “Ich stehe auf dem Mist”. Eintragen ins

Hexenbuch）　悪魔との契約
f）Blocksbergerfahrt der Hexe　（Hexensabbath, Hexenmahl etc.）ブロッケン山への飛行
g）Hexenfahrt（mit Hilfe von Hexensalbe, nachgeahmte Hexenfahrt, “Oben aus und nirgends an”, Hexenhalfter）　魔女の飛行
h）Hexentanzplatz　（Hexenring etc.）　魔女の踊る場所
i）Hexenprozeß　魔女裁判
k）Hexenmeister　男の魔法使い
l）Reittier der Hexe　魔女が乗る動物
m）Hexenhalfter　魔女の端綱

（７０）Teufel　（allgemein, Äußeres, Pferdefuß, Gestank etc.）
悪魔（一般、外見、馬足、においなど）
a）Teufelserklaerungssagen　悪魔を説明するサーゲ
b）Teufel holt Flucher und Verfluchte　（"Hol mich der Teufel!"）
悪罵を唱えた者を悪魔が連れ去る
c）Teufel beim Kartenspiel　カード遊びに臨席する悪魔
d）Teufel beim Rätselraten　謎解きの際の悪魔
e）Teufel auf dem Tanzboden　ダンスする場所にいる悪魔
f）Teufel als Ueberzaehlinger　余剰する者としての悪魔
g）Teufel als Freier　求婚者としての悪魔
h）Teufel holt ungetreue Braut（Bräutigam）　不誠実な花嫁（花婿）を悪魔が連れ去る
i）Teufel als Baumeister　建築士としての悪魔
k）Teufel unterschiebt Wechselbalg　悪魔がこっそりと子供を取り替える
l）Teufel in der Kirche　（Ruhestörer, Schwätzer, Schläfer）　教会の中の悪魔
m）Kalter Schlag der Schmiede　鍛冶屋の冷たい一撃
n）Buhlteufel　（Incubus）　色事の悪魔
o）Teufelspakt　悪魔との契約
p）Teufelspakt der Freimaurer　フリーメーソンの悪魔との契約
q）Teufelspakt der Hexe　魔女の悪魔との契約
r）Teufelsross　（wird beschlagen）　悪魔の馬（に蹄鉄を打つ）
s）Bockreiter　山羊に乗る者
t）Recht des Teufels auf Arbeit　悪魔の労働権
u）Teufelsschwänke　（dummer, geprellter, ueberlisteter Teufel）
悪魔に関する笑い話（間抜け、だまされる、欺かれる悪魔）
v）Bann und Exorzismus　追放と悪魔祓い
w）Tiergestalt　動物の姿

（７５）Riesen　巨人
a）Riesenerklärungssagen　（Riesensteine, Fußstapfen von Riessen）
巨人を説明するザーゲ（巨人の石、巨人の足跡）
b）Riesenbauten　（Riese als Baumeister）　巨大建造物（建築士としての巨人）

ｃ）Riesenspielzeug　巨人の玩具
ｄ）Besuch in der Höhle des Riesen　（ “Ich rieche Menschenfleisch”）
　　巨人の洞窟を訪問（「人臭いぞ」）
ｅ）Kegelspiel der Riesen　巨人の九柱技
ｆ）Gefesselter Riese　（Erdbeben）　拘束されている巨人（地震）
ｇ）Frau Harke　ハルケおばさん。「ハルケ」は熊手の意。

（８０）Heiden　異教徒

（８５）Wilde Leute　野人

（９０）Rübezahl　リューベツァール。Riesengebirge の山の精。旅人をからかう。

（９５）Berggeist　山の精
（９７）Orko（Noergele）
（９９）Sennenpuppe　藁人形
（１００）Wasserwesen　水に関する精霊
ａ）Seedaemon　（ “ergruendest du mich”）　海のデモン
ｂ）Hakenmann　（s. Kinderschreck）　かぎ男
ｃ）Wassermann　水の精
ｄ）Dienst beim Wassermann　（Gevatter etc.）　水の精の元での奉仕（代父など）
ｅ）Wassermanns Braut（Frau）　水の精の花嫁（妻）
ｆ）Nixen　ニクセ
ｇ）Verspätete Rückkehr der Nixen und ihr Tod durch den Wassermann（Blutseen）
　　ニクセが遅刻して帰還し、水の精によって死がもたらされる（血の海）
ｈ）Melusine（Mahrtenehe）　メルジーヌ（夢魔との結婚）
ｉ）Tiergestalt　動物の姿
（１０３）Elfen（Fairies）　エルフ（妖精）

（１０５）Zwerge　（allgemein: Ursprung, äußere Erscheinung, Kleidung, Tarnkappe, Namen, Sprache, besonderes Wissen, Wohnung, staatliche Organisation, Tod etc.）　矮人
ａ）Wohnung unter dem Pferdestall　馬小屋の下の住居
ｂ）Backen, Buttern, Käsen, Brauen　パン焼き、バター・チーズづくり、ビール醸造
ｃ）Leihverkehr mit den Menschen　人間との物の貸し借り
ｄ）Opfergaben für Zwerge　矮人への供物
ｅ）Schmiede, Bergleute, Schatzgräber, Schatzhüter
　　鍛冶屋、鉱山労働者、宝物探索者、宝物の番人
ｆ）Hilfe für Menschen und Aufhören der Hilfe　人間への手助けと、手助けの中止
ｇ）Ausgelohnt 賃金の精算
ｈ）Lohn der Zwerge　（Wertloses verwandelt sich in Gold）
　　矮人からの賃金（無価値なものが金へと変化）

ｉ）Geschenke des kleinen Volkes　小さな Volk からの贈り物
ｋ）Tierherren　動物の主人
ｌ）Schädiger des Menschen, Speisediebe etc.　人間に損害を与える、食べ物盗みなど
ｍ）Raub des Zwergentrinkhorns（Oldenburger Horn）矮人の角杯を強奪（オルデンブルクの角）
ｎ）Sonnenaufgang im Zwergenreich　矮人の王国での日の出
ｏ）Zwergenhochzeit　矮人の結婚式
ｐ）Frauenraub und Heirat mit Menschenfrauen　女性の強奪と、人間の女性との結婚
ｑ）Wechselbalg　とりかえっこ
ｒ）Hebammendienst bei den Zwergen　矮人の元での産婆仕事
ｓ）Leben am seidenen Faden
ｔ）Auszug（Zwerge und Christentum）　引っ越し（矮人とキリスト教）
ｕ）Überfahrtssage　航海ザーゲ

（１１０）Rumpelstilzchen　ルンペルシュティルツヒェン

（１１５）Hausgeister　（Kobold）　家の精霊
ａ）Kobold als Familiengeist　家族の精霊としてのコーボルト
ｂ）Schabernack des Kobold　コーボルトの悪ふざけ
ｃ）Schrätel und Wasserbär　シュレーテルと水熊。シュレーテルは、しわだらけの森の精。
ｄ）Kobold zieht mit ins neue Haus　コーボルトが新居についてくる

（１２０）Alraun　アルラウン。魔力を持つという小妖精。

（１２５）Klabautermann　（Schiffskobold）　クラバォターマン（船のコーボルト）

（１３０）Alp（Mahrt, Trud）　夢魔（マート、トゥルーツ）
ａ）Liebste(r) als Alp, Mahrtenehe, bes. Bedingungen: gestörte Mahrtenehe
ｂ）Tier- und Baumalp　（Schrätel, Schräteles Zöpfe etc.）　動物・木の夢魔

（１３５）Aufhocker　（Huckup, Ranzenpuffer）　アオフホッカー

（１４０）Hehmann　（Puhmann）

（１４５）Mittagsgeister　（Dämon meridianus, Mittagsfrau）
昼間の霊　（子午線のデモン、白昼の女）

（１５０）Bilwis　ビルヴィス
（１５３）Korndaemonen　穀物デモン

（１５５）Korndrache　（Drak）　穀物ドラゴン
（１５７）Dämonen in der Natur　自然の中のデモン

ａ）Geister im Baum　木の中の霊
ｂ）Personifizierte Naturgewalten　人格化された荒々しい自然

（１６０）Frauengestalten　女性の姿
ａ）Spinnstubenfrau（Nachtarbeiten, "Die Nacht ist mein"）
　　糸つむぎ部屋の女性　（夜の仕事、「今夜は私のもの」）
ｂ）Frau Holle　ホレおばさん
ｃ）Percht　ペルヒト
ｄ）Salige
ｅ）Wittewiewer
ｆ）Weisse Frau　（Schlusseljungfrau, Schlangenkuss etc.）　白い女
ｇ）Waldfrau　森の女
ｈ）Holzfräulein　（Holzweibel etc.）
ｉ）Drei Matronen　３人の婦人
ｋ）Lucia　ルチア
（１６３）Männergestalten　男性の姿
ａ）Weiße Männer　白い男
ｂ）Rote Männer　赤い男
（１６４）Feuermänner

（１６５）Spuk　霊現象
ａ）Tierspuk　（Fuchs, Ziege, Gans etc.）　動物の霊（狐、山羊、ガチョウ）
ｂ）Geräuschspuk　ポルターガイスト
ｃ）Optische Wahrnehmungen　（Licht, Feuer）　視覚による感知
ｄ）Riesenhaufen Spuk　（Größerwerden, Aufwachsen, Kleinerwerden）巨大な霊
ｅ）Nebelgeister　（Kopflose, Einbein, Dachreichter）
ｆ）Spukort　（Galgenspuk, Klosterspuk, Kirchenspuk, Moor als Spukort）
　　霊の出る場所（絞首台、修道院、教会、湿地）
ｇ）Bann und Exorzismus　追放と悪魔払い
ｈ）Geist in der Flasche　瓶の中の霊
ｉ）Etwas　（es, einer）　何か
ｋ）Klage　嘆き

（１７０）Kinderschleck　（Kinderspuk, Warnsagen）

（１７５）Drache, Lindwurm
ａ）Wasserdrachen　水のドラゴン
ｂ）Wetterdrachen　天気のドラゴン
（１７８）Schlange　ヘビ
ａ）Raub der Schlangenkrone　ヘビの王冠を強奪
ｂ）Schlangenbann　ヘビの追放

c）Hausschlange, Hausotter　（Kind und Schlange, "Ding iß auch Brocken"）　家のヘビ

（１８０）Schatz　宝物
a）Schatzhueter　宝の見張り
b）Schatzfeuer　宝の火

（１８５）Tote　死者
a）Das Erscheinen des Todes　死者の出現
b）Die Todesstunde　死期
c）Der unheimliche Leichnam　異常な死体
d）Der Tote offenbart Schuld und Unschuld　死者が罪と潔白を啓示
e）Das unerfüllte Leben　早すぎた死
f）Die ungelöste Verbindung　解けない関係
g）Der unbefriedigte Tote　満足していない死者
h）Der Schuldige als ruheloser Toter　罪あるゆえに安らげない死者
j）Die Erlösung ruheloser Toter　安らげない死者の昇天
k）Der dankbare und hilfreiche Tote　感謝の念に満ち、役に立つ死者
l）Der herausgeforderte oder in seiner Ruhe gestörte Tote
　　挑発されたまたは平安を妨げられた死者
m）Der gefährliche Tote　危険な死者
n）Die Totengemeinschaft　死者の共同体
o）Der vorgebliche oder vermeintliche Tote　偽の死者または死者と勘違いされた者
p）Der Scheintote oder Totgeglanbte　仮死または死んだと誤認された死者

（１９０）Krankenheitsdaemonen　病のデモン
a）Pest　ペスト

（１９５）Tote im Berg　山にいる死者
a）Schlafende Heer　眠っている軍勢
b）Schlafender Kaiser　眠っている皇帝

（２００）Wilde Jagd und Wildes Herr　（Muotes Heer, Nachtschar, Nachtvolk）
a）Wilde Jagd　（Wilde Jaeger）　死霊の軍勢
b）Wildes Heer　（Soldaten mit Verletzungen - Muotes Heer）
c）Warner vor dem Wilden Heer: Der getreue Eckart
d）Mitläufer und Nachzügler　（"geschürzt und gegürtet"）
e）Strafen　（Hacke und Beil einschlagen etc.）
f）Geschenk
g）Jagdanteil　（Aasgeschenk: Mitjagen, mitnagen）
h）Mitgenommen vom Wilden Heer
i）Ewiger Jaeger　（Historisches Substitutionen des ewigenwilden – Jägers）

－Hackelberg
－Rodensteiner
ｋ）Frauenjagd　女性狩り

（２０５）Ewiger Jude　永遠にさすらうユダヤ人

（２１０）Ewiger Fuhrmann　永遠にさすらう御者

（２１５）Fliegender Hollaender　さまよえるオランダ人、幽霊船の船長。

（２２０）Mann (Frau) im Mond (Sonne)　月（太陽）の中の男（女）

（３００）Varia　ヴァリアンテ

《以上》

資料２　フライブルク・ザーゲ資料所収蔵資料の出典となった、伝承集の目録

※　表中の「収集地域」は、ザーゲ資料所のカタログにある地域名。
「地域名」は、「収集地域」から割り出した現在の地域名称。ドイツおよびオーストリアは州名を、それ以外は国名を記した。

※　出版年については、リプリント版がでているものについても、当該する版が最初に出版された年を採用して記入した。

※　表中に挙げた伝承集は、重複になるが、引用・参考文献リストにも掲載した。

※　Sammlung Karasek（カラーセックコレクション）とは、ザーゲ資料所がある ヨハネス・キュンツィヒ・インスティテュートに収蔵・管理されているコレクション。「カラーセック」の名は、自らも生まれ故郷を追われた身である「東欧のドイツ人」であり、「東欧のドイツ人」の民俗資料収集に尽力した、アルフレッド・カラーセック（Alfred Karasek、1902～1970）にちなむ。

整理番号	著者 編者	燃える人伝承あり	収集地域	地域名	伝承集 タイトル	出版地	出版年
1	Alpenburg, Johann Nepomuk, Ritter von	1	Alpensagen	スイス、オーストリア	Deutsche Alpensagen. Gesammelt und hrsg. von -.	Wien	1861
2	Assion, Peter	1	Frankenland	バイエルン	Sagen aus dem Frankenland. Weise Schwarze Feurige. Neugesammelte Sagen aus dem Frankenland. Hrsg. und erlautert von -.	Karlsruhe	1972
3	Baader, Bernhard	1	Baden	バーデン＝ヴュルテンベルク	Neugesammelte Volkssagen aus dem Land Baden und den angrenzenden Gegenden von -.	Karlsruhe	1859
4	Bartsch, Karl		Meklenburg	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Sagen, Marchen und Gebrauche aus Meklenburg. Gesammelt und hrsg von -. Bd.1: Sagen und Marchen	Wien	1879
5	Bartsch, Karl		Meklenburg	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Sagen, Marchen und Gebrauche aus Meklenburg. Gesammelt und hrsg von -. Bd.II: Gebrauche und Aberglaube	Wien	1880
6	Benzel, Ulrich	1	Bohmerwald	バイエルン	Volkserzahlungen aus dem nordlichen Bohmerwald. (=Schriften des Volkskunde-Archivs Marburg, Bd.5)	Marburg	1957
7	Benzel, Ulrich		Oberpfalzisch-bohmischen	バイエルン／チェコ	Volkserzahlungen aus dem oberpfalzisch-bohmischen Grenzgebiet. (=Marchen aus deutschen Landschaften Bd.6)	Munster	1965
8	Benzel, Ulrich		Sudetendeutsch	チェコ（ズデーテン）	Sudetendeutsche Volkserzahlungen. (=Schriften des Volkskundearchivs Marburg, Bd.10)	Marburg	1962
9	Bindewald Theodor		Oberhessisches	ヘッセン	Oberhessisches Sagenbuch. Aus dem Volksmunde gesammelt. Neue vermehrte Ausgabe.	Frankfurt/M	1873
10	Birlinger, Anton		Schwaben	バーデン＝ヴュルテンベルク	Aus Schwaben. Sagen, Legenden, Aberglaube, Sitten Rechtsbrauche, Ortsneckerein, Lieder, Kinderreime. Zwei Bande.(Bd.1)	Wiesbaden	1874
11	Bock, Emmi	1	Hallertau	ニーダーエスタライヒ	Sagen aus der Hallertau. Gesammelt von -, illustrieret von Guido Zingerl.	Mainburg	1975
12	Bock, Emmi	1	Ingolstadt	バイエルン	Sagen und Legenden aus Ingolstad und Umgebung, gesammelt von -.	Mainburg	1973
13	Bock, Emmi	1	Niederbayern	バイエルン	Sagen aus Niederbayern, gesammelt und hrsg von -, illustriert von Guido Zingerl	Rendsburg	1977
14	Bodens, Wilhelm	1	Niederrhein	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Sage, Marchen und Schwank am Niederrhein. Gesammelt und hrsg von -.	Bonn a.Rh.	1937

15	Brachwitz, O	1	Kreis Zauch-Belzig	ブランデンブルク	Sagen aus dem Kreis Zauch-Belzig. (=Schriftenreihe der Heimatkundlichen Arbeitsgemeinschaft fur den Kreis Zauch-Belzig. Reihe IV (Volkskunde) Bd.1)	Belzig	1937
16	Deecke, Ernst		Lubische	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン	Lubische Geschichten und Sagen, gesammelt von -. 5. Auflage mit Quellen und Literatur nachweisen versehen von HeinrichWohlert.	Lubeck	1911
17	Depiny, Adalbert	1	Oberosterreich	オーバーエスタライヒ	Oberosterreiches Sagenbuch, hg. von -.	Linz	1932
18	Dietz, Josef		Bonner	ノル トライン＝ヴェストファーレン	Aus der Sagenwelt des Bonner Landes von-.(=Deutsches Volkstum am Rhein, Bd.7)	Bonn	1965
19	Diplich, Hans und Alfred Karasek	1	Donau-schwabische	ハンガリー ・ルーマニア	Donauschwabische Sagen, Marchen und Legenden. Donauschwabische Beitrage Heft 6.	Munchen	1952
20	Dittmaier, Heinrich	1	Untere Sieg	ノル トライン＝ヴェストファーレン	Sagen, Marchen und Schwanke von der unteren Sieg. (=Dt. Volkstum am Rhein 5)	Bonn	1950
21	Dold, Paul		Tuttlingen	バーデン＝ヴュルテンベルク	Die Sagenwelt Tuttlingens und seiner Umgebung von -.	Tuttlingen	1940
22	Dorler, Adolf Ferdinand		Innsbruck	ティロル	Sagen aus Innsbruck's Umgebung mit besonder Berucksichtigung des Zillerthales. Gesammelt und hrsg. von -.	Innsbruck	1895
23	Dunninger, Josef	1	Frankische	バイエルン	Frankische Sagen vom 15. bis zum Ende des 18. Jahrhinderts. Hrsg. von -. Zweite durchgesehene Auflage. (=Die Plassenburg. Schriften fur Heimatforschung und Kulturpflegen in Ostfranken Bd.21)	Kulmbach	1964
24	Eisel, Robert	1	Voigtland	ザクセン	Sagenbuch des Voigtlandes	Gera	1871
25	Engelien A. und W. Lahn		Mark Brandenburg	ブランデンブルク	Volksmund in der Mark Brandenburg. Sagen Machen, Spiele, Sprichworter und Gebrauche, gesammelt und hrsg von-.	Berlin	1868
26	Fielhauer, Hannelore und Helmut		Bezirk Scheibbs	ニーダーエスタライヒ	Heimatkunde des Bezirkes Scheibbs. Die Sagen des Bezirkes Scheibbs. Vollstandige Sammlung aller bisher bekannten Sagen, Legenden, Schwanke und anderer Volksberichte. Redigiert von -.	Scheibbs	1975
27	Findeisen, Hans		Hiddensee	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Sagen, Marchen und Schwanke von der Insel Hiddensee. Aus dem Volksmunde gesammelt, sowie mit einer Einleitung und Anmerkungen versehen von -.	Stettin	1925
28	Fink, Hans		Sudtirol	イタリア（南ティロル）	Volkserzahlungen aus Sudtirol. Unveroffentlichte Quellen, gesammelt und zusammengestellt von -. (Veroffentlichung der Gesellschaft zur Pflege des Marchengutes der europaischen Volker 1969)	Munster	1969

29	Frauenfelder, Reinhard		Schaffhausen	スイス	Sagen und Legenden aus dem Kanton Schaffhausen. Gesammelt, erlautert und hrsg von -.	Schaffhausen	1933
30	Gath, Goswin Peter	1	Rheinische	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Rheinische Sagen. Von der Quelle bis zur Mundung,, 3.Aufl.	Koln und Krefeld	1949
31	Gath, Goswin Peter		Siebengebirge	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Sagen und Legenden vom Siebengebirge	Koln	1957
32	Glaettli, K.W.	1	Zurcher	スイス	Zurcher Sagen (=Mitt. d. Antiquarischen Gesellschaft in Zurich, Bd. 41, 1959)	Zurich	1959
33	Graber Georg		Karnten	ケルンテン	Sagen aus Karnten. Gesammelt und hrsg von -.	Leipzig	1914
34	Gradl, Heinrich		Egergau	チェコ	Sagenbuch des Egergaues. Hrsg von -.	Eger	1913
35	Grimm, Jacob und Wilhelm	1	-	ドイツ	Deutsche Sagen. Hrsg. von den Brudern Grimm. Erster Band. Dritte Aufl. Besorgt von Hermann Grimm.	Berlin	1891
36	Grimm, Jacob und Wilhelm		-	ドイツ	Deutsche Sagen. Hrsg. von den Brudern Grimm. Zweiter Band. Dritte Aufl. Besorgt von Hermann Grimm.	Berlin	1891
37	Grosler, Hermann		Mansfeld	ザクセン＝アンハルト	Sagen der Grafschaft Mansfeld und ihrer nachsten Umgebung. Gesammelt von -.	Eisleben	1880
38	Gugitz, Gustav		Wien	ヴィーン	Die Sagen und Legenden der Wien. Nach den Quellen gesammelt und mit kritischen Erlauterungen hrsg von -. (=Buchreihe "Osterreichische heimat" Bd.17)	Wien	1952
39	Haas, A.		Grimmen	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Sagen des Kreises Grimmen; gesammelt und hrsg von -.	Greifswald	1925
40	Haas, A.		Rugensche	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Rugensche Sagen und Marchen, gesammelt und hrsg von -. 4. Aufl.	Stettin	1912
41	Haas, A.		Stubbenkammer	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Herthasee und Herthaburg in Geschichte und Sage, hrsg von -.	Sasnitz	1914
42	Hebel, F.W.	1	Pfalzisches	ラインラント＝プファルツ	Pfalzisches Sagenbuch, hrsg von -.	Kaiserlautern	1912
43	Hensen, Gottfried		Berg und Mark	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Neue Sagen aus Berg und Mark. Vom Donberg und Deilbach, gesammelt und hrsg von -.	Elberfeld	1927
44	Hensen, Gottfried	1	Munster-landische	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Volk erzahlt, Munsterlandische Sagen, Marchen und Schwanke. Gessammelt und herausgegeben von -.	Munster/Westf.	1935
45	Hensen, Gottfried		Rhein	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Sang und Sage am Rhein,hg. von -. (=Volk am ewigen Strom, hg. v. Gottfried Hensen und Adam Wrede, Bd. II)	Essen	1935b
46	Hensen, Gottfried	1	Julich	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Sagen, Marchen und Schwanke des Julicher Landes. Aus dem Nachlas Heinrich Hoffmanns hrsg und durch eigene Aufzeichnungen vermehrt von -.	Bonn	1955

47	Hensen, Gottfried		Uberlieferung	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Uberlieferung und Personlichkeit. Die Erzahlungen und Lieder des Egbert Gerrits.	Munster/Westf.	1951
48	Hoffmann, Heinrich	1	Indegebit	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Zur Volkskunde des Julicher Landes. 2. Teil: Sagen aus dem Indegebiet.	Eschweiler	1914
49	Hoffmann, Heinrich	1	Ruhrgebiet	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Zur Volkskunde des Julicher Landes. 1. Teil: Sagen aus dem Rurgebiet.	Eschweiler	1911
50	Hupfauf, Erich		Zillertal	ティロル	Sagen, Brauchtum und Mundart im Zillertal von -. (=Schlern-Schriften Bd. 148)	Innsbruck	1956
51	Jahn, Ulrich		Pommern und Rugen	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Volkssagen aus Pommern und Rugen. Gesammelt und hrsg von -.	Stettin	1886
52	Knoop, Otto		Hinterpommern	ポーランド	Volkssagen, Erzahlungen, Aberglauben, Gebrauche und Marchen aus dem ostlichen Hinterpommern. Gesammelt und hrsg von -.	Posen	1885
53	Knoop, Otto		Provinz Posen	ポーランド	Sagen der Provinz Posen. Gesammelt und hrsg von -. Mit Abbildungen. (=Eichblatts Deutscher Sagenschatz Bd.3)	Berlin-Friedenau	1913
54	Kramer, Karl-S.		Volkssage und Volksglauben	ドイツ	Volkssage und Volksglauben Glaubenssagen und Glaubenswirklichkeit. In: Festschrift Matthias Zender; Hrsg von Edith Ennen und Gunter Wiegelmann II. Bd.	Bonn	1972
55	Kuhn, Adalbert		Markische	メクレンブルク＝フォアポンメルン	Markische Sagen und Marchen nebst einem Anhange von Gebrauchen und Aberglauben gesammelt und hrsg von -.	Berlin	1843
56	Kuhnau, Richard	1	Breslau	ポーランド	Breslauer Sagen, gesammelt und herausgegeben von -.	Breslau	1926
57	Lohmeyer, Karl	1	Saar	ザールラント	Die Sagen von der Saar, Blies, Nahe, vom Hunsruck Soon und Hochwald. Gesammelt von -.	Saarbrucken	1935
58	Maierbrugger, Matthias		Glodnitztal	ケルンテン	Sagen aus dem Glodnitztal. Hrsg und erlautert von Osker Moser. In: Aus Karntens Volksuberlieferung, Karntner Museumsschriften XVII.	Klagenfurt	1957
59	Mailly, Anton, A.Parr und E. Loger		Burgenland	ブルゲンラント	Sagen aus dem Burgenland, hrsg von -.	Wien und Leipzig	1931
60	Meiche, Alfred		Sachsische Schweiz	ザクセン	Sagenbuch der Sachsischen Schweiz und ihrer Randgebiete, von -. 2., wesentlich vermehrte Auflage.	Dresden	1929
61	Merkelbach-Pinck, Angelika	1	Lothr. Meistube	ロレーヌ	Aus der Lothringer Meistube. Sagen, Schwanke, Legenden, bauerngeschichten, Redensarten, Sprichworter. Bd. I.	Kassel	1943
62	Merkelbach-Pinck, Angelika	1	Lothringen	ロレーヌ	Lothringer erzahlen. Sagen, Schwanke, Spruche, Brauche, Bd. 2.	Saarbrucken	1936

63	Meyer, Gustav Friedrich		Amt Rendsborger	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン	Amt Rendsborger Sagen	Rendsburg	1925
64	Mullenhoff, Karl		Schleswig-Holstein	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン	Sagen, Marchen und Lieder der Herzogthumer Schleswig-Holstein und Lauenburg, hrsg von -. 4. Aufl.	Kiel	1845
65	Muller, Friedrich		Siebenburgische	ルーマニア	Siebenburgische Sagen, gesammelt und hrsg von -. (=Siebenburgisch-deutsche Volksbucher Bd. I.)	Wien und Hermannstadt	1885
66	Muller, Josef		Uri.	スイス	Sagen aus Uri. Aus dem Volksmunde gesammelt von -. Hrsg. von Hanns Bachtold-Staubli. Band I. (Schriften der Schweizerischen Gesellschaft fur Volkskunde. 18.)	Basel	1926
67	Muus, Rudolf		Nordfriesische	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン	Nordfriesische Sagen, hrsg von -. (=Anm. Vgl. Anh.d. 1. Leitkarte)	Stedesand	1932
68	Nimtz-Wendlandt, Wanda		Kurische Nehrung	リトアニア 東プロイセン)	Erzahlgut der Kurischen Nehrung, hrsg von -. In: Schriften des Vkde. -Archivs Marburg, Bd. 9. Hrsg. G. Hensen.	-	1961
69	Petzoldt, Leander	1	-	ドイツ	Deutsche Volkssagen. Herausgegeben und erlautert von -.	Munchen	1970
70	Peuckert, Will-Erich	1	Hochwies	チェコ 仏デーテン)	Hochwies. Sagen, Schwanke und Marchen mit Beitragen von Alfred Karasek, hrsg. von -. (=Denkmaler deutscher Volks- Volksdichtung Bd.4)	Gottingen	1959
71	Peuckert, Will-Erich		Nieder-sachsische	ニーダーザクセン	Niedersachsische Sagen. Hrsg von -. (=Denkmaler deutsche volksdichtung, Bd. 6, I).	Gottingen	1964
72	Peuckert, Will-Erich		Nieder-sachsische	ニーダーザクセン	Niedersachsische Sagen II hrsg von -. (=Denkmaler Deutscher Volksdichtung hrsg von-. Bd. 6, II, Niedersachsische Sagen).	Gottingen	1966
73	Sammlung Karasek	1	Ungarndeutsch Nr. 1-1999	ハンガリー・ルーマニア	Ungarndeutsche Volkserzahlungen aus dem Bakonyerwald, Schildgebirge und Ofner Bergland (Manuskript)	-	-
74	Sammlung Karasek	1	Ungarndeutsch Nr. 3000 I	ハンガリー・ルーマニア	Ungarndeutsche Volkserzahlungen aus dem Bakonyerwald, Schildgebirge und Ofner Bergland (Manuskript)	-	-
75	Sammlung Karasek	1	Ungarndeutsch Nr. 3000 II	ハンガリー・ルーマニア	Ungarndeutsche Volkserzahlungen aus dem Bakonyerwald, Schildgebirge und Ofner Bergland (Manuskript)	-	-
76	Sammlung Karasek	1	Ungarndeutsch Nr. 4000-4499	ハンガリー・ルーマニア	Ungarndeutsche Volkserzahlungen aus dem Bakonyerwald, Schildgebirge und Ofner Bergland (Manuskript)	-	-
77	Sammlung Karasek	1	Ungarndeutsch Nr. 5900-5999	ハンガリー・ルーマニア	Ungarndeutsche Volkserzahlungen aus dem Bakonyerwald, Schildgebirge und Ofner Bergland (Manuskript)	-	-

78	Sammlung Karasek	1	Ungarndeutsch Nr. 6000-6099	ハンガリー・ルーマニア	Ungarndeutsche Volkserzahlungen aus dem Bakonyerwald, Schildgebirge und Ofner Bergland (Manuskript)	-	-
79	Sammlung Karasek	1	Ungarndeutsch Nr.2000-2999	ハンガリー・ルーマニア	Ungarndeutsche Volkserzahlungen aus dem Bakonyerwald, Schildgebirge und Ofner Bergland (Manuskript)	-	-
80	Sammlung Karasek	1	Ungarndeutsch Nr.4500-4700	ハンガリー・ルーマニア	Ungarndeutsche Volkserzahlungen aus dem Bakonyerwald, Schildgebirge und Ofner Bergland (Manuskript)	-	-
81	Sammlung Karasek	1	Ungarndeutsch Nr.5000-5199	ハンガリー・ルーマニア	Ungarndeutsche Volkserzahlungen aus dem Bakonyerwald, Schildgebirge und Ofner Bergland (Manuskript)	-	-
82	Sammlung Karasek	1	Ungarndeutsch Nr.5200-5399	ハンガリー・ルーマニア	Ungarndeutsche Volkserzahlungen aus dem Bakonyerwald, Schildgebirge und Ofner Bergland (Manuskript)	-	-
83	Schell, Otto	1	Bergische	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Bergische Sagen. Gesammelt und mit Anmerkungen herausgegeben von -.	Elberfeld	1897
84	Schell, Otto	1	Bergische	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Bergische Sagen. Gesammelt von -. Zweite vermehrte Auflage.	Elberfeld	1922
85	Schlosser, Paul		Bachern	スロヴェニア	Bachern - Sagen, Volksuberlieferungen aus der alten Untersteiermark; gesammelt und hrsg von -. (=Veroffentlichungen des Osterreichischen Museums fur Volkskunde Bd. IX)	Wien	1956
86	Schmitz, J.H.	1	Eifler	ノルトライン＝ヴェストファーレン	Sagen und Legenden des Eifler Volkes. Hrsg. von -.	Trier	1858
87	Schonwerth, Franz Xaver v. u. Karl Winkler	1	Oberpfalz	バイエルン	Oberpfalzische Sagen, Legenden, Marchen und Schwanke. Aus dem Nachlas Franz X. v. Schonwerths gesammelt von Karl Winkler.	Kallmunz/Oberpfalz	出版年不詳
88	Schonwerth, Friedrich	1	Oberpfalz	バイエルン	Aus der Oberpfalz. Sitten und Sagen. Erster Teil.	Augsburg	1857
89	Schonwerth, Friedrich	1	Oberpfalz	バイエルン	Aus der Oberpfalz. Sitten und Sagen. Zweiter Teil.	Augsburg	1858
90	Schonwerth, Friedrich	1	Oberpfalz	バイエルン	Aus der Oberpfalz. Sitten und Sagen. Teil III.	Augsburg	1859
91	Segscheneider, Ernst Helmut		Sudoldenburg	シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン	Zur mundlichen Uberlieferung der Sage in Sudoldenburg. In:Festschrift Matthias Zender hg. Von Edith Ennen und Gunter Wiegelmann Bd. II.	Bonn	1972
92	Storch, Karl	1	Mies	チェコ（ズデーテン）	Sagen des Kreises Mies. Gesammelt von -.	Dinkelsbuhl	1958
93	Stumvoll, R.		Magdeburger Dom	ザクセン＝アンハルト	Der magdeburger Dom in Sage und Geschichte, hg. von -.	Magdeburg	1908

94	Temme, J.D.H.		Mark Brandenburg	ブランデンブルク	Volkssagen aus der Mark Brandenburg, Nachdruck der Ausgabe Berlin 1839, Hildesheim - New York, 1976 (=Volkskundliche Quellen. Neudruck europaischer Texte und Untersuchungen IV: Sage)	Berlin	1839
95	Temme, J.D.H.	1	Pommern und Rugen	メクレンブルク=フォアポンメルン	Die Volkssagen von Pommern und Rugen. Gesammelt von -. Nachdruck der Ausgabe Berlin 1840, Hildesheim -New York 1976 (=Volkskundliche Quellen. Neudrucke europaischer Texte und Untersuchungen IV: Sage)	Berlin	1840
96	Treutwein, Karl	1	Mainfranken	バイエルン	Sagen aus Mainfranken. Ausgewahlt und bearbeitet von -.	Wurzburg	1969
97	Veckenstedt, Edm.		Wendische	ポーランド	Wendische Sagen, Marchen und aberglaubische Gebrauche. von -.	Graz	1880
98	Vernaleken, Theodor	1	Alpensagen	スイス、オーストリア	Alpensagen. Volksuberlieferungen aus der Schweiz, aus Vorarlberg, Karnten, Steiermark, Salzburg, Ober- Niederosterreich. Von -.	Wien	1858
99	Wiepert, Peter		Fehmarn	シュレスヴィヒ=ホルシュタイン	Volkserzahlungen von der Insel Fehmarn; gesammelt und erlautert von -. Mit Anmerlingen von Kurt Ranke. (=Niederdeutsche Denkmaler, Bd. X).	Neumunster	1964
100	Witzschel, August	1	Thuringen	テューリンゲン	Sagen, Sitten und Gebrauche aus Thuringen. (=Kleine Beitrage zur deutschen Mythologie, Sitten- und Heimatskunde in Sagen und Gebrauchen aus Thuringen, 2. Theil. Hrsg. v. G.L. Schmidt)	Wien	1878
101	Wolf, J.W.	1	Hessische	ヘッセン	Hessische Sagen, hrsg. von -.	Leipzig	1853
102	Wossidlo, Richard		Reise,Quartier, in Gottesnaam	メクレンブルク=フォアポンメルン	Reise, Quartier, in Gottesnaam. Das Seemannsleben auf den alten Segelschiffen im Munde alter Fahrensleute. Im Auftrage des Kuratoriums der Wossidlo-Stiftung aus dem Nachlas Richard Wossidlos bearbeitet u. Hrsg v. paul Beckmann, 4. Aufl.	Rostock	1952
103	Zender, Matthias	1	Westeifel	ラインラント=プファルツ	Sagen und Geschichten aus der Westeifel gesammelt und herausgegeben von -.	Bonn	1966
104	Zimmerische Chronik		-	ドイツ	Zimmerische Chronik, hrsg v. Barack, Karl August, Bde I-IV, 2. Verb. Aufl.	Freiburg/Br., Tubungen	1881/82
105	Zingerle, Ignaz von		Tirol	ティロル	Sagen aus Tirol. Nachdruck der 2. verm. Aufl.(Graz 1969)	Innsbruck	1891

資料3　参照したFeuermann伝承の日本語訳

※　太字は著者名、そのうしろは出典伝承集の出版年。
ただし、Sammlung Karasekについては採集年。

※　具体的にどの伝承集を使用したかについては、資料2を参照。
著者名と出版年から検索できる。

Alpenburg　　1861

S.25f. Nr.25

<ティーアベルク（Thierberg）の夜遊び人>あるときのこと、だらしない夜遊び人がクフシュタイン近郊のティーアベルク城に登っていた。夜這いをかけようと思っていたか、あるいはもしかしたらもっとひどいことを考えていたのかもしれない。彼が畑の間をどんどん抜けていき、はしごによじ登ろうとしたそのとき、燃える人影が彼に近づいてきて、戻れと合図を送ってきた。しかし大胆にも若者は、燃える人を恐れず、いや、それどころか悪魔さえ恐れなかっただろう、悪態をつき、その影に殴りかかった。そしてそのとき――それは起こった。夜遊び人こそが燃えている人影となったのである。彼が悪態をついたその場所で、相手にかわって燃える亡霊の姿となり、悪態をついた相手がそうであったように、そこで燃えている人影として罪を償い続けなければならなくなった。――いつか昇天するときまで。その後、ティーアベルク城は廃墟となったが、はしごのところだけは今でもいかがわしい場所として残っている。そして人々は、できる限り夜そこに登らないようにしている。

Alpenburg　　1861

S.269f. Nr.282

Jenestenのある年老いた農夫は、年齢と比して髪がふさふさ生えていた。ただ、額の真ん中に、手ほどの幅をしたあたかも刈り落としたかのごとくに丸くはげ上がった部分があり、周囲は健康な毛が生えているだけにたいへん目を引いた。それにはこのような由来がある。あるときこの農夫は、Meranの市場に出かけ、そこで雌牛を一頭買った。彼は牛を連れて、Voranを越え、Moltenを通りぬけ、自宅がある集落に向かっていた。しかし、Molteを越えたあたりで日が落ち始め、Potoijerの麓まで来るともう真っ暗で、かすかに、Salter北側に一軒の農家がみえたが彼はこの農家を訪れ、外が真っ暗なので、どうか提灯でよいから貸してほしい、と頼んだ。ありがたいことに、提灯を貸してくれたので、おそるおそるも農夫は先に進んだ。森まできたとき、連れた雌牛が、もうこれ以上進みたくないと鳴き出し、震えながら後ずさりし始めた。農夫は悪態をつきながら、牛を力ずくで道に戻そうと鞭を当てた。ようやく牛が前進し始めたので、農夫は後ろからついていった。すると、彼らの向かう方向に、頭のさきから足のさきまで赤々と燃えている男が立っているのがみえた。そのときカラマツの梢から露がひとしずく滴り、頼みの綱の提灯の炎がしゅっと消えてしまった。それでも牛は黙々と歩み続けた。やがて、農夫は、赤々と燃える男にみえたものが、じつは、朽ち果てた木だったことに気づいた。ようやく普通の様子に戻った牛は、森の中の道をゆるゆると歩み続け、Ringl=Wiesen（Ringlという名の牧草地）あたりまでやってきた。暗がりに慣れた農夫の目に、遠くに建物があるのが映った。こうこうと明かりがともり、騒々しいダンス音楽が流れていた。どうやら居酒屋のようだ。以前彼がここを通ったときには何もなかったから、おそらく新しくできた店なのだろう。農夫は店に向かい、牛を柵につないでから店に入った。店内では、大勢の着飾った男女が組になって踊りに興じていた。給仕の女性が注文をとりにきたので、農夫はワインを頼み、椅子に腰掛けた。ワインはすぐに運ばれてきた。それを口にしながら、彼がちらりと店内見回すと、なんと、店の入り口に、燃える目をした大きな雄山羊が身動ぎひとつせずに立ちつくしているではないか。怖気だち、どうやってこの建物から出ようかと農夫は思案した。グラスにはまだワインが残っていたが、それを飲み続ける気も失せてしまっていたので、勘定をしてもらおうと給仕を呼んだ。給仕は、金はいいから私と1曲踊ってほしいと言ってきたが、農夫は彼女の申し出をきっぱり断った。すると給仕は突然けたけたと笑いだし、待て、と叫びながら、いきなり農夫の額に左の掌を押しつけてきた。彼には状況がさっぱりの見込めなかったが、気づくいたときには家の外にぽつねんと立ちつくしていた。彼は、入店前につないだ雌牛の綱を解き、牛を牽いて歩き出した。最初の高台で彼は一服し、もと来た道の方を振り返って、いましがた出てきたばかりの居酒屋のあたりに目をやった。建物の外に、例の燃える車輪のような目をした巨大な雄山羊が、陣取っているのがみえた。そのとき、しゅうしゅういう音が聞こえたかと思うと、花火でも打ち上げたかのようなドカンという爆発音がした。先ほどまで建っていた居酒屋は、半分が地中に沈み、もう半分は煙とともに空中に飛び散ってしまったぎょっとして半分死人のようになってしまった男は、身も心もやつれ果て、這々の体で家に辿り着いた。翌朝、鏡に映る自分の姿をみたとき、男は魔女の手ほどの広さに額の一部が禿げ上がっているのに気づいた。禿げた部分には、二度と毛は生えなかった。

Assion　　1972

S.131 Nr.102, Anm.102, S.248

<MannleinとSteinbachの木製十字架>ある時ある車屋が夜遅くにSteinbachからMudauへの道を移動していたときのことだった。車輪が1つ壊れてしまった。車輪を修理し、車軸にはめ直そうとしたものの、あたりが暗く何も見えなかった。そこに灯りを持ったMannleinが現れて、車屋を照らしてくれた。その後、Mannleinは消えてしまった。車屋は斧を手に取り、小枝を2本切り取り、奇妙な出会いをしたその場所に十字架を作って立てた。

Assion　　1972

S.146 Nr.136, Anm.136, S.259

<照らすMannlein>Heidersbachの農夫が、あるときGroseicholzheimに、大豆を1袋取りに行った帰り道のこと、車の右側後輪が外れてしまった。既に夜が更けていたのに彼は灯りを持っていなかったため、修理することができなかった。突然彼の脇に小さな明るいMannleinが立って、照らしてくれた。数週間後、農夫はその同じ場所で死んだ。

Assion 1972

S.146 Nr.137, Anm.137, S.259f.

<Sturzenscheiser>Heidersbachの近くには、"Sturzenscheiser"と呼ばれる、燃える人が徘徊した。ある日の夜のこと。Mosbachから車引きがビール樽を積んで車を走らせていた。しかし、不幸にも車輪が1つ外れてしまった。外はすでにかなり暗く、修理をしようにも車引きは灯りを持っていなかった。そこを燃える人が野原を歩いているのが見えたので、車引きは彼を呼んだ。「Sturzenscheiser、こっちへ来てくれんか」。燃える人はすぐさま彼の横にやってきて、作業を照らしてくれたので、車軸に車輪を戻すことができた。手助けのお礼として、燃える人に車引きは1クロイツァーを杖に載せて差し出した。するとSturzenscheiserは消え、車引きは無事に家までたどり着くことができた。

Assion 1972

S.152 Nr.155, Anm.155, S.263

<Neudenau近郊の燃えるやつ> "Ferschtle"は汚いところで、奇妙なやつが出るので知られていた。むかし、SiglingenからGangolfskarchの脇をすぎたあたりの道で、Neidemeerが家路についていた。あたりは真っ暗で、一歩も踏み出すことができなかった。男は、やっとのことでGangolfskarchの脇をすぎ、Ferschtleのあたりまでやってきた。そこには、燃えるJagschdが出るらしいと言われていたので、こう叫んでみた。「出てきて照らしてくれたら、コーブルクの6ペニヒ硬貨を約束するぞ」。すると、なんたることか、真っ暗闇から燃えるJagschdが現れて、家に着き、台所にはいるまで照らしてくれた。到着すると奴は言った。「ではコーブルクの6ペニヒ硬貨を頂こうか」。男が台所のテーブルにあった硬貨を渡すと、燃えるやつは受取り、行ってしまった。いったいあれはなんだったのだろうか。テーブルの上には、指の跡が5つ、しっかりとついていた。

Assion 1972

S.183 Nr.228, Anm.228, S.278

<Gerichtstettenの燃える奴> 昔、Gerichtstetten近郊のHerreswaldには、燃える人が徘徊した。あるとき、1人の農夫の車の車輪が飛び出してしまったが、真っ暗な夜だったので車輪を元に戻すことができなかった。そこで、燃える奴が来てくれないかと願った。農夫がそう願うや否や、燃える奴が現れ、すぐに照らし始めたので、農夫は修理することができた。作業が終わると、農夫はありがたいとは思ったが、燃える人にはすぐに消えてほしいと思った。燃える奴が手を伸ばしてくると、おずおずしながらも農夫はその手を握ったので、焼け死んでしまった。

Assion 1972

S.186 Nr.238, Anm.238, S.280

<Zehntscheuerの燃える奴>水車（風車）を作る職人が、grosen HardheimerのZehntscheuerの水車（風車）で仕事をしていたところ、よくあることなのだが、家畜の餌が1片はらっと彼の上に落ちてくるのに気づいた。それを不愉快に思い、彼はこう言った。「止めねえと、そこへ上がっていくぞ！」 しかし上を見上げて驚いた。というのも、そこには燃える人が立っていたからだった。水車職人はとるものもとりあえず一目散に家に帰った。

Assion 1972

S.196f. Nr.268, Anm.268, S.285f.

<Dorlesbergの燃える奴>あるときUnterdorfのSchmiedshausにあるzum Spinneに人々が集まっていた。とても愉快で騒がしかった。そんな最中、ある男が窓越しに"Langen Wiesen"を指し示し、「見て見ろよ、あそこに妖怪がうろついているぜ！」と叫んだ。最初は誰もが笑い飛ばし、たいていの者は、きっとその男がリンゴ酒"Opfel-Mouscht"を飲み過ぎたに違いない、と考えた。しかし、自分で窓越しに目をやると外を燃える人がうろついているように見えた。燃える人は、暗闇で車が壊れてしまったりして困っている人を照らし、助けることで知られていたので、それを恐れる者はいなかった。だから、呼び寄せ方を知っているある者が、すかさずこう叫んで窓ごしに燃える人に呼びかけた。「同胞よ、Stutzenscheiserよ、ここへ来な！」 燃える奴はすぐさま建物に向かってきて、窓枠にしがみついてきたではないか。誰もが死ぬほどびっくり仰天して、奥の部屋に駆け込み、悪魔払いの呪文を唱えた。窓の外に光りが何も見えなくなって初めて、ようやく何人かの若者が元の居間に戻った。化け物（Spuk）はもういなかった。窓枠をじっくり見てみると、そこには燃える奴のかぎ爪の焦げ跡があった。居合わせた人々は、ふたたび背筋が凍るのを感じた。

Assion 1972

S.209 Nr.292

<Schwabhauser橋の燃える奴>ある日の夜遅く、Windischbuchの農夫（Bauer）がBoxbergから帰宅する途中のこと。Schwabhauser橋にさしかかったとき、前輪が壊れてしまった。近くに燃える男が見えたので、農夫はこう言って彼を呼び寄せた。「Stutzenscheiser、来てちょっと照らしてくれんか」。燃える奴はすぐにやってきて照らした。農夫は車輪を修理し、作業が終わると燃える奴に1グロッシェンを差し出した。男は感謝し、すがるようにこう言った。「これと同じだけもう一度もらうことができたなら、昇天できるのだがなぁ！」 しかし農夫はその願いを受け入れなかった。燃える奴は消えた。数週間後、農夫はまた車を引いてBoxbergから家に向かっていた。この間燃える奴に照らしてもらった場所に来たとき、農夫は事故で車から投げ出されてしまった。翌朝、そこに農夫の死体が横たわっているのが発見された。

Baader 1851

S.294 Nr.318

<燃える男>ある夜、BrucksalとUbstadtの間の長い橋を農夫が歩いていたとき、向こうから燃える男がやってきた。男はすれ違いざまいきなり農夫の手をつかんだので、農夫は手を火傷してしまい、切り落とさなければならなくなってしまった。

Baader 1851

S.365f. Nr.411

<燃える男が（闇を）照らす>ライホルツハイム（Reicholzheim）とデアレスベルク（Dorlesberg）の間の道には、大昔から伝わる言い伝えによると、燃える男がさまようことがある。ずっと以前のある夜のこと、荷馬車牽きがこの道を、馬車を牽いて歩いていたとき、暗がりの中で荷馬車が故障してしまった。暗くてどうしようもなかったので、彼は燃える男を呼び、照らして欲しいと頼んだ。すると燃える男がやってきて、作業が終わるまで車のまわりをぐるりと照らしてくれた。荷馬車牽きは、礼として燃える男に1グロッシェンを渡した。

Benzel 1957

S.11 Nr.32

"Feirige Manner"が、村の中のSchmiedegasselから「鉄十字」走り抜けた。彼はまるでわらでできたかかしのようで、内側は燃えていた。

Benzel 1957

S.11 Nr.33

燃える人は人畜無害。わずかな報酬で彼は誰でも家まで送り届けた。家に着くと、彼は無言のまま戸口に立ち、報酬がもらえるのを待った。たとえばパンのかけらや穀物粒、半クロイツァーで彼は充分満足した。彼の姿は大きく、全身が輝いており、炎と燃える光りを放っていた。

Benzel 1957

S.11 Nr.34

"Feirige Manner"は報酬を求めて人々を照らす。照らしてもらった人は、彼にパンの欠片などでいいから、相応の礼をしなければならない。もしそれをしなければ、戸口で飛び跳ねたり、家屋に飛び乗って、家をめちゃめちゃにした。

Benzel 1957

S.11 Nr.35 Abs.1

"Feirige Manner"は、"Murtl"という名前だった。彼らは、人々の家路を助けた。家に着いたら彼らに礼をしなければならなかったが、パンの欠片を2つ 3つやれば充分だった。窓から放り投げれば、彼らが入ってくることはなかった。また彼らは、古びた小刀もほしがった。

Benzel 1957

S.11 Nr.35 Abs.2

昔ある男が家路を照らしてもらった。家に着くと、"Feirige Moa"は報酬を待っていたが、男は窓の外に向かってこう言った。「Murtl、行っちまえ、失せやがれ！」"Feirige Moa"は、すぐさま窓をぶち破り、男を圧死させた。

Benzel 1957

S.12 Nr.36

昔Roshauptには"Feirige Manner"がいた。森や牧草地にいた。彼らはいつもこんなふうに叫んでいた。「Derlost mich doch, derlost mich doch!」。あるとき、ある男が夜帰宅途中のこと。この男も、"Feirige Manner"を目撃したところ、やはり「Derlost mich doch, derlost mich doch!」と何度も叫んでいたという。しかし男は怯まず、こう問いかけた。「どうしてほしいんだ。どうしたらあんたを昇天させてやれるのか、俺にはわからんよ」。とうとう"Feirige Moa"は答えた。「何でもいいから言ってほしい」。男は少し考えてからこう言った。「よし、あんたがderlosenされますように、だ」。そうすると、"Feirige Moa"は、大声で叫んだ。「あんたは俺をderlosenしてくれた。神の恵みがありますように！ （ありがとう！）」 そして消

Benzel 1957

S.12 Nr.37

"Feurige Mann"は、Rahmwiesenbruck近くによく徘徊した。彼らはまるでHundpudelのような姿をしていて、足のようにころがっていたという。色は黒く、目は燃えるようだったという。

Benzel 1957

S.12 Nr.38 Abs.1

昔、"Feirige Mann"が徘徊した。人々は帰宅途中、こんなふうに彼らを呼んだという。「Blouhons, Blouhons、こっちへ来て、照らしてくれ」。すると青く光りながら彼らは現れた。光りは口から出ていた。彼らはほとんどなにもほしがらなかったが、もしなにもやらなければ相手を引き裂いた。彼らは森や野原に妖怪のように現れた。彼らは戦争で倒れた兵士たちだった。"Feirige Mann"とは、煉獄の哀れな魂である。

Benzel 1957

S.12 Nr.38 Abs.2

"Feirige Mann"は、いつもSchmiedgasel辺りを徘徊した。彼らは何か燃えるものを持っていた。彼らは出くわした者を家まで追いかけてくると恐れられた。

Benzel 1957

S.13 Nr.39

昔私の母が2人の息子とRangerに向かったときのこと。森にさしかかり、木の上にFeirige Moaがいるのを見つけた。彼らは恐ろしくなり、家に戻った。

Benzel 1957

S.13 Nr.40

私の曾祖父の父はMaierhuofで鍛冶屋をしていた。ある夜、外でなんだか鍵をかけるような物音がしたので、曾祖父は1人で見に出かけ、壁の鍵穴に鍵を差し込んだ。その時分には、周囲をFeirige Mannerがうろついていた。曾祖父はその1人にこう言った。「こっちへ来て、ちょっくら照らしてくれんか」。Feirige Moaがやってきて、作業が終わるまでそこにいた。作業が終わるといってしまった。

Benzel 1957

S.13 Nr.42

昔はFeirige Mannがいた。彼らが出現すると、その年が良い年になると考えられた。しかも彼らはとても強かったらしい。

Benzel 1957

S.13f Nr.43

あるときFeiriger Moaが、部屋でくつろいでいる下女のところに現れ、こう言った。「お願いだ、俺をderlosenしてくれ」。下女は尋ねた。「どうしたらいいの？」 Feirige Moaはこう答えた。「おまえのベッドに入れてくれ」。下女はそれを許した。彼女は彼にこう言った。「あなたはなんて熱く、燃えさかっているの！」すると突然彼女の隣には、緑色をした上等の上着（Rock）を身につけ、靴底が銀出てきている長靴を履いた、美しい若者が横たわっていた。

Benzel 1957

S.14 Nr.44

Vogelsangに1人の年寄りが住んでいた。名をDiebelといった。彼の友人はHutscherstubnの娼婦宿にちょくちょく出かけ、女を買っていた。満月の時以外、いつもFeirige Mannerが来て、Hutschenstubnまで同行してくれた。彼らはいつも半クロイツァーが与えられた。ある時男は不運なことに、半クロイツァー硬貨が古い溝に落ちてしまった。するとFeirige Moaは、男が硬貨を拾うまで、先に進もうとはしなくなった。そういうわけで、やつらは結構神経質だった。

Benzel 1957

S.14 Nr.45

Lowenhofの年老いたRuglerが、また牛を一頭買った。彼は牛を連れてPetersburgを越えてRobesgrunまで行かなければならなかった。その際、Zwodauを横断しなければならなかったが、どこを通っているのか、彼はちゃんと知っていた。老人は、夜の8時から朝の5時まで小川沿いの小道を登ったり下ったりした。月明かりは明るかったが、彼は山道を見つけることができなかったので、とうとうこう叫んだ。「Feiermannはどこだ？」 すると、10歩先に明るく美しく輝く炎が見えた。老人は炎に付き従い、やがて山道の入り口に到着した。「ありがとう（Vergelts Gott）。やっと入り口が見つかったからね」。老人がそう言うや否や、小川の対岸にがらくた（Gerumpel）が現れ、石切場で轟音がした。後に老人は、石切場であったことについて語ると、誰もが静かになった。

Benzel 1957

S.14f. Nr.46

Johannes Dorfの近くには、Suderbachleinが流れていたが、毎年春になると水が溢れるのが常だった。ある男の恋人はSt.Johannに住んでおり、彼女を訪ねようと思ったが、その時も大水が出ていた。周囲は既に暗くなっていた。そんなとき、Feirige Mannerががそばを通りかかったので、これはしめたと男は呼びかけた。「Feirige Moaよ、誰か俺を助けてはくれんかね」。1人がやってきて、こう聞いた。「どうしたらいいんだい？」 もう1人のFeirige Moaが山を転げ落ちてきて、水の中に飛び込んでしまった。その中に、ある光景が見えた。対岸の水の中に、彼の恋人がいたのである。光景は普通にしゃべっていた。光景はふりかえると消えてしまった。それと同時にFeirige Mannerも消え、水音がした。男は不安になった。森の中を走り抜けようとしたが、そこで迷ってしまった。Feirige Moaがやってきてこう言った。「1時間につき半クロイツァー、10時間だから、10枚だ」。男はそれをFeirige Moaに約束した者の、じつは彼の家は貧しく、父はしがない木こりだった。夜な夜なFeirige Moaは窓辺にやってきたが、男の父はFeirige Moaとの約束を知らなかった。家族はみんな恐怖に怯え、父は母（彼の妻）に、おまえのせいなのかと聞いた。息子は全てをうち明けた。彼は自分の主人である騎士のところへ助けを求めに行ったが、笑ってこう言った。「それなら行ってやろうじゃないか」。彼は傭兵（Landsknechte）を2人呼びだし、Feirige Moaを捕獲して袋に入れてくるように命じた。彼らは家の前で待っていたが、Feirige Moaは現れなかった。突然傭兵は消えてしまい、その後、何も現れなくなった。

Benzel 1957

S.15f. Nr.47

ある時火が見え、それがこんなふうに叫んでいた。「ほい、ほい！」 その火は次第に近づいてきて、とうとう車の上に乗ってきたので、（荷物が）燃えだしてしまった。（車を引いていた）下男（Knecht）は驚いて「こんちくしょう（Sakrament）！なんだこりゃ！」と叫んだ。するとFeirige Moaが現れて、こう言った。「おお、これで私はderlosenされたよ！」

Benzel 1957

S.15f. Nr.48

Feirige Mannerは、禁じられた時刻、すなわち妖怪の時（真夜中0時）に徘徊した。金曜日や大きな祝日の前夜には、1人で森を歩いてはならなかった。迷信的な年寄りがいうには、それを破って夜道を歩いたりすればFeirige Mannが現れ、背中におぶさり、しばらくの間そのまま歩き続けなければならないというのだ。恐れを知らないものがこのFeirige Mannに話しかけたりしたり、あるいはその問いかけに答えたりしたならば、満足する場合もあるが、答えたものは犠牲になる場合もある。そんなときには、じわじわと痛いやけどをするという。年寄りたちはそのように言っていた。

Benzel 1957

S.16 Nr.49

LowenhofとZwodauの間でのこと。Lowenhofで牛を一頭売ったというZwodau出身のある男がこんな話を語ってくれた。帰宅途中の道はとても暗かったので、「ああ、灯りがあったらなぁ」と言った。すると炎がやってきた。場所は、Lowenhofのすぐそばだったという。炎は何も言わずに彼に同行した。男がZwodauの十字路にさしかかると、こう言った。「ありがとう（Vergelts Gottto）」。クロイツァーするタバコを1パック、地面においた。すると、炎は消え、タバコも消えてしまった。

Benzel 1957

S.16 Nr.50

ニワトコの小枝があった。その下にFeirige Moaが座っていて、いつも泣いていた。あるときその前を葬列が通りかかり、Feirige Moaを見かけた。司祭が祈りをあげると、Feirige Moaはderlosenした。

Benzel 1957

S.16 Nr.51

昔、Feiermannlがいた。Erpelkriebenでのこと。ある農家の息子が、夜遅くまで出歩いていて、外が真っ暗になってしまった。農夫は、下男（Knecht）に言った。『ゼフ（Knechtの名前）、Feiermannlを呼べ』。ゼフが『Feiermannl、出てこい』と叫び、Tschicherをすると、Feiermannlが目の前のDeichsenspitzeの上に現れた。それを見て馬は恐れおののいた。美しい光りを伴って、彼らは家路を急いだ。家に着くと、誰もが緊張したが、Feiermannlはまだ Deichselの上にいる。下男は言った。『Feiermannl、もういってよし！』 それでもFeiermannlはいっこうに消えなかった。仕方がないので、下男は祖母のところに行って一部始終を説明した。祖母は下男に言った。『鞭を持っていって、Feiermannlに十字を3回切って、こう言いなさい。『神のお恵みがFeiermannlにありますように』』。ゼフは外に出て、言われたとおりにした。ふたたびTschicherをすると、Feuermannlは消えてしまった。

Bock 1973

S.103 Nr.132

何十年も前のこと。ReichertshofenのDaumervaterは毎週馬車（Gauwagerl）でGeisenfeldの市場に通っていた。その際、しばしば森の真ん中で燃える男たちにちょっかいをだされたという。それどころか、燃える男のひとりは、あるとき彼の車に乗り込んできた。パンをやったらやっと車から降りた。後にDaumervaterは、それはもう恐ろしかったので馬をとばして、無事に家に着いたのを喜んだのだ、と子供たちに語ってきかせた。

Bock 1973

S.108 Nr.138 Abs.1

<燃える男とBullerhunde>今から50年ほど前までは、Stammhamの農家はどこでもホップ畑を持っていた。そこは夜になるといつでもとても不気味なところだった。というのも、燃える男たちが出没したからである。彼らは骸骨のような姿をしており、炎のように赤い姿で突如として現れた。一番欲現れたのは日曜日だった。Stammhamのある人がインゴルシュタットに向かっていたときのこと。危険な沼地として知られるKapellenで道に迷ってしまった。燃える男たちが照らしたので、家についてしまったのである。真っ暗闇の中で、彼らは神秘的な光りを放って孤独な旅人を何時間も迷わせ、恐怖と疲労から家まで追い返してしまう。家まで照らしたことの報酬として彼らは1グロッシェンをほしがる。あるいはパンのかけらでもよい。そしてその際、『ありがとう（Vergelt's Gott）』と言えば、彼らはきえてしまう。

Bock 1973

S.108 Nr.138 Abs.2

<燃える男たちとBullerhunde>農夫が早朝インゴルシュタットの市場に出かけるとき、はからずも燃える男たちに出会ってしまうことがよくあった。突然車に乗ってくるのだ。彼らが乗ってくると車はとてつもなく重くなるので、馬が汗をかき始め、全力を尽くしてやっと運べるほどだった。また、StammhamからHepbergへの道でも、燃える男に出会わないとは限らなかった。Hepbergの城主でさえもその噂を耳にしていた。Haselbergのふもとでのこと。先代の城主は農夫に手綱をひかせてたところ、燃える男はそこには二度と現れなかった。

Bock 1973

S.108 Nr.138 Abs.3

<燃える男たちとBullerhunde>燃える男たちは、しばしば、けたたましい音をたてる醜いBullerhundeを連れていることがあった。Westerhofの女性、ZenziとAnnaは、あるとき、早朝NeuhauのEichelklaubenに赴いたときのこと。彼女たちは森の100mほど手前でおぞましくひどいめにあった。というのも、Bullerhundeと燃える男たちが彼女たちを追いかけ回してきたのである。この恐ろしい状況から彼女たちはやっとの事で逃げ帰った。Hepbergの司祭が聖別し、1854年に教皇が悪魔払いをしてからは、燃える男たちとBullerhundeが出没することはなくなった。

Bock **1973**

S.127 Nr.162

<車軸の上の燃える男たち>私がまだ子供だった頃、Zucheringの年老いた大工が、仕事中に現れて彼を悩ませる燃える男たちについてよく話してくれた。それはこんな話だ。彼が仲間と木を切り倒して持って帰ろうとして森（Holz）に向かうときはいつも、燃える男たちが車幅一杯に車軸に飛び乗ってきたという。そうると荷車は、馬が引けないほどの大変な重さになった。

Bock **1973**

S.73 Nr.86

私の母Johanna Kogelは、1871年か1872年にHagau生まれである。彼女がまだ子供だった頃のこと。Hagauで人が死んだ。人が死ぬと、その人が寝ていた藁布団を外に出して燃やしたので、（それに従って）、夜、布団が燃やされた。その時、母を含む数人の子供たちは、燃える火を見ていた。すると、赤い、まるで矮人のような人物が現れた。矮人たちは手をつなぎ輪になって踊っていた。

Bock **1973**

S.81 Nr.100

Koschingのある老人が、肉屋のWallyから聞いた話。Wallyが小さな子供だった頃をいろいろ語ってくれたが、その中に燃える男の話もあった。それはこんな話。豚市に農夫が出かけたときに、奇妙な徒弟が車の上に上がり込み、座り込んでしまった。祈りの鐘が聞こえる頃になってやっと彼らは降りてくれた。農夫がパンを一かけらも投げなかったり、「みなさんにありがとう(Vergelt's Gott fur's Leuten)」とも言わなかったりすれば、失明し、失聴するほど手痛いビンタを食らわされた。十字路などの聖別された場所、たとえばFeldkreuzenのところなど、墓標のあるところに、やつらは現れた。しかし今では燃える男を恐れることはない。というのも、教皇が（der Heiligen Vater)が追い払ってくれたからだ。

Bock **1973**

S.81f. Nr.101

<Weana-BruckelのSpuk> Ampferlは、屋号BaoschのところのAmpferl（男）は、自分の馬に乗ってしばしばインゴルシュタットの穀物市場に出かけた。農夫である彼はそこで、持ってきた袋をおろすと、ビール醸造者が現れ、Troadをじっくりみて、購入するのに一番きれいで良いものを選んだ。その後農夫は酒場に立ち寄り、帰途についたのは夜遅くになってからだった。Ampferlが長く酒場にへばりついた後、やっと帰途についた。Weana橋のたもとは現在はKastlbauerの新しい開拓地への入り口になっているが、そこに燃える男がいたのである。その場所では決して眺め回したり口をきいたりしてはならなかった。もしもAmpferlが一言でもしゃべったりしたならば、燃える男が彼に向かって飛びかかってきたに違いない。Ampferlはとても狡賢かったので、しゃべるようなへまはしなかった。それゆえ騙されるようなことはなかった。他の者にも同じようなことが起こった。ある女は今でもこんなふうに語る。夜、彼女の夫がWeana橋を渡るときはいつでもまことに不気味なざわざわとした音がして何かが哀れな嘆き声をあげていたというのだ。馬たちは恐れおののき、一歩も進もうとはしなくなってしまうので、それより先には進めなくなってしまうのだった。

Bock **1973**

S.83 Nr.104

<燃える男>誰でもBesenwangerのことは知っている。そいつは、Wolfihauslの裏に住んでいる。1年前、Dersellは…（以下、鉛がきついため要約のみ） 境界違反者が、燃える姿で徘徊しなければならなかった。隣人が彼に話しかけ、盗んだ土地を元通りにしたこと出やっと彼は昇天することが出来た。

Bock **1975**

S.105 Nr.238

<ジャガイモ掘りの時に出た燃える男>私の母はMeilenhofenの出で、Siglの農家の出身だった。母が語ってくれたことには、彼女がジャガイモの収穫をして、それを車に乗せるときにはいつも燃える男が手伝ってくれたというのだ。作業が終わると、「Gelt's Gott」と言い、すると燃える男は消えたという。

Bock **1975**

S.131 Nr.295

<燃える人>PerkaにはPeterbauernhofと呼ばれる農家がある。100年ほど前にそこを所有していた農夫は、Biburgの酒場によく立ち寄ったものだった。万聖節の週のある日、あまりに楽しかったので彼は真夜中まで店に居着いてしまった。ようやく深夜になってやっと彼は帰途についた。帰り道は、牧場を越えていくAbendbruckeを越えていくものだった。そこに、突如として燃える人が現れて、農夫に並んだ。Peterbauerは、恐ろしくはなかった。両者とも一言もしゃべらなかった。Perkaの石製十字架のところまできてやっと農夫は帽子を脱ぎ、Vergelt's Gottとだけ告げた。燃える人は暗やみに消えた。それ以来、農夫が夜道を帰宅するときには必ず燃える人が付き添ってくれるようになった。あるとき、Peterbauerはかれがどんな経験をしているかを酒場で人々に話してきかせた。それではと、大口たたき屋が今夜は同行するといってきた。彼は、大きなナイフを隠し持っていた。Abendbruckeには、やはり燃える人が待っていた。それを見ると途端に萎えてしまった大口たたきは、ナイフを持っているのも忘れ、一言もしゃべれなくなってしまった。「3十字」のところで、農夫はいつものように帽子を取り、礼を言った。燃える人は消えた。恐怖に駆られた大口たたきは、もはや1人でBiburgまで戻ることはできず、Peterbauerと一緒にPerkaに向かい、そこで夜を明かし、明るくなってから家に帰った。

Bock **1975**

S.140 Nr.313

<魔女の穴>GambachからPornbachに向かう、いわゆるHochstraseを歩き回ると、昔は、Pornbach村の手前の左側の、道と野原の間にかなり長い穴があった。今では埋められてしまっているが、そこは魔女の穴と呼ばれていた。大昔は、深夜この穴のそばを通ろうとするものはいなかった。というのもそこには燃える男や犬、老女がしばしば現れてうろうろしていたからだ。この穴のそばを通らなければならないときには、恐る恐る道の端によって魔女に捕まらないように歩いたものだった。今ではこうした恐ろしさはなくなったが、そこは今でも雑草が生い茂っていて、有益な作物は植えられていない。

Bock **1975**

S.142 Nr.318

<月見>昔は燃える男たちがいたといわれている。彼らは、月を5分ばかり見つめていた者を追いかけ回したという。夕方になると、家の中にまで入ってきて、室内を照らし出し、それを見た人々は恐れおののいたという。

Bock **1975**

S.144 Nr.325

<Geisenfelder森の燃える男について>もう何十年も前のことになるが、ReichertshofenのDaumervaterは、馬車で毎週Geisenfeldの市場に出かけていた。その際、森のただ中でよく燃える男たちに脅された。男たちのうちのある者は、車に乗り込んできて、パンをやるまで降りようとしなかったという。Daumervaterも馬もすっかり怯えていたので、森から出て開けた野原に出たときにはなんと安心したことかと、後に子供たちに話して聞かせた。

Bock **1975**

S.15 Nr.17

<ありがとう(Das vergelt's Gott)> (ニーダーバイエルン地方、レーゲンスブルク近郊の)アーベンスベルク(Abensberg)のバウアー(Bauer、富農)は、薪を集めるためによく森(Wald)に入った。その途中、いつも1人の燃える男が彼の車に乗ってきて、彼に同伴した。燃える男は、荷物を積み込むときにバウアーの仕事を手伝ったので、バウアーは報酬として2ペニヒを支払っていた。報酬をもらうと燃える男は森に消えた。ある日のこと、バウアーはあいにく持ち合わせがなかったので、かわりに感謝の気持ちとして「神のお恵みがありますように(Vergelt's Gott)」と言った。すると燃える男はこう返事をしたのである。「これでやっと俺は解放される。あんたからもらった金は、あんたの家の戸口の敷居の下にあるよ!」。そう言い残して彼は消え、二度と現れなかった。

Bock **1975**

S.156f. Nr.354

<Aignerhofそばの森の光>今から8年ほど前のこと。Aignerhofの農夫が馬を1頭売ったので、その馬をSchlottまで運ばなければならなくなった。それはとある秋の日、早朝5時でそとはまだ真っ暗な中、彼は家を出た。彼の農場から1キロ半ほどきたところで、農夫はこう思いたった。「森を抜けて、近道をしよう」。しかし、森の中に入ったものの馬はすぐに戻ろうとし、ほとんど進むことはできなかった。農夫は森の中に上下にチラチラと動く光りを見つけた。きっと森で働いている木こりに違いないと思った農夫は、「光りを消してくれ！馬が怖がって進もうとしないんだ！」しかし光りは消えず、馬は一向に歩み出そうとしなかったので、農夫は、別の道を行く以外にはなかった。道を変えたおかげで、馬は意気揚々とSchlottまで進み、農夫は二度と馬を連れて森を抜ける近道を通ることはなかった。

Bock **1975**

S.157 Nr.356

<WirtsbennoとWeiz>昔Hauptweizは、燃える男と呼ばれる怪し火だった。Sandsbach老Wirtsbennoはそれを怖がらなかった。ある時彼はビールを積んだ車の上に乗ってのんびりとタバコをくゆらせていた。すると、彼の馬が夕闇の中に向けて歩き出してしまった。車の後ろでは燃える男が踊りまわっていて、悪気はないものの車に積まれた藁束の上にまで乗ってこようとし始めた。老Bennoにとって、そんなことをされたら困ったことになったので、このときばかりは我慢せず、燃える男にこう言った。「いい加減にしろ（Du Sapperment du）、おれの藁束に乗るんじゃねえ！」

Bock **1975**

S.157 Nr.357

<Huttenkoferinと燃える男>Schierlingの時計職人Johann Herzogは、こんな話をした。「老Huttenkoferinは、私に燃える男の話をしてくれた唯一の人物だ。燃える男は、Sandsbachにいて、Poschel-Anwesenを走っていた。人々は彼女に、外を見て見ろ、燃える男が走っているぞ、といったという」。

Bock **1975**

S.167 Nr.379

<"Zwengmoa"の燃える男>Stelzerの"Stallbua"は、Stelzerの少年Ludwigと一緒に、あるときPfaffenhofenの仕立屋のところに服を仕立ててもらうために行った。Ludwigは今はもう個人だが、当時はまだ学校に通っている年代だった。二人が帰途についたときは、すでに夜になっていた。森の中にあるSiebeneckenわきのZwengmor(Zweckhof)の裏まで来たとき、二人は見知らぬ男に出会った。「こんばんは」。二人は男に言った。すると男は一気に燃え始めたではないか。二人は震え上がり、動揺しきって家に向かって走り出した。Stelzerの"Stallba"は泣き出してしまい、彼は年をとってからもなお、暗くなってからはよく知らない人には「こんばんは」と言おうとはしなかった。

Bock **1975**

S.173 Nr.394

<ReichlholzのWeiz>Staudachは、SiegenburgとTrainの間にあり、StaudachのわきにあるのがReichlholzである。Im Reichlholz hat es geweizt.「燃える男たちがそこをうろつき、Eicheの切り株を照らしていた。そこにはだれも近寄ろうとはしなかった。

Bock **1975**

S.200 Nr.454

<Heimerl-Kreuzの燃える奴>Wolnzach駅から遠からぬところにある、GabelsbergerstraseからWendenstraseに入って直進してのぼっていくと、Arnold Alfonsのホップ畑の裏に出る。そのわきにはHoamerl-Kreuzがあり、市場の西側を見わたすことができる。Heimerl（彼の子孫はまだ生きている）にはある願いがあったので、十字架を献納したという。最初は木製だったが、今は石製になった。そこにあった古い太い木は最近切り倒され、シラカバなどの若木が3本植えられた。道沿いからHeimerl-Kreuzのあたりには、かつてはよく燃える男が出没したという。

Bock 1975

S.33f.Nr.59

<燃える騎士>ある年の万霊節の頃、Einingの二人の男が深夜1時頃Sittlingから帰宅しようとしていた。地元でHeringと呼ばれる窪地（Talmulde）まできたとき、彼らは、燃える馬に乗った燃える騎士伸す方を野原に見つけた。男のうちで無鉄砲な方が、燃える男をしかりつけ、言いがかりをつけた。すると、あっという間に馬が駆け足で男たちのところまでやってきて、ちょうど10mくらいの距離のところで、恐ろしい騒音をたてながら、馬と騎士は地中に消えてしまった。向こう見ずな男たちは、死人のような、なにかに驚愕したかのような表情で家にたどり着いた。しかしその後、燃える騎士と馬を見た者は誰もいない。

Bock 1975

S.40 Nr.76

<困難なerlosung>昔、巡礼の鈴を鳴らしながらLangquaidからHerrnwahlthannに向かっていくときには、いつも燃える男が同伴してきた。私たちの村、Frauenwahlのある男は、燃える男には「Vergelt's Gott」と礼を言っていた。燃える奴が、何度も同行してくれたので、村人の男は燃える男にこう尋ねた。「erlosenするためにはなにが望みなんだい？」燃える男はこう答えた。「森の中にモミの木が生えています。それを切って板にし、その板でゆりかごを作ってください！しかしそこに子供が寝て初めて、私はerlosenされることができるのです！」

Bock 1975

S.41 Nr.81

<燃える男たち>夜、Landshutから家へ帰るときには、以前はFurthertalとPfettrachtalの間にいつも燃える男たちがいるのが見られた。彼らは最後には車の後部（Wagensterz）に乗ってきて、しばらく車に同行した。あるいは、夜遅くまで外にいる旅人の家路を照らしたりもした。燃える男たちは、礼として「Vergelt's Gott」という言葉を所望した。

Bock 1975

S.45 Nr.89

<去勢した雄馬に乗った燃える人>GebrontshausenのKleidorfに住むある老人がこんなことを回想した。「私がまだほんの小さな少年だった頃のことだ。隣家は高地で農業を営んでいる家で、そこにたいそうな年寄りがおり、彼が語ってきかせてくれたのがこんな話だった。「1780年か1790年頃のことだったと思う。私の父は石膏を求めてFreisingに赴いた。その帰り道、馬が恐怖のために一歩も先へ進もうとしなくなってしまった。すると、前方に、Wallachに乗った燃える人が突然現れた。父はびっくりしたが、馬はふたたび歩き出し、それどころか前よりも走って家までたどり着いた。村の入り口の門につくと、燃える人は消えた。家に着くと、父はすぐさまベッドに倒れ込真なければならないほど疲れ切っていた」』

Bock 1975

S.49 Nr.98

<燃える人>これから語るのは、それほど昔のことではない。農夫は、穀物が余ると穀物市場でパン屋や粉ひき、商人に売るのが常だった。ある農夫がそうして穀物市場で売ったあとGeisenfeldへと帰るときのこと。彼は酒場に少しばかり長居しすぎてしまったため、帰途につくのが大変遅い時間になってしまった。GeisenfeldとNottingの間で、燃える人が車に乗り込んできた。燃える人は、酔いつぶれ、眠ってしまった農夫の代わりに手綱を取り、どんどん進んでいった。燃える人はnottingを抜け、Rockolding、Vohburgに向けて進み、そこで降りた。こんなことがあって以来、この農夫は暗くなることを心配して急いで帰途につくことはなくなり、いつも燃える人に照らしてもらうようになった。燃える人には報酬として1ペニヒずつを与えていた。燃える人は、それを丁寧に鞄にしまったが、言葉を発することはなかった。しかしある日、農夫の財布の中には1ペニヒも残っていなかった。農夫は深く考えずに燃える人にこう言った。「次の時に2ペニヒやるよ。今日は"Vergelt's Gott"で送ってくれんか」。するとその時、燃える人は初めて口を開いた。「千回の"Vergelt's Gott"を（あなたに）！あなたが私をerlosenしてくれたんだ。あなたにもらったお金は、全部あなたの家の屋根の雨樋に入っているよ！」それ以来、農夫の前に燃える人は二度と現れなかった。また、ペニヒ貨も全て確かに雨樋にあるのが見つかった。

Bock **1975**

S.61 Nr.131

<車の上の燃える男>Hinterheiderの母親はGrafenhaunの出で、彼女はしばしば、こんな燃える男についての話をした。燃える男は、夜、町に行こうとするときには、GrafenhaunとOberglainの間で車の上に乗ってきて、道中しばしの間照らしたという。

Bock **1975**

S.66 Nr.145

<燃える境界石移動者>昔、夜になると、HaarbachとAuの間を燃える男が彷徨っていた。人々はその正体をこんなふうに推測した。きっとあれはずいぶん昔に死んだ農夫で、境界石を動かす常習者だったから、今になって罰として全ての境界石を探して元の場所に戻しているにちがいない、と。

Bock **1975**

S.67 Nr.147

<Haderer HolzのSpuk>私は、第1次世界大戦の前にはHummelsbergerで作男をしていた。その頃、Haderer Holzには出ると噂されていたけれど、私は信じていなかった。しかしそこの農夫が彼の体験を私に語ってくれたので、それで信じるようになった。その話はこのようなものだった。1905年のある夜、馬に乗ってGrafnhaunからHummelsbergの家に帰る途中、Holzの中で、彼の馬はいっこうに動こうとしなくなってしまい、進もうとも戻ろうともしなくなってしまった。農夫はどうにか進んでもらおうと、馬をなだめすかした。幸いなことに月の明るい夜だったので、さほどひどいことでもなかった。そこへ、前の方から燃える人が雨傘を持ってこちらへやってくるのが見えた。雨傘はどんどん大きくなり、燃える人はそれと比べてどんどん小さくなるようだった。それを見て、馬はふたたび歩み始め、走り始めたので、あっという間に家までたどり着いた。農夫は馬を抑えることができなかったのである。家に着き、馬と農夫の姿を見たものたちはその姿に驚いたという。

Bock **1975**

S.77 Nr.171

<友人のような人物>Herrnwahlthannの農夫がある夜Grosmusからうちに帰る時のことだった。向こうからやってくる人は、どうやら友人のようにも思えた。Thannの農夫はタバコは持っていたが、火を持ち合わせていなかったので、火のついていないタバコをくわえたその友人らしき人物にこう尋ねた。「火を持ってないかい？」すると突然、友達らしき男は燃えさかる姿となった。燃える人影は、近くの森に駆け込み、消えてしまった。農夫は恐ろしくなってその場から急いで立ち去った。

Bock **1975**

S.78 Nr.174

<燃える男>Hinterhaiderの曾祖父は、かつてEldmannsbergに行ったとき、一度帰りが遅くなってしまったことがあった。彼は道中パイプをくわえていた。突然彼から遠からぬ所に燃える男が出現したので、それをおもしろがって、パイプに火をつけてくれないだろうかと言った。言い終わるか終わらないかのうちに、燃える男はすでに傍らにいた。老Hinterheiderは、すっかり驚いて家まで飛び帰った。

Bock **1975**

S.86 Nr.197

<親切なFuhrknecht>私の大叔父のHeinrich Karrerは冬のある日、SchrannaからLandshutに出かける用事があった。Hoizhausnの近くで、たいそう道が悪いところがあったけれど、どうしても馬はそこを通って先まで行かなければならなかった。道は大変な急坂で、これ以上馬は進めそうになかったその時、燃えさかる馬車が通りすがり、その御者は大叔父が持っていた鞭を奪い取って馬にムチを当て始めた。馬は恐れをなし、一気に坂を駆け上った。昇りきったところで御者は大叔父に鞭を返し、現れたときと同じようにふっと消えてしまった。

Bock **1977**

S.125 Nr.186

<WirtsbennoとWeiz>昔Hauptweizは、燃える男と呼ばれる怪し火だった。Sandsbach老Wirtsbennoはそれを怖がらなかった。ある時彼はビールを積んだ車の上に乗ってのんびりとタバコをくゆらせていた。すると、彼の馬が夕闇の中に向けて歩き出してしまった。車の後ろでは燃える男が踊りまわっていて、悪気はないものの車に積まれた藁束の上にまで乗ってこようとし始めた。老Bennoにとって、そんなことをされたら困ったことになったので、このときばかりは我慢せず、燃える男にこう言った。「いい加減にしろ（Du Sapperment du）、おれの藁束に乗るんじゃねえ！」

Bock **1977**

S.134 Nr.201

<踊る燃える男たち>Ergoldingの牧草地では、しばしば夜になると燃える男たちがダンスを踊っていた。早朝2時か3時頃、脱穀作業のために起きると、燃える男たちは納屋の中にまで入ってきたという。

Bock **1977**

S.135 Nr.206

<Feldarbeiterとしての死者>Hornbachの近くの野原には、夜になるとあちらこちらに燃える男たちが出没し、ピッケルとスコップで仕事をしているのが見える。彼らは生きている間に不正に土地を横領した死者の魂である。

Bock **1977**

S.295 Nr.484

<燃える建築士とその現場監督>かつて、教区教会の方向から、燃える男が2人、Postmunstreのあたりまでやってきたことがある。"Hustenmutter"という名前で広く知られた礼拝堂の前で、二人はけんかを始めた。取っ組み合い、叫び声をあげていたが、突然礼拝堂に突進していった。しばらくすると、両者は1人ずつ出てきて教区教会の方向に戻っていった。老Zeiler-Hiaslは、彼らがHustenmutter-Kapelle礼拝堂を建てた建築士と現場監督で、彼らが貧しい職人の工賃をだましとったことを知っている。

Bock **1977**

S.41 Nr.44

<知りたがりな作男>100年以上前は、Nesbaum村にあるMitterndorfとLohと呼ばれる土地の間にある特定の場所で、燃える男たちが目撃された。好奇心旺盛な作男がはこう考えた。「一度、あいつを間近から見てみたいもんだ」。朝日が昇るずっと前の時刻だが、そろそろ脱穀作業を始める頃、燃える人影を見ようと庭に出た。するとすぐに彼の目の前に現れた。彼はしゃべることもできないほど驚きおののいて、納屋に引き返した。作男が何を目撃したのかは、だれも彼の口から聞くことはできなかった。

Bock **1977**

S.85f. Nr.121

<燃える人>Kumreuterから荒野に入植した農夫が、例年通りクリスマスの深夜ミサに出かけた。農夫の妻は夫に聖水を入れる瓶を手渡し、聖水を汲んできてほしいと頼んだ。家の鍵は、夫が帰宅したときに彼女が起きなくても入れるよう、寝室の窓の外に出しておいた。Rohrnbachの教会に行くには、森の谷間の真っ暗な道を通り抜けていかなければならなかった。そこを通っているとき、いきなり農夫の足下に赤々と燃える小山ができ、そこから燃える人が出てきて、ミサに出かける農夫の背中に飛び乗ってきたではないか。大慌てで農夫は聖水瓶を取り出し、中に数滴残っていた聖水を燃える人の顔めがけて撒きつけた。すると、燃える人は小山ともども消えてしまった。山道を歩いている最中、農夫はただならぬ不安に駆られたので、礼拝の際、帰り道にはどうかもうこれ以上恐ろしい目に遭いませんようにと、切々と祈った。しかし彼が言えにたどり着いたとき、農場の近くに赤々と燃える筋状の何かが見えた。「まさか、燃える人がおれを家の前で待ちかまえているなんてことはよもやないだろうが！」と農夫は驚愕した。Gredを乗り越えて寝室の窓辺を見ると、鍵が赤々と燃えている。農夫は妻を呼ぼうと窓をこつこつ叩いた。しかし何も動く気配がなかった。そこで、スコップで鍵をすくい上げてWassergrandに放り込んだ。しかし、鍵の放つ熱は、一向におさまらなかった。怖くなったので、農夫は窓を破って家に入り、寝室によじ登った。そこには、妻が死んでベッドに横たわっているのが見えた。体中が火傷だらけだった。きっと燃える人が彼女を絞め殺したに違いない。

Bodens **1937**

S.135 Nr.572

<Furkals>昔は、Furkalsを見たという報告がしばしばあった。彼らは至るところから牧場Weideにやってきては、火の粉をまき散らした。人はそれに近寄らない方が良かった。Furkalsは、悪魔よりもたちが悪かった。小農たちが夜、盗賊や人狼から馬を守るために番をしているときでも、Furkalsが現れると、あわてて馬をまとめ、せかせて一番近い集落に逃げ込んだという。

Bodens **1937**

S.135 Nr.573

<万聖節の夜の燃える人>私の祖父がまだ少年だった頃、Bonninghardtの少女と恋仲にあった。ある万聖節の夜、彼はXantenにやってきた。そこのRoskeの柏の木のところで、奇妙な少年に出会った。その少年の瞳は、まるで燃える人のように赤々としていて、火を持っていないかと祖父は尋ねられたという。祖父はすぐさま十字を切り、少年の顔を殴りつけたので、少年は道路にたたきのめされた。集落の入り口の手前で、ふたたびその少年は祖父の前に立ちはだかり、今度は時間をきいてきた。祖父はこう答えた。「Roskeの墓の中にいる奴に聞け！」 万聖節の夜には、Geisterが彷徨うに違いない。

Bodens **1937**

S.135 Nr.574

<火を吐くFurmann>魔女Werhexeと燃える人Furmannが、夜になると徘徊した。燃える人はあるとき道を飛び越えてある男の顔めがけて手のひらいっぱいの火を吐きつけた。

Bodens **1937**

S.135 Nr.575

<Furkalsと若者たち>昔、12時になると火のついた車輪を1つ、集落中引き回す男たちがいた。彼らはFurkals（複数形）と呼ばれた。Furkalsは若者たちの前を行っていたと思ったら、急にふりかえってきたので、そうすると驚いて誰もその姿がどうだったか後で言うことはできなかった。

Brachwitz **1937**

S.67, Nr.102

<Lichtermender>怪し火は、光の人（リヒターメンダー）と呼ばれる。それを見ても、祈ってはいけない。そんなことをすればどんどん数が増えていくだけだ。祈るのではなく罵声を浴びせるべきである。そうすればたちどころに消えてしまう。しかしロクトウ（Locktow、ポツダム近郊の集落）では逆で、光の人（リヒトメンダー、Lichtmender）は洗礼を受ける前に死んだ子供たちなので、祝福の言葉を受けると消える。プラーネニーダルンク（Planeniederung）、とくにロクトウとメァツ（Morz）の間には怪し火がよく出没し、そこではこんなふうにいわれる。あるときある農夫が干し草を乗せた車で湿地を横断していた。湿地でどろだらけになる前に、農夫の前に光の人（リヒターマン、Lichtermann）が現れたので、農夫はこう話しかけた。「俺を照らしたいと思うなら、ちょっくら湿地を抜けるときに照らしてはくれんかね」。光の人（リヒターマン）は、農夫のいうとおりにした。彼らが無事に湿地を抜けると、農夫はいった。「あなたに神のお恵みがありますように（Gott segne dich）」。すると光の人（リヒターマン）は消えてしまった。

Depiny **1932**

S.208 Nr.291

昔、LeonfeldenでダンスパーティFreitanzがあったときのこと。パン屋のToniは、ダンスのパートナーを連れずにやってきた。彼はそのことをからかわれたので、外に出て、少ししてからガールフレンドを連れて戻ってきた。少女の家は、会場から3時間ほど離れたSussmuhleにあったにもかかわらず。いったいどうしてこんなことが起きたのだろうか。それはこんな具合だ。彼女はすでに就寝していたが、パン屋のToniの友人の猟師のToniが彼女の部屋の窓を叩いたので、彼女は寝床から出た。Toniが軒下までは来なかったので、彼女は自分から出ていった。すると雄山羊Bockの姿になったToniが空を飛んで彼女をものすごい速さで背負って連れ出した。その時、燃える男たちがうようよしているといわれるHochgerichteの上も越えて、Leonfeldenの酒場に宿屋の娘は、少女に必要な衣服を貸し与えた。ダンスの後、彼女は同じようにして戻っていった。

Depiny **1932**

S.22 Nr.17

ある夜、Ebenseeの年老いた男が家に向かっていた。GumperstatとHafingの間の風変わりな家が2軒たっているところで、男は、ひとつの光が彼の後を追ってくるのに気づいた。その光は、眼窩とこめかみから火を噴き出している燃える人だったので、男はひどく驚いた。

Depiny **1932**

S.94 Nr.69

Konigsweisenの人たちがいうように、（当地でも）Fuchtelmannは黒く、小さい。彼はランタンを持っており、車屋を照らしてくれる。

Depiny **1932**

S.95 Nr.76

1916年に死んだ若者が生前こんなことを体験した。彼がFrauennachtの深夜0時頃Tarsdorfから帰宅するときのこと、Ostermiethingの向こうから一気に赤い火が立ち上るのが見えた。若者は「火事だ！」と思い、走り出したが、彼の目の前にいきなり大きな男が立ちはだかった。男の出で立ちは、長い上着に白い靴下とバックル飾りの付いた靴Schnallenschuhenといったものだった。男の胸部と頭部は見えず、その代わりに炎がそこにあった。若者は、どうやってStollbergの家まで帰ってきたか、覚えていなかった。

Depiny **1932**

S.96 Nr.90

ある農婦がHellmannschlagに向かっていたとき、突然の雷雨に驚いて、背負っていた、空の、「卵を入れるかごEierbutte」ひっくり返してしまった。彼女がふたたび歩き出したとき、1人のFuchtelmannが畑の畦のあたりをあちこち移動しているのが見えた。彼女は、できる限りの速さでその場所から逃げ出した。Fuchtellichtはそれ以来一度も現れなくなった。

Dietz 1965

S.100 Nr.407

<Gluhmannのについて>Gluhmannは、銀の皿のようなつまみがついていて、目はMartinsfeuerのよう。子供たち（が連れて行かれないように）Gluhmannには注意しなければならない。

Dietz 1965

S.100 Nr.408

<jlohnigen Mannとの邂逅>これは、私の祖母と、そのの母つまり私の曾祖母に起こった出来事である。祖母がまだ子供だった頃のこと、彼女たちはEichholzhofに向かって、Landstrase Koln-Bonnのあたりを進んでいた。そのとき、Ahrweilwes Kreuzのところで、祖母は、曾祖母にいった。「お母さん、うちに帰りたい。Jlohnige Mannが来るから」。「おかしなことを言うんじゃありません。あれはそんなんではなく、上にランプのついている、幌のついた車にちがいないわよ」。2人が奇妙な光の方に近づいていくと、やはりそれはjlohnige Mannだった。（後略、訛がきつすぎるため）

Dietz 1965

S.101 Nr.409

<Heiligenhauschenのjlohnige Mann>今から80年ほど前のこと。私の祖母がUdorfの何人かの人と、歩いてケルンの市場に出かけた。他の人々はWiddigで別の人と待ち合わせをしていたので、祖母は買い物かごを手にして1人でLandstrase（Miel）を進んでいった。Urfeldの近くまできたとき、道の片側にJlohningen Mannが立っているのが見えた。頭部がなく、首からチラチラと炎が出ていた。祖母は驚ききって、動けなくなってしまった。彼女はかごの上にへたり込んでしまい、両手で顔面を覆った。他の人々がやっと彼女に追いついたときになった初めて、祖母は顔を上げることができた。そのときには、jlohnige Mannはいなくなっていた。祖母がこのことを話すと、同行者たちは、こう言った。「それは罪に追われる哀れな魂だよ。人間がそれについて彼に尋ね手、彼らの手助けをしてやれば、彼らは昇天するのさ」。

Dietz 1965

S.101 Nr.410

<Gluhmannerが怖い>私の祖父は、Jeeslohrの農家に住んでいた。彼は、ある日の夕方、農家の下男と、Rheindorfに向かって出かける用事があった。下男は燃える男をたいそう怖がったが、祖父には何も見えない。「おい見て見ろ、jlohniger Mannがあんなところにいるぞ」。「窓に何か映っているだけだよ」。「そんなことはない！」といって、下男は逃げてしまった。（訛がきついため意訳）

Dietz 1965

S.101 Nr.411

<燃える人>昔は、人々は燃える人たちのことを信じていた。燃える人は、私たちの村にも生息していた。夕方、ある女性が隣家に行こうとしたとき、ちょっと近道をしようと思い、牧草地を抜けていった。すると小川のほとりに赤い火の粉Funkeがあるのが見えた。近づくと、それは燃える人だった。彼女が帰るときには、何もなくなっていた。

Dietz 1965

S.101 Nr.412

<奇妙な男>昔はこのあたりからも、果物や野菜を積んでケルンの市場まで売りに出かけたものだった。RheiddとMondorの間のあるところに、一艘の小さなモーターボートが繋留されていた。だから、人々は、夜中にライン川沿いの藪を通り抜けてそこまで行かなければならなかった。ある夜のこと。数人の女性が川沿いの道を歩いていると、突然、遠くに1人の男が立っているのが現れた。それはとても奇妙な光景で、びっくりした女性たちは、男にこう声をかけた。「Gehen Sie mit zum Schrauber?」言い終わるか終わらないかのうちに、男は、炎を上げて燃えだした。この夜ほど大急ぎで彼女たちがLandebruckeまで走ったのは、後にも先にもほかにない。

Dietz 1965

S.101f. Nr.413

<けんかをしている燃える人たち>Falkenlustのそばで、夜になると2人のjlohninge Mannerが落ち合っていた。朝を知らせる時の鐘がなると、彼らは鐘のタクトにあわせて殴り合いを始め、火の粉が飛び散るくらいだった。音が止むと、2人は消えた。

Dietz 1965

S.102 Nr.414

<ふらふらしているgluhnende Manner>ある時のこと。彼らが居間でくつろいでいるとき、誰かが窓を叩く音が聞こえたので、窓を開けてみたが、外には誰もいなかった。ふたたび窓を閉めた。祖父はいった。『なんのせいだったのか、みてこなけりゃいかん』。祖父が外で見たのは、あたりを揺れるようにふらふらとしている2人の男の姿だった。いきなりどさっという音がしたかと思うと、一条の光が差し込んだ。すると2人はどこかへいってしまった。

Dietz 1965

S.102 Nr.415

<荷車に乗ったjlohnige Mann>あるとき、司祭がN村まで出かけたので、教会の雑用係Kusterは彼を迎えに行った。N村への道は悪かったので、雑用係は徒歩ではなく荷車に乗っていった。N村を出て最初のうちは問題なく走っていたが、ふと雑用係はこう言った。『旦那さま、無事に家まで帰ることができるでしょうか？』不安な問いかけに司祭は『大丈夫にきまっていよう』と答えた。しかし、そこへjlohnige Mannが近づいて来るではないか。あわてて馬に鞭を当て、2人は祈り始めた。にもかかわらず、2人が祈れば祈るほど、男は近づいてくる。男の腹部からは、肋骨が浮き上がって見えていた。いきなりjlohnige Mannは2人の乗った車の後部に跳び乗ってきた。それを見て、雑用係は罵りはじめた。するとjlohnige Mannは車の後ろにずり落ち、一声こう叫んだ。『あぁ、あともう1度だけ主祷文を！あぁ、あともう1度だけ主祷文を！』（そうすれば昇天できるのに）

Dietz 1965

S.102 Nr.416

<Wiggepeoschのjlohnige Mann>若い頃、私はたくましかった。Frings（あたりは、私の土地で、Waldorf という集落）の領域だった。（乱りがきついので、要約のみ訳）御者が道中で祈っていると、jlohnige Mannがよってきた。しまいには荷車の後部に乗り込んできたので、ののしり言葉をかけると、『昇天するまでには後もう少しだけ主の祈りが必要だったのに』と嘆き、消えてしまった。

Dietz 1965

S.102 Nr.417

<荷車の上のgluhende Mann>私の父は、牛をつれて、Klutten（つぶした褐炭）を買いにWalbergまで出かけたときのこと、荷車にgluhende Mannが乗ってきたので、父は彼を引きずりおろした。というのも、そうしなければ積み荷がすべて燃えてしまっただろうからだった。こういう風に母が語ってくれた。

Dietz 1965

S.102f. Nr.418

<荷車の上の燃える男>ある夜、私の祖父が前山から荷車を引いて帰ってくる途中のこと。ちなみに彼は、解放戦争（1813-15のことか）にも参戦しているような屈強な男だった。荷車の後輪あたりに、燃える男がよじ登ってくるのが見えたが、祖父は冷静にそのまま先に進んでいった。翌朝になって車を見てみると、Bornheimの近くにある沼地にあるのとおなじようなべたべたしたものが車輪についているのが見つかった。

Dietz 1965

S.103 Nr.419*

<Gerste-Gerhardの体験>Kartauserdorfの老女Busackerが以下のような話を語ってくれた。ある夜、Alfterの通称「大麦のGerhard」と呼ばれる運送業者が、Alfgerからケルンにあるビール工場まで大麦を運ぶ途中、EichholzとAhrweilerkreuzの間あたりにきた。いつもしているように彼が周囲を見回すと、jlohnigen Mannが荷車の後ろに乗っているのが見えた。恐ろしくなって彼は祈り始めた。しかし逆にjlohnige Mannはさらに近くに寄ってきた。GerhardがBornheimに近づくと、知り合いが生活している修道院の庭Kartauserhofに駆け込み、汗だくになっていた馬はつないでおいた。にもかかわらず、jlohender Mannは建物に近づき、窓からのぞき込んできた。

Dietz 1965

S.103 Nr.420

<jlohnige Mannにおいかけられた話>私の父は、Fritzdorfの"Landche"だった。彼がまだ小さかった頃のある日の夕方、うちに帰ろうとしたときはすでに遅い時間だった。そこへjlohnige Mannがや現れたので、少年時代の父は、あわてて納屋に逃げ込んだ。（乱りがきついので中略）納屋の中まで追いかけてくるので、彼はさらに自分の家まで逃げた。家に帰ると母はこういった。「どうしたんだい？」「jlohninge Mannが、jlohninge Mannが…」少年はこういって窓の外を母に示した。

Dietz 1965

S.103 Nr.421

<Wichcheのgluhende Mann>ある時私の祖母が夕方Roisdorfから家に帰る途中にであった出来事としてこんなことを語った。「Wickche川のほとりに、gluhender Mannが現れたので、庭の入り口に向かって逃げたが、男も追いかけてきた。翌日、門扉を見ると、gluhende Mannがその赤々と燃える手でつかんだ痕跡がしっかり残っていた」。

Dietz 1965

S.103 Nr.422

<仕立屋とgluhende Manner>Odekoweのある仕立屋が、仕事をするためにMedekoweに行ったときのこと。風に飛ばされないよう重いアイロンを持っていった。小川のほとりに着くと、そこにはjlohnige Manneがいて、いつも追いかけてくるのだった。そのとき、男たちのうちの1人が、「神に祈ってくれ」というが、悪魔に祈ると、彼らは消えてしまう。

Dietz 1965

S.103f. Nr.423

<付き従うjlohninger Mann>私の曾祖父は、Trippelsdorfer HeideからMertenに向かって、真っ暗な中を歩いていた。そのとき、突然jlohninger Mannが彼の左側から飛び出してきた。曾祖父は帽子を左目の上にかかるように深くかぶりなおし、化け物Ungetumが見えないようにした。曾祖父が家につくと、大きな爆発音がして、jlohninger Mannは消えてしまった。

Dietz 1965

S.71Nr.263

<Tannenwaldchenの修道院>Tannenwaldchenには、昔、女子修道院が建っていたらしく、その近くのBleyerbachの下の方の牧草地からLinnerzgaschenのあたりには、深夜0時から1時頃にかけて、何かが徘徊したという。"em Berfet"にも、何かが出たらしい。ここでは"jlohnija Maner"が踊っていた。夕方、子供たちが家に帰りたくないとだだをこねたときには、"Begingeに連れて行かれるぞ"と脅かした。

Dietz　　1965

S.94 Nr.385

<SiebengebirgeのGeistになった大臣>ケルン選帝候のある大臣は、在任中、その職務をこなすにあたって良心的ではなかったので、死後何年もたったのに、この場所で燃える人として徘徊しているという。彼にいじめられた農夫たちは、今や彼にあれこれ言いつけることができるようになった。ある者が、厚かましくも夜道を照らしてくれと彼にいえば、彼は山越えの道を照らしてやらなければならない。あるいは、彼らのパイプに火をつけたりもしなければならない。

Diplich/ Karasek　　1952

S.52

<跳び乗ってくる者Aufsitzer>農夫Bauerが夜遅く帰宅するとき、Perjamoschのtellgasseで燃える男たちを目撃することがあった、と年寄りたちは言っている。遠目には火の粉が飛び散っているように見えるが、近づくと、燃える男たちはSchragelをこえて車に跳び乗ってきた。彼らが乗ると、荷台に大変な荷物でも積んでいるかのように馬の歩みが遅くなり、大汗をかき始める。人々が男たちの仕業をののしると、燃える男たちは車にとどまり続けるが、何もないかのように平然としていると、やがてどこかへ行ってしまう。夜遅く歩いて家に帰るときには、黒い男が襲いかかってくることがあった。黒い男は背中に跳び乗り、乗せたまま歩かせる。この場合も、ののしればののしるほどそこにとどまり、平然としていればやがていなくなった。

Diplich/ Karasek　　1952

S.61f.

<昇天した燃える人>Himmershausenの近くでのこと。あるとき男がワインセラーに向かっていた。彼が家路につこうとしたとき、戸口の前に燃える人が立っていた。燃える人はこういった。「あなたが私を、立派な馬に引かせた立派な馬車に乗せて村中を走ってくれないなら、あなたの馬車は塵となり、馬はまもなく死ぬでしょう」。男は怖くなり、急いで家路についた。しかし燃える人は男にしがみつき、どんどん重くなっていったので、男はそれ以上先に行くことはできなくなってしまった。家に着くと男は下男に、一番立派な車を出して、一番立派な馬に引かせて、燃える人を乗せて村を走ってくるように言いつけた。彼らがGrosnyardをこえてSchwarzen Torまできたとき、燃える人はおろしてほしいと頼んだ。燃える人はふたたび乗り込み、Hottergrenzeを越えて、Turkenhugelも越えて、Udvarまで行かせた。2人が村まで戻ってくると、今度は教会に行き、大きな祈祷分Grose Messeを読ませた。すると燃える人はerlosenされた。この燃える人は元々金持ちだったので、車を提供した男に対して、お金を与えることで感謝の気持ちを表した。

Diplich/ Karasek　　1952

S.66

<燃えるDickkopfe>Ratskosarに住む、ある年老いたシュヴァーベンの人が、こんな話をしてくれた。あるときのこと、私たちは6人で搾油所Olmuhleに向かっていた。真昼だった。すると、Mekenyeschの方からTeschler Bergを越えて、燃えるDickkopfが空中を浮遊しているのが見えた。それは水の中にいるDickkopfnoのようにも見え、人間よりは小さいくらいの大きさだった。その頭は皿と同じくらいの大きさで、後ろに向かって赤々とした火花を吹き出していた。私たちは、あれはいったい何なんだ？とびっくり仰天し、口もきけずにそれに目をやった。それはKalvarienbergの上のFunfkirchenのあたりをものすごい速さで飛び越えていった。気を取り直して私たちは搾油所へに向かい続けた。搾油所に到着すると、人々が私たちにこう尋ねてきた。「あんたらも見たかね？」あれがなんだったのか、誰も知らなかった。Mekenyeschでは、こういわれている。あの燃えるDickkopfはしばしば現れる。あるときは14日間も連続してみられたこともあったそうだ。人々が畑でソラマメを集めていたときのこと、例の燃える物体が現れた。大きさは皿くらいで、そのときも空中の低いところをかすめ飛んでいた。人々は恐ろしく思い、藪に身を隠したり、ソラマメの山の陰に隠れたりした。ある者が燃える物体めがけて発砲したことがある。しかし何も起こらず、それは悠々と先に飛んでいった。

Diplich/ Karasek　　1952

S.77f.

<燃える人たち>少年がこんな話をしてくれた。ノイアラート(Neuarad、現ルーマニアのアラドゥ・ノウ Aradu Nou)の人々は、昔は燃える人たちがいたと言い張っている。街道で車が壊れてしまったら、お祈りをすればたちどころに燃える人たちが現れたという。彼らが現れるとあたりは昼間のように明るくなり、車の修理ができたそうだ。僕の曾祖母の父は、それどころか、燃える人たちに命令することさえできたと伝え聞いている。曾祖母がまだ小さかった頃のこと。ある日、彼女は姉妹と一緒に夕方遅くまで庭で仕事をしていたところ、燃える人たちが現れたので、恐ろしくなった。少女たちは叫び声を上げ、父親の所に逃げ込んだ。しかし父が庭への扉を開けると、燃える人たちは垣根を越えて逃げ出してしまった。1820年のことだったという。

Diplich/ Karasek　　1952

S.77f.

朝早くブドウ畑に行き、夜遅く帰宅するときには、ひとりふたりの燃える人たちによく会った。彼らのことを恐ろしく思い、祈りをあげると、長く祈れば祈るほど燃える人の数は増え、全員車に乗り込んできたという。馬は牽く車の余りの重さに大汗をかき、ほとんど前進できなくなってしまう。それに怒って人々が罵り始めると、燃える人は次々と消えてしまい、やっと農夫は静かに帰途につくことができるようになった。同じ話を、ペルヤモシュ(Perjamosch、現ルーマニアのペリアムPeriam)でも聞いた。そこでは、燃える人はテルガッセ小路(Tellgasse)にいて、車の後部の勾配に乗り込んできたといわれた。暗闇の中、最初は火の粉が飛び散っているように見えるが、近づくに連れて、燃える男の姿となった。

Diplich/ Karasek　　1952

S.77f.

Sepp Holznerという男が、あるとき婦人を連れてAlbrechtsflorからSankt Georgenのあたりを車で走っていた。外は真っ暗になり、馬車で行く道は真っ暗だった。そこへ燃える人が2人現れた。夫はすぐさま馬に鞭を当て、婦人は恐ろしく思って祈り始めた。その甲斐なく、燃える男たちは車につかみかかり、乗り込もうとしてきたではないか。夫は悪罵を浴びせ、婦人はそれにたいそう驚いた。暗闇の中、男たちは消えた。翌朝車を見ると、燃える男たちに捕まれたところが黒く焦げていた。

Dittmaier　　1950

S.51 Nr.157

<der Bestellte Feuermann>ある男が人を驚かせてやろうと思ってカボチャの中をくりぬいて目鼻をつけたものを畑に立てておいた。それを燃える人だと勘違いした人々は驚いて逃げ出した

Dittmaier　　1950

S.90 Nr.285

<赤々と燃える男たちと、仕立屋>この話は、Holtorf出身の父から聞いたものである。私の祖父は、Holzlarにある仕立屋の工房で働いていた。ある土曜日の夜、仕事がなかなか終わらないので深夜1時まで仕事をしてから帰途についた。当時、HolzlarからHoltorfへの道は悪く、ましてや夜道ともなればなおさら危険を覚悟しなければならなかった。そこで祖父は、道を照らしてくれる燃える人をよこしてほしいと神に祈った。すると、突然燃える人6人も現れ、月明かりのように照らしてくれた。左右に3人ずつが同行し、祖父は無事にHoltorfまでたどり着いた。祖父が、彼らをどこかへやってくださいとふたたび神に祈ると、彼らは消えてしまった。

Dittmaier　　1950

S.90 Nr.286

<背中に乗った、赤々と燃える男>ある年の大晦日の夜、私の父は、飲み屋でカード遊びに興じていた。深夜3時になってやっとカード遊びをやめ、家路についた。その道中、空中に赤々と燃える男が漂っているのが見えた。父は得意の指笛を鳴らして彼を呼びつけた。燃える男はずっとついてきて父の道筋を夜通し上から照らしてくれた。

Dittmaier 1950

S.91 Nr.287

赤々と燃える男としばしば関わりを持つ人がいた。あるときその男は、口笛を吹いて赤々と燃える男を呼んだ。すると燃える男は男の後をずっと追いかけてきて、走っても走ってもついてきた。家の戸口についてもまだすぐ後ろにいた。

Dittmaier 1950

S.91 Nr.288

<2人の赤々と燃える男>これは母から聞いた話。母もまたHangelの人だった。あるとき母は、他の少女たちと一緒に桶1杯の水をくみにPutzまで行った。するといきなり燃える男が2人現れて、桶を持ち上げようとするではないか。母と少女たちは驚いて、桶をその場に置いたまま逃げ帰った。

Dittmaier 1950

S.91 Nr.289

<Siegの赤々と燃える男>私の祖父がEschwarを越え、Sieg（地名）を通ってやってきたときのこと、（道の？）反対側に男が1人立っているのが見えた。どうやら彼は、何か質問abgefragt werdenされたがっているようだった。祖父がSiegの真ん中までやってくると、あの男がまた現れ、今度は大きな音をたててSiegに身を投げた。そして祖父がKuhgasseまでやってきたときも、あの男が現れたが、今度は通り過ぎただけだった。祖父がWendrp（Weindorf）手前の高台に到着したときは、明るい炎の中に立って待ち伏せしていた。赤々と燃える男だった。

Dittmaier 1950

S.91 Nr.290

<燃える修道士>MullekovenにあるSchwievelshofのBrungs（職業名か？）が息子を連れてケルンまで行く途中のこと。Lehmkanleの教会の中庭の裏手にきたとき、息子がこういった。「ちょっとここで止まろうよ。あそこにお坊さん(Monch)がいるよ」。「静かに！」不安になって父は言った。というのも、修道士がマントをはだけていて、マントの下は赤々と燃えていたからだった。

Dittmaier 1950

S.91 Nr.291

<赤々と燃える男>ある日の夕方、私たちはBohnenで台所にいた。するといきなり農場の上に光がやってきた。Wupp! Wupp! Wupp!きっとあれはGluhndiger Mannに違いないと思った。

Duenninger 1964

S.73f. Nr.50

<燃える男>（要約）下男とともに木を運ぶ途中、燃える人が木製の荷車に乗り込んできて、村までついてきた。一度降りたように見せかけて、家の廻りをぐるっと一回りしてからまた乗り込もうとした。

Eisel 1871

S.67 Nr.159a

WustfalkeとOtticha とLoitzschとNiebraの間のあたりには、湿地が広がっているが、そこには以前しばしば怪し火がでた。その他時々燃える男がでたこともある。燃える男は、俗にSpinneとかKankermannとも呼ばれる。1828年のこと。粉挽きのBergnerが、すぐ近くにある自分の家に帰ろうと風車小屋から出てきたところ、突然光が見えた。その光はどんどん大きくなり、しまいには巨大な燃える男の姿になって粉挽きの前に立ちふさがった。その脚は痩せこけていて、天まで届くかと思えるほどの高さに両腕を掲げていた。しかし、粉挽きが男の姿をもっとじっくり見ようと思ったところ、男は現れたときと同様に突然消えてしまった。

Eisel 1871

S.67f. Nr.159b

Otticha の別の人がみた妖怪Gespenstはさらにその上をいっていた。彼がGeldnothにいたときのこと。真っ暗な夜だったが、牧草地のあたりに明るい場所があった。もしかしたら宝物のありかを示しているのではないかと考え、胸を高鳴らせながら、男はその場所に近づいていった。あったのは、赤々と燃える炭の山だった。宝を探そうと中を引っかき回すと、高々と火の粉が舞い上がり、しまいには立ち上がるかのようになって、巨大な姿となって男の前に立ちふさがった。巨大な姿の頭部には頭がなく、かわりに首に黒い帽子が掛かっていた。そして手からは炎が出ていて、そのおかげで周囲一面がたいへん明るくてらされていて、地面に落ちた1ペニヒ硬貨を見つけることが出来るほどだった。男はKankermannから逃げようとしたが、Kankermannも執拗に追ってきた。逃げ続け、男が自分で所有する土地にやってきたとき、妖怪Gespenstはそこには入ることが出来ず、遠回りをしなければならなかった。しかし、男の所有地をすぎると、ふたたび近くまで寄ってきた。村の少し手前で、妖怪はふたたび方向を変え、逃げ続けて息も絶え絶えになっている男は、火の光が自分から遠く離れたところにあるのを見て取った。それは、Gulmberg bei Loitzschのあたりで、彼が家のすぐ近くにくると、ふたたびあのおぞましい姿が近くに寄ってきた。その後、14日間男は寝込み、このときの恐怖を、死ぬまで克服することは出来なかった。

Eisel 1871

S.68 Nr.159c

Kankermannを見たという証言は、このほかにもたくさんある。ある者はそれを灰色でたいへんな大きさをしていて、大股で歩いたといい、またある者は、ヴェールの掛かったつば広帽子を被っていて、よくBastholz bei Pohlenのあたりを徘徊していたという。

Eisel 1871

S.68 Nr.160

Weida近郊のSchlachtwieseに、あるとき盗賊が月明かりの中仕事をするチャンスがこないかと待ちかまえていた。夜11時くらいになった頃だろうか、ランタンが近づいてくるのが見えた。しかし、そのランタンは、近づくにつれてどんどん背が高くなり、50エレほどの高さにまでなった。そしてついに、その正体が分かった。彼らの前に立っているのは、背の高い燃える男だったのだ。男が町の方向に振り返ると、盗人たちには何も見えなくなった。というのも、男の正面からの姿は燃えているが、背中側は真っ暗だったからだ。彼は3度振り返ったので、盗人たちは3ど燃える側と真っ暗な側を見た。3度目に振り返った後には、男は消えたので、盗人たちは我が身の無事を喜び合った。

Eisel 1871

S.68 Nr.161

アーンスハウクト(Arnshaugt)とモーダーヴィッツ(Moderwitz)のあたりは、ずっと昔から頭のない燃える男が徘徊するので知られていた。男は人々に特別な危害を加えるでもなく、おとなしく気ままにあたりをうろつくのだった。しかし彼は、ブルクヴィッツ(Burgwitz)からアーンスハウクトを抜けて、アオルベルク(Aollberg bei Moderwitz)までも歩き、しばらくそこに立ち止まった後、消えてしまうのが常だった。ある時、手押し車を押した貧しい女性の前に男は現れ、ノイシュタットの粉挽き場(Neustadter Muhle)からモーダーヴィッツのジルバーベルゲ(Moderwitzer Silberberge)まで、彼女を照らした。「ありがとう(Habe Dank)、燃える人」。女性が男にそう言うと、男は消えてしまい、以後ふたたび現れることはなかった。

Eisel 1871

S.68f. Nr.162

Hermshohe bei Rauschengefeesでは、夜、燃える人が目撃される。彼はたいまつを手にしていて、それを頭上で振り回して火の粉を振りまいている。その後Wilzenthalの方向に山を下り、Prothentelleにある泉でそのたいまつの火を消した。今ではこの男の姿を見るものはいなくなり、その代わりにさまざまな妖怪たちGespensterがそこには住みついた。

Eisel **1871**

S.69 Nr.163
燃える男がPollzigそばの森から、6/4時間離れたBielesdorfに向かう。6/4時間彼はそこの野原にとどまったのち、Elaskopfまで戻って消えてしまう。

Eisel **1871**

S.69 Nr.164
Dorner Gutschafftalleに、燃える人が出没した。彼はその場所に長いこととどまっていて、燃える車輪を空中のあちこちで回していた。

Eisel **1871**

S.69 Nr.165
あるとき、木樵の女房が、MarkersdorfからLangengrobsdorfに向かってのびている、いかがわしいと有名なFrohnwegeでこんな声を聞いた。「待て、おまえの首を切り落としてやる！」それに対して、こう答える声も聞こえてきた。「おまえが私にするなら、同じことを仕返してやるぞ」。彼女は怖くなって逃げ出したが、すぐ後ろにちょうど人間の男くらいの人影があった。その人影は燃えるフリルがついていた。この妖怪はGespenstすでに何人も人を殺していて、Markersdorfでやっと消えた。

Gath **1949**

S.235-237
昔からある藪で、ある特定の夜になるとFeuermaenner が現れて、そのまわりを回る。ドラゴンが赤く燃える石炭のように見える宝を守っている。農夫が石炭を持ち帰ると、それがゴールドに変わった。藪には白馬と燃えさかる車が現れる。

Glaettli **1959**

S.158 Nr.2
野原に肋骨から火がでている男が出現する。読んだりすれば報復される。

Grimm **1891**

S191f. Nr.284a
この年（1125年）、ひとりの燃える男が「うり二つ」と呼ばれる二つの城の間にいられるのが目撃された。それは真夜中のことだった。男は一方の城からもう一つの城へと歩いており、明るく火事のように燃えていた。そう夜警たちが語っている。燃える男は3夜続けて現れ、以後姿を見せなくなった。

Grimm **1891**

S191f. Nr.284b
「現ヘッセン州ダルムシュタット近くにある）カイルバッハ（Kailbach）近郊、フライエンシュタイン行政区(Amt Freienstein)にあるホッペルライン（Hoppelrain）と呼ばれる場所に住むゲオルク・ミルテンベルガーが、こんな話を語ってくれた。「待降節第1日曜日の夜、11時と12時の間、私の家からほど遠からぬところで、火だるまの男を私は見かけた。彼の身体は、肋骨の本数を数えられるほどだった。境界石の間をここあそこと彷徨っていたが、真夜中過ぎに突然消えてしまった。彼を目撃した多くの人々は恐怖におののいた。というのも、彼は口と鼻から炎を噴きながら、飛ぶような速さであちらへこちらへと走り回ったからである」。

Hebel **1912**

S.23 Nr.16

Winterbachからおよそ半時間ほど離れたところにKlosterbergがある。そこには、かつてひとつの怪し火Irrwischが棲んでいた。あるとき、Biedershausenのある男が息子を連れてZweibruckenに向かっていた。Eselsklammを下っているとき、行く先に明かりがあるのに気づいた。彼は息子にこういった。「仲間が来るよ」。しかし、光は近づいてくと、2人の廻りを回り始めた。突然、馬が怯えだし、坂道を猛スピードで下りだした。彼らが道に戻ると、また光が現れた。息子には、なにやら男が馬に鞭を当てているように見えたので、父から鞭を借り、その男に鞭を当てた。それ以来、光が現れることはなくなった。しかし、Irrwischが消えたその場所は、今でも黒く、何も生えない。

Hensen **1935**

S.93 Nr.69

農夫が「Raemmelken」を、悪魔のところから来るという条件で呼んだ。木々に水泡が出来た。ある農夫が落馬した。木が燃えた。

Hensen **1955**

S.122 Nr.202

夜、男が自分の方に近づいてくる火を見た。彼は途中で止まり、火は横すべりしていった。彼は、それが悪魔だと信じた。

Hensen **1955**

S.125f. Nr.211

二人の男が近づいてくる光を見た。聖なる名前を呼ぶと、火は二人の横をそそくさと通りすぎ、消滅した。これはきっとFeuermannだったに違いない。そのあばら骨を見た。

Hensen **1955**

S.126 Nr. 212

Harthetzigなユンカーが、死んだ後Feuermannとして徘徊。通りがかりの旅人が彼に驚いた。

Hensen **1955**

S.126 Nr.213

ある人が燃える人にであった。Feuremannは、行く道を遮ったので、彼はFeuermannにびんたを食らわせた。Feuermannがanbliesしたので、その男は目が見えなくなった。

Hensen **1955**

S.126f. Nr.214

彼が燃える人に出会ったときには5グロッシェンをやろうと思っていた。Schaeferschippeにのせて照らしてくれた。翌朝見ると、棒の先が焦げ焦げになっていた。

Hensen **1955**

S.127 Nr.215

犬を連れた二人の男が、夜、燃える男に追いかけられた。

Hensen **1955**

S.127 Nr.216a

燃える人が出現した。一人が罵ると、消えてしまった。

Hensen 1955

S.128 Nr.216b

Geichのある牧人が、Frauwullesheimで羊の番をしていた。とある土曜日の晩、いつものように彼が家に帰ろうとしたそのとき、驚いたことに、燃える人が近づいてくるのが見えた。燃える人は下は黒く、上半身は火のついたわら束のようだった。牧人は仰天して、おもわず口から呪詛の言葉が飛び出した。燃える人は呪詛を聞くやいなや、鉄砲玉のように破裂して散り散りになり、野原の中に消えてしまった。

Hensen 1955

S.128 Nr.217

祖父はよく彼が体験したこんなことを話してくれた。あるとき彼がEmbkenから帰ってくるとき、Frohnbuchelのそばで道の両側にひとりずつ黒い男がいるのを見つけた。『なんてこったい、いったい何なんだ、こりゃ』。彼は驚いてそう叫んだその刹那、2つの黒い人影は激しくぶつかり合い、赤々と燃える姿となった。両者はお互いに殴り合ったので、火花が方々に飛び散った。祖父はあらん限りのスピードで家に帰った。夫を家で迎えた祖母はこう言った。『ハンネス、それで彼らはどんな風のかしら？』恐ろしくて、彼は最初口を開くことが出来なかった。気持ちが落ち着いてきてやって、自分の体験を話すことが出来た。

Hensen 1955

S.128 Nr.218

ある朝早くに、Frauwuellesheimの男が森で薪を拾おうと車を走らせていた。いかがわしい場所として知られている、Hommelsheimer Hofの近くにあるGriemaarとよばれるところで、燃える人が荷台に乗り込んできた。恐ろしくなって男は祈り始めたが、祈れば祈るほど、"jlonige Mann"は近づいてきた。とうとう恐怖をこらえきれずに、男は燃える人にののしり言葉を浴びせかけた。すると霊Geistは言った。『あんたがもう一回だけ主の祈りを唱えてくれていたならば、私は救済されたのに。次に私を救えるのは、クルミの木が植えられて、その木が育って材木にされて、その材木からゆりかごが作られて、そのゆりかごに揺られた最初の赤ん坊なんだ』。そういって燃える男は消えた。

Hensen 1955

S.128f. Nr.219

70歳の男が、軍隊にいた頃の話をしてくれた。『休暇をもらったとき、家に帰るためには森を抜ける道を通らなければならなかった。近道の獣道は、とてもいかがわしい道だった。つまり、夜になるとそこは赤々と燃える男が彷徨っていると言われていたのだ。『うむ、おまえは軍人だし、サーベルを腰に差している。おそれることはないじゃないか』。私は獣道に分け入った。と、突然、燃える男が目に入ったではないか。彼は微動だにせずに立ちつくしていた。おそれずに近寄っていくと、そこにあったのは、上の部分が朽ち果てている木の切り株だった。それが、月明かりの中で赤々と光っているのだった。こうして私は、赤々と燃える男の秘密を発見したのだった。当時の人々はまだ迷信深かった。何か奇妙なものを見つけると、深く考えるということはなかった。今となってはそういうことはまずないだろう。人々は妖怪Geisterや幽霊Gespensterを信じなくなり、何かきみょうに思えるものがあれば、それがなんなのかじっくり観察するようになった。

Hensen 1955

S.129 Nr.220

人々が信じていることによると、燃える人は待降節の頃一番たくさん現れるというが、ずるがしこい人たちは人々がこう信じていることを利用して、泥棒をする。泥棒使用とたくらむものは、ランタンを手にして野原に行き、そこでそれをぶらぶら揺らす。すると、それを目撃した人たちは、怖がって野原に行こうとはしなくなるので、誰にもじゃまされず、落ち着いて泥棒家業に精を出すことが出来るようになった。野原に罠を仕掛ける密猟者も泥棒と同じようにした。密猟者は、仕掛けができあがると火を消した。それと同時に燃える人も消えたのである。

Hensen 1955

S.203 Nr.354

DurenからBinsfeldに向かう街道の右側に、平らな野原がそこだけ落ちくぼんでいる箇所がある。そこは"an dr Miesheimer Krech" と呼ばれ、昔は教会が立っていたと言われる。その教会は、のちに庭つきの修道院になり、その後、教会と庭は沈んでしまったと言い伝えられている。Merzenischeから、野原を抜けてこの場所まで続く小道がある。この道は、Lichwag、あるいはgruner wegと呼ばれる。というのも、そこがMerzenischのMiesheimer教会の管轄で、中庭が信者を埋葬する場所だったからで、これがLichwagの由来となっている。この小道には怪し火や燃える人たちが徘徊するため、とてもいかがわしかった。とりわけMiesheimer Kircheに面した広場にはGeisterやSpukがよく出て人々を恐れさせた。

Hensen 1955

S.58 Nr.50

StockheimとSollerを越えてFroitzheimへと至る街道を行くと、道の左側の何もない野原に、ポツポツと茂みが3箇所あるのが見える。それらは、Duvves, Stuckchen und Kahmchen oder Vetterisserの茂みと呼ばれている。Quatemberの夜になると、Duvvesには決まってたくさんの燃える男たちが目撃された。かれらは大小さまざまな炎の形をしており、音もなくManneshoheの藪の脇を通り過ぎていった。人々はそれを「燃えるJagg」と呼んだ。そこではまた、霊Geisterたちが彷徨っていた。

Hoffmann 1911

S.10 Nr.23

在任中、森を分ける際、自分に見返りがあることを期待して金持ちに荷担し、貧しい者には不利な取り扱いをした森林官。死後はかつての自宅にSpukとして現れて鬱陶しがらせたので、聖職者GeistlicheがStall家畜小屋に追放。そこではさらにひどくポルターガイストなどを起こした。家畜小屋にはいると、肩に乗ってきて、そのまま歩かされた。それは、今にも押しつぶされるほどの耐え難い重さだった。そこで聖職者が呼ばれ、今度は人々への被害がさらに少ないと思われるKermeterに追放した。Kermeterでは彼は猟師の格好で現れ、犬を2匹連れて森の中を徘徊した。その道を通る者は、しばらく彼を乗せて歩かなければならなかった。また夜になると彼は、燃える人となり、こう言いながら走り回った。『どこにこいつを置いたらいいんだ？Wo setz' ich en hen?」

Hoffmann 1911

S.33f. Nr.78

NideggenとBergの間の小道の左側に、今も"em Seechesgaade"と呼ばれる牧草地が広がっている。そこには以前Siechausと呼ばれる建物があった。中にはやくざ者のごろつきたちが住んでいて、彼らは夜になると馬を駆って通りすがりの旅人を襲撃しては家に連れ込んで痛めつけた。しばしば殺したりしたとも言われる。建物が廃墟となってからも、この場所はろくでもない場所のままだった。人々は、『あそこには出るんだ」と噂した。怪し火と燃える人"Drueggleede und Fuermaenn"が出没したからである。そこでは不意に何も正体がないのにびんたを食らったりするのだった。その場所で撲殺された者のGeisterが、その場所を禍々しくしているので、この場所を通り過ぎようとする者はいつも恐る恐るだった。人々を道に迷わせる怪し火あるいはDrueggleedeがそこではよく見かけられた。その正体は地面から発するもやがチラチラと漂っているものだと言うものもあれば、別の者は洗礼前に死んだ子供の霊Geisterだと言った。ある男が向こう見ずにも帽子で怪し火を捕まえて家まで持って帰ったことがある。家について彼が見たのは、青いシミだけだった。

Hoffmann 1911

S.4 Nr.7 Abs,8

そこには"Feuermann"も出没した。Morsbachの "Karthieppertchen"と呼ばれる男は、よくWollseiffenで夜遅くまでカード遊びに興じる人物だった。その彼が夜家に向かうときには、Ronnfeldeで頭のない赤々と燃える男につきまとわれることが何度もあった。つきまとわれるたびに恐怖で男の髪は逆立ち、脂汗を流した。

Hoffmann 1911

S.49 Nr.117

赤々と燃える男（グレーニゲ・マンGlonige Mann、glunige Mannの転訛か）とは、天国と現世の間を彷徨っていて、誰かが救済するまで安らぐことのできない魂（Seelen）である。あるときのこと、テュム（Thum、場所不明）の男が車に乗って果物を売るためにツェルピヒ（Zulpich、ケルン近郊のローマ時代からの古都）のフロイツェム（Froitzhem）に向かっているときのこと。早朝であたりはまだ真っ暗だった。突然、燃える人が車の後部に乗り込んできたではないか。車を牽く馬はすぐに汗だくになった。馬車を駆る男は恐ろしくなって祈りだしたが、燃える人影は消えなかった。とうとう男は我慢しきれなくなり、大声を上げた。「こんちくしょう、車から降りやがれ！」その瞬間、霊（Geist）はこう言い捨てて消えた。「あともう一度主の祈りを唱えてくれていたなら、俺は救済されたのに」。

Hoffmann 1911

S.49 Nr.118

あるとき、Thumに住む職人の親方一行が晩遅くBoichから家に向かった。彼らは村の近くのweissen Burscheと呼ばれる場所で、赤々と燃える男3人を見かけた。恐れ知らずで、霊Geisterにも負けない力を持った人物でもあった親方は、弟子2人にこう話しかけた。「赤々と燃える男を近くで見てみたいとは思わんか」。彼らが同意したので、親方は燃える男たちに向かって口笛を吹き、すると暗闇の中、燃える男たちが一行の目の前に立っていた。その姿は赤々と燃える人間の骨格のようで、肋骨の数を数えることが出来るほどだった。心臓はまるで絹糸のようなもので掛かっていた。バックル飾り付きの靴には、銀のボタンが付いていた。仰天しているGeselleたちを尻目に、彼らの親方は「立ち去ってもらおうか？」と弟子にたずねた。親方がぶっきらぼうなのんびり言葉を口にした途端、赤々と燃える男は、遙か彼方に消えうせた。

Hoffmann 1911

S.52 Nr.127

Helmesと呼ばれる牧人はKelzで羊の番をし、土曜の番になると妻と子供たちの待つDroveに通っていた。ある土曜日の晩、彼はいつものように家路についた。あたりは目の前の手も見えないほど真っ暗だった。村の手前についたとき、突然燃える人が彼の目の前に現れ、周囲を煌々と照らし出した。困っていた牧人は、5グロッシェンでDroveの手前のBurgbergまで照らしてはくれないだろうかと持ちかけた。燃える人は黙したまま彼の前を進んだ。道々牧人は、約束した報酬をどうやって手渡したらよいかずっと思案した。約束の場所に到着すると、燃える人はすでに報酬をもらうのを待ちかまえていた。やっとそのとき、彼に名案が浮かんだ。牧人用スコップを手に取り、そこに報酬をのせて燃える人に渡した。燃える人が触れたところには、黒く焼けこげが残った。

Hoffmann 1911

S.62f. Nr.156

BogheimとBrandenbergの間にはTal Lichtenbroichがのびており、そこは燃える男たちの巣窟だった。Vogheimの若い男が、ほかの人々と一緒に村のそばにある高台にいたとき、"gloenigen Mann"をLichtenbroichに見かけた。そこで遊び半分で、別の者の制止にも耳を貸さず、燃える男に向かって口笛を吹いた。すぐさま燃える人は軽はずみな男の目前に現れたので、とっさに逃げ出したが、すぐに追いつかれてしまった。燃える男は、逃げる若者の背中にぶら下がってきた。若者は重い荷物にあえぎながら、ようやく家に着き、一番近くの家畜小屋に向かい、そこに倒れ込んだ。家畜たちは突如小屋の中に広がった明るい火に驚き、つながれた鎖を切って逃れようともがいた。しかし突然、燃える人は消えてしまった。若者が正気に戻るまでにはその後しばらく時間が掛かった。

Hoffmann 1911

S.67 Nr.167

Huertgenの仕立屋がGrosshauで仕事をしたあと、帰途につくのが晩遅くなってしまった。Huertgenの近くの小川のほとりに来たとき、突然燃える人が彼の前に立ちふさがった。その肋骨は赤々と燃えていて、数を数えられるほどだった。仕立屋は根が生えたかのようにその場に立ちすくんでしまった。

Hoffmann 1911

S.72 Nr. 178

あるBerghofで働く下男が、ある日の夕方燃える男が耕作地を彷徨っているのを見つけた。そばにいた同僚の下男たちはすぐに馬で逃げ帰ったが、この下男は勇敢なところを見せつけようと、Geistに向かって口笛を吹いた。すぐに燃える姿は無鉄砲な者の目の前に現れたので、彼には逃げる暇などなかったが、どうにか家の扉を鼻先で閉めることだけは出来た。その次の瞬間、扉が何度か叩かれ、ドンドンと音がした。翌朝、蹄鉄の焼けこげ跡が6つ、扉についているのが見つかった。この焼け跡は決して消えることはなかった。

Hoffmann 1911

S.72f. Nr.180

ある晩遅く、Schlagsteinerが車に乗って家を出て、翌朝早くしっくいを入手するためにWenanに向かっていた。BergheimとKusserathの間の切り通しで、突然黒い人影が彼の目の前に現れた。男は人影に向かって親しげに挨拶したが、返事はなかった。男の粗野な振る舞いに対して、人影は身につけたマントをはだけて応対した。マントの下に男が見たのは、赤々と燃える人間の骨格で、そこから火が立ち上り、口からは火の粉が飛び散っていた。髪の毛が逆立つほどぞっとしている男を尻目に、燃える姿は車に乗り込んできた。朝の薄明かりの頃になってやっと、Geistは車を降りていった。驚いたことに、夜通し走ったにもかかわらず、Lendersdorfからほとんど離れていないことに気づいた。さらに、赤々と燃える人影が腰掛けていたところが黒く焼けこげていたので、男は、あれが妄想などではなく、本当に起こったことなのだと実感した。

Hoffmann 1911

S.74 Nr.185

LangenboichのRektorは、しばしばLendesdorfの司祭を訪ねたが、その道中、真っ暗になると燃える人が付き従ってくれた。燃える人が行く道を明るく照らしたので、夜になっても聖務日課書を読むことが出来た。Kufferrathの手前で燃える人は消え、村をすぎるとふたたび現れた。

Hoffmann 1911

S.9 Nr.19

Quatembernachten（四季の祭日の夜）と待降節になると、Muchelbergの麓の庭で、燃える人たちが姿を現した。ある日のこと、ひとりの男が仕事をしていて、帰宅するときには日が暮れてしまっていた。帰宅途中、彼の荷車に燃える人が乗ってきた。燃える人の姿は、あたかも人間の骨格が赤々と燃えているかの如くだった。燃える人が乗ってくると、車はどんどん重くなっていったので、とうとう帰宅途中の男は燃える男にこうたずねた。「いったいあんたの望みは何なんだ」。燃える人は男に、ついてくるように合図した。ふたりが来たのは、とある境界標識石のところだった。燃える男は、帰宅途中の男にその石を動かしてほしいと頼むので動かしたところ、燃える男はこう言って消えた。「あぁ、これで俺も永遠の命をもらった子どもだ（＝昇天する）。あんたもじきにそうなるだろうよ」。

Hoffmann 1911

S.91 Nr.224

夜になると"Fueemann"が出没した。彼は肋骨丸見えだった。彼を人々は杖でたたいた。目撃した人が帰り道つまずき、すぐに死んだ。

Hoffmann 1911

S.98 Nr.246a

燃える人とは、償わなければならない罪が現世にまだ残っている死者の魂で、とりわけ、生きている間に隣人の土地を（不正に）耕した者である。当地では彼らはたいてい、メルケンの野原（Merkener Feld。メルケンは、おそらくは、ケルンの近郊にあるデュレンDurrenという名の町近くの集落）あたりに出没する。夜になると、霊たち（Geister）がそこにたむろするとされたからだ。

Hoffmann 1911

S.98 Nr.246b

およそ100年ほど前のこと、Merkenのある女が下男を連れてEchtzerのKirmes祭から家路についていた。あたりは真っ暗だった。そこにSchoebbischの方からあかりが来るのが見えた。それはあたかもランタンを手にした男のように見えた。光は、一定の距離を置いて彼らの横に並んでいた。Merkenの入り口に来ると、あかりは突如大きな火となった。庭の周囲の柵が、照らし出されたが、次の瞬間、突然光は消えてしまった。

Hoffmann 1914

S.107 Nr.260

<荷台にのった燃える人>GressenichからMausbachに向かう道中を夜移動すると、そこではしばしば燃える人が目撃された。ある晩のこと。年老いた車屋が家路をたどっていたとき、燃える人が荷台の最後部に乗っていて、降りようとしなかったことがあった。荷台はからなのにもかかわらず、あたかも重い荷物を引いているかのごとく馬は汗だくになり、普段なら30分ほどしかかからない道のりなのに、1時間以上も費やした。燃える人が消えるとやっと車は普通に走り出した。珍妙なことに、燃える人が腰をかけていたところには、焼けこげた跡は全くついていなかった。

Hoffmann 1914

S.108 Nr.264

GressenichからMausbachに向かう道は、とても不気味なところだった。とくに、Weiherneste は薄気味悪かった。そこには怪し火や燃える人たちがよく横行した。ある日の深夜2時頃のこと。Groshauの女性2人が家を出発した。翌朝Stolbergで野イチゴを売るためである。GreissenichとMausbachの間の谷間の道筋で、2人は休憩を取るために歩みを止めた。彼女たちが休もうと腰掛けるや否や、黒馬に乗り、頭部を小脇に抱えた騎士が脇を通りかかった。彼はWeiherneste で消えてしまった。2人は驚き、籠を頭にのせていかがわしいその場所をそそくさと立ち去った。

Hoffmann 1914

S.117 Nr.291

ある晩のこと。Hastenrathの男が、Eschweilerから家に帰るのが遅くなってしまった。その道中、まだ村の麓の牧草地にも到着しないところで、彼は十字架の形をした燃える男に出くわした。燃える霊Geisは、歩く彼の横に並んだので、その周囲はとても明るく照らし出されていた。男は死ぬほど怯えた。家につくと、燃える姿は彼の脇を離れた。Hastenrathの男は、恐ろしさゆえ、哀れな魂が同行している間に声をかけることができなかったが、もし彼が十字を切って「Bist du von Gott, so sprich; bist du aber vom Teufel, so scher dich weg」とさえ言っていたら、燃える男は救済されていた。

Hoffmann 1914

S.117 Nr.291

Ruckertにある牧草地の中に湿地があり、そこには燃える男たちがとくによく徘徊し、特別勇気のあるものでなければその場所を通ろうとはしない。"der Engel des Herrn"の祈りが唱えられて以来、燃える人たちだけでなく魔女も消えてしまった。

Hoffmann 1914

S.13 Nr.33

<Indetalの燃える人>ある老人がこんな話を聞かせてくれた。昔は、夜になるとよく燃える人の一群が（ケルン近郊、エシュヴァイラー近くの）インデタール谷を通っていったものだった。彼らはまるで薪に火をつけたたいまつのようにもみえ、ちょうど大人の背丈ほどの高さのところに頭があるだけで、体のそれ以外の部分は何も見えなかった。一般的には、彼らは生きている間に何か悪いことをした人間の霊（Geister）とされ、それが死後、救済を求めて彷徨わなければならないのだと説明される。彼らを救済してやるには、何か話しかけてやればよいと伝え聞くが、多くの人々は彼らのことを恐がって、避けた。怖くなって祈り始める人がいると、彼らはその人に近づいてくる。しかし、ののしり言葉を口にすれば、その刹那彼らは消えてしまう。

Hoffmann 1914

S.13 Nr.34

<Fuemann>ルッヘム（Luchem）出身の、屈強で恐れを知らないある若者が、いつものように、夜、“コルベルク”（Kollberg）（一般にはバルデンベルク、Bardenberg）に向かって車を走らせていた。朝には現地に到着していたいからだった。彼は、一度“フェーメン”にあってみたいと思っていたところ、ある夜、その希望が叶った。彼は、美しく大きな燃える人を見かけたのである。しかし、燃える人は、彼から遠ざかっていた。彼は、燃える人は口笛を吹くとよって来るという話を聞いていたので、口笛を吹いてみた。すると、あっという間に燃える人は彼のすぐ横までやってきたではないか。男は総毛立ったが、思いきって夜の放浪者に声をかけてみた。燃える男は彼に応えるかわりに、車に乗り込んできて、運転手の横にピタッと腰掛けた。車を引く馬は、精一杯の力を振り絞るので、馬具がぎしぎしと音を立てていた。自分で燃える人が近くに来てほしいと望んだにもかかわらず、若者にとって、すぐ横にいられるのはたくさんに思い、車から降りて馬の横を歩き始めた。彼の不安をさらにかき立てることに、燃える人がもうひとり近づいてきた。車の助手席に自分の仲間がいるのを見つけて、2人目も車に乗り込んでこようとしたが、先に乗っていた方は、それを拒もうとし、車を後から来た仲間からなるべく遠ざけようとした。それゆえ、両者の間で殴り合いが始まり、2人がまき散らす火の粉が、馬車を引く馬の向こう側まで飛んできた。元々車に乗っていた若者は敬虔なカトリック信徒だったので、切羽詰まってロザリオの祈り（聖母マリアへの祈り）を唱え始めた。彼は祈った。そして、十字を切ったとき、殴り合う2人の燃える人は、消えてしまった。

Hoffmann 1914

S.131 Nr.328

<燃える人からの逃亡>ある生徒がこんな話をした。「50年ほど前のこと。Eschweilerの駅まで曾祖母を迎えに行った下男が、曾祖父のところに帰ってきたとき、一行が乗った馬車を引いていた馬は汗だくでしかも息を切らせていた。下男は怯えきって、中庭に向かってこう声をかけた。「燃える人がいたぞ。Hovermuhleのところの池で飛び跳ねていて、そのうちの2人が僕らを追いかけてきたんだ。それで馬をできる限り速く走らせたから、どうにか捉まらずにすんだ」。

Hoffmann 1914

S.138 Nr.353

<燃える人たち>農家の下男から聞いた話によると、プロテスタント教会の墓地には、夜になると燃える人が出るという。ある日の深夜、おそれ知らずな使用人が燃える人を一目見ようとそこに出かけた。しかし別の使用人たちががすでにそこで待ちかまえていて、火をたいていた。彼らはシーツを体に巻き付けて、赤々と燃える灰を空中にまき散らしていた。それを見て、跡から来た男は勇気を失い、一目散に逃げ帰った。

Hoffmann 1914

S.143 Nr.366

<Kashenchen> Rothgenでは、毎晩灯火を持った燃える人が彷徨っていた。人々はこの燃える人のことを、"Kashenchen"あるいは"Furmannchen"と呼んでいた。

Hoffmann 1914

S.145 Nr.373

昔、Pumpeには人々を驚かせる燃える人が出た。彼はランタンを手にして森を彷徨い、砂袋を担いでいた。人間と出くわすとかれは砂を目めがけて投げつけたという。しかし、これは本物の燃える人ではなかったといわれる。

Hoffmann 1914

S.157f. Nr.422

<燃える人>ある生徒がこんな話をしてくれた。「およそ65年前のある雨の晩、僕の祖父の兄弟が汗だくになって家に帰ってきた。荷車には、クローバーがいっぱいに積まれていた。彼が曰く、道中で馬の前に燃える人が飛び出してきたので、馬が立ち止まってしまったという。鞭を当てても、馬はいっこうに前進しようとはしなかった。たたいてもその甲斐がないので、彼は祈り始めた。すると燃える人は耕作地の方に行ってしまった。村のすぐ手前、いわゆるKuhgasseについたとき、また燃える人がいるのが向こう側にいるのが見えた。馬はまた立ち止まってしまった。彼がまた祈り、十字を切ると、燃える人は耕作地の方にふたたび去っていった」。

Hoffmann 1914

S.161 Nr.435

<燃える人たち>昔、"Steenere Brock"のそばに、燃える人が現れた。人々は、燃える人が人の背中に乗ってくると噂した。DurwitzとFronhovenの間の野原で、ある男が動物の姿を見かけた。しかしそれは犬ではなく、その正体がいったい何だったのか、彼には分からなかったが、旅人は、その姿にびっくりしてあらん限りの速さで走り、その場から立ち去った。別の機会に同じ道を通ったときには、彼は何も見かけなかった。

Hoffmann 1914

S.164 Nr.446

<Alsdorfの言い伝え>Alsdorfにも、口から口へと伝えられてきた奇妙な言い伝えがある。たとえば燃える人や大きな黒猫、荷車に跳び乗ってきて馬を立ち往生させる見えない積み荷、旅人の背中に跳び乗ってくる"Zubbeldiehr"、"Juffern"、不思議なウサギなどなど。残念なことに、最近の若者たちは、こうした昔からの大切な言い伝えのことを知らない。

Hoffmann 1914

S.174 Nr.466

昔は、Obersteinの反対側にある"Aeffel (Feel)"には、燃える男たちが出て人々を驚かせていた。またこのあたりでは、夜になると"wisse Juffe"も闊歩していた。私には、未だに忘れられない出来事がある。ある夜のこと。勇敢なことで名の通っていた私の父が、それを目撃して恐怖におののいている友人に呼び出された。父は頑丈な棒を手にして、「白い女性」が出たという現場に向かった。私はそのときちょうどまだ10歳だったが、父について行くことを許された。しかし、白い女性は棒を持った男たちにあいたくないと思ったのか、1時間以上あたりを歩き回ったけれど、私たちは何も見つけることができなかった。

Hoffmann 1914

S.18 Nr.45

<燃える人>人々は、自分の教会区からBardenbergの"Kollberg"まで、石炭を掘りに出かけた。そこで手に入れた石炭は、Durenまで運ばれた。道中で燃える人に出会うこともあり、そのときにはKruzzerfettmannchenと呼ばれる小銭を、石炭を掘るための大きなスコップの上にのせて燃える人に渡した。彼はそれを手に取り、消えた。

Hoffmann 1914

S.18 Nr.46

あるとき"Mollepattche" (Muhlenpfad)で、車屋が燃える人に出会った。車屋は、燃える人をからかってもよいものだと思って、彼をこう呼び寄せた。「こっちへ来いよ。来たらKruzzerfettmannchenをやるよ」。燃える人は車屋の車に乗り込んできて、彼の隣に腰掛けた。一行がLangendorfに到着したときには、車を引いていた馬は消耗しきっており、体中汗だくだった。

Hoffmann 1914

S.20 Nr.57

<燃える人たち>燃える人たちは、生きている間に境界標識石を動かして土地を不正に広げた者が、死後の魂Seelenになった姿である。それ故彼らは、死後、さまよわなければならず、このように叫んでいる。「どこにこのPohlをおいたらいいんだ？」誰かがこの問いかけにこう答えるまで彼らはさまよい続ける。「おまえが動かす前の、元の場所におけ！」と。

Hoffmann 1914

S.22 Nr.64

（ルール地方）ローンの司祭が、エアベリッヒのある病人の（告解の）ために呼ばれた。司祭を呼んだのは病人の二人の隣人たちで、彼ら二人と教会の寺男が随行した。一行が今日キュスター十字が立っているところまでやってくると、いきなり寺男が叫んだ。「司祭さま！燃える人が来る！」。「祈り続けるのだ。そして進もう！」。司祭は答えた。燃える男が近づいてくると、司祭は祝福を与えた。すると、男が話し始めた。「この祝福を、ずっと長いこと待たなければならなかったんだ。まだ生きている頃、祝祭日に礼拝するのをなまけていたんだ。これで昇天できる。ありがとう。」そういって、霊は消えた。

Hoffmann 1914

S.23 Nr.68

Indenの"Wog"では、夜になると燃える人たちが徘徊する。今から15年ほど前に死んだある男がまだ生きているとき、夕方、Indeの左岸を歩いているとき、燃える人を目撃したそうだ。彼が口笛を吹くと、燃える人はIndeを越えて彼の方にやってきた。恐ろしくなった男は、家に向かって急いで走り出したが、燃える人は彼を追いかけてきた。走っても走っても追いかけてくるので、しまいには疲れ果ててしまった。ようやく門までたどり着き、最後の力を振り絞って急いで門を閉めた。門の外側では、燃える人が門扉の外側をドンドンたたいているのが見えた。翌朝門を見ると、そこには焼けた大穴の痕跡がしっかり残っていた。

Hoffmann 1914

S.28f. Nr.86a

Echtz地区のSchobbichは、今は耕作地になっているが、以前は荒れ地だった。村の東側にあたりMariaweilerにあった。実はそこは、近隣の村人たちにとって意味ある場所だった。というのも、魔女の火あぶりが行われた場所だからだ。とても禍々しい場所とされ、Echtzという名も、ときにHexeechtzとも呼ばれた。村からその場所へ至る小道も、"Hexegeise"と呼ばれた。また、夜になると、とくに燃える男たちや"Drugglede"などが滞留し、周囲を徘徊していたとも言われる。それ以外の化け物Spukもあたりをうろついていた。

Hoffmann 1914

S.32f. Nr.96

ニーダーメァツ（Niedermerz）のある男が、アルデンホーフェン（Aldenhoven）で仕事をしていた。仕事場へ向かう道中、彼はいつも燃える人にちょっかいを出された。だから、ある日彼はパストール（村司祭か？）のところへ行き、いったいどうしたらよいのかきいた。彼はこう答えた。「次回燃える人が現れたら、そのときには、何をしてほしいのかきくとよい」。翌日、男はいつものように仕事に向かっていると、村の手前にまた燃える人が待ちかまえていた。そこで男はすぐさま燃える人に、望みをきいた。「あぁ！」燃える人はため息をつき、こう続けた。「私は霊（Geist）なのだ。実は生きている間にとある誓いをしたが、それが守れなかった。おまえ、私のために祈りを捧げ、サクラメント（秘跡）を受けてはくれないだろうか。そうすれば私は救済されるのだが、それまではこうしてさまよい続けなければならず、安らぐことができないのだ」。「でも、あんたが救済されたということを、俺はどうやって知ったらいいんだ？」男の問いかけに、燃える人はこう答えた。「おまえに合図を送ろう」。男は霊との約束を忠実に果たし、祈りを捧げ、最後にサクラメントを受けたそのとき、いきなり、彼の眼前にある聖体拝領者のためのベンチに革のような茶色の手が現れ、聖体拝領の布に黒い焼けこげがついた。男はこの布を持って帰り、大切に保管した。後にこの布は、男の親類によって（アルデンホーフェン近郊の）デアボスラー（Durboslar）の教会に寄贈された。

Hoffmann 1914

S.34 Nr.98

DurboslarとNiedermerzの間に、"Honsschlach"と呼ばれる畑地がある。年寄りたち曰く、その名は、そこであるとき雌鳥を屠殺したことに由来するという。粗野で野蛮な人々は、肉を調理せずに、馬に乗せて柔らかくしたものを食べていたからだという。"Hongsschlach"はおよそ4-5ヘクタールほどもある。そこには以前は深い切り通しの道が通っており、"Fuemander"がたくさん滞留している、呪われた場所であるとされた。そこを通る者は誰でも、無事に通り抜けることができたことを心から安堵し、よろこんだほど、不気味なところだった。

Hoffmann 1914

S.39 Nr.112

FrenzとLutzelerの家の間には地面がずぶずぶしているところがあり、底なし沼がある。そこには、おばけSpukもよくでる。とくに、燃える人たちと"Drugglede"が多い。Frenzの両親は、そのそばで遊ぶ子供たちによくこう言い聞かせていた。その湿地では、以前車が2頭の馬とともに跡形もなく沈んでしまったことがあるのだ、と。Lucherbergに鉱山ができたので、今ではその沼は涸れてしまったらしい。またかつては、夜そこを歩く者は誰でも、純白の衣をまとった乙女がうろついているのを目撃したともいわれる。だから誰も近づきたがらなかった。ある夜、JungersdorfのあるLamersdorfから家に向かっているとき、この場所を通りすがった。そのとき彼は、2頭の黒馬にひかれた馬車の中に純白の衣を身につけた乙女が乗っていて、"Hellepotz"の方向からやってきてLutzeler屋敷の方向に向かっていくのを目撃した。屋敷の前まで来ると、門扉が自然に開き、車は屋敷地の中に入って、止まった。乙女は車から降り、領主の屋敷の中に消えた。驚いた男は恐ろしくなって、自宅まで走って帰った。

Hoffmann 1914

S.39 Nr.114a

<3人の燃える人たち>100年以上前、Frenzer Burgの脇の"op de Rohweed"には、夕方になると燃える人たちが3人、よく集まっていたという。1人は、IndetalのWeisweilerから、もう1人は"Husboischche"のLangerweheから、3人目は、Lutzelerの家からやってきたのだった。彼らはいっときRuhweideにとどまり、お互いになにか相談でもしているかのようで、そののちもと来た道を戻っていくのだった。Franzer Burgで仕事をしているある男は、この様子をしばしば観察していた。城の女城主は、彼女の使用人の話に興味を示し、燃える人たちがでたら彼女を呼ぶようにと、男に頼んだ。男は門の前に立っていると、案の定3人が現れた。男は急いで主人を呼び、早く降りてくるように伝えた。彼女はすぐさまやってきて、燃える人たちの集会を目撃した。ピウス9世が来て妖怪や幽霊Gespensterをすべて"affgebatt"して以来、燃える人たちが現れることはなくなった。

Hoffmann 1914

S.40 Nr.115

<燃える人が照らす>89歳の老女が語るには、彼女の祖父はFrenz出身で、彼は、動物が病気になるとEchtzまでよく呼び出されたという。昼間のうちに仕事に片が付かず、夕方以降移動するときには、いつも決まって通る道があった。村の出口にたどり着くと、そこにはいつも燃える人が彼の道中を照らそうと待っていてくれた。Echtzのすぐ手前、"Echtzer Heggen"になってやっと、燃える霊Geistは彼のもとを去った。しかしあるとき、このときもまた燃える人が同伴してくれていたのだが、彼らの後ろで酔っぱらいがからかい半分でこう叫んだ。「待て！俺も一緒にEchtzまでいくぞ！」すると燃える人はくるりと振り返り、向こう見ずな酔っぱらいに稲妻ように近づき、燃えるげんこつで一撃を食らわせた。火花がぱっと飛び散り、燃える人は消えてしまった。酔っぱらいはとたんにしらふに戻った。しかし祖父は彼をやっとの思いでEchtsまで連れて帰った。その後男は病気になってしまったが、やがて治った。

Hoffmann 1914

S.40 Nr.116

老人たちがいうには、EschweilerからFrenzに向かう道には、夜になると燃える人たちがうろついており、火の粉を散らしながらお互いに戦っていたという。それゆえその場所にはいまでも古い鉄が見つかるという。

Hoffmann 1914

S.42 Nr.119b

Merken出身のGressenichの老婆は、以下のように語った。「あるとき、Merkenの農夫が"Duffesmaar"にある自分の畑を耕していた。すると突然、鋤が地中にある何か堅いものにあたり、壊れてしまい、なにやら鐘が鳴り始めた。興味深く思った彼は、それを掘り起こしにかかり、びっくりした。というのも、礼拝堂の鐘のてっぺんに突き当たったからだ。鐘の音がし始めたのは、そういうわけだった。農夫はすぐさま穴を土で埋め戻しはじめた。というのも、沈んだ町の秘密を暴くのはよくないことだといわれていたからである」。Gressionの町の人々は、じつは、死に絶えてしまったわけではないとも言われる。クリスマスの夜（別の者に言わせればマティアスの夜）になると地下がざわざわと活気づき、12時になると沈んだ町の教会の鐘が鳴り始める。そのとき地面に耳を押し当てて耳を澄ませば、地下深くに沈んだ都市から地表まで伝わってくる、鈍い鐘の音をきくことができるという。静かな夜、Duffesmaarで美しい音楽が聞こえてきたという者もいる。またある者は、特定の日の夜になるとそこに魔女たちが集まって、退屈しのぎにさまざまな音楽を奏でて踊っていたからだと言い、別のものはそれは地下都市から聞こえてくる音楽だったと信じた。Geichのある若者は、Luchemの娘と恋仲だったので帰宅が夜になることがしばしばあった。その際彼は、ときどき謎めいた音楽を耳にすることはあったが、どこから来るのか突き止めることは一度たりともできなかった。しかもそのいかがわしい場所には、怪し火や燃える人もうろついたので、以前は、ここを通るときには皆恐る恐る行ったものだった。言い伝えによれば、DuffesmaarからGeichへは地下通路がのびていて、その入り口は"heiligen Geestes"館の地下室にあるという。

Hoffmann 1914

S.42 Nr.120

<ドゥルッグレーデ（Drugglede）と燃える人>デュッフェスマール（Duffesmaar）とその周辺は、「昼間ではない（do dog et net）」と人々にいわれるように、とても不気味な場所だった。夜になると、（真昼でも）デュッフェスマールから「ルヘム（Luchem）のビルト（Bild）」という名で呼ばれる五叉路に向かって、燃える人（Fuemann）が出たという。当初こそその正体は不明だがやがて全身が赤々と燃えている姿が見えだし、炎に身を包まれながら道を行く男の姿となる。彼は誰にも危害を加えないよき霊とみなされた。たちの悪いのはイルリヒトで、それは小さな炎のように見え、よくデュッフェスマール近郊の荒れ野に出没する。イルリヒトに惑わされた人々は、知らぬ間に道を外れて夜通し迷い続け、目的地には明け方になってやっと到着することができたという。たとえば、メルケン（Merken）のある女が、隣村ルヘムのキルメス祭（Kirmes、教会祭）に参加したときのこと。彼女が帰路についたときにはすでに夕方遅く、案の定、道中イルリヒトに出くわしてしまった。彼女はイルリヒトに夜通し引きずり回され、（村へ向かう道にある）ルーハーベルク（Lucherberg）付近まで3度も来たにもかかわらず、どうしても帰り道を見つけることができなかった。ようやく見つかったときには、すでに明け方になっていた。家に着くと、彼女はすぐさまベッドに横になり、そして二度と起きあがることはなく、それからまもなく恐怖のために死んだ。彼女と似たようなことは他の者の身にも降りかかった。何時間も野原を彷徨い、別の村に来てしまったりもしたが、自宅にはどうしても到着できなかったのである。このように、イルリヒトは悪質で、人間に対して悪意を抱いている。

Hoffmann 1914

S.45 Nr.126

<ランタンを持った男>生きている間に悪しき行いを重ね、罪深いまま死んだ人間は、死んだ後に罰として徘徊しなければならないのだと、昔は言われた。『奴は今でもうろついているよ。罪を償うためにね』。あるとき、Konzendorfで生涯悪徳にまみれたある男が突然死んだ。そのすぐ後から、野原を燃える人がさまよう姿が目撃されるようになった。この燃える人を、恐れ、避ける人々もでた。この話を信じなかったObergeichの男3人が、ある晩、燃える人を本気で怖がっている少女を3人つれて、件の場所にやってきた。そこで彼らは、確かに光が彼らの方に向かってくるのを見た。光はどんどん近づいてきたが、男たちは両手に持った棒きれをさらに強く握りしめて、立ったまま待ちかまえた。しかし、いざ光が近づいてくると、男たちの、燃える人に声をかけてもし何も応えなければとっちめてしまおうという勇気は、萎えてしまった。というのも、近づいてくる男が異様に長い長靴を履いていて、片手には長い杖を、反対の手には防風カンテラをいたからだった。その出で立ちは、当時まだランタンを持った男は、男たちが集まっている中央を通って静かに歩を進めると、電光石火の速さでふたたび野原を横切って戻っていった。気づいた次の瞬間には、すでに遠く離れたところに去り、そのまま森の中へと消えた。歩き方や動作から、あれはついこの間死んだ例の男ではないかと噂された。今でも、当時のことを知るものにきけば、これは本当に起こったことだと確かに主張する。

Hoffmann 1914

S.4f. Nr.11

<Lucherbergの燃える人>燃える人とは、償わなければならない罪がまだ残っている、安らぐことのない魂である。とりわけ、生きている間に境界標識石を動かして隣人の土地を侵犯して耕したものなどである。境界標識石の設置は、古くはたいへん重大なことであって、裁判所の陪審員7名が見ているところで行われなければならなかった。設置にあたっては、まずは地面に穴を掘り、陪審員一人一人がその中に小石を1つずつ投げいれる。そしてその上に境界標識石を設置する。この境界標識石は『ポール(Pohl、字義不明)』とも呼ばれる。小石の位置を確認することで、境界標識石が最初に設置された場所にそのままたっているかどうかを確認することができるのである。境界標識石の設置は、厳粛に行われるべきものであり、それゆえ、その境界標識石を動かすという行為はとても罪深いこととして捉えられた。だから、違反者は死後燃える人としてあたりを徘徊することになった。彼らは自分が動かした石が元あったところに戻されるまで、永遠に地上をさまよい続けるとされた。

Hoffmann 1914

S.5 Nr.12,2

Lucherbergから"Wagemuhle"の方に向かう道の左側は、昔はとてもいかがわしいところだった。日中まだ陽が高いときでさえ、『そこでは昼間ではない』といわれるくらいのところだった。その近くで働いているある男が、12時から1時の間くらいに、たいそう漠く声を聞きつけた。『どこにこのpohlをおいたらいいんだ？どこにこのpohlをおいたらいいんだ？』このようにその声は言っていたが、姿はなかった。全くその声がやみそうになかったので、男はこう答えた。『おまえが持ってきた、元あった場所に戻せ！』すると、声はピタッと止んだ。夜になると、そこには燃える男が出没した。燃える男を見かけると、誰でも何でも逃げ出した。その姿は大きな炎のようで、何かを探しているかのようにあちこちをうろうろしていた。あるとき彼はしゅうしゅうと音を立てながらVilvenichの畑に飛んでいったかと思うと、突然消えてしまった。

Hoffmann 1914

S.5 Nr.12,3

"Fuemann"とは、償わなければならない罪が現世に残っている魂、とりわけ、隣人の土地を我が者として耕すために境界標識をずらしたのことだと、人々は考えていた。彼らは好んで人々の前に現れて、救済を乞うた。あるとき、Langerwehrからやってきた酔っぱらいは、燃える人が近づいてきたので、彼に殴りかかってしまった。それは酔っぱらいにとって大きな代償を必要とした。というのも、燃える人は逆襲してきたからだ。酔っぱらいはこてんぱんに打ちのめされ、体中の痛みがなかなか取れなかったという。

Hoffmann 1914

S.5 Nr.13,1
"Bohnenkampchen"は、Gebaulichteitenが最初に勃興したところで、今でも廃墟が残っている。夜になると、そこには燃える人が徘徊するという。そして夜だけでなく昼間にも、こんな声が聞こえるといわれる。「このPohlをどこにおいたらいいんだ？」

Hoffmann 1914

S.71 Nr.184
（ケルン近郊の）ランガーヴェーヘ（Langerwehe）とフレンツ城（Burg Frenz）の間には、ユンカースベンデン（Junkersbenden、語義不明）と呼ばれるかなり大きな底なし沼がある。そこは、以前はかなり柔らかく、足を踏み入れると抜け出すことができないといわれた。民衆の間に伝わる言い伝えによれば、この場所にはかつて金持ちのユンカー（郷士）が住む、立派な城塞が建っていたらしい。彼の暮らしぶりはたいへん贅沢三昧であった。しかしこのユンカーは、周辺には大勢の貧者がいたにもかかわらず、彼らに施すことは決してなかった。
あるとき、周辺で物価が高騰したことがあった。ランガーヴェーヘの貧しい未亡人が銅製の重い深鍋を小脇に抱えて、城にやってきた。鍋をユンカーに買い取ってもらい、そのお金で自分やかわいそうな子供たちのためにパンを買うためだった。しかしユンカーは、冷徹にも貧しい未亡人の願いを拒絶した。そこで彼女は、おなかをすかせて待っている子供たちが今晩食べるパンを、ひとかけらよいのでどうか恵んではくれないだろうかと懇願した。ユンカーは無愛想に拒絶した。「失せよ、女！乞食と関わり合っている暇なぞ私にはない」。そういって彼は女に背を向けた。憤慨した女は、絶望のあまりこう叫んだ。「おお神様、この人には生きている価値などはありません。それなのに、私は哀れな子供たちとともに飢えに苦しんでいます。情け容赦のない仕打ちに対する罰として、この城が沈んでしまったらいいのに！」。こう言い捨てて、女は町を後にした。
翌朝、道行くものたちは驚いた。そこにあったはずの城がなくなっていたからだ。中にいた人々や財宝もろとも城塞は地面に飲み込まれ、城があったはずの場所には水が流れ込んで湿地になっていた。これ以来、そこは不毛の地となり、地中に沈んだ人たちの魂が、怪し火や燃える人となって徘徊するので、人々は夜には決して近づこうとはしなくなった

Hoffmann 1914

S.74 Nr.189
<救済されそこねた燃える人>Gurzenichのある人が、Langerweheにでかけたとき、帰途につくのが遅くなったことがあった。Langerwehereを出発してすぐ、野原の中、遙か彼方離れたところに燃える人がいて、彼の方に近づいてくるのをみつけた。恐ろしくなった彼は祈りはじめたが、祈れば祈るほど燃える人は近づいてくる。しまいには彼の荷車に上がり込み、運転手の隣にピタッと腰掛けた。おとこはとうとう我慢しきれなくなり、男の口からののしり言葉が飛び出した。その刹那、霊Geistは車から跳び上がり、こう言った。「あんたがあともう1回主の祈りを唱えてくれていたら、俺は救済されたのに。これでまた元の木阿弥、いつまで歩き続けなければならいのだろう……」。こう言って消えてしまった。

Hoffmann 1914

S.88 Nr.219
Gronewegのところには、燃える人"Fuemander"が滞留していた。それは、下半分は真っ暗闇だが、上は火がついていて、人間の形をしており、道沿いにいつもたむろしていた。またそのあたりは、燃える人だけでなく怪し火Iruhleedeも徘徊した。それは小さな光で、道行く人を迷わせようとした。教皇ピウスがそれらを追放した。

Hoffmann 1914

S.89 Nr.220

Holzheim bei Heisternにある騎士の領地は、昔は別のところにあったそうだ。かつてあったのは、Ochsenbendenで、現在の場所から10分ほど離れたところだったといわれ、いまでも地面を見ると、壁があった痕跡がかすかに残っているらしい。あるときそこに、地下に埋もれた財宝の隠し場所を示しているかのような、小さな火が燃えているのが目撃された。「あそこに金が埋まっている」。年寄りたちは口々にそういったが、危険を冒すのをおそれて、だれも禍々しいあの場所に近づこうとはしなかった。狩猟ラッパが荒々しく鳴り響き、犬のほえる声が聞こえたと主張するものもいた。また、燃える人も徘徊した。ある晩、Heisternのある男が空の荷車を引いて家へ帰る途中、その場所を通りかかった。あっという間に燃える人が車に乗り込んできたではないか。車を引く馬は、あまりの荷の重さに大汗を流し始めた。村にはいるとやっと霊Geistは車から立ち去り、野原に消えていった。

Hoffmann 1914

S.91 Nr.225

<怪し火と燃える人たち>昔、ここではDruggledeがよく目撃された。とりわけGressenich am Weiherneste のあたりに多く、それゆえいかがわしいところとされていた。彼らは、旅人をよく道に迷わせた。Irrlichterとは、洗礼前に死んだ子供たちの魂だそうで、小さな炎を出して、とくに水辺に多く現れた。Fuemannは、しばしば赤々と燃える球形の火の形をとって現れ、ときに赤々と燃える人間の姿にもなった。彼らはまだ神から恩赦を受ける前の死者で、天国と地獄の間を彷徨っているのだと言われた。彼らに向かって口笛を吹いてはいけない。ある晩のこと。ここの若い男が、森の端に燃える人がいるのを、自宅の窓から目撃した。彼は母を大声で呼んでこう言った。「お母さん、あそこに燃える人がいる。奴にちょっと口笛を吹いてやろうかな」。母親が警告したにもかかわらず、図に乗った若者は燃える人に口笛を吹いた。その刹那、燃える人は電光石火のごとく飛んできた。あまりの速さに、すんでのところで若者は窓を閉められないところだった。しめたその瞬間、霊Geistが窓の外を両手でドンドンたたく音がしてた。彼の燃える手が窓に焼け跡を残し、それは決して消えることはなかった。

Karasek 1932

Ung. 1437

<Sturzenscheiser>Sturzenscheiserが、泉の中央に立つ柱の上に座っていた。彼は、馬がそこにつながれるのを待っていたのである。そうすれば、車の後輪の上に乗り移ることができるからだ。もしもつながれているのが優秀で強靱な馬であっても、飛び乗られてしまったら、馬はそこから一歩も動けなくなる。

Karasek 1932

Ung.1398

<燃える男たちを救済する>私の妻の父は、秋のある日Granの市場に行った。夕方、家路についた。帰宅途中、燃える男たちを3人がSandackerの方から彼の方に向かって来るのが見えた。燃える男たちは何も危害を加えないときもあるが、性悪な場合もあることを彼は知っていた。性悪とは、たとえば荷車に火を放ったりするのである。その日彼の荷車にはワラが山積みになっていたので、心配になった。だから、彼は鞭の取っ手で十字を3つ、燃える男たちに向かって作り、こう言った。「おとなしくしていろ、フランツ、ハンス、バンツ！」すると3人が口をそろえて「Vergelt's Gott」と言ったかと思うと、消えてしまった。帰宅し、積み荷のワラを荷車から降ろしているとき、ドゥカート貨が3枚、ぽろっと落ちた。それは、男が燃える男たちを救済したことへの、3人からの礼だったのだ。

Karasek 1933

Ung. 3389

<哀れな魂>昔、Feist /Fajszの人たちは材木（薪）を売っていた。ある者が車に荷を載せて売りに出かけたが、すでに遅い時刻だった。すると、車の上に燃える男たちが乗っているではないか。男は恐ろしくなって、祈った。燃える男たちは彼の近くに寄ってきて、今度は背中に乗ってきた。男は逃げ出したら、燃える男たちは去っていった。そのうちの1人は泣いていた。男がもう少しちゃんと神に祈っていさえすれば、燃える男たちはderloesenされたのだった。

Karasek **1935**

Ung. 2714

<燃える人>畑で夜遅くまで仕事をしていると、後ろから燃える人たちに追いかけられるので、どのみち家に帰らなければならなくなる。

Karasek **1935**

Ung. 3455

<道に迷った生徒>私は土地を持っていたが、そこを使っていたのは隣人だった。彼は自己所有する土地がなく、Kreussも持たなかったので、町に行かなければならなかった。道に迷った生徒がいたので、彼は生徒に泊まるところを提供した。貧しい隣人はこう言った。「私は明日町に行かなければならないが、金がないんだ」。生徒は彼にこう答えた。明日起きて、僕についてきてください。翌朝2人が向かったのは壕だった。壕の上には燃える男がしゃがみ込んでおり、そばには大量のお金があった。燃える男は貧しい男に言った。私を恐れることはないぞ。貧しい男は金をもらい、幸せになった。

Karasek **1935**

Ung. 3509

<Feuermanner>燃える人たちは、天まで届くほど背が高く、お互いに戦っていた。だから人々は、全てが壊れてしまうのではないかと思ったほどだった。昔はそういうものたちがいた。隣人はWeingartenからきた人だが、それを見たことがあるという。

Karasek **1935**

Ung. 3548

Perwalにて、夜警が見回っているような夜遅い時刻に若者たちが牛を見張りに出かけたが、眠りこけてしまった者もいた。起きているものが歩き出すと、一隅に光が見えたので、つかもうと手を伸ばすと、若者の手に炎がかかった。あわててけそうとしたが、火は身体全体にまわり、全身火だるまになってしまった。それを見た仲間の若者たちは、一目散に逃げ出した。「燃える奴が来る！燃える奴が来る！」火だるまの青年は言った。「俺はMathesel Juriだ！」それでも若者たちは驚嘆の叫びをあげただけだった。燃える若者は1人になった。最終的に彼の父が現れて、やっと彼は助かった。

Karasek **1935**

Ung. 3580

<Stutzenscheisser>Stutzenscheisserは、追放された人々で、燃える人だった。彼らは車に乗ってきて、車の上に上がり込んできた。悪態をつけば追い払うことができた。Stutzenscheisserと呼びかけると、朝まで金縛りがとけなくなってしまった。

Karasek **1935**

Ung. 3752

<野猟>野蛮な猟師は、夜になると彷徨う連中で、「Huista-ta-ta」と叫んでいた。燃える男たちと呼ばれた。彼らのことを呼び返したりしない限りは、人に危害を与えることはなかった。

Karasek **1935**

Ung. 3778

<Wilde Jagd>彼らは呪われた連中で、燃える男たちと同一視された。昔は夜11時から12時頃、あたりを徘徊して、「Husta-ra-ta-ta!」と叫んでいた。

Karasek **1935**

Ung. 3779

<Wilde Jagd>家畜番たちが森に行ったとき、燃える男たちが森で狩りをしているのが見えた。それを見て、家畜番のあるものはこう言った。燃える男たちを真似してみようじゃないか、と。家畜番たちは燃える男たちの叫び声「Husta-ra-ta-tal!」を真似てみた。すると、燃える男たちが近づいてくるのが見えた。彼らは、人間の足を家畜番たちに向かって投げつけてきた。家畜番たちは怖くなった。しかも彼らの目の前で、爆発が起こったので、これはきっと燃える男たちだったにちがいないと彼らは考えて、山小屋に隠れた。すると燃える人が近づいてくることはなかった。家畜番たちは、もう二度と叫び声をまねたりするのはやめようと決め、そうしたら二度とこうしたことは起こらなくなった。

Karasek **1935**

Ung. 3779A

昔のはなしだが、私の祖母は水車（風車）を所有していた。その近くでは、牛やHornが口笛を吹く音が聞こえ、こんなふうに叫んでもいた。「Husti-ta-ta!」 いったいこれは何だったのだろう。今日いわれるのは、それが燃える男たちのしわざだったということだ。

Karasek **1935**

Ung. 3780

<Wilde Jagd - Feuermanner>昔こんな言い伝えがあった。仕立屋のところ（Schneidersuttn）に燃える男たちがいて、こんなふうに叫んでいた。「Ta-ta-ta, da kumm her！（こっちへ来い！）」 これは、祖父が聞かせてくれた話だ。

Karasek **1935**

Ung. 3950

ある人(Kmolla)の背中に、ある時燃える男が飛び乗った。集落の牧草地でのことだった。飛び乗られた男は、祈ることで追い払おうとしたが、うまくいかなかった。そこで罵り言葉をかけると、たちまちいなくなった。Mauneskraisでの出来事で、wauna lauda kluatのようで、とても重く、Mauneskroftを持っていて、彼は汗だくになっていた。

Karasek **1935**

Ung. 3951

<燃える男>MilbichのAinlは、よくOldoofm（Altofner Berg）に出かけた。その道中、燃える男が近づいてくるのにあったことがある。それは燃える藁束のような姿をしていて、Ainlの肩に乗ってきて、Oldoofmにつくまで降りようとしなかったが、罵り言葉をかけると、消えてしまった。（かなりなまりがきついので、意訳）

Karasek **1935**

Ung. 4517

<燃える男たち>Toni Vederにて、ある日本人（男性）にこんなことが起こった。彼はPapaから車で出発し、車上で祈り始めた。すると夥しい数の燃える男たち彼の車に乗ってきたので、馬がこれ以上引くことができなくなってしまったほどだった。男は鞭を手に取り、「Herr Gott, Kruzifizi」と呪言を唱えた。そのおかげで、燃える男たちは消え失せた。彼らはerlosenするのを待ちわびていたのだった。

Karasek **1935**

Ung. 4518

<燃える男たち>昔は、Gromには燃える男たちがたくさんいた。

Karasek **1936**

Ung. 4625

<燃える男たち>昔は燃える男たちがいた。彼らは、"verwunscheni Ingeniire"と呼ばれた。彼らは燃える棒を持ち、いろいろなところを測って回っていた。燃える棒をもって走り回ってもいた。

Karasek **1936**

Ung. 4626

<燃える男たち>Poopaや車で走っているとき、車に彼らは乗ってきた。彼らとは、燃える男たちのことだ。彼らはどんどん重くなるので、しまいには馬が引くことができなくなってしまった。御者が祈ると、燃える人の数はどんどん増えたが、罵ればたちどころに消えてしまった。

Karasek **1937**

Ung. 5356B

<燃える男たち>彼らは市場にいた。これは僕の祖父が目撃したことだ。彼らは夕方、Kisgannga am Rapurglにて、男たちと火花が上がるのを見た。人々が恐ろしいからといって祈り始めると、男たちは車に乗り込んできた。祖父の車にも乗り込んできた。車を引いていた牛は、車が重くなったので、ほとんど集落の入り口の門の前まで来ていたというのに、それ以上ひくことができなくなってしまった。祖父は罵り始めた。すると、男たちはこう言って嘆きだした。「あんたたちが俺たちを載せて門を通ってくれさえすれば、もうすこしでerlosenできたのに！」

Karasek **1937**

Ung. 5373

<燃える男たち>以前、燃える男たちを見たことがある。彼らはそこに生えているリンゴの木くらい大きかった。私が見たときは2人だった。彼らの脇を通り過ぎようと思った。彼らと私がちょうど横並びになったとき、彼らは口から火を噴いた。私は友人（女性）にしがみついた。男たちが出たのは、じめじめした湿地だった。私はそこにいる彼らを観察した。彼らはTotvasaをものともせず、Kalichofenの近くをうろうろしていた（verkommen）。

Karasek **1937**

Ung. 5376

<燃える男たち>私の父は、果物を積んだ車を引いていた。父は、燃える男たちに果物を燃やされてしまうのではないかと心配していた。燃える男たちは火を噴いたが、その火にあたっても果物は燃えなかった。

Karasek **記載なし**

Ung. 2173

<燃える男たち>昔、家畜番たちが夜11時頃動物たちを牧草地に連れて行ったときのこと。牧草地には森が隣接しており、そこから突然燃える男が1人出て来るのが見えた。男は牧草地の上で素速くとんぼ返りをしていた。さらに男は、Gojaにかかっている川を越えなければならなかった。どうやって彼が川の上に来たのか、誰にもわからなかった。さらにとんぼ返りをし続け、そして消えてしまった。この奇妙な男は、かつて一帯の農場を所有していた人物（Gutsherr）だったが、使用人たちに対して大変悪い人だったので、死後魔法にかけられてしまったのだった。

Karasek **記載なし**

Ung. 2205

<燃える男たち?>ある夜、私の父はCsarkenerの森を通って車を走らせていた。Gebetltenを過ぎたあたりで、車を進めることができなくなってしまった。車に積んでいたのは（小麦）粉だった。森のど真ん中で立ち往生しているとき、一行には口笛と歌声が聞こえてきた。音はどんどん近づいてきた。とうとう、荷車を引いた馬がそれ以上進めなくなってしまうほど、車が重くなった。一行は一斉に罵り言葉を吐きだし、見えない相手と殴り合いのけんかを始めた。「いまいましい、呪われた奴らめ、人間さまや動物に危害を加えるな」。誰かがこう言うと、どうにかふたたび車を先に進めることができるようになってきた。しかし、車は依然として重いままだった。森を抜けて初めて、馬は汗だくになりつつも普通に進むことができるようになった。

Karasek　　記載なし

Ung. 2208

<Stizenscheisser>父の下男が畑で仕事をした帰り道、彼はある男を怒鳴りつけた。というのも彼のことをとても恐れていたからだった。門に近づいたとき、下男は「Stizenscheisser!」と叫び、素速く屋根の下に走り込もうとした。しかし"Stizenscheisser"に追いつかれ、抱きすくめられてしまった。（Stizenscheisserは、人が屋根の下にいないときだけちょっかいを出すことができるので。屋根の下では彼らは無力である）。下男は即座にとてつもない痛みを感じ、3日後に死んだ。

Karasek　　記載なし

Ung. 2209

<Stizenscheisser>Stizenscheisserは、人が屋根の下にいないときだけちょっかいを出すことができた。屋根の下では彼らは無力だった。

Karasek　　記載なし

Ung. 2211

<Stizenscheisser>Seppiの父があるとき、堆肥を畑に運んでいるときのこと。彼は、"Stizenscheisser"など怖くないと言っていた。Kaiser Lorenzわきの小道を通っているとき、彼は「Stizenscheisser!」と叫んだ。その刹那、馬は一歩も進めなくなり、その場に立ち止まってしまうほど、荷車が重くなった。彼は祈り始めた。それでも車は軽くはならず、馬は汗だくなのに一向に進まなかった。しまいに彼は罵り始めた。罵り、悪しざまに叱りつけ、馬に鞭を当てた。すると、馬は、荷は重いままだったがふたたび歩み始めた。小道に入ってやっと車は軽くなったので、馬は普通に歩くことができるようになった。

Karasek　　紛失

Ung. 2221

<燃える男>あるとき燃える男が藁を積み上げたものStrohtristeの周りを走り回って、焼いてしまった。それを見ていた私たちは、怖くて暗くなるまでうちに帰ることができなかった。

Karasek　　紛失

Ung. 2242

<燃える人とGeldfeuer>これは、私が母から聞いた話だ。今から70年ほど前のことだったという。それは畑でGeldを焼いていたという。その場所は、Haidinger Breitnにあった。その火は、遠く離れたところからでも見えたが、誰も近づこうとする者はいなかった。というのも、その周りには燃える人がいると言われたからである。誰も近づかなかったら、そのうち消えてしまった。

Karasek　　紛失

Ung. 2243

<燃える人>到着が夕方になるとき、Velentzeの車屋の車には燃える人が大勢乗っていた。燃える人は、馬が引けないくらいとても重かった。

Karasek　　紛失

Ung. 2307

<Stitzenscheiserのこと>Stitzenscheiserは、火を噴く。巨木に登り、そこから火を下に向けて吐き出す。年寄りたちは、これを自ら目撃している。

Karasek　　紛失

Ung. 2307B

<Stutz'nscheiserを教皇が追放>昔はStutznscheiserがよく現れた。もっともよく出たのは、Kornyeyの牧草地Wieseだった。とくに秋、あたりが暗くなった頃よく現れた。彼らを怒らせたり、「Stutznscheiser!」と呼んだりしてはならなかった。そんなことをすれば怒り出して藁の山にのぼって座りこみ、火を排泄した。すると藁は即座に燃え始め、大損害を被った。今ではStutz'nscheiserが出ることもほとんどなくなった。というのも、ローマから教皇がやってきて、甚大な損害を与えるということで彼らを追放してくれたからだ。

Karasek　　紛失

Ung. 2307C

<StilziあるいはStitzenscheiserとBergmannl>ここからUntergallとBanhidの方向に向かったあたりには、ずぶずぶしている場所があり、そこにはしばしばStilzlscheiserが現れた。彼らがそのような名で呼ばれていたのは、怒り狂ってあたりを走り回るときには尻から火を噴いたからだった。私は、それのことを単にStilzlと呼んで不作法な呼び名をしようとしない年寄りを知っている。StilzlscheiserはBergmannlと同じくらいの大きさだが、Bergmannlよりもたちが悪かった。鉱山夫たちは、BergmannlのほうがStilzlscheiserよりもよほどいいと、よく言ったものだった。Bergmannlは人助けをすることもあったが、Stilzlscheiserは悪さをするばかりだった。何に対しても悪さをして、大きなワラの山や干し草の山に火をかけることもしばしばだった。今はStilzlscheiserに会ったり、彼について聞いたりすることはずいぶんと少なくなった。

Karasek　　紛失

Ung. 2307D

<Stutzelscheiserのこと>彼らについて、両親や祖父母の時代はよく話題に上った。しかし今では若い人たちは彼らが誰なのか知らないことも多い。彼らはほとんど姿を現さなくなった。Stutzelscheiserがよく出たのは、小川のそばのずぶずぶしているところで、Komlod方向に向かう道沿いだった。そうした場所は、昔は、Stutzellochなどとも呼ばれたほどだった。いまではそこは乾燥しているので、かつての名前で呼ばれることはなくなった。そこには以前は、夕方暗くなってきたころから夜にかけてStutzelscheiserが現れ、火を尻から噴き出していた。夜道を行く人は彼らの火を見て、あかりを持った誰かがそこにいるのだと勘違いして、道に迷わされてしまったものだった。

Karasek　　紛失

Ung. 2309

<聖夜の冒？ を咎めるシュティルツルシャイサー Stilzlscheiser)>

この話は、クリスマス頃になると本当の話だとしてエーンル (Ahnl、人名)がよく話して聞かせていたものである。

彼らのところに、あるときコッチュ (Kotsch、現Kocs)出身のハンガリー人が宿泊した。彼はビーハル (Biehall、現在名不明)とサンクティヴァン (Sanktiwan、現ピリシェンティヴァンPilisszentivan)を越えてオーフェン (Ofen、現ブダBuda)まで巡礼に行く途中だった。じつは彼は前年犯した罪を悔い改めるために巡礼に出たのだった。彼は、自分がどのような罪深き行いをしたのかについても話してくれた。

それによれば、この男は前年の待降節の時期に、屋根を葺くための木瓦づくりを始めたという。というのも、新年にかけてお金を稼ぐためだった。平日だけでなく、安息日である日曜日にも、彼は働いた。日曜だけでなく、クリスマスイヴの日中も、そして深夜ミサが行われている時間にも、彼は木瓦を作り続けた。荷車が木瓦でいっぱいになったので、新年が過ぎた頃、木瓦を売りに出た。バンヒット(Banhid、現在名不明)かガラ(Galla、現在名不明)、さもなければ、タタバーニャ、タタ(Tata、現在名不明)あたりだったら、きっと誰かが買ってくれると考えた。早朝自宅を出て、肉屋通り(Fleischhackerstrase)を通ってバンヒットに向かった。バンヒットの近くまで来たとき、馬が引けないくらい車が重くなった。何が起こったのかと、彼は車を点検して回った。すると、荷車に積まれた木瓦の上に、3人の小さな人間が座っているのが見えたではないか。それがシュティルツルシャイサーだった。男は、車から降りろ、さもないと鞭でたたき落とすぞ、とハンガリー語で怒鳴りつけた。その答えは、こうだった。彼らはズボンを降ろし、排便するときのような格好で荷車の上にしゃがみ込むと、すぐに木瓦が燃え始めた。それから3人は荷車から飛び降り、側溝を飛び越えていなくなってしまった。その際、手をたたきながらこう言い残していった。「深夜ミサの時に教会に行かずに木瓦を作っていたせいだぞ！」 火から遠ざけるために、男は車から飛び降り、馬具から馬を外してやらなければならないほどだった。火勢はたいへん強かったので、彼の荷車は、荷ごとすべて燃え尽くしてしまった。彼には、馬とともにとぼとぼと家に帰る以外なかった。荷車をなくし、木瓦をなくし、金も得られずに。

深夜ミサのときに教会に行かず仕事をしていたりすると、こんな目に遭うのだよ。

Karasek　　紛失

Ung. 2713

<燃える男たち>夜、車で移動するとき、燃える男たちが車の上に飛び乗ってきて、すると車は先に進めなくなってしまった、という話を、祖父母から聞いたことがある。

Kuhnau 1926

S.152 Nr.97a

<ブレスラウ（Breslau、現ポーランドのヴロツワフWrocław）の燃える人>18世紀当時、シュレジエン（Schlesien、現ポーランド南西部のシロンスク?lask）には、夜になるときまって出没する現れる妖怪（Gespenst）が怪し火の他にもいた。それは燃える人と呼ばれ、燃えさかる藁束のような姿をしていた。ある晩、帰宅が遅くなった村人がいた。彼が家の近くまでくると、なんと納屋の屋根に明るい火柱があがっているではないか。彼はびっくり仰天し、大声を上げながら隣人に助けを求めた。しかしまさにその刹那、ふっと火は消えてしまう。こうした出来事を経験した人は少なからずいた。別のある者はこのように言った。収穫の数日前、干し草置き場から屋外の野原の方向を見ると、収穫直前の畑が炎に包まれているのが見えた、と。しかし、この場合も、妖怪（Spuk）は通りすがるだけで人に悪さをすることはない。にもかかわらず、怪異が現れるその土地の所有者は、人々から罵倒された。というのも、強欲な開墾者（こそが怪異の正体）だと（シュレジエンでは）みなされていたからだ。生前、日々畑を耕すときに轍1本分ずつ隣の畑にずれ込み、（他人の土地を）恥知らずにも我がものとしていったような者は、死後呪われ、かつて不正に拡張した耕地に夜な夜な燃える人として戻ってくるのだと、農民たちは信じていたし、今でも信じられている。

Kuhnau 1926

S.152ff. Nr.97b

この地方では、燃える人は一般的には狐火と同じように人間に対して悪さばかりする妖怪と見なされるが、たった一度だけ善行をしたという。

ブレスラウの南西には、今ではツォプテン（Zobten）を越えてシュヴァイドニツ（Schweidnitz、現スヴィドニツァ）方面に向かう舗装道路がのびているが、18世紀にはひどい道だった。とくに、クラインブルク（Kleiburg）とクライン・リンツ（Klein-Linz）の間の村々を通る道はすさまじかった。これらの村々を通る道は不吉といわれるが、その原因は、そこを通る車屋たちの口から出た、夥しい数の悪罵が招いているのかもしれない。たとえば、シュレジエン地方の言い回しで、「すべてが呪われてしまう」という悪罵である。たった1マイル（約7.5キロメートル）の距離なのに、悪路のためときに2日もかかることもあるからだ。

ある霧のかかったじめじめと冷たい11月の晩のこと、シュヴァイドニツのある車屋が、石灰と石臼を積んだ3頭立ての荷車を3台牽いて、ブレスラウへ向かっていた。途中、この「不吉な区間」にさしかかったとき、突然、夕闇の中で何者かが彼に襲いかかってきた。彼はこれまでにそのような目にあったことはなかったが、今回ばかりは車軸までぬかるみにはまってしまった。それはまるで地面が落ち込んでしまったかのようだった。明らかにそれは夢などではなく、彼はたちの悪い霊（Geist）に出会ってしまったのだった。やがてあたりは真っ暗になり、3歩先も見えなくなってしまった。もはやこれ以上この場所にとどまることはできない、そんなことをしたら馬が死んでしまう。彼は従者を呼び、テコと巻き上げ機を使って持ち上げるよう指示した。しかしすでにあたりは真っ暗。手元が滑り、うまくいかない。これ以上何の手だてもないことを、彼らは悟った。近くの村からランタンと助けを求めるのも無理だった。というのも、彼らのうち誰も、自分たちがいったいどこにいるのか言うことができなかったからである。とうとう車屋の口から、罵り言葉が飛び出した。だがしかし、それがなんになっただろう！　彼は大声で嘆き、叫んだ。「ああ、燃える人が来てくれたらなぁ。あの、呪われた妖怪（Gespenst）が。現れて私たちを照らしてくれ！」。

従者はこの罵言に仰天した。わずか3秒後、彼らの前には燃える人がいた。まるで地面からにょきにょきと生えてきたかのように。燃える人は小さく体をゆすっており、火の粉が飛び散っていた。車屋もこれにはびっくりしたが、それでもすぐに気を取り直し、従者を呼び、遠くまで照らす明かりを用いて荷車を持ち上げるよう指示した。彼らは何も言わず、主人の言葉に従った。全員が作業に取りかかり、いくばくかの苦労の後、ようやく荷車は再び前進し始めた。誰もが押し黙ったままだったので、聞こえるのは道を行く荷車の音と、地表をざわざわと鳴る風の音ばかり。燃える人はつねに一番照らしてほしい場所に移動し、進み始めた荷車に付き従った。荷車が安全なところまでくると、燃える人は奇妙にも空高く跳び上がった。それはまるで子供が喜んでいるかのようだった。あたかも神の祝福が与えられたかのごとく、作業は早く運び、荷車はとうとう石畳の上に戻され、先に進むことができるようになった。馬の驚異的な本能も、前進を後押しした。しかし、こうなると、従者は燃える人に対しての支払いが心配になってきた。だが、主人は冷静で、馬たちも、普段は何か変わったことが起こるとすぐに脂汗を流し身震いしだすにもかかわらず、このときはまったく恐怖の色を見せていなかった。燃える人は先頭車両の前に立ちはだかり、褒美を待っていた。車屋は、いつもはぶっきらぼうな男だったが、このときばかりは気の利いたことを言った。「燃える人よ。私はあなたを罵り言葉で呼びだした。というのも、あなたがサタンの側にいると思っていたからだ。しかし、あなたはあたかも善き精霊であるかのごとく手助けしてくれた。もしかして、あなたは罪を浄めるために追放されていたのではないか。金銀はあなたには何の価値もないだろうし、実際、あげようにも持ちあわせがない。もしかして、私がこんなふうに言ったらあなたの役に立つだろうか。あなたの善き行いに対し、父なる神が、息子なる神が、三位一体なる神が報いますように。そうしてあなたが赦免に預かり、永遠の至福へと至りますように。アーメン！」。

燃える人は地面に崩れ落ち、天に向かって炎を噴き出し、静かにこう言った。「3つの聖なる名の元に、あなたに礼を言う。あなたがアーメンといってくれるまで私には禁じられていた、その名を唱えることが。もう500年間も燃えながら彷徨い続け、もはや昇天できないかと思っていた。私はかつてこの土地の騎士だったが、生前は悪人だった。すべての聖人や神父さまたちを冒涜してしまった。（中略）しかし、あなたが私を解放してくれた。神は必ずやあの世であなたに報いるだろう。（後略）

Lohmeyer 1935

S.102 Nr.161

ザール地方中部では、夜になると燃える人が出現するので人々に恐れられている。彼は炎が揺らめくような姿で、赤々と燃える肋骨をみせ、髭をたくわえ、髪をなびかせており、嵐の夜になると現れる。ある人は、燃える人は「永遠の猟師」であるという。また、彼が出現した後はたいてい火事が起こる。

Mercelbach-Pinck 1936

S.157f. Nr. 168

私の母は友人と一緒に卵を商っていた。当時はZiechがなかったので、母たちはバターと卵、そして鶏肉をSaabrickeの市場まで歩いて売りに行っていた。ある晩のこと。彼らがBerchenufに登ると、炎がチラチラしているのが見えた。こんなに近くに！驚いた彼らは、逃げようと歩き続けた。しかし、彼らが歩き出すと、火も近づいて来るではないか。そこで2人は祈りはじめた。（一文略）意を決して近づいていくと、やがて、小道に立っているのは燃える男だと言うことがわかった。いったい何が道の真ん中にいるのか、彼らには見当もつかなかったし、先に進もうかどうかも決めかねていた。そうこうしているうちに、ついに彼はSittgestelltとなった。一行が燃える男の脇を通り過ぎようとするとき目にしたのは、彼の体で肋骨が炎に包まれていて、焼き尽くすまでに燃えていたことだった。炎の熱さが、脇を行くものたちにも感じられるほどだった。橋Bliesbrueckenまできたとき、恐怖のあまり死んでしまった。90年代には、この話はスキャンダラスに語られた。

Mercelbach-Pinck 1936

S.267 Nr.280

AlstingenとSpichernの間には、昔はRuchlingenという名前の集落があった。そこのカーブのあたりには、大きな生け垣Heckeがあり、夜そばを通るといつも燃える霊Geistが目撃された。ある夜、男がSpichernまで産婆を呼びに行った。産婆は男に言った。「Michel、生け垣のところを通るときには注意しなさい。馬をしっかりつかまえておくんだよ」。「僕の馬は暴れたりしやしないさ。しかも手綱もしっかり握ってるし」。彼らが生け垣のそばまで来ると、いきなり、馬が手のつけようのないほど暴れ出し、Michelは振り落とされてしまった。じつは、夜、産婆を迎えに行った男がこうした目にあうことはこれまでにもしばしばあり、彼女はそれを知っていたのだった。

Mercelbach-Pinck 1936

S.267f. Nr.281

これは、私の兄弟に起こった話である。彼は70年の戦争にも行ったような、恐れ知らずの人だった。ある晩、Spicherから帰宅するときのこと。彼が生け垣のあたりまでくると、燃える頭が現れて、道の真ん中に居座ったので、彼は頭に向かってこういった。「おまえが悪魔なら、geh ich langs.」兄は背のたかい人だったが、帽子をかぶっていたかどうか忘れてしまっていた。髪の毛が散らばった。兄は先に進んで周囲を眺め回すと、頭はふたたび生け垣に戻っていった。家に帰ってきたときの兄Nicolasの顔は、恐怖から死人のように青ざめていた。

Mercelbach-Pinck　　1936

S.90f. Nr.54

以前私は、人がよく集まる大きな食堂Meistubbを所有していた。そこである者がこんな話をしてくれた。Bitscherwehで材木の競りが行われたある日、帰途につくのが遅くなってしまったが、仲間のひとりは用意周到にもPiffを準備していた。しかし生憎、誰もHelzelを持っていなかった。『どうやって火をつけようか？」ある者が言った。そんなとき、遠くにあかりが見えた。『あのあかりがここにあったら、Piffに火がつけられるのになぁ！」ある者が言った。言うや否や、あかりが一行の前にあるではないか。喜んでPiffに火をつけ、一行は進み始めた。しかも、光はどうやら一行と同行してくれるようだった。一行は道が明るくなったことを喜び、これで安心して酔っぱらうことが出来ると意気揚々だった。家に着くと、そこにはOnnerschderがいた。そこである者がBabbeにこう言った。『Honsnickel. このあかりをいったいどうしたらいいだろう。どうしたら立ち去ってくれるだろう」。妙案は浮かばなかった。彼らは立ちすくみ、あかりも同じように立ちすくんでいた。そこである者があかりにこう言った。『明かりよ、そろそろおまえがもといたところに帰れ」。しかし明かりは立ち去ろうとはせず、立ちすくんだままだった。そこでBabbeが明かりの廻りを一回りして、いったいこの明かりがどのようなものなのか突き止めるためじっくり眺め回した。それは、Holzgobbだった。それで彼はナイフを取り出し、木に穴を開けると、その中には硬貨をぎっしり詰めてこう言った。『もしおまえが哀れな魂だというなら、神の名の下に、おまえがもといた場所に戻れ」。すると、光は消えてしまった。この考えを思いついたBabbeに、一同は心から感謝した。

Mercelbach-Pinck　　1943

S.101 Nr.181

これは、私のBabbeが語ってくれた話だ。彼らがElsaessのWinlondに出かけたときのこと。突然fiericher Monnが現れ、車に乗ってきた。あとで見ると、彼が乗ってきたところには焼けこげた手の跡が残っていた。

Mercelbach-Pinck　　1943

S.118 Nr.216

もう一つ似たような話を知っているよ。これはある家の中で起こったことだ。少女がこういった。『燃えるLohwisch、ここに来てキスしてちょうだい」。すると彼はすでに少女の部屋の窓に手をかけていた。彼の手が当たったところは真っ黒に焼けこげてしまった。もし窓が閉まっていなかったなら、きっと彼は少女を連れ去っていってしまっただろう。そんなことになったら、どんなに恐ろしいことになっていただろう！

Mercelbach-Pinck　　1943

S.159 Nr.305

私がまだ小さかった頃、Runkelstube beim Spinnenで物語が語られるときには、Allichtの元、地べたにに座って聞き耳を立てていた。Allichtが置かれた小さな粗末な机があって、人々はその廻りに車座になった。男たちは後列に陣取り、パイプを吹かしながら聞いていた。今でも私がよく覚えているのは、ある城の話で、そのときは歌も歌った。それは、幽霊の話だった。ある古城の廻りを燃える男たちと頭のない男たちが彷徨っていた。人々はそれを恐れ、古城のそばに近寄ろうとする者はいなかったという。

Mercelbach-Pinck　　1943

S.159 Nr.306

昔は、家畜を放牧地Weideまで連れていって夜遅くまでそこにいると、よく燃える男たちが見られた。

Mercelbach-Pinck　　1943

S.177f. Nr.215

昔は、水をくみに泉まで行ったものだった。燃える男たちはそこに現れた。彼らが現れるとあたりは明るくなり、地面に落ちた待ち針を拾えるほどだった。彼らはKehtalから大挙してやってきた。数が多かったので、もみくちゃになっていた。別に私がそれを怖いとも思わなかったのは、その正体を知らなかったからだった。すると彼らが言った。『幽霊Geisterなのさ」。

Mercelbach-Pinck　　1943

S.200 Nr.403

FrankhauserのHannesが、私の祖父に向かってこう叫んだ。「Hansjosepp、こっちへ来て上に何があるか、見てみようじゃないか」。村の上の左側には幽霊が立っていて、燃える棒を手にしてお互いに殴り合っていた。実はその場所は、いつも何か出ると人々にささやかれる場所で、どこかいかがわしいところだった。それゆえ、いまもみられる十字架をそこには建てたのである。

Mercelbach-Pinck　　1943

S.251 Nr.499

Annelには、霊Geistが見えることがよくあった。彼女が言ったことは、本当に信じられないようなことだった！ある夜、彼女が窓から外を眺めていると、ちょうど向こう側がWiesntalで、そこで、燃える霊Geisterが2人、お互いに燃える棒でたたき合い、火の粉が飛び散っているのが見えた。

Mercelbach-Pinck　　1943

S.32 Nr.2

以前は、夜になると目撃されたFiermaennerがそれはそれは恐れられたものだった。兄が教えてくれたのだが、私たちの父は1809年生まれなのだが、彼はBallersteinでそいつがあちこち走り回っているのを実際に目撃したととのことだ。

Mercelbach-Pinck　　1943

S.32 Nr.3

これは、名付け親が語ってくれた話である。あるとき彼が酔っぱらってRechtalの酒場から次の店へとはしごしようと、左側の谷を越える道をとった。そのとき、Feuermannが彼に近づいてくるのが見えた。まだ一抹の冷静さは残っていたので、Feuermannに向かってこう言った。「そのくらいの距離にいて、私の通る道が見えるように照らしてくれ！」

Mercelbach-Pinck　　1943

S.44 Nr.34

Fierichi Maennerがお互いに殴り合いをしていた。それを牧人が見ていて"Uessgebeinelten" Mannのように思った。

Mercelbach-Pinck　　1943

S.45 Nr.35

若者がダンスから帰るところを、Feuriger Mannが追いかけてきた。家に手をつけたら、火事になった。

Mercelbach-Pinck　　1943

S.45 Nr.38

野原にある境界標識石を動かした者は、feuriger Mannになってさまよう。

Mercelbach-Pinck　　1943

S.62 Nr.95

これは魔女に関することではない。というのも村に魔女などいなかったからだ。昔は、追放されていたのは燃える男たちで、彼らを人々は恐ろしがり、避けた。

Mercelbach-Pinck　　1943

S.72 Nr.123

あるとき、燃える男があたりをうろついたことがある。女の子が燃える男にこう呼びかけた。「こっちへ来て、キスしてちょうだいな」。すると燃える男は少女を追いかけてきた。少女は家の扉をなんとか燃える男の鼻先でしめることが出来た。しかし扉にはくっきりと彼の手で焼けこげた跡がつき、私の両親もその焼けこげを見た。

Mercelbach-Pinck　　1943

S.91 Nr.161

昔は、春になると男たちは水を準備しに出かけたものだが、それは危険な仕事だった。というのも、fierichi Maennerが出たからである。これについて叔母は、ある者が語ってくれた話としてこんな話をしてくれた。（話の内容：燃える人が脅してきたので、人々は10m飛び上がるほど驚いた）

Petzoldt　　1970

S.159　Nr.265

<燃える人>Tirlemontの近くには、燃える人が徘徊する。普通は7歳児くらいの大きさだが、誰かが近づいてくると驚くほど大きくなる。

Peukert　　1959

S.46f. Nr.76

18歳の時、私はBagasch（御者か）と一緒にKoenigsbergに出かけた。その帰り道、Paulischから遠からぬところの牧草地Wieseに雄牛を放してしばらく休憩を取った。私が横になるとLichtmannlが3人いるのが見えた。彼らは山の上の方に集まっていて、私に「hu-hu、hu-hu」と呼びかけていた。そこで私はこう考えた。「奴らが俺を呼ぶなら、俺は奴らに口笛を吹いてやろう！」軽はずみなことに、思い立ってすぐに実行に移してしまった。彼らは5分もしないうちに私のそばにきて、明かりをかかげて私の目をじっと見つめた。3人が3人とも私の目を明かりで煌々と照らしたので、私はまぶしくて目が見えなくなってしまった。赤白い光り以外、なにも目からは感じなくなってしまった。とっさに頭にHalina（ロート）をかぶり、Lichtmannlたちの明かり攻撃から身を守った。草の上に横たわってコートをかぶっている私に、彼らは小便でもかけたのだろうか？急におぞましいほど臭くなった。その臭さに耐えきれなくなり、私は飛び起きて雄牛のところまで逃げたが、逃げながらも彼らをこう非難した。「Spitzbuberさんよ、俺がいったい何をしたってんだい？あんたらは俺を呼んだから、口笛を吹き返してやっただけじゃないか。そうだろう。あんたらが俺を放っておいてくれたなら、俺だって何もしやしなかった。なんで俺にしょんべんをひっかけるんだよ、おい。臭いったらありゃしない！」すると3人は恥じ入ってしまった。ひとりは牛をつなぐのを手伝い、ふたりめは明かりで道を照らした。3人目は車の後部によじ登り、そこで照らした。まるで最近流行の車のように。ほかの2人も移動に同行し、ひとりは先を行き、もうひとりは後ろについてきた。これで私は家まで前後に明かりを持つことが出来た。家についても、家畜小屋と物置まで彼らは照らしてくれた。この話は実話で、私の両親とキョウダイがそれを証明してくれる。

Peukert　　1959

S.47 Nr.77 I

学校の旧校舎の裏手にある庭に、Lichtmannlがよく出た。彼らは小川を上流に向かって移動していた。また、彼らに向かって口笛を吹くときには気をつけなければならなかった。というのも、彼らは、口笛を吹いた者に突進してきて飛びかかってきたからである。もし逃げ遅れれば、攻撃されて顔中傷だらけになるのは必死だったから、口笛を吹いたら急いで逃げなければならなかった。

Peukert　　1959

S.47 Nr.77 II

まだ私が小さかった頃のこと。近所に威勢のよい若者が住んでいて、彼はしょっちゅう口笛を吹いた。この日はLichtmannlに向かって口笛を吹いた。彼は町中の誰よりも足が速かったが、口笛を吹き終わるか終わらないかのうちに、Lichtmannlは彼のところにやってきたので、若者は必死で安全なところに身を隠そうと逃げた。しかし生憎近くに家がなかったので彼は干し草小屋に駆け込み、Lichtmannlに顔を傷だらけにされないよう、頭をしっかりと深くわらの中に埋めた。Lichtmannlも若者を追って干し草小屋に入ってきて、どうにか干し草から男を引っ張り出そうとした。しかし、若者がしっかりともぐっていたので、どうしようもなかった。そこでズボンを引きずりおろし、臀部に傷を負わせた。そのおかげで若者は、3日間というもの椅子に腰掛けることが出来なかった。

Peukert 1959

S.47f. Nr.78

年寄りのPaulischerたちは、Lichtmaennerlasと呼んだ。この単語は、スラヴ語のSvetli nocを借用したもので、VetternotzerlあるいはNichtlichterとも呼ばれる。私たちはスロヴァキア人の中にぽつねんと暮らしているので、彼らの単語が我々の暮らしでも使われていることがよくあり、その一つがLichtmennalaであろう。よく言われるのは、同じ物事に対して10もの異なった名前を付けるべきではない。そんなことをすれば最終的には簡単なことでもお互いに分かり合うことが出来なくなってしまうということだ。いずれにしても、我々のところではLichtmennaleasについてのお話は結構ある。老Abrahamは、あるときKirchenwaidlでそれを目撃したことがある。目撃したどころか、Lichtmennaleasは彼の後ろを追いかけてきて、ほかには誰もいないのにランタンを手にしているように見えた。次の瞬間、アブラハムは「捉まった！」と感じたので、それを3-4mの丘から下に投げ落とした。しかしそれは坂を転げ落ちただけで大事には至らず、光も消えてしまった。Jarnowaer側に行ったとき、私はLichtmennalaを目撃した。それは、まるで中くらいの大きさの樽のようにも見え、地面を転がっていた。そのときは地面をころころと転がっていって、また消えてしまった。私の叔父はSockersteinの上のHochwieser Muehlenからはるかスロヴァキアの方に行くのを一度だけ目撃した。そのとき彼はこう思ったそうだ。誰かがランタンを持って道の先を行っているのだ、と。不案内なところを歩いていたので、やっと道をたずねることが出来る人に出会って、いったい今どこにいるのか聞いて、彼は驚いた。というのも、たった一晩、3-4時間歩いただけなのに、同じ道を戻るのに3日もかかってたからである。

Peukert 1959

S.48f, Nr.79

いまから23年前のある晩、仕事を終えた私はGross-Topoltschanまで車を走らせていた。Neutraflussまできたとき、突然雄牛が立ち止まってしまった。合図をしても歩こうとはしないので、仕方なく私は車から降りると、道に仔牛ほどの大きさの巨大な黒犬が寝そべっているのが目に入った。深夜0時頃だった。犬を追い払おうと鞭や鞭の軸まで使ってみたが、少し動いただけだった。仕方がないので犬を避けて道の脇を通ろうとすると、犬は簡単に道を空けた。犬に鞭を当てている最中、私はいらいらし通しだった。というのも、日中何も飲んでいなかったからである。ビールも、シュナップスも、一口も飲んでいなかった。それが頭から離れなかった。深夜0時に、Schimjanまできたが、教会の近くで道がよく分からなくなってしまった。もどる以外、どうしようもなかった。深夜1時、遠くで夜警のラッパが聞こえた。それでやっと、今自分がどこにいるかわかった。そのとき私は野原のど真ん中にいて、道なりに進んでいくと、道沿いに女性が3人いて、（通夜の）祈りをあげていた。しかし、死者が横たえられている室内は真っ暗だった。私は恐ろしくなった。というのも、その場所には昼間は何も建物がないのを知っていたからである。それでも、自分が今どこにいるのかはわかっていたから、先に進むことは出来た。雄牛に車を引かせて、無事どうにかGross-Topoltschanまで到着した。後にスロヴァキア人から聞いたことによると、あの黒犬、そして3人の女性と部屋に横たわっていた死者は、あの場所でよく目撃されるのだという。そう、あの場所は「よく出る」場所なのだった。

Schell 1897

S.108, Nr.57

少し前まで、Blutkapelleのそばには、聖なるブナの木が生えていた。その木は、「血の木」あるいは「奇跡の木」と呼ばれ、かつてはBlutfesteのが行われるときには、巡礼者が大勢訪れたところだった。古老たちの話によると、祭りの夜、とくにクリスマスやメーデーの前夜には、そこで大きな火が焚かれたという。ドラゴンによく似た動物が、そのそばにあるという宝を見張っていたともいう。メーデーの夜だけは、宝を見張る者はなく、さながらRohlenfeuerのごとく地上にあるのが、照らし出されていた。ある農夫は、この火からとった炭をタバコのパイプに入れた。彼は家に帰ると、それが炭ではなく金のかけらになっているのを見つけた。

Schell 1897

S.127f. Nr.9

ある晩遅く、Freiheit Graefrath von Ostenの住民2人が、Duennenbroichから自分たちの村に帰る途中のこと。2人はおしゃべりに夢中になっていたが、修道院の方に目をやると、突然言葉を失った。というのも、修道院を取り巻いていた壁の向こうから、燃える男が歩み出てきたからだった。恐ろしくて、2人は立ち止まってしまった。そうこうするうちに、燃える奴は、2人の方に近づいてきた。無言のまま、2人の脇を通り過ぎ、近くの森に向かっていった。茫然自失状態の2人は、急いで家に帰った。

Schell 1897

S.158 Nr.45

夕闇が迫る頃になると、Radevormaldには奇妙な騎士が町をうろつく姿が見られる。彼は赤々と燃えており、ロバに乗っている。

Schell 1897

S.197 Nr.135

Weinbergの上にある切り通しには、Schnapsstueberに向かう道が通っており、そこには"glueentige Man"が現れて人々を驚かせた。あるときそこを大胆な男がひとりWeinbergの居酒屋から通って家路をたどっていた。突然、彼の目の前に幽霊Gespenstが現れ、彼に向かっておぞましい声でこういった。「ここで何をしている？」幽霊の激怒ぶりをみてとった男は、大慌てで逃げた。

Schell 1897

S.265, Nr.23

Odenthalの近くに、通称Zehnterwegと呼ばれる道が今でもある。この道は、しばしば鎖につながれた犬を連れた赤々と燃える男が出たことで知らる。時折、通行する者の前に毎晩出ることもあった。彼はVerwiesenerに違いないと言われた。あるとき、近隣の集落に住む女性が裕福な農家に、体を洗いに行った。帰りが遅くなるだろうとことは予想がついたので、夫に、暗くなる前に子供を迎えによこしてほしい、そうすれば、真っ暗な中あの恐ろしい場所を一人で通らなくてすむから、と頼んだ。しかし子供が戻ってこなかったので、女は仕方なく一人で帰らなければならなくなった。Zehntenwegまできたとき、例の奴らはもうそこにいて、彼女の前をずっと歩いた。その間に犬はどんどん大きくなり、しまいには馬ほどの大きさになった。女はたいそう驚いて、気絶寸前だった。しかしもう一度だけ休憩を取って、最後の力を振り絞って家路を急いだ。3日後、彼女は死んだ。

Schell 1897

S.276f. Nr.38a

真っ暗な夜移動していて、森や湿地で道に迷っても、Hermannを呼べばよい。呼ぶと彼はすぐやってきて、確かなところに来るまで旅人の前で足下を照らしてくれる。またHermannはRitternachtの頃カシワの木やナシの木の上の方にちょこんとすわって周囲を照らしているので、真っ暗な夜でも道に迷わなくてすんだ。

Schell 1897

S.276f. Nr.38b

こういう話がある。Drieschの上の方にあるFuechenという名の農場には、軽はずみな若者が何人かいて、夜になると木になっているナシを盗みとろうと木に登った。そのとき若者のうちの一人がHermannに気づき、こんな風に呼びかけた「Hermannsdueffel、ここに来て照らしてくれないかなぁ！」仲間はその呼びかけに驚いたが、明かりはすぐに男たちのところにやってきた。燃える火のような目をした毛深い熊が、猫のように高い木に登り、細い小枝にちょこんと腰掛けた。この獣は木に登っていく途中で、裸足だった若者の足指にかみつき、爪をむしり取った。若者たちのカバンはナシでいっぱいになったので、木から下りると、Hermesteufelは家の戸口までの道中を照らしてくれた。むしり取られた爪はその後ふたたび生えることはなかったが、出来た傷は全く痛くなかった。つまり、これは人々に驚くべき事態が起こったことの証に違いないと捉えられた。

Schell 1897

S.276f. Nr.38c

ある秋の日の夕方、Schlebuschの牛飼いが家畜を村に戻しているとき、牛が一頭足りないことに気づいた。あたりが暗くなってきた中、湿地近くにあるGemeindeheideまで急いでとって返すと、Hermesteufelがやってきて、いなくなった牛が見つかるまで彼の前で照らしてくれた。事件に関して牧人を尋問したOrtsversteherのNikolaus Brandは、こうした供述を記録していたという。そこで人間に似た姿をした一つ目の妖怪Spukが現れた。この妖怪は強い光を放っていたので、牧人は、街道を行く、何百歩も離れている人の服についているボタンも見分けることが出来た。Maikammerで、Duenwald近くの森で、Buhlsbuschで、旅人たちは、さながらIsholzeにいるかのごとくカシワの木の高い梢にいる人間のような姿をしたHermannが道を照らすのを目撃した。

Schell 1897

S.276f. Nr.38d

注目すべきは、こうした現象がかなり昔から報告されていることである。つまり、7世紀頃Schlebuschrathのpfarrerをしていたハイステルバッハのカエサリウスが、深夜病人の見舞いに行くとき、Isholze bei Alkenrathで同様の現象を体験したと書いているのである。そこで妖怪は光を放ちながら高いカシワの木の上にいて、森中を照らしていたという。また彼は、ある日の早朝、カシワの木の近くにそれが立っていて、木と同じくらいの背丈まで大きくなったのも見ているという。ここでPfarrerは、Hermannを悪魔だと見なした。

Schell 1897

S.279f.Nr.43

以前、（ルール地方レヴァークーゼン市近郊）シュレブッシュ（Schlebusch）にほど近い、リュッツェルバッヘ（Lutzelbache）にあるベックスヴィーゼ（Beckswiese）という名の牧草地には、赤々と燃える男がうろついていた。しばしば炎を吹き、うめき声を上げていたが、突如として夜道を歩いている者の前に出現しては、しばらくの間同道することもあった。その際、燃えている男はこんなことを呟いたものだった。「こいつをどこに置いたらいいんだ？ こいつをどこに置いたらいいんだ？ こいつをどこにやったらいいんだ？」。数年の間、そんなことが起こり続けた。多くの人がこの男に恐れをなし、その視線で病気にもなった。

ある夜、オーベンタール（Obenthal）のホーファー・マテスなる村人が帰宅するときのこと。シュレブッシュで大酒を飲んでいた彼は、リュツェルバッヘで赤々と燃える男に突然出くわした。男はいつもどおり呟いていた。マテスはステッキを強く握りしめて化け物の目を見つめた。彼は、背中に乗っている大きな境界標識石のせいで化け物（男）が喘いでいることに気付いたので、こういった。「そいつを、おまえが持ってきたところに置け！」すると化け物は「ありがとう！」と叫び、さらにこうもつけ加えた。「この答えをずっと待っていたんだ」。それきり男の姿は消え、以後再び現れることはなかった。

Schell 1897

S.304 Nr.23

ずっと昔のこと、一人の年老いた男がSpitze bei Herrenstrundenから自宅のあるBuechelerhof bei Herrenstrundenまでの道を歩いていた。彼には下男が一人同行していた。歩きながら、ふと農夫が周囲を見回すと、偶然にも、彼らの後を追ってくる赤々と燃える男が目に入った。二人は無我夢中になって家路を急いだ。どうにか赤々と燃える奴の鼻先で家の扉を閉めることができた。恐ろしくて二人は大急ぎで家に入り、おぞましい奴から逃げられたのでほっと一息ついた。

Schell 1897

S.315 Nr.44

（ケルン市近郊、ベルギッシュ・グラードバッハ付近）パフラース村とクルス農場の間の道際に、巨大な珪石の岩がある。その岩の付近には、夜になると火を吐く男がうろつきまわり、ときに村付近まで近づくという。村近くの道際には石灰石の岩がある。火を吐くその人はこの岩のそばまで来ると、もう1人の男が現れて行く手を遮る。2人の間で小競り合いが始まることも稀ではなく、そうなると火の粉が遠くまで飛び散った。

Schell **1897**

S.318 Nr.52

Bensbergの下側、Lusheideには、昔そこにRittergutes Rippinghausenがあったという痕跡を示す瓦礫がわずかに残っている。,ここの古い壁は、森の中の境界線のように残っているが、その上に、夜になると巨大な燃える人が徘徊するといわれる。彼は大きくて強そうな一つ目の犬を連れている。別の言い伝えでは、犬は二つ目だが、、燃える男は一つめで、どちらも赤々と燃える目をしているとも言われる。

Schell **1897**

S.441 Nr.41

UckerathからBennerscheidとAltenbachに向かう途中に、Heiterwald (Buchenwald)がある。そこには昔、夜になると小さな燃える人が現れた。彼らが地中の穴からはい出してきたのは、たいていは黄昏時、しかも秋が一番多かった。しかし人間が近づくと、すぐに逃げてしまった。あるとき、小さな燃える人が、ひとりの男をからかおうと思って追いかけた。小さな人は子供ほどの大きさで、大きな目をしており、彼の胴着(Waenschen)には錫製の皿くらいの大きさのボタンが付いていた。男は結局小さな人から逃げることが出来た。

Schell **1897**

S.561 Nr.42

(ルール地方の)レーンドルファータール(Rhondorfer Thal)には、在任中に誠実でなかった役人が、死後燃える人として彷徨っているという言い伝えがある。今では、(その生前とは逆に、)地元の人々が彼の主人となっている。(たとえば、)人が山道を歩くときには、燃える人がその足元を照らさなければならず、彼らのタバコに火をつけなければならない。

Schell **1922**

S.101 Nr.288

1830年代まで、Holterhoefchensは背の高いカシワの木があった。その木の下は、いつも不気味で、たとえば永遠の猟師が狩りをする音がいつでも聞こえた。またそこには、自分の頭を小脇に抱えた「燃えるKettenmann」も現れ、夜道を旅する者を怖がらせた。しかも、長いガウンを纏った高貴な女性(の幽霊)も徘徊することで知られていた。

Schell **1922**

S.436 Nr.1113

在任中、職務をこなすにあたって良心的ではなく、Erzstiftの臣民を苦しめたケルン選帝候のある大臣は、死後、燃える人となってRhoendorfer Talを徘徊しているという。かつて彼が統治した人々こそが、今は彼の主人なので、たとえば山道を行く人々の道を照らしてやらなければならない。また、大胆な者は、燃える人となったかつての役人に、パイプに火をつけさせたりもする。

Schell **1922**

S.445f. Nr.1142

夜遅くなると、Ittenbachのそばにはよく赤々と燃える男たちが現れた。あるとき数人の人たちが男に近づくと、男たちはフルートを吹いていた。その音色に聞き惚れ、中のある者が男に近づいていって、同じようにフルートを吹き始めた。その男に、赤々と燃える男たちのうちの一人が、何が望みなのか、と聞いた。男は別に他意はなく、冷やかし半分だったことに気づき、そう告げると、燃える男は、こんなに近づかない方がよい、さもないと不愉快に思う仲間もいるかもしれないと忠告した。その瞬間、忠告してくれた赤々と燃える男は、空中にかき消えてしまった。この赤々と燃える男は、煉獄にいる、流浪する霊Geisterだといわれている。彼らに尋ねる勇気さえあれば、あと何年こうして放浪しなければならないのか、聞くことが出来る。また、赤々と燃える男は、(複数ではなく)1人だけだったという報告もある。

Schell **1922**

S.449 Nr.1156

Agidienberg近くの森に、"Hamisch"と呼ばれるところがある。そこにある十字路には、十字架が立っており、このそばには夜12時頃になるとしばしば赤々と燃える男が現れる。心臓が強い者でないと無理だが、彼を探して願をかければ、何でもかなえてくれる。ただし、その代償として、願をかけた人は赤々と燃える男に所有されることになる。

Schmitz **1858**

S.104

Deudesfeldのある騎士は、従者を引き連れてよくMalberg城に出かけた。その道中、当時は"Erlesbueren"と呼ばれ、いまではSt.Thomasと呼ばれる場所を越えていった。じつはここの壁の内側には、女性たちが幽閉されていた。中には、彼女たちが誰に祈りを捧げているのかを示す、絵が飾られていた。騎士が彼女たちの元を訪れたのは、倫理にもとる目的のためであった。ある晩遅く、騎士は女性たちのいる場所を出発して、「石の十字架」そばにある、沼が2つ並んでいる場所にきたとき、燃える人影が、大音響をとどろかせながら現れ、騎士に近づいてきた。なんとか気を取り直して、騎士はこう聞いた。「俺にどうしろというんだ？」すると、「悪いことはやめろ。さもないと命がなくなるぞ」。燃える人影はそう答えた。騎士は改悛し、修道院を「Erlesbueren」に設立することを約束し、実行した。

Schonwerth **1858**

S.159f. Nr.21

Burg bey Haugsdorfの魔法にかけられた騎士は、Wilde Jagdに入っていることもある。騎士は、Wilde Jagdと一緒に哀れな魂を追いまわす。しばしば彼は燃える男たちの群れの先頭に立ち、Haugsdorfのまでやってきた。あるとき、近くの森で2人の木樵が仕事をしているときのこと。1人が、Wilde Jagdが近づいてくるのが聞こえると仲間に告げた。しかし、仲間には何も聞こえなかった。そこで、聞こえる男は聞こえない男が、日曜日に生まれた幸運の持ち主だったことを思い出し、立ち上がらせると、彼にも聞こえるようになった。

Schonwerth **1858**

S.399f.

<Schwarzenburg>Schwurzelburg、Schwarzenwurberg、schwarze BurbergとよばれることもあるSchwarzenbergは、RotzとTbannsteinのあいだの大きな尾根のことをさすが、ここは霊Geisterがたまるところとして知られており、たとえばスウェーデン人に破壊された城に住んでいた者や、落ち着かない霊Geisterなどがいる。というのも、Waldmunchenのふもとあたりには湿地があって、そこは、地域一帯の悪い霊Geisterが、追放されてやってきたり、運び込まれているからだ。またそこには小さな光Lichtleinがたくさんあつまっていて、ぴょんぴょん跳び回っている。これほど悪名の高い廃城は周辺には他になかった。夜個々を越えようとすると、決まって道に迷った。昼間でもけっして安心できなかった。たとえばある木樵が12時にこの場所の近くを通りかかり、Steinwurfeをぬけようとすると、頭の上の方かから、挨拶する声が聞こえてきたという。そこにあらわれるのは、たとえば、火を吹きながら燃える男たちや、白い乙女などの白い霊Weisse Geister、騎士、頭部のない犬などの地獄の動物だ。また、霊たちが山の中の工房でハンマーを手にして石を打っている音も聞こえる。あるいは音楽を奏でたり、訳のわからない言葉で話している声もする。6頭の黒馬にひかれた古い馬車が山を登っていくこともある。馬車の中には猟師の格好をした男がいる。

Schonwerth **1858**

S.89 Cap.15 Abs.1

燃える霊Feuergeisterという呼び名は、彼らが燃えさかるヴェールに包まれていて、照らすことに由来する。たいていの場合彼らは哀れな魂で、罰として徘徊し、いつか誰かが（人間が）救済してくれるのを待ちわびているのである。

Schonwerth 1858

S.89 Cap.15 Abs.2
彼らの中には、気質のよいものと悪いものがいるが、それは、彼らがどのように扱われるかによって変わる。ほかの冥界のものたちと同じように、彼らは人間に奉仕するが、そのやり方は独特である。彼らは報酬を求め、もしそれを拒めばひどく復讐するのである。夜道を行く旅人を照らすというのが、彼らの奉仕作業だ。この際とくに問題になるのは、彼らが報酬として求める黒いニワトリである。黒いニワトリは、冥府の女神ヘルTodesgottin Helの動物だ。

Schonwerth 1858

S.89f. Cap.15 Abs.3
一般的に燃える男たちは、異教のHeidentum霊Geister、たとえば悪魔Teufelと同様、大きさを自由に変えることが出来るといわれる。しかし民衆は、悪魔と燃える男たちは全く別だときっかり区別する。燃える男の亜種とされるLandsknechtも悪魔ではない。また、怪し火と燃える男も区別される。つまり、怪し火は燃える男の小さいものではない、というのである。両者をわけるのは大きさだけではない。怪し火が群れをなして踊っているところから妖精（Elben）に近いのに対し、不気味にも燃える男の背中には、境界表示を動かすという罪を犯したがゆえにえぐり取られたのだろうか、ぱっくりとあいた大きな穴がある。

Schonwerth 1858

S.90 Cap.16-1 Abs.1
<燃える男たちについて>彼らは妖怪じみており、geisterhafter Wesen、人間と同じような背格好で、民衆と同じような服装をしている。口から火が噴き出しているので、周囲はこうこうと明るく照らされる。彼らは、

Schonwerth 1858

S.90 Cap.16-1 Abs.2a
燃える男たちは、実直な普通の男と同じくらいの大きさをしている。

Schonwerth 1858

S.90 Cap.16-1 Abs.2b
燃える男たちは、矮人Zwergと似ている

Schonwerth 1858

S.90 Cap.16-1 Abs.2c
森の木と似ていて、全身で照らす。

Schonwerth 1858

S.90 Cap.16-1 Abs.3
最初は小さく、だんだん大きくなっていく。

Schonwerth 1858

S.90 Cap.16-1 Abs.4a
背中にくぼみがある（Ihr Rucken ist ausgehohlt wie eine Mulde）。

Schonwerth 1858

S.90 Cap.16-1 Abs.4b
パン焼き職人が使うこね鉢を2つあわせたような姿をしている。

Schonwerth 1858

S.90 Cap.16-1 Abs.4c
Backmuldeのような形をしている。

Schonwerth 1858

S.90 Cap.16-1 Abs.4d
一部は、手に火のついたたいまつを持っている。

Schonwerth 1858

S.91 Cap.16-1 Abs.5a
燃える男は、単独で出ることもあるが、数人一緒に出ることもある。

Schonwerth 1858

S.91 Cap.16-1 Abs.5b
燃える人同士が衝突すると、火が飛び散る。

Schonwerth 1858

S.91 Cap.16-1 Abs.5c
彼らが身体を揺さぶると、体中から火の粉が飛び散る。

Schonwerth 1858

S.91 Cap.16-1 Abs.5d
彼らが良く出るのは、晩秋と冬の聖なる期間（おそらくは、待降節およびクリスマス週間）で、晩から夜が多い。しかし、感情を害すると、昼間でも出る場合がある。

Schonwerth 1858

S.91 Cap.16-1 Abs.6
出没するのは、牧草地や野原、木の中、湿地、水辺が多いが、ごくまれには道や十字路などに出ることもある。集落の中を徘徊することはなく、いつも同じあたりに出没する。

Schonwerth 1858

S.91 Cap.16-2 Abs.1a
燃える男たちは、（生きている間に境界標識石を動かしたために苦しみに耐えなければならない哀れな魂。

Schonwerth 1858

S.91 Cap.16-2 Abs.1b
境界標識石をずらすと、死後、燃える男として徘徊しなければならない。罰として、自分がずらした境界標識石を担ぎながら、このように言っている。「こいつをどこにおいたらいいんだ？」

Schonwerth 1858

S.91 Cap.16-2 Abs.2
燃える男たちは、誰か生きているものが「おまえが持ってきたところに戻せ！」と言ってくれるまで、昇天できない。また、彼らがなぜ現れるのかというと、人間によるerlosenを求めるからだ。上記のような言葉を言ってくれたり、あるいは祈りの言葉がほしいからである。

Schonwerth 1858

S.91 Cap.16-3
以前はよく出たので、農夫ならば誰でも一度は見たことがあった。最近ではめっきり少なくなったけれど、話だけは今でもよく聞かれる。農夫によれば、燃える男たちは、他の霊Geisterたちと同様に教皇から追放を受けたものたちなのだという。

Schonwerth 1858

S.91f Cap.16-4 Abs.1
燃える男たちには、性質のよいものと悪いものがあるが、おおむね、彼らを怖がる必要はない。人間の方から燃える男をからかったりしなければ、彼らの方から人間に危害を加えることはない。というよりも、じつは彼らは世話好きである。彼らは、呼んだり頼んだりすれば現れて、わずかな報酬で夜道を照らしてくれる。彼らは人間の2歩前を歩き、家の戸口まで同行する。しかし、道中では、決して、しゃべてはいけない。また、家にはいるときには後ろ向きに家に入らなければならない。

Schonwerth 1858

S.92 Cap.16-4 Abs.2a
ただし、彼らがかいがいしく尽くすのは、報酬目当てである。仕事が終わると、彼らにはしかるべき報酬を渡さなければならない。さもないと、道に迷わされるvon ihnen in den Luften davon gefuhrt。

Schonwerth 1858

S.92 Cap.16-4 Abs.2b
または、家に火をかけられる。

Schonwerth 1858

S.92 Cap.16-4 Abs.3a
報酬に対して彼らが求めるのは、たいへん慎ましいものでしかない。パンくずを3つとか、小麦粉でよい。

Schonwerth 1858

S.92 Cap.16-4 Abs.3b
あるいは、銀のペニヒ硬貨、黒いタバコ。

Schonwerth 1858

S.92 Cap.16-4 Abs.3c
あるいは、パン1個、木片1かけ。

Schonwerth 1858

S.92 Cap.16-4 Abs.3d
あるいは、黒いペニヒ硬貨。

Schonwerth 1858

S.92f Cap.16-4 Abs.4a
慎重でありたいならば、彼らに報酬を渡すのは家に入ってからにした方がよい。彼らは窓の外でしばらく報酬を待っている。

Schonwerth 1858

S.92f Cap.16-4 Abs.4b
丁寧にしたいのであれば、報酬を彼らの足下に投げつけるのではなく、皿に載せて渡した方がよい。

Schonwerth 1858

S.92f Cap.16-4 Abs.4c
彼らの手は人間にはみえないが、それでも差し出された報酬はなくなる。

Schonwerth 1858

S.92f Cap.16-4 Abs.4d
受け取ると、彼らは身を震わせるので、火の粉が飛び散る。

Schonwerth 1858

S.93 Cap.16-4 Abs.5a

報酬を泉／井戸Brunnenに投げ込むと、彼らはそれを拾おうとして（水に入る）ので、水はシュウシュウと音を立てて、ゴボゴボと泡立つ。

Schonwerth 1858

S.93 Cap.16-4 Abs.5b

燃える人に一番よく会うのは、酔っぱらいである。

Schonwerth 1858

S.93 Cap.16-5 Abs.1a

もし燃える人と出会ってしまったら、逃げ出してはいけない。そんなことをすれば背中に乗ってきて、あちこち引き回す。

Schonwerth 1858

S.93 Cap.16-5 Abs.1b

また、燃える人の後をつけていってもいけない。そんなことをすれば、道に迷わされて沼地や水辺に連れ込まれてしまう。

Schonwerth 1858

S.93 Cap.16-5 Abs.2a

燃える人は自発的に人間についてくる。それゆえ、とりあえずついてこさせた方がよい。もしも追い払いたいときには、1ペニヒ硬貨を近くの水に投げ込めばよい。彼らはそれを追って水に飛び込み、消えてしまう。

Schonwerth 1858

S.93 Cap.16-5 Abs.2b

罵れば消え、祈りは彼らを引きつける。燃える人は、罵られると罵った人を道に迷わせて（原文では悪しき道に引き込んで）満足する。

Schonwerth 1858

S.93 Cap.16-6 Abs.1

悪罵や侮蔑の言葉をかけられると、燃える人は気分を害し、仕返ししとしてAufhugelnしたり道に迷わせたりする。悪罵にあたるのは、たとえばGeltenscheisser（Gelteのくそったれ）である。Gelteとは、小さな"Schopfa"のことで、Schopfaとは、木でできた水やミルクをくむためのひしゃくを指す。

Schonwerth 1858

S.93f Cap.16-6 Abs.2

道に迷わされたと思ったら、着ている衣服の一部、たとえば袖、帽子、頭巾などを裏返しにしないと元の道には戻れない。

Schonwerth 1858

S.94 Cap.16-6 Abs.3

燃える人が背中に乗ってき手も、追い払うことは出来ず、彼が自分で降りるか消えてしまうまで乗せたままにしておかなければならない。

Schonwerth 1858

S.94 Cap.16-6 Abs.4

彼らはよく車に乗ってきて、乗せたまま走らせる。

Schonwerth 1858

S.94 Nr.1

語り手はLixentoseringに住んでおり、彼女の従兄弟は、居酒屋から帰るときにはいつも燃える男が道を照らしてくれたと言っている。燃える男は、見返りを何もほしがらなかった。しかしあるとき従兄弟が家の戸口の前でくしゃみをするしたときがあった。燃える男は従兄弟に「Helf Gott!（お大事に）」と言った。従兄弟はそれに、「Gelts Gott!（ありがとう）」と答えた。すると、燃える男は「これでやっと俺は救われた。もう二度と道を照らすことはないよ」と言った。

Schonwerth 1858

S.94 Nr.2

家から燃える人が出てくるのを目撃した少女Dirnもいた。彼女が「ゲルテンシャイサー（Geltenscheisser）！」と男を呼ぶと、燃える男すぐには現れた。家にもたれかかりながら、その身を震えさせ、火の粉を振りまいていた。彼はパンを一切れもらうまでは、その場から消えようとはしなかった。

Schonwerth 1858

S.94f. Nr.3

以前は、Roslarnのあたりで燃える男を見かける者がいた。何時間も湿地をうろつき、彼が体を揺すると火の粉が辺り一面に飛び散った。また、あるときには、湿地の中央にある泉にとどまったりもした。その大きさは8フィート以上はあった。遠くからも彼を一目見ようと、人々が集まってきた。

Schonwerth 1858

S.95 f. Nr.7

Oberviectachの農夫は、夕方、粉挽き小屋から家に帰るときにはいつも燃える男に家路を照らしてもらった。そのお礼として、農夫はひとかたまりのパンをやった。あるとき、農夫が二輪車に乗っていたら、また燃える男がやってきたが、このときばかりは農夫はこういった。「来るな。俺が燃えちまうよ」。

Schonwerth 1858

S.95 Nr.4

ある者が、燃える男に家路を照らしてもらったが、何も報酬を与えなかった。すると燃える男は家の壁にもたれかかり、家の中に向かってこう叫んだ。「俺の3ペニヒ、そうでなけりゃ黒い雌鳥、さもないと家に火をつけるぞ」。こういわれて、家の者たちは、家の外にいる男に、黒い雌鳥を投げ与えた。

Schonwerth 1858

S.95 Nr.5

Bayerforst bey Bruckには、Luderwieseと呼ばれる牧草地がある。そこには、かつて燃える男たちが大挙して出没した。夜になると、誰でも彼らの姿を見ることができた。この間の戦争のとき、ロシア人が彼らの中に入っていこうとした。燃える男たちのうちの2人が彼を中央まで導いた。翌朝、彼の焼死体が発見された。

Schonwerth 1858

S.95 Nr.6

Hansenriedでのこと。農家の下男Knechtが納屋の裏手を歩いているとき、牧草地に燃える男がいるのが見えた。下男は男を罵った。悪罵を言い終わるか終わらないかのうちに、男は下男の背中に跳び乗ってきた。下男は、その後1時間も男を乗せたまま歩き続けなければならなかった。そのせいで下男は病気になってしまった。後に彼はこう告白している。私はやけどはしなかったが、男は、それはもう重かった、と。

Schonwerth 1858

S.96 f. Nr.9

語り手の祖先（曾祖父か）は炭焼きで、RanahofからHammer Loidersdorf bey Ensdorfまで燃える男によく照らしてもらったという。聖週間だったのだが、森の中で炭焼きの仕事場に燃える男が現れた。男は体を揺り動かしたので、火の粉が飛び散った。燃える男に炭焼きは「ちょっとまて、道を照らしてはもらえんかね」と言って、報酬として男の足下に3ヘラーを投げつけた。3ヘラーだったのは、奇数でないといけなかったからだった。燃える男は、家までずっと照らしてくれた。炭焼きは、燃える男に冗談を言ったり、ときには悪罵をあびせたりすることもできた。たとえば、「Geltenscheisser」や「Blecharsch」といった言葉だ。しかし悪罵を浴びせると、燃える男は炭焼きの背に乗ってきた。燃える男は、この世界すべてを背負っているかのように重かった。聖なる名前を唱えれば、燃える男はいなくなった。燃える男は、前から見ると人間の姿だったが、背面はausgemoltertだった。彼の顔と体は黒く、目は炎のように燃えていた。身なりはきちんとしていて、肩章とズボンは同じ布地で、頭にはつばのついた帽子をかぶっていた。また、天高くまで大きくなることもでき、逆に、聖夜にはWeichselbaumに跳び乗るために、とても小さくなった。

Schonwerth 1858

S.96 Nr.8

Ihrer SechseがLengenfeld bey Welburgに向かっているとき、彼らはかなり酒に酔っていた。彼らが沼地Weiherについたとき、下の方に明かりがついているのが見えた。彼らはそれに向かってこう叫んだ。「こっちへあがってきて、俺たちを照らしてくれ」。するとすぐさま彼らの脇には背の高い精気のないgraue男が立っていて、彼は手から明るく照らした。

Schonwerth 1858

S.97 Nr.1

燃える男たちのことをLandsknechteと呼ぶ場所もあった。とくに、上の方、ボヘミア森やBarnauからNeustadtとWaldthurnのあたりがそうだ。彼らは暗い夜に現れては、森のそばにしばらくとどまる。旅人がそこまで来ると、その数歩後ろについて家まで照らしてくれる。時に大きくなったり小さくなったり。気をつけなくてはいけないのは、彼らに向かって汚い言葉や悪罵をかけたり、叱ったりしてはならないという点である。それをしてしまうと、彼らは消えてしまう。道を照らしてくれた礼としては、パンを3つ、3ペニヒまたは3ヘラーをやればよい。Neustadt。しかし一部、人を惑わすものもいる。Barnau。昔はもっとたくさんいた。O.Bernried。彼らが現れるところにはよいことがある。Neustadt。

Schonwerth 1858

S.97 Nr.2

ある少年が粉挽き小屋から家に帰る途中、Landsmannを見かけた。恐ろしくなって逃げ出した。

Schonwerth 1858

S.98 Nr.3

Bergnersreutには、たいまつのようなものがでることがある。もしも照らしてほしいときには、こういうとよい。「He, Landsmann, bal raub, bal blau, bist bal durt, bal dau, leucht ma ham, kraygst a Knodl oder an Silbarpfennig」（Landsmann、出てこい、出てきて家路を照らしてくれ。照らしてくれたらパンか銀貨を1枚やるぞ）。仕事が終わると、彼は窓のところで報酬を待っている。と言うのも、彼は家の中に入れてもらえないからだ。もし報酬をやるのを拒めば、彼は家に火をつける。照らしている最中、彼はまるでパンをこねる桶Backmuldeのような姿をしている。

Schonwerth 1859

S.156 Nr.14

森の中で、木がざわざわ言うのが聞こえ、人を惑わせる。迷った人のところに、黒い、熊のように毛むくじゃらで、燃える目をした年をとったこびとが近づいてきて、仁王立ちになり、しまいには空中にそびえ立って、消えてしまう。

Schonwerth 1859

S.182 Abs.2

背中がBackmuldeのように見えるFeuriger Mannが出没。理由：Ackergranzeを動かしたから、あるいは搾乳した乳を入れる容器を清潔に保っていなかったから。

Schonwerth o.J.

S.58f.

怪し火と燃える人が、どのような存在Wesenなのかについての説明。燃える人には罵り言葉をかけてはいけない。罵り言葉：Geltenscheisser!Gelteとは、木製の桶で、取っ手が垂直についているもの。水やミルクに使う（1段落、Schonwerth, Oberpf.II, 10と同じ）その他、一般的な説明）

Schonwerth/ Winkler o.J.

S.59

粉ひきのゲゼレが村まで粉を運ぶときにfeuriger Mannが近づいてきて、足にやけどをさせた。Hoass Teufel!と叫ぶと消えた。

Schonwerth/ Winkler o.J.

S.59

肉屋が夜、帰宅途中のこと。山の上で15のfeurige Landsknechteを見た。「一人来て、道を照らしてくれないかなぁ」と思うやいなや、そこに一人いた。家まで照らしてくれたので、1Kreuzerを与えると、消えた。

Schonwerth/ Winkler o.J.

S.59f.

<さまよう光>これは、誰かが語って聞かせてくれた話だ。今からおよそ8年ほど前のクリスマスイヴ、私はDietfurtからHallerhausenに向かってSchweinstechenするために歩いていた。Griesstettenの上にある山を歩いているとき、Dietfurtで早朝6時の鐘が鳴るのが聞こえたので、私はDietfurtの方向に目をやった。するとそのとき、突然、救貧院から弱い光がもれているのが見えた。この光は道の上をミュールバッハに向かって移動し始めた。見ているうちに、どんどん光は強くなり、Wolfsbergの方向に動いていった。Wolfsbergにつくと、ふたたび戻り始め、行きよりも速いスピードで元の場所に戻っていった。この光は、暗闇の中で5回往復した。雪も積もっていたので、怪し火であったとは考えられない。光は、上から下に向かって降りてきたので、Schafbergと俗に呼ばれる丘を越えてくるのかとも思えた。光は最終的に、Schafbergで消えたが、その前に、光から強い煙が80フィートもの高さまで立ち上った。私は主の祈りを捧げ、仕事に出かけた。仕事が終わって帰宅するときは、すでに夜になっていた。明かりを持って行った方がよいと勧められたが、早飛脚Schnelllauferが照らしてくれるから必要ないと答えた。しかし、そこの人たちは、そんなことは言わずに明かりを持って行った方がよいと言って、私に1つ持たせた。往路で出来事を目撃したのと同じところにきたとき、重い積み荷を積んだ車が私の後ろを走っているような音がしてきた。それを避けようと思い、道の脇によけたが、背後には何もなかった。石か何かが荷車から落ちてはいないかと、切り通しに戻ってみたが、何も見つからなかった。

Storch 1958

S.41f. Nr.102-106

燃える男たちは哀れな魂で、夜道を照らしてくれる。彼らへの報酬は、「Vergelt's Gott!」の言葉か、または半クロイツァーでよい。パンを何個かやることもある。

Storch 1958

S.41f. Nr.102-106

Techlowitzの女中が、一袋の穀物を挽いてもらうためにNeumuhleまでやってきた。粉挽き場が込んでいたので、彼女は順番が来るまで長いこと待たなければならなかった。ひきおわったときにはすでに日が暮れかかっており、暗い中を帰らなければならなかった。彼女は怖くなり、ため息をついてこういった。『無事に家まで帰れますように！』。"Schossel"のあたりにさしかかったとき、突然、彼女の目の前を、燃える男が行くのが見えた。彼女が速く歩けば彼も速く、ゆっくり歩けばゆっくり歩いた。道中2人は一言も言葉を交わさなかった。村の入り口にあるケシュパガッセ（Kaschpegasse）まで来ると、燃える男は立ち止まり、とうとう女中に声をかけた。『家路を照らした礼に、俺は何をもらえるのかな？』。女中のポケットには1クロイツァーも入っていなかったので、彼女は申し訳なさそうにこう答えた。『何ももっていないから、これしかいってあげられないわ。神のお恵みがありますように（"Vagelt's Gott!"）、って』。『やれやれ！（"Gott sei Dank!"）』。もえる同伴者はこう続けた。『これで救われた！』。

Storch 1958

S.41f. Nr.102-106

粉挽き場が住処である下男Muhlknechtが、ある日の晩おそくに家路についていた。あたりは真っ暗で、しかも悪路とあって、彼は怯えていた。すると突然下男の目の前に、男が現れた。現れた男は、1歩歩くごとに喉から炎を吹き出していた。尋常ならざる同行者が道を煌々と照らしてくれたので、馬が道を逸れることなく粉挽き場（Muhle）まで到着することができた。下男が男に報酬についてたずねても、照らした男は黙って首を横に振るばかり。そこで下男はこういった。『それなら、こう言いましょう。神のお恵みがありますように！って』。『この言葉を俺はずっとずっと待っていたんだ』。男は嬉しそうにこう答えて、消えた。

Storch 1958

S.41f. Nr.102-106

シェーンタールの仕立屋が仕上がった服をお得意さまのところに届けるのは、その日の仕事を終えたあとにするのが常だった。だからしばしば帰宅が夜遅くなることがあった。真っ暗な時には、燃えさかる男が家路を照らしてくれた。別れ際、仕立屋は男にいつも半クロイツァーをやっていた。ある時仕立屋はいつものように男に報酬をやろうとしたが、ポケットの中にはなにもなかった。彼はこういって許しを乞うた。『今日は残念ながら、金を持ってくるのを忘れてしまった。だから、神の祝福がありますように（どうもありがとう）』の言葉だけで満足してもらわないといけない』。『それが一番いい』と燃えさかる男は答え、『この言葉で私は解き放たれる』。この晩以来、照らしてくれる男を仕立屋が見ることはなくなった。

Storch 1958

S.43 Nr.108

ピルゼンPilsenとEgerを結ぶ街道Kaiserstrasseは、1820年代まではMiesからKscheutzer Hoheを越えてTechlowitzのあたりまで延びていた。それが今では山道となってしまい、人々は古道と呼ぶ。あるどんよりとした秋の日のこと。今はなき私の主人が、Miesにある納屋Schuttbodenに穀物を配達する際、仕事が遅れて暗くなってしまった。雄牛と並んで歩いていたが、突然あたりが明るくなった。気づくと燃える男が車のSchusskellerに腰掛けているではないか。そのおかげで周囲を見ることが出来るようになったのだが、彼は燃える男が怖くて仕方がなかった。それで彼は何度も帽子を深々と被りなおした。村の入り口まで来たとき燃える男は車から降りたので、主人はようやくほっと安堵して思わずこう口にした。『あぁ、1000回ありがとう！だ』 その刹那、燃える男にびんたを食らわされ、聴力と視力を失ってしまった。燃える男はこう叫んだ。『1000回でどうしろっていうんだ！1回でよかったんだよ。これでまた最初からやりなおさなけりゃならなくなったじゃないか』。

Temme **1840**

S.279 Nr.237

StettinとUefermuendeのあいだいは、Seegrunder湖がある。ここには火の王と呼ばれる、Feuermoenig野蛮な幽霊Gespenstが棲息している。それが現れるたびに嵐が巻き起こり、それを乗せた小舟は、突然、湖の波間に現れるという。頭には燃える王冠を戴き、燃える甲冑に身を包み、手には赤々と燃える剣、肩には血のように赤いマントを羽織っている。それは頻繁に現れたが、それに近づくのは危険ともいわれた。あるとき、ひとりの漁夫が仲間の制止を振り切って、無謀にもFeuerkoenigに、なぜ、嵐の前触れとして頻繁に現れるのか質問しようとして近づいていった。しかし翌朝、自分の小舟の中で死んでいる漁夫の姿が発見された。

Temme **1840**

S.279-281 Nr.238

SwineとDievenowの間の浜は、昔から不気味なところで、奇怪な物影を見た者も多かった。1500年頃のこと。Vegislafv公の役人のJurgen KleistはUsedemの役場での任を命じられ、現地入りするためにSwineを通ることになった。あるとき彼が夜その場所を車で走ってSwineからDievenowまで戻ろうとしたとき、そこには実に奇妙なことが彼の身に降りかかった。空が突然真っ暗になり、いきなりあたりは夜のよう。星も人も、何もかも全く見えなくなってしまった。Jurgen Kleistとその従者は、どこに向かって走ったらよいのか全く分からなくなってしまったのである。すると、どこからかいきなりこういう声が聞こえてきた。「こっちへ来い、こっちへ来い！」呼び声につられ従者はそちらに向かおうとしたが、役人はそれを引き留めた。というのも、夜になると悪魔的な幽霊 Teufelsgespenst がうようよすることを知っていたからである。それで役人は、来た道を戻れと命令した。そうこうするうちに、「こっちへ来い、こっちへ来い！」の声はどんどん激しくなった。一向に彼らがその声に従わなかったので、しびれを切らしたのか、燃えるマントを羽織っただけの、裸の燃える男が近づいてきた。男は、一行が乗った車に向かってきて、背もたれにつかみかかり、車に並んで歩き始めた。男は無言のままJurgen Kleistをじっと見つめ続け、時折燃えるマントをはだけた。すると彼の身体が垣間見え、それは、地獄の炎のようだった。幽霊は走りながらどんどん大きくなっていき、しまいには頭が天にまで到達した。男には、誰も一言もかけなかったので、彼は車から離れ、マントを完全にたくし上げた。大きな炎が巻き起こり、それはさながら燃えるWeilerのようだった。低い声で、しかしはっきりとした声でぶつぶつつぶやき、そして彼は消えた。Jurgen Kleistとその従者は、心底驚き、普通の状態まで回復するまでにはその後数日を要した。車の脇にいた犬は、この幽霊を恐れて車輪の間にもぐり込んで、死んでしまうのではないかと思わせるほど、うなったり、くんくんいったりしていた。こんな目にあったのは、彼が煉獄を信じようとしなかったからで、改心させようとして神は霊Geistを役人のところに送ったのだのではないかと人々は噂した。あるいは、地方の住民に高い年貢を課したため、その警告だったという人もいる。

Temme **1840**

S.279-281 Nr.238

また他の話もある。これはJacob Flemmingという名の別の貴族が同じ場所で体験したことである。あるときのこと、彼も真っ暗な夜、SwineとDievenowの間の浜に沿って移動していた。すると突然、鞭が下男たちに火をつけようとしだした。彼らが火を払い落とすと、火はJacob Flemmingが乗っている車の中に入ってきて、あちこち動き回った。車の前席にいた少年はそれに驚き、車の外に落ちてしまった。それと同じ瞬間、大きな火の玉が車の下に落下し、下男たちはそれを一突きにしようとしたので、かわいそうな少年は、あわや仲間に刺されてしまうところだった。すんでの所で叫び声を上げたので、大事には至らなかった。この出来事はJacob Flemmingに対しての罰だったと言われる。というのも、彼は、誰か気に入らない人間がいるとひどく罵ったり、その人物が不幸になるように願ったりしたからである。

Vernaleken **1858**

193 (S.271)

燃える男(furige Mannli)がぴょんぴょん跳びはねているのが怪し火だ、と人々は考えている。燃える男とは、死者、つまり地獄または煉獄の炎で焼かれる霊（Geister）で、生きている間に境界標識石を不正に移動させた者だと信じられている。

Vernaleken **1858**

57 (S.75)

満月の夜にさまよう、頭のかわりに燃える藁束が乗っている人間。Unt. Steier地方のStraussとLiedの間にモミの森に沿って堤防がある。そこには、満月の夜になると頭の変わりに燃えるわら束が乗っている人間が徘徊する。

Vernaleken **1858**

64 (S.80)

Luftenauの古老たちは、こんな話をよく聞かせてくれた。あるとき、Wiesenrein (Luftenau近郊の小村) を通ってライン川沿いを行く街道に、真っ暗な中、燃える男が現れて、馬車を引く馬に乗ってきた。この燃える人は無言で、馬にも人間にも危害は一切加えず、現れたときと同じようにふたたび突然消えてしまった。また彼は、車に乗ってくることもあった。乗り込んできたかと思うと、馬は車をそれ以上ひくことができなくなり、体中汗だくになり、吐く息がが大変高温になった。車を駆る御者が霊Geistに降りろといくら言っても聞かず、霊が自発的に降りるのをただ待つばかりであった。

Witzschel **1878**

57 (S.51)

ある夜、レーン山地の農夫がウルスター付近を歩いていたとき、遠くから光が近づいてくるのが見えた。この光はどんどん大きくなり、最後には燃えさかる人間の姿になった。＜それ＞は水を一飛びして農夫の背に飛び乗ってきたが、農夫はそのまま歩き続るしかなかった。妖怪Gespenstに、どこかへいってくれと頼んでも一向にどこうとしない。農夫が罵り言葉を浴びせると、やっとどこかへ消え失せた。

Wolf **1853**

136 (S.92f.)

昔、（おそらくはヘッセン州ヴォルムス近郊の）ラウテナウ（Lautenau）に、粗野で不作法な男が住んでいた。彼は、昼間は飲み屋にたむろし、夕方家に帰ると、馬に乗ったまま居間まで上がり込んでくるような男だった。ある夜遅く、帰宅途中、彼は2つの怪し火（Herrwische）が牧草地（Wiese）で踊っているのを目撃した。暗い夜だったので、男は怪し火に向かって、家路を照らしてほしい、照らしてくれれば2クロイツァーやるから、と大声で呼びかけた。すると怪し火が両方彼のところにやってきて、道中ずっと彼のそばで踊ってくれた。しかし家に着くと男は玄関の戸をばたんと閉めてしまい、約束した報酬を怪し火にやろうとはしなかった。怪し火は戸口で待ち続けたが、しびれを切らして男の家の窓をこれでもかというくらいたたき始めたので、居間にも家が倒壊するのではないかと心配になった。びくびくと怯えながら、男は約束した2クロイツァーを差し出した。この後、男は二度と怪し火に道を照らしてもらおうとはせず、ランタンに火をつけて自分でもって歩くようになった。しかも、すさんだ生活を更正し、夜は家にいるようになったので、夜出歩くことも少なくなった。

Wolf **1853**

138 (S.93-95)

農家の下男が夕方わらを乗せた車に乗って家に帰る途中のこと。あちこちとびまわっている怪し火が遠くに見えた。そこで彼は怪し火をからかおうと思って、こう呼びかけた。「Irrwisch、こっちに来い、やってこい！」すると怪し火は突然男のそばまで飛んできた。男はすばやく車に乗ったわらの中に逃げ込んだので、怪し火はそれ以上追いかけることが出来なくなった。それでも、怪し火は車から離れようとはせず、その周囲で踊り続けた。十字路のところまで着たとき、やっと彼らは車から離れた。